

研究成果報告 2018 年度

都市文明の本質

The Essence of Urban Civilization

古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities



1



山田重郎 編

科研費新学術領域研究
都市文明の本質：
古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

1

研究成果報告 2018 年度

山田重郎 編

2019 年 3 月

例言

本書は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30 年度～ 34 年度「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」による 2018 年度研究成果報告書である。

文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30 年度～平成 34 年度
「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」

領域略称名：西アジア都市

領域番号：5001

領域代表者：山田重郎（筑波大学人文社会系）

URL: <http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/>

MEXT Grant-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas 2018-2022

The Essence of Urban Civilization: An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities

Number of Research Area: 5001

Head Investigator: Shigeo Yamada (University of Tsukuba, Faculty of Humanities and Social Sciences)

URL: http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city_EN

目 次

都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究	山田重郎	1
---------------------------------------	------	---

A01 計画研究 01 西アジア先史時代における生業と社会構造

西アジア先史時代の貝製ビーズ	三宅 裕	9
石器素材の地質学的考察	久田健一郎	17
イラク・クルディスタン、チャルモ遺跡の調査と新石器化への新視角	常木 晃	21
新石器時代の専門化に関する覚え書き	有村 誠	27
西アジア先史時代の物資交易：黒曜石交易・ビチュメン交易の研究	前田 修	35
新品種「発掘のごほうび」(デュラムコムギ)の育成登録：考古学から 経済産業への貢献	丹野研一	39

A02 計画研究 02 古代西アジアにおける都市の景観と機能

計画研究 01-02：メソポタミア景観考古学：イラク・クルド地区における 最近の研究	山田重郎	45
ラガシュ（ギルス）出土のエ・ミ文書における祭儀：対象・行為者・時・場所	唐橋 文	51
古代メソポタミア都市の伝統と景観に関する覚書 1：古バビロニア時代における マハヌム（Maḥanum）の事例	柴田大輔	59
エマル文書における親族用語 ^{lú.meš} <i>aḥḥū</i> “兄弟たち”	山田雅道	69
前 9 世紀におけるアッシリアの拡大	佐野克司	77
アッシリア帝国東部辺境の拠点都市：ヤシン・テペ遺跡の調査とイラク・ クルディスタンの考古学（2018 年度）	西山伸一	81
エルサレム陥落時の新バビロニア諸将（エレミヤ書 39:3）について： 『聖書協会共同訳』刊行に寄せて	三津間康幸	89

田舎の史料から都市を眺めるーアウロマン文書を例にー	春田晴郎	93
---------------------------	------	----

A02 計画研究 03 古代エジプトにおける都市の景観と構造

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」2018 年度活動報告	近藤二郎・河合 望	99
古代エジプトの祝祭都市テーベの景観と構造	近藤二郎	107
メンフィスとその墓地の景観と構造についての予察ー古王国時代と新王国時代を中心としてー	河合 望	113

B01 計画研究 04 古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源

計画研究 04「西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」研究成果報告	安間 了	127
都市鉱山の起源：金属濃集からみた古代都市化	黒澤正紀・池端 慶・荒川洋二・丸岡照幸・笹 公和	131
セルビア共和国におけるローマ時代・近代～現世の鉱山・鉱山跡における試料採取と顕微鏡観察結果	若狭 幸・黒澤正紀	137
西アジアの古環境復元に向けてーイラン北西部のザグロス山脈に分布する石灰質化学沈殿岩の現地調査報告ー	浅原良浩・南 雅代・ラズーリ ハディ・アジジ ホセイン	143
イラク国北部 Qalat Said Ahmadan 出土の黒曜石製石器の化学組成と原産地推定	安間 了・前田 修・常木 晃	149
Optically Stimulated Luminescence Dating of Dune Sand Sediments in the Western Margin of the Thar Desert at Sindh, Southern Pakistan	Y. Shitaoka, A. Noguchi, Q.H. Mallah, G.M. Veasar, N. Shaikh & H. Kondo	155

C01 計画研究 05 中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究

サファヴィー朝下のイスファハーンと新ジュルファー：近世西アジア都市の非ムスリム街区	守川知子	163
初期イスラーム時代の都市からの覚書	深見奈緒子	173

C01 計画研究 06 西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究

計画研究 06「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」		
2018 年度活動報告	松原康介	193
アルジェ・植民都市計画の変遷	松原康介	197
ロドス旧市街の文化の重なり	田中英資	209
アレppo、ファラジュ門地区の履歴	松原康介	213
エルジンジャンの震災復興	木村周平	217
カッパドキアの岩窟教会	谷口陽子	221
レバノンとシリア、戦災と復興の連環	松原康介	225
2018 年度に開催した研究会・シンポジウム・講演会		229

平成 30-34 年度 文部科学省科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」
都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

研究組織

領域代表

山田 重郎（筑波大学人文社会系・教授）

総括班「西アジア都市文明論」

山田 重郎（全体の統括・研究連携支援）

安間 了（編集・出版活動）

黒澤 正紀（編集・出版活動）

近藤 二郎（広報・教育活動）

柴田 大輔（研究会・シンポジウム企画）

谷口 陽子（広報・教育活動）

前田 修（総務・研究連携支援）

松原 康介（研究会・シンポジウム企画）

三宅 裕（編集・出版活動）

守川 知子（研究会・シンポジウム企画）

事務局

廣永 尚子（会計・総務）

上原 妙子（会計・総務）

研究項目 A01「都市文明への胎動」

計画研究 01「西アジア先史時代における生業と社会構造」

研究代表者

三宅 裕（筑波大学人文社会系・教授、新石器時代社会）

研究分担者

有村 誠（東海大学文学部・准教授、先史時代の専門化）

丹野 研一（龍谷大学文学部・准教授、植物考古学）

常木 晃（筑波大学人文社会系・教授、銅石器時代社会）

久田 健一郎（筑波大学生命環境系・教授、地質学・先史時代における石材利用）

本郷 一美（総合研究大学院大学先導科学研究科・准教授、動物考古学）

前田 修（筑波大学人文社会系・助教、先史時代の物資流通）

研究協力者

千本 真生（筑波大学人文社会系・研究員、土器の生産と流通）

研究項目 A02「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 02「古代西アジアにおける都市の景観と機能」

研究代表者

山田 重郎（筑波大学人文社会系・教授、楔形文字学・歴史研究）

研究分担者

池田 潤（筑波大学人文社会系・教授、セム語学）

唐橋 文（中央大学文学部・教授、楔形文字学・シュメル研究）

柴田 大輔（筑波大学人文社会系・准教授、楔形文字学・宗教文化史）

西山 伸一（中部大学人文学部・准教授、西アジア考古学・青銅器・鉄器時代）

春田 晴郎（東海大学文化社会学部・教授、古代イラン史）

研究協力者

伊藤 早苗（上智大学神学部・学振特別研究員、楔形文字学・アッシリア史）

佐野 克司（筑波大学人文社会系・学振特別研究員、楔形文字学・アッシリア史）

下釜 和也（古代オリエント博物館・研究員、西アジア考古学）

高井 啓介（関東学院大学国際文化学部・准教授、北西セム語文献）

辰巳 祐樹（筑波大学人文社会系・研究員、考古学・地中探査）

辻田 明子（ライデン大学・大学院生、楔形文字学・メソポタミア宗教史）

中田 一郎（中央大学・名誉教授、楔形文字学・前二千年紀前半メソポタミア史）

沼本 宏俊（国土舘大学体育学部・教授、メソポタミア考古学）

前川 和也（京都大学・名誉教授、楔形文字学・シュメル研究）

前田 徹（早稲田大学・名誉教授、楔形文字学・前三千年紀メソポタミア史）

三津間 康幸（東京大学大学院総合文化研究科・研究員、セレウコス朝期の歴史）

森 若葉（国土舘大学・研究員、楔形文字学・シュメル語学）

渡井 葉子（筑波大学人文社会系・学振特別研究員、楔形文字学・新バビロニア時代）

渡辺 千香子（大阪学院大学国際学部・准教授、メソポタミア美術・環境史研究）

渡部 展也（中部大学人文学部・准教授、考古学・地理情報学）

山田 雅道（中央大学・非常勤講師、楔形文字学・前二千年紀後半メソポタミア史）

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の景観と構造」

研究代表者

近藤 二郎（早稲田大学文学学術院・教授、エジプト学・エジプト考古学）

研究分担者

内田 杉彦（明倫短期大学歯科衛生士学科・准教授、エジプト学・文献研究）

柏木 裕之（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員教授、古代エジプト建築史）

河合 望（金沢大学新学術創成研究機構・准教授、エジプト学・エジプト考古学）

周藤 芳幸（名古屋大学人文学研究科・教授、古代ギリシア史・考古学）

高宮 いづみ（近畿大学文芸学部・教授、エジプト考古学・先王朝時代）
田澤 恵子（古代オリエント博物館・研究員、エジプト学・宗教文化史）
中野 智章（中部大学国際関係学部・教授、エジプト学・エジプト考古学）
西本 真一（日本工業大学建築学部・教授、古代エジプト建築史）
長谷川 奏（早稲田大学総合研究機構・客員教授、エジプト考古学・ヘレニズム～古代末期）
馬場 匡浩（早稲田大学高等研究所・准教授、エジプト考古学・先王朝時代）

研究協力者

恵多谷 雅弘（東海大学情報技術センター・主任研究員、衛星画像解析）
高橋 寿光（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員講師、エジプト考古学）
矢澤 健（東日本国際大学エジプト考古学研究所・客員准教授、エジプト考古学）

研究項目 B01「西アジアの環境と資源」

計画研究 04「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」

研究代表者

安間 了（徳島大学社会産業理工学研究部・教授、地質学・研究の総括）

研究分担者

浅原 良浩（名古屋大学大学院環境学研究科・准教授、岩石学・同位体分析）
荒川 洋二（筑波大学生命環境系・教授、岩石学・金属同位体分析）
池端 慶（筑波大学生命環境系・助教、鉱床学・金属同位体分析）
黒澤 正紀（筑波大学生命環境系・准教授、鉱物学・微少領域分析）
昆 慶明（産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門・主任研究員、地球化学・ICP-MS 分析）
佐野 貴司（国立科学博物館地学研究部・研究主幹、岩石学・XRF 全岩組成分析）
下岡 順直（立正大学地球環境科学部・助教、地球年代学・OSL 年代測定）
中野 孝教（総合地球環境学研究所・名誉教授、環境科学・環境同位体分析）
堀川 恵司（富山大学大学院理工学研究部・准教授、古環境学・鍾乳石の分析）
丸岡 照幸（筑波大学生命環境系・准教授、地球化学・硫黄同位体分析）
八木 勇治（筑波大学生命環境系・教授、地震学・災害科学研究）
横尾 頼子（同志社大学理工学部・助教、環境科学・水質および土壌化学分析）
若狭 幸（秋田大学大学院国際資源学研究科・助教、地形学・地形面の年代測定）

研究協力者

笹 公和（筑波大学数理物質系・准教授、加速器分析学・加速器分析）
申 基澈（総合地球環境学研究所研究基盤国際センター・准教授、同位体地球科学・ICP-MS 分析）
辻 彰洋（国立科学博物館植物研究部・研究主幹、微化石学・珪藻分析）
パークナー トーマス（筑波大学生命環境系・助教、地形学・GIS およびリモートセンシング）
南 雅代（名古屋大学宇宙地球環境研究所・准教授、文化財科学・放射性炭素年代測定）
渡辺 千香子（大阪学院大学国際学部・准教授、メソポタミア美術・環境史研究）

研究項目 C01「中世～現代の西アジア都市」

計画研究 05「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」

研究代表者

守川 知子（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授、西アジア史：イラン・ペルシア湾岸の都市）

研究分担者

稲葉 穰（京都大学人文科学研究所・教授、中央アジア史：アフガニスタン・中央アジアの都市）

中町 信孝（甲南大学文学部・教授、アラブ中世史：エジプト・シリアの都市）

深見 奈緒子（国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員、イスラーム建築史：イラク・エジプト都市）

山口 昭彦（聖心女子大学文学部・教授、クルド史研究：クルド山岳地域の都市）

研究協力者

黒木 英充（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授、地域研究：シリア・レバノンの都市）

計画研究 06「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」

研究代表者

松原 康介（筑波大学システム情報系・准教授、都市計画学：シリア・レバノン・アルジェリアの都市）

研究分担者

木村 周平（筑波大学人文社会系・准教授、文化人類学：トルコ・シリアの都市）

谷口 陽子（筑波大学人文社会系・准教授、文化財科学：アフガニスタン・トルコ・エジプトの都市）

研究協力者

田中 英資（福岡女学院大学人文学部・准教授、文化財学：トルコ・ギリシアの都市）

都市文明の本質： 古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究

THE ESSENCE OF URBAN CIVILIZATION: AN INTERDISCIPLINARY STUDY OF THE ORIGIN AND TRANSFORMATION OF ANCIENT WEST ASIAN CITIES

山田重郎（領域代表）
筑波大学人文社会系

本稿では、今年度（2018 年度）7 月にスタートした領域研究の概要を記しておきたい。

研究課題

紀元前5千年紀末から紀元前4千年紀にかけて、メソポタミア（現在のイラクから北東シリアの地域）において人類史上初の都市が成立した。大型公共建築物と城壁を持ち、種々の職業に従事する大人口が一定のヒエラルキーのもとに統合され、周辺世界の政治と経済の核となる複雑社会がここに誕生した。このような都市文明の様式は、前3～2千年紀には、メソポタミアとその周辺の広域に拡散し、西アジア各地に多数の都市が成立した。こうして、都市が政治・経済・文化の中心としての役割を担って、地域の在り方を決定づける構造が、西アジア全域に、そして世界の諸地域に形成され、以来、都市は地球的規模で人類史を決定づけてきた。現在、世界人口70数億人の半数以上が「都市」に居住し、現代文明の抱えるあらゆる問題も、都市の存在を抜きにしては考えられない。そうした意味で、都市の起源と本質を問うことは、優れて地球的にして現代的な課題である。

西アジアは、農耕、牧畜、冶金、文字記録、一神教、そして都市文明といった人類史に大きな影響を与えた文化的革新が地球上で最も早く生じた

地域であり、西欧世界の思想的源流であるユダヤ・キリスト教文化の故地でもある。そのため、19世紀以来、多くの考古学的調査が行われ、イラク、イラン、シリア、トルコ、パレスチナを中心に何百もの都市遺跡が調査された。これらの考古学的発見を通し、各地で都市の景観と機能が明らかにされてきた。

前3200年ごろの南メソポタミアに成立した都市ウルクでは、粘土板に文字を記す技術が行政運営のために発明された。その後、この書字技術は、楔形文字システムとして洗練されながら西アジア各地に伝播し、複数の言語の記述に応用された。この結果、前3千年紀から紀元前後の時代に至るまでの長期間、古代世界において出色の文字文明が西アジアにおいて繁栄した。書字技術は、多様な目的に用いられるようになり、人間社会の様相が種々の文書に記録された。

このように、古代西アジアは、都市主導型の文明が地球上で最も早く高度に発達した地域であり、豊富な考古学的資料と保存性の高い媒体（粘土板）に書かれた多くの文字史料によって、都市文明の発生とその変容に関する大量のデータを提供する。人類の都市との関わりの原点であり、人類史上最古の都市文明をめぐる濃密な歴史的経験であった古代西アジア都市の諸相の解明は、都市

の本質を問うために決定的な価値がある。古代西アジア都市を、民主的なギリシア都市に対する専制的オリエント都市とみる西欧の古典的・傾向的理解は批判されて久しい（後述）。しかし、西アジアにおける都市の発生と変容、都市の環境や人間社会との相互影響関係、都市景観の様相、都市の諸機能を種々の史資料に照らして実証的に解明し、現代に至るまでの都市のタイポロジーに照らして歴史的に評価する試みは、都市型社会の理解に向けた意義深い課題としてほぼ手つかずに残っている。

学際連携

本領域研究は、学際的連携によって人間社会の都市化という歴史的現象の解明を目指すプロジェクトである。学際連携の核として、まず考古学が重要な役割を担う。19 世紀以来、西アジア各地の都市遺跡で発掘調査が行われたが、当初は神殿・宮殿などの大規模建築物、権力者の残した見栄えのするモニュメント、文字史料に調査が限定されていた。しかし、調査地域が広がり、調査方法が精密化するに伴い、調査対象も、市民セクターを含む都市構造、都市の周辺に広がる村落の分布、都市に関連する水利設備や交易路、家畜の放牧・遊牧と関連する痕跡などといった「都市景観」に及んできた。現在では、都市をトータルに分析する研究原理としての考古学の重要性はますます高まっている。

考古学と連動し、都市で営まれた人間社会の諸相の研究に大きく寄与する学問分野が文献学である。先述の通り、南メソポタミアで前 3200 年頃に発明された書字技術は、現在のイラク、シリア、トルコ、イラン、レバノン、パレスチナ、エジプトなどを含む地域に伝播し、各地の都市遺跡から

は、粘土板や石碑にシュメル語、アッカド語、エラム語、ヒッタイト語、ウガリト語、古代ペルシア語などで書かれた大量の楔形文字文書が発見されている。多岐にわたる豊富な文書史料は、王権や神殿を中心とした政治と行政、農耕・牧畜・手工業・交易のような産業、法と社会制度、建築・数学・天文学などの科学、宗教と儀礼、文学と思想といった多くの分野についての情報を含み、都市とその周辺で営まれた人間社会の諸相に関する豊富なデータを提供する。こうした楔形文字文書群に加え、前 1 千年紀の半ば以降に西アジアで広く通用したアラム語をはじめとする西セム系言語、さらにはギリシア語によって石材、オストラカ、パピルス、羊皮紙などに書かれた諸文書（書簡、行政文書、記念碑文など）もまた、西アジア都市に関するデータを含んでいる。

考古学と文献学に加え、都市を取り巻く環境、資源、ならびに農業・工業・交易等の産業の分析には、自然科学分野の参画が不可欠である。具体的には、都市遺跡に由来する動植物の遺存体を同位体分析などによって分析し、食生活や農耕・牧畜の動植物学的な詳細を解明すること、都市内部やその周辺に見られる鉱物・石材・土壌（粘土板やレンガの素材）・水を採取して化学組成を調べ、都市に供給された金属・石材・河川堆積物の起源とそうした資源環境の地理的広がりを把握すること、衛星画像を用いて灌漑・農業用水の取水システムの変化を追跡し、都市への水の供給システムの変遷を探ること、地震や災害の都市への影響を地球科学的な分析によって評価することなど、都市と環境・資源の関係についての極めて重要な問題が扱われる。

こうした考古学・文献学・自然科学の学際的連携によって、都市文明の諸要素が芽生えた先史時

代を背景に、都市が誕生して変容を重ねていく前 3000 年頃からヘレニズム・ローマ期に至るまでの 3000 年におよぶ期間に、都市空間はどのように構成され、そこでどのような社会が営まれ、いかなる思想が生まれたのか、都市とその周辺の村落や遊牧社会はどのような関係にあり、都市と都市はどのようなネットワークで結ばれたのか、都市文明は周辺の環境にどのような影響を与え、環境は都市の在り方をどのように規定したのか、といった諸問題を通時的・共時的に明らかにすることが本領域研究の課題である。

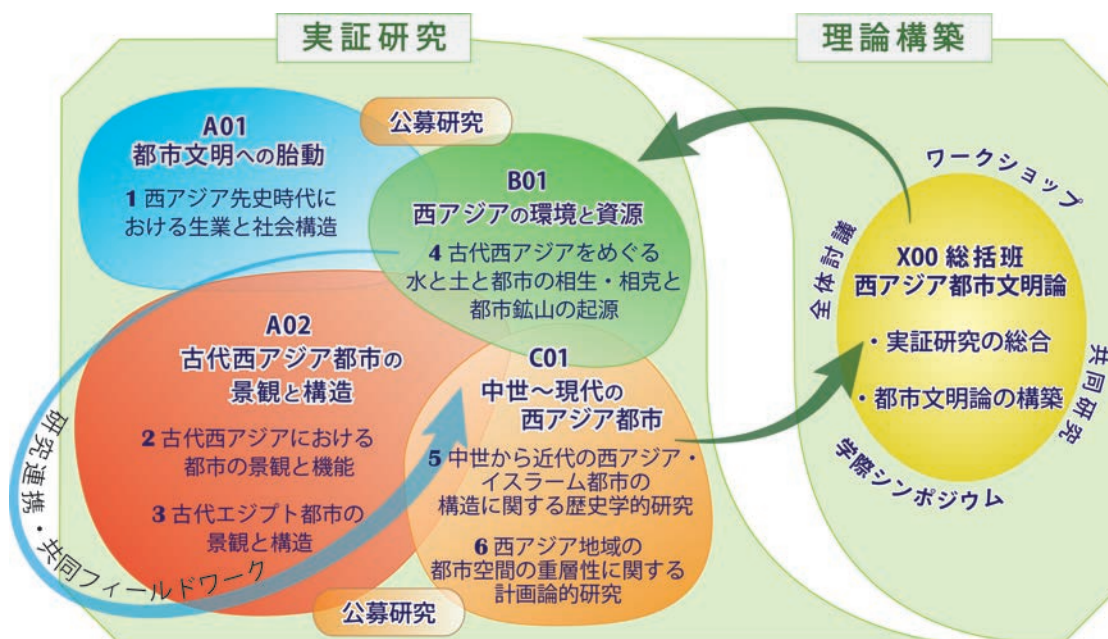
「都市とは何か」という大きな命題を古代西アジアという都市文明の古層に探る本領域の目的は、西アジアの隣接地域の都市、ならびに後代の西アジア都市をもある程度射程におさめ、古代西アジア都市の特徴を相対的に評価することによって補完される。これにより、古代西アジアの都市文明の個性を浮き彫りにし、その後代への影響を考察すると同時に、現代人に忘却された西アジア都市文明という歴史的経験を再発見して、都市文明と人間社会の関係を深く広く探求し、現代の都市主導型文明を内省的に再考して、サステナブルな未来をもたらすための都市文明論を提示することを目指す。そのため本領域研究は、西アジアと隣接する古代エジプトの都市研究と中世から現代に至るまでの西アジア都市を研究する複数の計画研究を含んでいる。葬祭装置の発達が顕著で、かつては「都市なき文明」と呼ばれ、城壁都市の欠如が強調された古代エジプトだが、近年は、都市型居住地の形成と都市化の詳細が積極的に研究され始めた。また、中世以降の西アジア都市は、古代の都市プランを継承しつつ、イスラーム都市、近代都市として変容を遂げた。こうした研究分野をカバーするエジプト学、イスラーム学、西ア

ジア史学、社会人類学、都市計画学、都市社会学、文化遺産学等の研究者が本領域研究に参画している。こうして、本領域は、異なる学問分野がそれぞれの分野内に孤立しては獲得できない広い視野に立って、古代西アジア都市という大きなテーマに臨み、そこに都市文明の本質を考究する実証研究と理論研究を実践したい。

研究史に照らした本領域研究の位置づけ

古代西アジア都市についての本格的な研究の開始は、西アジア各地で古代都市の遺跡が発掘され始めた 19 世紀にさかのぼる。しかし当初は、「民主的都市」としての古代ギリシアのポリスと対比して、古代西アジア都市は絶対権力者に所有される「専制的オリエント都市」にすぎないと評価された。この傾向的評価が欧米学界である程度まで克服されるまでには一世紀を要した。その後、西アジアの多くの遺跡で、神殿や宮殿のような大型建築物のみならず、市民セクターを含む都市景観全体が調査・考察され、都市遺跡に由来する文書史料から都市社会に関する種々のデータがもたらされた。この潮流のなか、都市文明の最古の事例である古代西アジア都市の詳細を客観的に研究し、「都市」の定義と都市形態の多様性を真剣に考察する機運が 20 世紀の半ばくらいまでに育まれた。

「都市革命」という概念を創出して西アジア都市の考古学的定義を試みた G. Childe、資本主義的原理の外で働くモノの交換・分配のメカニズムを都市の理解に適用した K. Polanyi、灌漑作業と都市権力生成の因果関係を論じた K. Wittfogel らの先鋭的な議論をへて、1958 年には、シカゴ大学東洋学研究所の主催で「古代西アジアの都市化と文化的発達」をテーマに考古学と楔形文字学



の研究者を集めたシンポジウムが開かれ、この問題が包括的に論じられた (Kraeling et al. 1960)。その後、メソポタミアの都市とその周辺の環境、セトルメント・パターン、土地利用等の解明に取り組んだ R. M. Adams の考古地理学的研究 (1981)、歴史時代の西アジアの都市化の諸相を楔形文字文書研究者の視点から論じた M. Van de Microop の著作 (1997) が現れ、古代西アジア都市の継続と変遷をテーマにしたドイツ・オリエント学会主催のシンポジウム (Wilhelm 1997) も行われるなど、古代西アジアの都市研究は続いてきた。そうしたなか、航空写真や衛星画像から得られるデータをフィールドワークの成果と総合して、都市とそれを取り巻く古環境を復元する景観考古学的分析を導入した T. J. Wilkinson (2003) の画期的研究が現れ、古代西アジアの特定の時代や地域について都市景観や土地利用を分析する研究が実践されてきた。

こうした研究史は、(1) 都市とその周辺の環境と土地利用の考古地理学的研究の活性化、ならびに(2) 都市社会の政治的・経済的・文化的諸機能を考古学と文献学を組み合わせる包括的に把握しようとする試み、という2つの傾向に集約される。このような考古学的研究の多様化と文献学的・歴史学的研究の進展を受け、今、古代西アジア都市の包括的理解を試みるに期は熟したといえる。本領域では、古代西アジア都市に関連して、様々な時代、地域、テーマについて研究実績を持つ国内の研究者を糾合し、海外の研究者とも密接に連携して、特定の時空間やテーマに関する調査や研究によって新たな事実を掘り起こしつつ、西アジア都市文明の発生・拡散・変容の歴史のプロセス、そして都市の景観と機能の多様性を、地域的な広がりやを踏まえながら、通時的に分析する。

また、古代エジプト研究班と中世から現代の西アジア都市を扱う研究班を内包することで、古代

西アジア都市を相対的に評価し、古代から現在までの西アジア都市の在り方を通時的・共時的に俯瞰する。同時に、長期にわたる都市化の歴史において、都市文明が地球環境にどのような影響を及ぼし、また、どのような社会観やイデオロギーの変化を人間社会にもたらしたのかを人類学的あるいは文化論的に考察する。それによって長い歴史に累積された都市文明の姿に照らして現代の都市文明の在り方を省察し、現代社会に対して有意義な提言を導き出すことも目指したい。

基本的研究戦略

本領域は、西アジアにおける都市の誕生、変容、社会的機能、多様性を学際的方法で、通時的・共時的に研究するために、A01「都市文明への胎動」、A02「古代西アジア都市の景観と構造」、B01「西アジアの環境と資源」、C01「中世～現代の西アジア都市」、ならびに X00「西アジア都市文明論」（総括班）の5つの研究項目を設定している（図1）。研究項目 A01 と A02 は、前4千年紀末の南メソポタミアにおける都市の誕生に先立って、西アジア各地で都市文明に含まれる諸要素が断片的に出現していく現象を考古学的に解明し（A01）、その後のメソポタミアにおける都市文明の誕生をへて、西アジアならびにエジプトにおいて進展した3000年にわたる都市化の諸相を考古学と文献学の協働により研究する（A02）。研究項目 B01 は、西アジア都市文明を育んだ環境と資源を地球科学的・物質科学的方法で分析し、都市文明の発生と変容に環境がどのような影響を与えたのかを考究して、領域全体の底上げに貢献する。研究項目 C01 は、A 群の扱う古代の都市文明をうけて、中世から現代に西アジア都市の伝統はどのように継続し、どのように変容したか、を解明し、現代の

西アジア都市の諸相や社会的課題を分析する。

こうした研究項目を公募研究によって補足し、領域全体として西アジア都市の諸相を多角的・通時的に把握したうえで、研究項目 X00（総括班）の主導により、古代西アジア都市文明の特徴と後代への影響を歴史学的・社会学的・文化論的に評価し、都市・人間社会・環境の相互関係、都市の類型、といった問題を総合的に論じたい。

領域推進のビジョン－専門研究と全体研究

本領域は、古代西アジア都市研究を、都市文明史の最古層にして、長期にわたる都市・人間・環境の相互関係を考察するための最重要の研究分野として位置付け、そのうえで、西アジア都市の古代から現代までの変容を射程に収めながら、人間と環境にとって都市とは何なのかという「都市の本質」を考察する試みである。この構想は、文理融合で多様な研究分野の研究者を糾合した学際的手法により実施され、歴史的・実証的な研究の上に普遍的・文明論的な考察を積み重ねる過程を含む。領域参加者には、専門性の高い個別研究の遂行とならんで、視野の広い分野横断的研究や、都市文明についての全体的・普遍的考察が求められる。具体的に言えば（1）独自の調査とデータ分析に基づいた個別研究を実施して、学問の前線を押し上げるような専門的・先端的な研究成果をあげること、（2）計画研究がカバーする研究分野における既存研究の現状を全体的に把握し、それを批判的に評価すること、（3）「都市とは何か、都市はどうあるべきか」という普遍的問いに対して社会的にインパクトのある洞察を提示すべく、広い視野からのディベートを重ねること、という「詳細から全体に至る」ミクロ・マクロの課題に取り組むことが必要である。

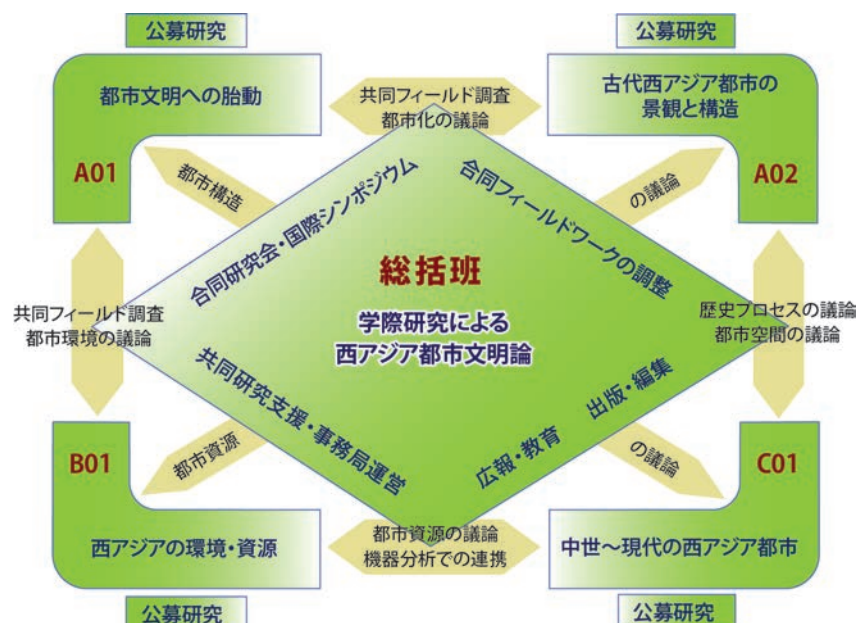


図2 総括班の役割

総括班構成

山田重郎（領域・計画研究 02 代表者）文献学・歴史学
 前田 修（計画研究 01 分担者）西アジア先史学
 松原康介（計画研究 06 代表者）都市計画・中東地域研究
 守川知子（計画研究 05 代表者）西アジア中世・近代史
 柴田大輔（計画研究 02 分担者）楔形文字学
 近藤二郎（計画研究 03 代表者）古代エジプト学
 谷口陽子（計画研究 06 分担者）文化財科学
 三宅 裕（計画研究 01 代表者）西アジア考古学
 安間 了（計画研究 04 代表者）地質構造学・環境科学

「全体の統括・研究連携支援」
 「総務・研究連携支援」
 「研究会・シンポジウム企画」
 「研究会・シンポジウム企画」
 「研究会・シンポジウム企画」
 「広報・教育活動」
 「広報・教育活動」
 「編集・出版活動」
 「編集・出版活動」

こうした領域の統一的運営は、図2に示したのメンバーによって構成される総括班が主導し、その結果、各計画研究班が、時には自律的に、時には連携しながら、先端的な専門論文と各分野の都市研究を俯瞰するレビューを試みる。

参考文献

Adams, R.M. 1981: *Heartland of Cities: Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates*

Kraeling, C.H. et al. (eds.) 1960: *City Invincible: A Symposium on Urbanization and Cultural Development in the Ancient Near East*. Chicago.

Van de Mieroop, N. 1997: *The Ancient Mesopotamian City*. Oxford.

Wilhelm, G. (ed.) 1997: *Die Orientalische Stadt: Kontinuität, Wandel, Bruch*.

Wilkinson, T.J. 2003: *Archaeological Landscapes of the Near East*. Arizona.

研究項目 A01 「都市文明への胎動」

計画研究 01

西アジア先史時代における生業と社会構造

西アジア先史時代の貝製ビーズ

三宅 裕
筑波大学人文社会系

平成 30 年度の活動のひとつとして、トルコ共和国のハッサンケイフ博物館に収蔵されている、ハッサンケイフ・ホユック遺跡から出土した遺物を対象に資料調査を実施した。紀元前 10 千年紀後半を中心に、新石器時代初頭に居住が営まれたこの遺跡では、これまでの発掘調査で 140 基以上の埋葬が検出され、石製容器、装飾板、ビーズなど多くの遺物が副葬品として出土している。本報告ではその中から貝製品を取り上げ、新石器時代に先行する旧石器時代の様相も射程に入れながら、西アジア先史時代における貝製品のあり方について概観し、その社会的意味について検討してみたい。

ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土貝製品

本遺跡から出土した貝の種類はかなり限定的であり、地中海産と考えられる *Nassarius gibbosulus* (シロハラヨフバイ)、*Conus* sp. (イモガイ類)、種未同定の小型巻貝 1 種 (1 点) と淡水産小型巻貝の *Theodoxus* sp. (カノコガイ類) の 4 種のみ確認されている。ほぼ同時期のレヴァントやアナトリアの遺跡では、これらに加え *Dentalium* sp. (ツノガイ類) や *Columbella rustica* などの貝も出土することが多いが (Baysal 2013, Maréchal and Alarashi 2008)、ハッサンケイフ・ホユック遺

跡では欠落していたようである。地中海まで直線距離にして約 480 km、ティグリス川上流域に位置するこの遺跡では、地中海産の貝はおそらく交易ネットワークを通じて入手されていたと考えられる。その限定された貝の種構成は、様々な要因や事情から篩にかけられ、厳選された結果とみることができ、どの貝が特に希求され、大きな価値が見出されていたのか知る手がかりとなる。

その点において、数量的にある程度まとまって出土した *Nassarius* は、その当時の人々にとって特に高い価値をもつ貝であったと考えることができる。地中海産貝類の中では突出してその割合が高く、250 号墓では 250 点、211 号墓では 52 点と、一括で副葬品として出土している例がある。250 号墓においては、被葬者の腰の付近から *Nassarius* 製ビーズが、48 点と 13 点、それぞれ紐で連ねられていたような状態で検出され (図 1)、腰飾りであった可能性が考えられる。*Nassarius* 製のビーズは、その偏平な形状や摩耗の状況から、布や革などに縫い付けて使用された可能性を指摘する意見もあるが (Ridout-Sharpe 2015: 105)、少なくともこの事例からは紐に連ねて使用されることもあったことがわかる。

ハッサンケイフ・ホユック遺跡出土の *Nassarius* 製ビーズは、殻孔の反対側に大きな穿



図 1

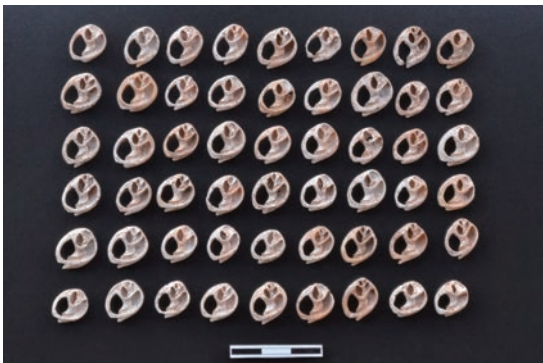


図 2



図 3

孔が認められ、貝殻内部の軸柱部が露出して見えているものが多い（図2）。一般に、新石器時代以前のものは穿孔が小さく、新石器時代になると穿孔が大きくなることが指摘されているが

（Baysal 2013）、そうした指摘ともうまく符合する。ビーズの表面に赤褐色顔料の痕跡が認められる例も少なくなく、そうした例はほかの遺跡でも数多く知られていることから、*Nassarius* 製のビーズに彩色を施すことはよくおこなわれていたと考えられる。また、他の遺跡の事例では火を受けて黒変している例も報告されているが（Baysal 2013, Ridout-Sharpe 2015）、ハッサンケイフ・ホユック遺跡では1点確認されているのみである。こうした行為は、貝製ビーズの色彩的効果を高めるための工夫として、意図的におこなわれたとみられている。もうひとつの地中海産の貝であると考えられるイモガイ製品は2点確認されているが、いずれも円錐状の殻頂部が除去されており、うち1点には顔料の痕跡が認められる（図3）。

淡水産巻貝である *Theodoxus* sp. は、殻長が7 mm前後の小型のものであり、殻孔の反対側に磨ってあけたとみられる穿孔が認められる。おそらく、殻孔とこの人為的な穿孔の間に紐を通して、ビーズを連ねていたものと考えられる。この *Theodoxus* 製のビーズも50号墓から2224点、250号墓から1648点、315号墓から622点と、多数まとまって出土している例がある。50号墓では、クロライト製の石製容器の付近から集中して検出され、容器の中に納めるような形で副葬されたと考えられる（図4）。50号墓では *Nassarius* 製のビーズも2点出土し、上述したように250号墓では *Nassarius* 製のビーズが多数共伴している。この2基の墓からはいずれもクロライト製の石製容器が出土しており、副葬品の構成やその規定を考える上で注目される。また、315号墓の被葬者は子供であったが、多数の *Theodoxus* 製ビーズが副葬されていたことは、子供の厚葬という観点からも興味深い事例である（図5）。



図 4

Theodoxus sp. は淡水産巻貝であるため、遺跡周辺で採集された可能性も考えられる。管見の限り、現在のティグリス川上流域において生息が確認されたとの報告はないが、ユーフラテス川流域 (*Theodoxus euphraticus*) やヨルダン溪谷 (*Theodoxus jordani*) ではその類縁種の生息が知られている (Amr et al. 2014)。ただし、この種の貝は環境の変動に弱く、今では絶滅が危惧されるまでの状況になっているとのことで、現状の分布から過去の生息域を推定するのは難しい状況にある。少なくともハッサンケイフ・ホユック遺跡においては、*Theodoxus* sp. を素材とするビーズ生産がおこなわれていたことを積極的に支持するような証拠は認められず、交易によって入手されていた可能性も否定することはできない。



図 5

ハッサンケイフ・ホユック遺跡では、遺構のプランの変化と切り合い関係を基に、新石器時代の層は上層（矩形プラン）と下層（円形プラン）に区分されている。貝製ビーズの層位的分布を見てみると、利用される貝種に違いが認められることも明らかになっている。イモガイ類と *Theodoxus* sp. は 2 つの時期を通じて認められるが、*Nassarius* は今のところ下層においてのみ出土が確認されている。*Nassarius* は上層の時期にはその入手が途絶えてしまったと考えられ、*Theodoxus* sp. 製ビーズも上層になると顕著にその数が減少する傾向にある。

貝製ビーズにみられるこうした変化は、石製のビーズも含めたビーズ全体の様相の中で捉えてみると、より大きな変化の一部であることが理解できる。石製ビーズは色調を異にする数種類の石材を素材とし、多様な型式のものが出土しているが、ほとんどが上層に帰属するものであり、下層から検出された例は 2 点しか確認されていない。*Theodoxus* 製のビーズは上層からも出土しているが、多くは石製ビーズと共に出土しており、まとめて出土する数もあまり多くないことからすると（最多でも 48 点）、単独で使用されていたというよりは、石製ビーズと組み合わせられて装身具を構成していたと考えられる（図 6）。したがって、



図 6

下層ではほとんどが貝製であったビーズは、上層になると石製ビーズ中心へと大きく転換したとみることができる。

石製ビーズについても、クロライト製の石製容器の破片を再利用したと考えられる数点を除いて、遺跡でビーズの製作がおこなわれていたような証拠は認められない。今のところ、石製ビーズもその多くは交易によって入手されていたと考えた方が妥当のように思われ、それにより比較的短期間のうちにビーズの素材が大きく変化することも上手く説明できるようになると思われる。

貝製装身具利用のはじまり

先史時代における貝製ビーズの存在は、これまで主に以下の2つの点から注目されてきた。ひとつは、ホモ・サピエンスの出現と関連する「現代人的行動」との関係、もうひとつは長距離交易の発達との関係である。ビーズなどの装身具の使用は、現生人類の認知能力と深く関係するとされ、アフリカの中期石器時代（MSA）においてダチョウの卵殻製のビーズが出土することが注目されてきた（McBrearty and Brooks 2000）。その後、貝製ビーズの存在も確認されるようになり、南アフリカのブロンボス洞窟などで出土したビーズは、*N. gibbosulus* の近縁種で形態的にもよく似てい

る *Nassarius kraussianus* を素材としたものである（Henshilwood et al. 2004, d'Errico et al. 2005）。

最近の研究で、西アジアでも *N. gibbosulus* 製のビーズが、中期旧石器時代にはすでに利用されていたことが明らかにされた。ホモ・サピエンスの埋葬人骨が出土したことで知られるスフル洞窟では貝も出土していたが、報告書には出土層位についての記述がなく、その帰属時期については長い間不明のままであった。近年、ロンドンの自然史博物館に収蔵されている貝製ビーズが再調査され、その中に詰まっている土壌の分析から、ホモ・サピエンスの人骨が検出された B 層から出土したものであると認定された（Vanhaeren 2006）。ちなみに、スフル洞窟 B 層の年代は、様々な手法による年代測定の結果、今では 13.5 ～ 10 万年前と考えられるようになっている。スフル洞窟と同様、中期旧石器時代の層からホモ・サピエンスの人骨が検出されたカフゼー洞窟からも貝製ビーズが出土している（Bar-Yosef Mayer 2009）。こちらは二枚貝製のビーズであり、殻頂部に穿孔が認められる。

スフル洞窟の貝製ビーズはアフリカの事例よりも年代が古く、今のところ世界で最も古い貝製ビーズということになる。それが、ホモ・サピエンスの人骨をとまなう B 層から出土していたことが判明したことは大きな意義があり、貝製ビーズの利用とホモ・サピエンスの間には深い関係があったことが確認された。また、このように古い時期から *N. gibbosulus* がビーズの素材として選択されていたことも大変興味深く、アフリカでも近縁種が選択されていることは、この種の貝が選択されるそれ相応の理由があったと考えられる（Bar-Yosef Mayer 2015）。

貝製ビーズの連続性と変化

貝製ビーズは後期旧石器時代になるとさらに一般的となり、トルコのウチュアウズル洞窟やレバノンのクサル・アキル洞窟などでは、ある程度の期間にわたって層位的に貝の種類の変遷を追うことができる (Stiner et al. 2013, Bosch et al. 2015)。その状況において注目されるのは、この時期における貝製ビーズの中心がやはり *N. gibbosulus* であることである (Bar-Yosef Mayer 2015)。終末期旧石器時代のナトゥーフ併行期になるとツノガイ類の利用が目立つ遺跡が増えてくるが、*Nassarius* も引き続き利用されている。こうした旧石器時代における貝製ビーズのあり方をみると、ハッサンケイフ・ホユック遺跡で認められた *Nassarius* を中心とする海産貝製ビーズの組成は、ホモ・サピエンスが中期旧石器時代に開始した、貝利用の伝統の延長線上にあると評価することができる。

ティグリス川上流域のハッサンケイフ・ホユック遺跡においては、*Nassarius* を中心とする貝の利用が、先土器新石器時代 A 期の後半には終焉を迎えたように見え、装身具の主役は石製ビーズへと移っていった。ただし、これはあくまでもかなり内陸部に位置する遺跡の状況であり、アナトリアやレヴァント全域に敷衍して論じることはできそうにない。実際、ティグリス川上流域よりも地中海に比較的近いユーフラテス川中流域では、それとは異なった状況を見ることができる。

この地域では、ムレイベト遺跡、テル・アブ・フレイラ遺跡、テル・ハルーラ遺跡の資料を通して、終末期旧石器時代から土器新石器時代までの海産貝類の利用の状況を知ることができる (Maréchal and Alarashi 2008, Ridout-Sharpe 2015, Alarashi et al. 2018)。ナトゥーフ期には *Nassarius*、

Columbella rustica、ツノガイ製のビーズが一般的であり、同様の状況が新石器時代に入ってもしばらく継続するが、先土器新石器時代 B 期中期ごろになると *Nassarius* はほとんど姿を消してしまい、紅海産と考えられるタカラガイ類が多く出土するようになる。これは貝製ビーズの素材の供給地が大きく変化したことを意味しており、この時期に海産貝類の交易ネットワークに大きな変動があったことを示している。もちろん、西アジアのすべての地域において同じような変化が認められるわけではなく、アナトリア高原ではチャタル・ホユック遺跡のように、土器新石器時代になっても *Nassarius* が継続して利用されることが知られている。

長距離交易による物資の入手

上述したように、ハッサンケイフ・ホユック遺跡は地中海から約 480 km 内陸に位置しており、海産の貝類は交易ネットワークを通じて入手していたものと思われる。新石器時代にはこのほか、黒曜石、希少石材、赤色顔料、マラカイト（孔雀石）や自然銅など、多くの物資が広域に流通していたことが知られている。このような交易による物資の流通は、いつ頃から顕著にみられるようになったのだろうか。

すでに見てきたように、海産貝類は中期旧石器時代から利用されていたが、後期旧石器時代においても、比較的海岸部に近い遺跡に限定されており、ローカルな資源の開発・利用であった可能性が高い。終末期旧石器時代になると、アナトリアのプナルバシュ遺跡のように、200 km 近く内陸の遺跡からも海産貝類が出土するようになり、交易による物資の流通を想定できるようになるが、移動性の高い社会である場合には、産地に直接出

向いて獲得したものなのか、交易ネットワークを通じて入手したものなのか、判断が難しい場合も多い。

黒曜石も原産地付近では、前期旧石器時代から石器の素材として利用されていたことが知られ、カレテペ・デレシ 3 遺跡では黒曜石製のハンドアックスも出土している（Slimak et al. 2008）。しかし、黒曜石が原産地周辺を超えて広範に流通するようになるのは、その後かなりの時間を要したことがわかっている。今のところレヴァントで確認されている最古の黒曜石は、シリアのヤブルド岩陰 II で約 4 万～3 万年前の層から出土したスクレイパーであり、分析の結果中央アナトリア（ギョルルダール東）産の黒曜石であることが確かめられている（Frahm and Hauck 2017）。しかし、出土したのは 1 点のみであり、交易ネットワークの存在を背景とした組織的な物資の流通であったとは考えにくい状況にある。レヴァントにおいて一定量の黒曜石がある程度恒常的に出土するようになるのは、終末期旧石器時代中期（ジオメトリック・ケバラ期）になるのを待たなければならない（Delage 2018）。そして、これに後続するナトゥーフ期にかけての時期には、特定の産地の玄武岩やチャート、美しい色をした希少石材など、広域に流通する物資はその種類や量を増していくことになる。これまでのところ、長距離交易ネットワークの形成、あるいは遠隔地の希少な物資の入手が試みられるようになるのは、終末期旧石器時代中期から後期にかけての時期からと言えるようである。

ここで検討してみる必要があるのは、なぜこの時期に交易による物資の流通が盛んになったのかである。ひとつ注目されるのが、終末期旧石器時代中期頃に南レヴァントでは、ハラネ IV 遺跡

やジラト 6 遺跡のように、かなり規模が大きく、ある程度の期間にわたって居住が営まれたと考えられる遺跡が出現することである。年間を通じての居住とは言えないまでも、一定の季節にある程度まとまった数の人間が集住するような性格の遺跡であったと考えられており（Maher et al. 2012）、定住化の過程の途上にあったとみる意見がある。この時代にはまだ季節的な集住であったかもしれないが、一定の期間、人口の稠密な状態が出現することにより、集団を取りまとめる指導者層が形成され、社会的な不平等が増幅されていった可能性がある。そうした社会の出現を背景に、希少な物資の入手が希求されたことが、広域に物資を流通させる交易ネットワークが形成される契機になったのではないかと考えている。

参考文献

- Alarashi, H., A. Ortiz and M. Molist 2018 Sea shells on the riverside: Cowrie ornaments from the PPNB site of Tell Halula (Euphrates, northern Syria). *Quaternary International* 490: 98-112.
- Amr, Z., Nasarat, H. and E. Neubert 2014 Notes on the current and past freshwater snail fauna of Jordan. *Jordan Journal of Natural History* 1: 83-115.
- Bar-Yosef Mayer, D. E. 2015 *Nassarius* shells: Preferred beads of the Palaeolithic. *Quaternary International* 390: 79-84.
- Bar-Yosef Mayer, D. E., Vandermeersch, B. and O. Bar-Yosef 2009 Shells and ochre in Middle Paleolithic Qafzeh Cave, Israel: Indications for modern behavior. *Journal of Human Evolution* 56(3): 307-314.
- Baysal, E. 2013 A tale of two assemblages: Early Neolithic manufacture and use of beads in the Konya plain. *Anatolian Studies* 63: 1-15.
- Bosch, M. D., Wesselingh, F. P. and M. A. Mannino 2015 The Ksâr' Akil (Lebanon) mollusc assemblage:

- zooarchaeological and taphonomic investigations. *Quaternary International* 390: 85-101.
- Delage, C. 2018 Revisiting Rolling stones: The procurement of non-local goods in the Epipaleolithic of the Near East. *Quaternary International* 464: 159-172.
- d'Errico, F., Henshilwood, C., Vanhaeren, M. and K. Van Niekerk 2005 *Nassarius kraussianus* shell beads from Blombos Cave: Evidence for symbolic behaviour in the Middle Stone Age. *Journal of Human Evolution* 48(1): 3-24.
- Frahm, E. and T. C. Hauck 2017 Origin of an obsidian scraper at Yabroud Rockshelter II (Syria): Implications for Near Eastern social networks in the early Upper Palaeolithic. *Journal of Archaeological Science Reports* 13: 415-427.
- Henshilwood, C., d'Errico, F., Vanhaeren, M., Van Niekerk, K. and Z. Jacobs 2004 Middle stone age shell beads from South Africa. *Science* 304 (5669): 404.
- Maher, L. A., Richter, T. and J. T. Stock 2012 The Pre-Natufian Epipaleolithic: Long-term behavioral trends in the Levant. *Evolutionary Anthropology* 21: 69-81.
- Maréchal, C. and H. Alarashi 2008 Les éléments de parure de Mureybet. in Ibáñez, J. J. (ed.), *Le site néolithique de Tell Mureybet (Syrie du Nord)*. BAR International Series 1843, 2 vols. Archaeopress, Oxford, pp.575-619.
- McBrearty, S. and A. S. Brooks 2000 The revolution that wasn't: a new interpretation of the origin of modern human behavior. *Journal of Human Evolution* 39(5): 453-563.
- Ridout-Sharpe, J. 2015 Changing lifestyles in the northern Levant: Late Epipalaeolithic and early Neolithic shells from Tell Abu Hureyra. *Quaternary International* 390: 102-116.
- Slimak, L., Kuhn, S. L., Roche, H. et al. 2008 Kaletepe Deresi 3 (Turkey): Archaeological evidence for early human settlement in Central Anatolia. *Journal of Human Evolution* 54 (1): 99-111.
- Stiner, M. C., Kuhn, S. L. and E. Güleç 2013 Early Upper Paleolithic shell beads at Üçağızlı Cave I (Turkey): Technology and the socioeconomic context of ornament life-histories. *Journal of Human Evolution* 64: 380-398.
- Vanhaeren, M., d'Errico, F., Stringer, C., James, S. L., Todd, J. A. and H. K. Mienis 2006 Middle Paleolithic shell beads in Israel and Algeria. *Science* 312 (5781): 1785-1788.

石器素材の地質学的考察

久田 健一郎

筑波大学生命環境系

先史シルクロードの石材文化に関する地質学的考察

2018 年度は、ウズベキスタン・フェルガナ盆地北縁部（図 1）の概査調査を行った。フェルガナ盆地は、天山山脈のほぼ西端に位置し、シルダリヤ川上流域に相当する（図 2）。調査にあたってはウズベキスタン地質調査所の協力を得た（図 3）。

フェルガナ盆地は、タリム盆地の北縁の天山南路を西に向かい、カシュガルから天山山脈を越えてきたところに位置する。アジア東西文化交流に歴史時代シルクロードが果たした役割は計り知れないが、その起源は歴史的にどのくらい遡るだろうか。20 万年から 10 万年前に出アフリカを果たしたホモ・サピエンスは、西アジアでまず定住

し、その後 5 万年前前後に世界に拡散したことが知られている。おそらくザグロス山脈やアルボルス山脈に達したホモ・サピエンスはカスピ海東側を経て、中央アジアに入ってきたものと思われる。その後、いわゆるヒマラヤ北ルートを経て東アジアに到達したのであろう。この東西文化交流を考えた場合、ヒマラヤ北ルートあるいは先史シルクロードが、歴史時代シルクロード形成に大きな影響を与えたことがうかがえる。西秋（2018）は「特別展シルクロード新世紀ーヒトが動き、モノが動くー」（岡山市オリエント美術館・古代オリエント博物館）の中で、「先史シルクロードを理解することは、みなが思い浮かべる歴史時代シルクロードにおける東西交流がいかに洗練されたものであったかを理解することにつながると思う。」



図 1 フェルガナ盆地北縁付近



図 2 フェルガナ盆地を流れるシルダリヤ川



図3 野外調査に使用したウズベキスタン
地質調査所の車

と述べている。したがって、東西 300 km に及ぶフェルガナ盆地の自然環境、とくに石器素材を提供した地質状況の把握と理解は重要な研究課題に成り得る。また石器を介した交易の可能性もあり、歴史時代シルクロード形成に社会的文化的側面から情報を提供できるものと思われる。

本年度の調査では、フェルガナ盆地北縁部の

CHUST 周辺の調査を行い、地質特性を明らかにした。その結果、従来白亜系（陸源性砕屑岩や石灰岩などから構成される）とみなされた層序のうち、著しく欠如している可能性が出てきた。これはフェルガナ盆地形成史を検討する上で、極めて重要な成果である。石灰岩層（厚さおよそ 100 m）は主に古第三紀であることが判明した。

ウズベキスタンの前—中期旧石器時代については Suleymanov and Aripdjanov (2018) に詳しい。彼らによれば以下のとおりである。1900 年代の前半に Teshiktash Cave からネアンデルタル人骨の発見があり、ヨーロッパから中央アジアにかけてのネアンデルタルの広がりを示す上で重要なサイトである。その後長らく人骨が見つかっていないが、2000 年代に入って、Obirakhmat や Anghilak Cave から中期旧石器時代の人骨が見つかった。併せて多数の石器群も見つかっている。カザフスタンの Karatau Range は原始的な石器を



図4 ウズベキスタン及び周辺国の旧石器時代遺跡 赤丸がフェルガナ盆地
(元図は Google Earth 画像)

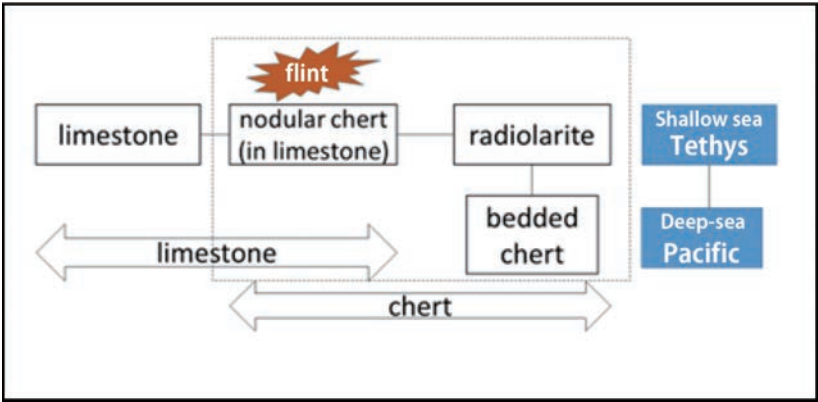


図 5 石灰岩と珪質岩の分類

産出するサイトとして知られている。その他に、Kuturbulak、Amankutan などの旧石器時代のサイトがある。これらのサイトは、天山山脈西端の山麓部に位置する（図 4）。

石器素材の考古学的地質学的意義

現在、石器素材の考古学的地質学的意義について考察を進めている。旧石器時代の石器の素材といえば、打製石器では西アジアの場合、フリントやチャート、黒曜石といわれている。黒曜石は流紋岩～石英安山岩質ガラス質火山岩である。チャートは「成層又は層状をなす場合と、石灰岩や苦灰岩中の団塊をなす場合とがある。」（地学辞典 平凡社 1970 年）とあり、前者は層状チャートや放散虫岩 (radiolarite)、後者は珪質ノジュール(団塊)と呼ばれている。イラン・ザグロス山脈では、白亜紀前期の放散虫からなる放散虫岩が発達し、これらが中期旧石器時代の石器の素材として使用されている（図 5；久田 2018）。ここで問題となるのが、チャート、フリント、放散虫岩、珪質ノジュールというそれぞれ言葉がもつ意味合いである。整理すると以下ようになる。西アジアでは石灰岩－珪質ノジュール（フリントと同意語に使



図 6 タシケントにある国立地質博物館



図 7 地質博物館長 Axmedshayev Axmadjon 氏と筆者

われる)－放散虫岩が漸移的であり、この関係はこれらの岩石が堆積した 1.0 ～ 1.5 億年前の古海洋（テチス海）が大きく関係している。この放散



図8 陳列されている石器

虫岩は比較的浅海の堆積物であり、日本列島に産出する層状チャートは深海の堆積物である。したがって、黒曜石を除いて、打製石器の素材となる岩石は生物源堆積岩（有孔虫や放散虫というプランクトン）であり、いわゆる造山帯の岩石ということになる。これは、石器素材の入手や石灰洞の存在を考慮すると、人類の世界拡散ルートに造山帯のような地質要素が影響していたのではないかと考えられる。日本列島では黒曜石や珪質頁岩が

石器素材として重要であるが、古代人の石器素材の選定に関わる要因についても現在検討を進めている。黒曜石については大分県を、珪質頁岩については秋田県の主要産地を研究対象としている。

本年度の調査では、ウズベキスタン、タシケントにある国立地質博物館（図6-8）で石器標本の素材同定を行う機会を得た。陳列されている石器の大部分は、珪質ノジュールと思われる。

参考文献

久田健一郎 2018:『アフリカを脱出した人類最初の奇跡ー西アジア・ザグロスの考古地質学ー』愛智出版、157 頁。

西秋良宏 2018:「先史シルクロードのネアンデルタール、ホモ・サピエンス」『シルクロード新世紀ーヒトが動き、モノが動くー』岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館、22-23 頁。

Suleymanov, R. & O. Aripdjanov 2018: Issues of transition from the Lower to the Middle Paleolithic in Central Asia. *PaleoAsia International Workshop*, pp. 12-13.

イラク・クルディスタン、チャルモ遺跡の調査と 新石器化への新視角

常 木 晃
筑波大学人文社会系

イラク・クルディスタンは、新石器化研究にとっては、いわば聖地ともいえる場所である。それは、第2次世界大戦が終了して間もなくの1948年から1955年にかけて、米国シカゴ大学オリエント研究所のロバート・ブレイドウッドたちのチームが、史上初めて、実際の考古学調査に基づいてなぜ人々が農耕・牧畜を始めたのか、つまり食糧生産社会を創り出したのか（すなわち新石器化）の研究（ジャルモ先史プロジェクト）を行った場所であるためだ（Braidwood and Howe 1960, Braidwood et al. 1983）。その調査に基づいてブレイドウッドは、新石器化を説明するためのいわゆる「核地帯（栽培家畜化される野生の動植物が生息する場所）の山麓部における天水農耕」仮説を提示し（Braidwood 1967）、一世を風靡した。しかしながら、1958年から計画していたブレイドウッドの第4次調査がイラクの7月14日革命で休止せざるを得なくなったように、その後のイラクの政治的混乱から、イラク・クルディスタンでの外国隊による考古学調査は長期にわたって全く行われなくなってしまう。

2000年代後半になって、イラク・クルディスタンの政治的安定がもたらされるようになると、クルディスタン地域政府（自治政府）は、イラク・クルディスタンへの考古学調査を外国隊に開放す

る政策をとるようになる。それは、イラクのフセイン政権時代に押し付けられていた大メソポタミア主義に基づく文化政策を転換し、クルディスタン地域の歴史を自らの手に取り戻したいという強い願望が背景にある。もともとクルド語で書かれた歴史文書を持たず、クルディスタン地域の歴史を復元するための独自の文献資料を持たないこの地域の人々にとって、自らの歴史の復元に考古学は重要な手段となるためである。そのための資金も人材もない状態では、外国隊の力を借りるのが最も現実的な方法であった。また、2011年以降、シリアが内戦状態になって行き場を失った欧米の考古学調査隊が、この時とばかりにイラク・クルディスタンになだれ込むことになった。

カラート・サイド・アハマダンの調査

シリアやイランで先史時代調査を続けてきた私たち筑波大学の調査隊も、イラク・クルディスタンのスレマニ文化財局から要請を受けたこともあり、2014年からスレマニ地区で考古学調査を開始した（図1）。私たちの目的は、ブレイドウッドたちの調査から60年近く経ってしまったイラク・クルディスタンのスレマニ地区での新石器化研究を、再開することにあった。2014年の春に、スレマニ地域で考古学踏査を行い、スレマニ



図 1

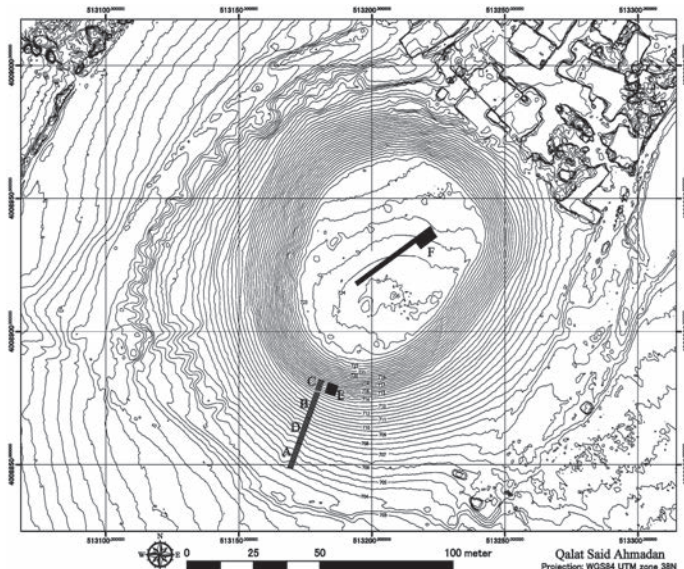


図 2

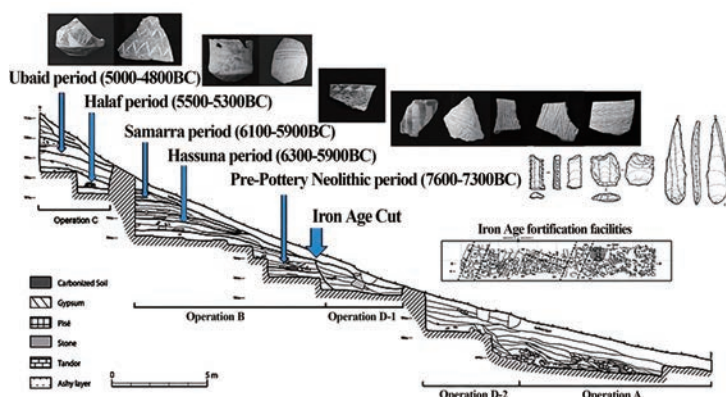


図 3

北方のペシュダール平原に所在するカラート・サイド・アハマダン遺跡から調査を始めることにした。同遺跡での発掘調査は、2014 年と 2015 年の夏に 2 シーズン実施し、先土器新石器時代から銅石器時代までの断続的な文化堆積を発見した（図 2・図 3）（Tsuneki et al. 2015, 2016）。また、同遺跡が鉄器時代には集落ではなく、防御用の砦のような役割を果たしていたことが分かった。同遺跡の地質図や 3D 図（図 4）なども作り、そこからは、小川と扇状地末端の湧水する泉に囲まれた自然低丘陵上に、先土器新石器時代後半の紀元前 8 千年紀半ばに農耕牧畜民が初めてここにやってきて、村を作り始めたことなどが読み取れる。その後断続的にここに村を作り続けた人々は、ある時はイラン高原側の人々と、またある時は北メソポタミア側の人々と交易などの関係を保ちながら、独自の新石器、銅石器文化を創っていったようだ。

チャムチャマル地区の調査

2016 年からは、スレamani 西方のチャムチャマル地区で新たな調査を開始した。スレamani 文化財局から、かつて欧米の考古学研究者が発掘や踏査を行い、その後放置されてしまった遺跡の調査を再開し、歴史復元の材料にできないだろうかという要請を受けたからである。私は、チャムチャ

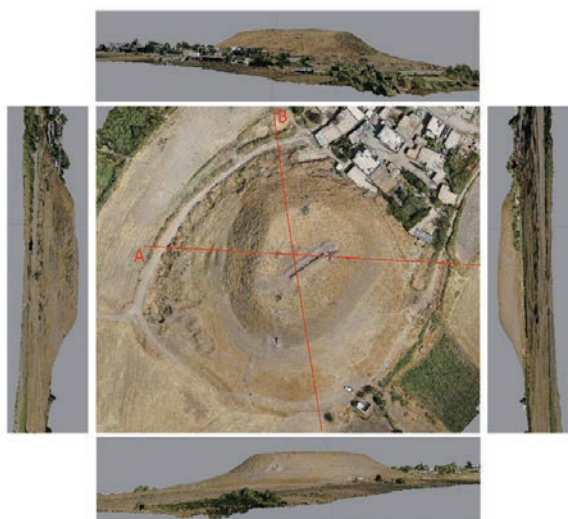


図 4

マル地区で実施されたジャルモ先史プロジェクトを新しい視点から見直したいと提案し、受け入れられた。発掘調査は最小限にとどめ、遺跡周辺の詳細な地形図や地質図、3D 図などを制作し、そこから新たな視点でイラク・クルディスタン地域の新石器化を考えることができないか、という提案である。ジャルモ先史プロジェクトのブレイドウッドの結論である、「核地帯における山麓部での天水農耕」起源説は、この 60 年間のシリアやヨルダン、トルコなどでの新石器時代研究の成果をみると、あまりに素朴であると考えられる。もっと複雑な景観との関わりや過程を経て、新石器化が進展したのではないだろうか。ザグロス山脈から南西に向かって流れ出ているチャム・ガウラ（クルド語で大きな川という意味）に沿って、チャムチャマル東方では、カリム・シャヒル、トゥルカカ、ジャルモと 3 つの重要な遺跡がほぼ 1 km 間隔で並んでいる（図 5）。これらの遺跡には、続旧石器時代から土器新石器時代までの様々な時期の文化層が存在することが予想されるため、そこから新石器化の過程が読み取れるのではないかと考えた。



図 5



図 6

トゥルカカ

2017 年には、最も古いと考えられたトゥルカカ遺跡で小規模な発掘調査を実施した（図 6）。住居や炉址などの遺構は全く発見されず、出土品のほとんどはチャートの自然石、石核、石刃と石核を調整する際に出た剥片ばかりであった。植物遺存体は全くと言ってよいほど出土せず、動物骨もウマ科のものがほんの少し出土しただけであった。このような証拠から、同遺跡は、紀元前 17,000–15,000 年ごろの続旧石器時代（このあたりの編年ではザルジ期と呼ぶ）に営まれた、石器製作のためのワークショップであったと結論づけた。絶対年代的にも、また完全な狩猟採集民が一時的に利用したという意味でも、新石器化を考え



図 7



図 8

るためには少し古すぎる遺跡であった。

チャルモ

2018 年には、本プロジェクトの肝とでもいえる、チャルモ（ジャルモ）遺跡を調査対象とした。チャルモはクルド語で「白い」という意味であり、カラート・チャルモは「白い丘」という意味である。ブレイドウッドたちがチャルモを発掘した時、アラビア語には「チャ」という発音がないので「ジャ」を当てて「ジャルモ」という表記になったのだが、ジャルモでは誰もその意味を分らない。そのた

めに私たちはクルド語の「チャルモ」を遺跡名として採用することにした。確かに周りの砂岩や泥灰岩の場所と比べてチャルモは白く見えるので、そのような名前が付けられたのだろう。

チャルモでは、2 x 2 m のグリッドを 2 か所と 1 x 2.5 m のトレンチを 1 か所設けて試掘を行っている（図 7）。G-10 グリッドでは石器とともに later manifestation と呼ばれる新しいタイプのジャルモ土器が出土し、III 北トレンチでは、ほぼ全層が先土器新石器時代層であった。後者から採取した炭化物サンプルの ^{14}C 年代を名古屋大学年測センターの南雅代先生に測定していただいたところ、7 サンプルで 7296–6651 cal BC (2 sigma) の間を示す較正年代が得られた。遺物から見て先土器新石器時代終末に当たるので、大変適性な年代値と考えている。チャルモの南側斜面では筑波大学の辰巳祐樹氏が GPR 探査と磁気探査双方を用いて地中探査を実施し、南側斜面にも遺構が広がっていることが想定された。これを検証するために、ブレイドウッドのグリッドの D/E-15/16 グリッド近辺に W ピットを設けて試掘したところ、

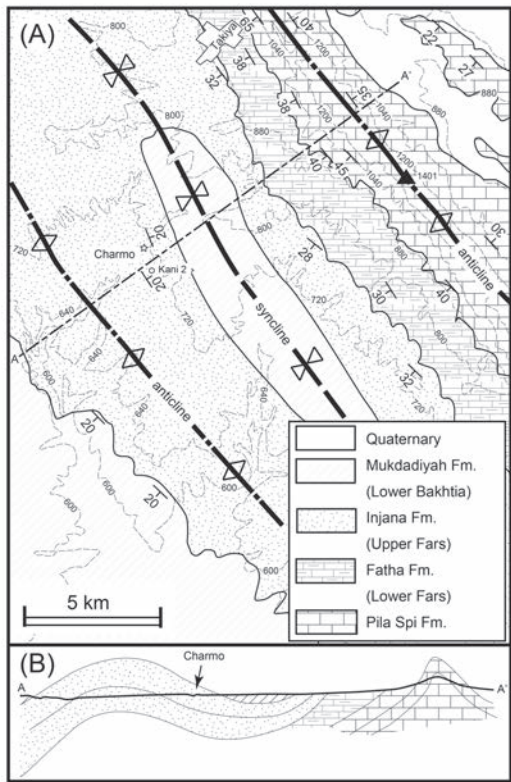


図 9

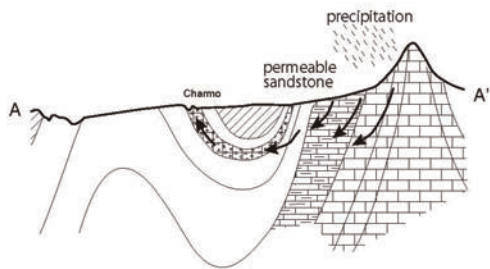


図 10

表土直下から集石遺構が検出された。チャルモの新石器時代集落が丘陵南斜面にも伸びていたことが検証されている。

2018 年度調査で重要な成果は、徳島大学の安間了先生が行ったチャルモ周辺での地質調査と、中部大学の渡部展也先生が実施した UAV によるチャルモ南側の測量調査でもたらされている。

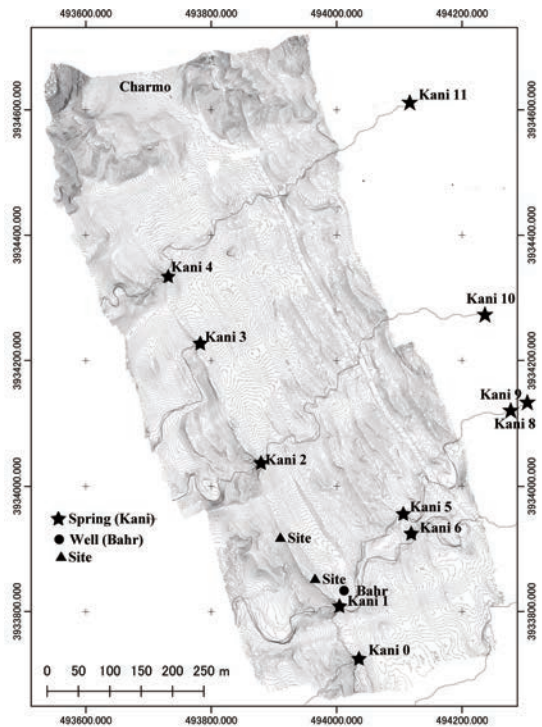


図 11

チャルモ周辺は砂岩と泥灰岩の互層による非常に印象的なケスタ地形を呈しているが（図 8）、褶曲による背斜構造と向斜構造が入り組み、ザグロス山脈への降水が南西への伏流水となり、チャルモ付近で湧出する（図 9・図 10）。それは、よりきめの粗い砂岩を雨水が浸透し泥灰岩に沿って流れるからである。つまり、チャルモ付近の地下は、伏流水によりまるで貯水池のような状況になっているのだ。チャルモ南側の測量図とオルソ図からは、2 列にわたって点々と泉が連なっている状況が分かる。注目すべきは、東側の泉からの湧水が、チャルモ南側の緩斜面を、北東から南西に向かって冬季にあたかも灌漑するがごとくに潤すことである（図 11）。そして、そのような泉の近くには、チャルモと同時期の新石器時代の遺物が散布している（図 12）。つまり、チャルモに農耕村落が営まれていた時期に、人々がこの南側緩斜面

を耕地として使用していた可能性が極めて高いと考えられる。そしてそれは、単なる天水農耕ではなく、帯水農耕とでも言ってよいような、泉を水源として利用した農耕であった可能性がある。

私たちのチャムチャマル地区での新石器化をめぐる研究はまだ始まったばかりだが、シカゴ大学のブレイドウッドらが考えたような

「山麓部での天水農耕」という単純な図式では、この地区の新石器化と初期農耕村落の発展を捉えきれないことが徐々に判明してきている。「貯水池の真上で営まれた複雑な帯水農耕」という視点でチャルモをはじめとするチャムチャマル地区の初期農耕遺跡を捉えなおすことで、ここに初期農耕村落が営まれた本当の意味を理解することができるのではないだろうか。

参考文献

Braidwood, R. J. 1967: *Prehistoric Men* (Seventh edition), Scott, Foresman and Company, Glenview.

Braidwood, R. J. and B. Howe 1960: *Prehistoric Investigations in Iraqi Kurdistan*, Studies in Ancient Oriental Civilization, No.31, The Oriental Institute of the University of Chicago, Chicago.

Braidwood, L. S., R. Braidwood, B. Howe, C. A. Reed, and P. J. Watson 1983: *Prehistoric Archaeology along the Zagros Franks*, Oriental Institute Publications Volume 105, Chicago.



図 12

Tsuneki, A. 2013: Proto-Neolithic caves and Neolithisation in the southern Zagros, in Matthews, R. and H. F. Nashli (eds.) *The Neolithisation of Iran: The Formation of New Societies*: 84-96. Oxbow Books, Oxford.

Tsuneki, A. 2019: Revisiting the Turkaka sites in Slemani, Iraqi-Kurdistan, in S. Nakamura, T. Adachi, M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Western Asian Archaeology in Honor of Sumio Fujii*: 243-250. Rokuichi Shobou, Tokyo.

Tsuneki, A., K. Rasheed, S. A. Saber, S. Nishiyama, R. Anma, B. B. Ismail, A. Hasegawa, Y. Tatsumi, Y. Miyauchi, S. Jamm, M. Makino and Y. Kudo 2015: Excavations at Qalat Said Ahmadan, Slemani, Iraq-Kurdistan: First interim report (2014 season), *Al-Rāfidān* 36: 1-50. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Tokyo.

Tsuneki, A., K. Rasheed, S. A. Saber, S. Nishiyama, N. Watanabe, Tina Greenfield, B. B. Ismail, Y. Tatsumi, and M. Minami 2016: Excavations at Qalat Said Ahmadan, Qaladizah, Iraq-Kurdistan: Second interim report (2015 season)”, 7: 89-142. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Tokyo.

新石器時代の専門化に関する覚え書き

有 村 誠

東海大学文学部

工芸の専門化（craft specialization）とは、一般に、製品を生産する職人や職能集団が出現することと理解される。職人・職能集団は自らが生産した製品を他者に渡し、その見返りに生活に必要な物資やサービスを受ける。考古学では、専門化は社会経済的な発展や初期国家成立に伴って出現する現象の1つとされ、多くの研究がなされてきた。また、それらを解説した優れたレビューも多い（Clark 1995; 西秋 2000 など）。西アジア考古学においても、都市化や階層化社会のはじまりを示す重要な指標の1つと考えられ、特に銅石器時代（前4千年紀）の研究で重点的に取り上げられてきたテーマでもある。

一方、こうした都市化と連動する本格的な専門化の出現とは別に、専門化のルーツを追求する研究が1990年代以降活発になった。特に、以下でふれるように、専門化の初源を新石器時代に見出す研究が少なからず見られるようになった。

何をもって専門化とみなすかは、結局のところ研究者が行う定義に左右される。また、初期専門化のような、専門化とよべるかどうか微妙な段階では、本格的な専門化のような明確な特徴を捉えることは困難であろう。そこで、専門化の起源を探るような試みを行うならば、専門化の定義を狭めないでおくことが得策だろう（西秋

2000:3）。都市化や階層化社会の出現に伴う専門化を成熟した本格的な専門化とすれば、専門化のはじまりは、その規模、社会的意味合いにおいて、区別されるものであろう。本稿では、西アジア新石器時代に出現したとされる専門化を「初期専門化」と呼びたい。

西アジアでは旧石器時代末期の定住化現象以降、物質文化に質的量的な変化が明確に現れる。その背景には、当時起きつつあった社会的、経済的、あるいは観念的な変化があったことが推測される。専門化という切り口で新石器時代の物質文化を検討すれば、当時の社会変容を理解することに繋がるのではないだろうか。

このような意図から、本稿は、西アジア新石器時代における初期専門化に関する議論を2、3概観しつつ、今後の課題や見通しを述べたい。

＊

管見によれば、1990年代以前には専門化の問題を新石器時代研究の中で取り上げた論考はほとんどない。新石器時代研究と専門化の問題は無縁に等しかった。実際、1989年に発表された工芸の専門化の起源を論じたS. A. ローゼンの論文でも、新石器時代は工芸の専門化が未熟な段階にあったと評価されている（Rosen 1989）。この論文では、新石器時代ではどの遺跡でも石器製作が

行われていたのに対し、銅石器時代には特定の石器を専門的に製作する集落が現れることから、工芸の専門化は銅石器時代以降に進行すると結論付けられた。

初期専門化は新石器時代にはじまったと最初に主張したのは、おそらく C. ペルレであろう (Perlès 1992)。彼女は、ギリシア新石器時代における交換・交易の発達との関係の中で、いくつかの集落では特別な工芸品が専門的に生産され、それが他の集落との交換に用いられたと考えた（彼女の言う “village craft specialisation”）。ペルレが重視する工芸の専門化の指標は次の 4 点である (ibid, p. 135)。

- ・（製品を）分配する生産の中心地
- ・ 生産高
- ・ 生産地から外へ広がる流通の範囲
- ・ 必要とされる技術的ノウハウの複雑さ

実際のところ、ペルレが主張したギリシア新石器時代の専門化の様相は、前述のローゼンが示した南レヴァントの銅石器時代・前期青銅器時代の石器製作のそれとほぼ同一のものである。両者が専門化のはじまりとして共に重視している考古学的状況は、ある集落で専門的に製作された品物が、交換を目的として、他の集落に供給される、というものである。このような状況が考古学的に認められるのであれば、その対象とする社会では専門化が十分に発達していたように思われる。

最近の概説や総説をみると、多くの研究者が西アジア新石器時代に初期専門化がはじまっていたことを認めているようである。中でもその代表例としてしばしば言及されるのが PPNB 式対向剥離石刃製作技術（あるいはナヴィフォーム式石刃技術）である（例えば Goring-Morris and

Belfer-Cohen 2014）。PPNB 式対向剥離石刃製作技術（以下、PPNB 式石刃技術）は、PPNA 期の末にユーフラテス河中流域に誕生した技術であり、続く PPNB 期にはレヴァント全域に瞬く前に広がった。この技術の目的は、先定石刃と呼ばれる葉状で真っすぐな側面観をもった石刃を製作することである（有村 2013）。この石刃から尖頭器や鎌刃が製作された。素材となる石刃の規格性が高いことから、二次加工をそれほど加えずに道具を簡単に製作できることが大きな利点であった。

PPNB 式石刃技術と初期専門化の問題をはじめて取り上げたのは L. A. キンテロと P. J. ウィルケであり (Quintero and Wilke 1995)、彼らの主張はほぼ定説となって繰り返し引用されてきた。彼らの主な主張は次のようなものである。

- ・ PPNB 式石刃技術による石刃生産は PPNB 期という非階層化社会に起こった最初の専業である。
- ・ 共同体の一部のメンバーが、おそらくパートタイムの専業で、同じ共同体の他の構成員のために、PPNB 式石刃技術による石刃生産を行った。
- ・ こうした石刃製作のあり方が出現した背景には、定住化の強化により起きた人口増加と、それに伴う食料採集・生産活動の拡大という経済的発展が背景にあった。言い換えると、以前とは比較にならない量の、尖頭器や鎌刃といった狩猟や農耕に使用する道具（の素材）が PPNB 期に必要となったことが原因。

上記のように、キンテロとウィルケは PPNB 式石刃技術による石刃生産が専門化した要因を PPNB 期の経済的需要の拡大に求めている。さらに重要な点は、ここで主張されている初期専門化

とは、同一共同体内における労働の分担を意味しているということである。すなわち、限られたメンバーによる特定製品の専門的生産と他のメンバーへの製品の提供、という状況を初期専門化と呼んでいる。

さて、それでは、どのような考古学的証拠に基づいて、このような主張がなされたのであろうか。キンテロとウィルケが実際に参考とした考古資料はヨルダンのアイン・ガザル (Ain Ghazal) のものである。実際には、PPNB 式石刃技術の以下の様な特徴をとらえて初期専門化と判断したようである。

- ① 規格性の高い石刃を大量に生産する高度な技術
- ② 集落周辺で入手できない良質な石材
- ③ 専門家（職人）が残した作業場（workshop）の存在

①は、キンテロ、ウィルケが石器の複製製作実験を通して得た意見である。PPNB 式石刃製作には、高度で専門的なノウハウや熟練した手技が必要であることから、限られたメンバーのみが行っていたと考えた。②も①に関連して、PPNB 式石刃製作には近在にない良質な石材が用いられており、そうした石材の入手は共同体の数人にのみ限られた可能性が高いと考えた。③は、しばしば専門化の議論の中で挙げられる指標の 1 つでもあるが、遺跡内で石刃製作に関わる遺物が一か所に集中する傾向がみられるとすれば、それは職人が製作した作業場であった可能性が高いと考えてもよいとした。

キンテロとウィルケの PPNB 式石刃技術と初期専門化に関する主張は、やや無批判に引用されてきたように思える。筆者は、PPNB 式石刃技術を専門化の始まりとみなすことができるのか、も

う少し検討してもいいのではないかと考えている。例えば、上記の①、②は何も PPNB 式石刃技術が初めてもった特徴ではないであろう（例えば旧石器時代のルヴァロア技法など）。工芸品の製作に関わる技術やノウハウの複雑さや専門性の高さは、しばしば専門化の指標とみなされる。しかし、過去の技術の複雑さについては、その技術が当時の人々にどのように認識され運用されていたのが重要であって、私たちが抱く印象ではない。果たして PPNB 式石刃技術は新石器時代の人々にとって専門性が高く使いこなせる人が限定的な技法であったのだろうか。③の新石器時代の作業場の同定は、専門化の出現を探るうえで有力な指標と思える。今後の検討課題になりえるだろう。

階層化社会における高度な専門と異なり、初期専門化をどうやって定義するのかは、その兆しが微妙なものであることが想定されるので、簡単ではないだろう。近年、E. バイサル (Baysal) はアナトリアの新石器時代を対象に、初期専門化を判断するための指標を 3 つの項目に分けて提案している (Baysal 2013, 表 1)。バイサルは後代の高度な専門化と新石器時代に始まったであろう初期専門化が異なることを意識し、さらに、考古学的に確認可能な指標を選んでこの表を作成した。そのため、従来の専門化の基準ではしばしば言及されてきた、専門の度合い（パートタイム／フルタイムの区別など）などの考古学的に検証困難な指標は省かれている。論文の中では、実際にこの指標に照らし合わせて、中央アナトリアのカレテペ (Kaletepe) の石刃製作とボンジュクル・ホユック (Boncuklu Höyük) のビーズ製作の 2 例が検討された。しかし、これらの指標は一見して考古学的に検証可能なものとばかりとは言えず、論文における先の 2 例の検討過程も十分とはいえない。

表 1 新石器時代の専門化の指標（Baysal 2013: Tab. 1 より）

1. 新石器の専門化の必要条件
<ul style="list-style-type: none"> ・余剰：あるモノやサービスの余剰をもっている、または提供できる潜在的な消費者の存在。 ・価値：交換のための等価性という価値観。必ずしも現在のような決まった一定の価値交換を想定する必要はない。 ・報酬：ある種の互惠関係が専門化へと向かう。社会経済的な相互作用として贈り物の交換があった可能性を想定すべき。
2. 技術と生産
<ul style="list-style-type: none"> ・物質の加工：交換のための製品生産の根底にあるのは、他者が求める製品を生み出すために個人によって物質が加工されるということである。一般に加工することで、物質に新たな価値が加わる。 ・知識／ノウハウ：生産活動には特殊な知識やノウハウが必要かもしれない。しかし、このことは必ずしも共同体の他のメンバーがこれらの知識やノウハウを知りえないということではない。 ・繰り返し生産：ある製品の生産を行う世帯は、消費される以上の製品の生産を行える能力がある。 ・要望に応えた生産：何らかの理由でその製品が必要である。
3. 社会的側面
<ul style="list-style-type: none"> ・消費者より少ない生産者：工芸の専門化が広く普及すれば、あらゆる専門を担う個人の割合は減る。 ・生産関数：ある製品の需要が認識されることが求められる。 ・文化的適合：生産者や消費者は、製品の様式、形態、機能、材質などにより、製品の認識が可能である。 ・文化的に特殊な技術：消費者は、獲得する製品の識別が、製品の質、機能、様式、流行などを通じて可能である。

表 2 初期専門化における 3 段階

A. 世帯内での労働分担
同一世帯内で労働の分担が性差、年齢、得手不得手等によって行われる。世帯内で生み出された物品は基本的に世帯内で消費される自家消費の段階である。この段階は新石器時代以前から存在したことが想定される。物品の製作址（作業場）は集落のあちこちで見られ、特定の場所に集中しない。製作された物品の特徴が住居間（世帯間）で異なる様相を示す可能性がある。
B. 集落内での労働分担
特定の世帯で製作された物品が、同じ集落の他のメンバーに提供される。集落内の限られたメンバーだけが特定の物品の製作に関わり、物品は集落内で消費される。物品の製作址（作業場）は特定の場所に限られ、他の場所では完成品や毀損品のみが出土する。
C. 集落間での労働分担
集落で製作された物品が、他の集落にも提供される。特定の物品は特定の集落でのみ製作され、他の集落では製作されない。

ただ、初期専門化が出現するには、新石器共同体の中でどのような社会、経済、技術的な条件が整えばいいのか、考えるべき要点がまとめられていて参考になる。

本稿で問題とする初期専門化が、共同体内の労働の分担から出発しているのは間違いないであろう。これまでの研究を参考に、初期専門化の度合いを、労働を提供する側と受け取る側との関係を軸にしてまとめると、次の3段階に区分できる。

- A. 世帯内での労働の分担
- B. 集落内での労働の分担
- C. 集落間での労働の分担

専門化研究の蓄積を参考にすれば、先史社会の全てにおいて初期専門化がAからCの段階へ進化論的に発展していったと考える必要はなさそうであるが、当然、専門化の度合いはAからCに向かって強まると考えられる。各段階の特徴は表2にまとめた。専門にける時間（パートタイム／フルタイム、長期／短期、通年／季節的）や見返り・交換の有無や内容などは、専門化の中でも重要な要素であるが、考古学的に確認が難しいと思われるので、ひとまず省いてある。西アジア新石器時代にあらわれた初期専門化を対象にした場合、とりあえずこれら3段階を念頭におけば十分であろう。

B段階は先に述べたキンテロとウィルケが想定したものに一致する。3段階の中では、C段階が西アジア新石器時代に存在したのか否かもっとも検討すべきものであろう。通常、この段階でみられる状況は西アジアでは銅石器時代以降に顕著に認められるが（Rosen 1989; Rowan and Golden 2009 など）、先に触れたペルレの主張するギリシア新石器時代の専門化もここに相当する。また、

西アジア新石器時代の専門化がこの段階にまで達していたと主張する研究者も少なくない（以下参照）。

次に、ここで示した初期専門化の3段階を基準に、実際の考古資料を検討してみたい。

＊

ここで取り上げるのは、前7千年紀後半、土器新石器時代のケルク遺跡（Kerkh、北西シリア）の事例である。ケルク遺跡の土器新石器時代層からは墓地が発見され、240体以上の埋葬が確認された（Tsuneki 2011）。その中でも興味深い事例は、ある成人男性の墓（Str. 1058）である（Tsuneki 2017）。特筆すべきはその副葬品で、石器製作に関連する遺物がまとまって発見された。遺物にはPPNB式石刃技術でつくられたフリント製石刃やデビタージュ、そして石器製作に使用する鹿の角やハンマーストーンなどが含まれていた。副葬品の内容に加えて、類似した副葬品をもつ墓がケルク遺跡からは他に発見されていないことから、おそらくこの墓の被葬者は土器新石器時代のケルク集落における唯一の石器製作の職人であったと考えられる（Arimura 2019）。

新石器時代の墓地が発見された前7千年紀後半のケルク遺跡では、道具石器の多くは近在のフリントを使った簡易な剥片石器で製作されており、遠隔地の良質フリントを使ったPPNB式石刃技術はほとんど廃れてしまった。しかしこの時代、例外的にPPNB式石刃を用いて製作した石器が存在する。それは尖頭器（アムーク型尖頭器）である。大型の石刃を素材とした尖頭器はPPNB期に比べて数を減らしたとはいえ未だに製作されており、さらに副葬品や特殊遺構に供献された事例が現れる。おそらく前7千年紀後半の土器新石器時代には、尖頭器は日用品というよりもPPNB文化

的な価値が受け継がれた特殊な品として存続していたのではないのだろうか。前8千年紀（PPNB期）にはレヴァント中に普及したPPNB式石刃技術も、前7千年紀後半になるとほとんどの地域で衰退しており、この技術を使いこなせる人材もかなり少なくなっていたことが推測される。ケルク遺跡で発見された墓（Str. 1058）の被葬者のような人物のみが同技術を受け継ぎ、彼が製作した石刃（または尖頭器の可能性も）が集落の他のメンバーに提供されていたのだろう。

先の初期専門化の3段階に照らすと、このケルクの事例はB段階に相当する。PPNB式石刃技術がもっとも盛行したPPNB期（前8千年紀）では、同技術はありふれた石刃技法であったと思われる。その証拠にレヴァントのどのような規模の遺跡からもこの技術で製作された石器が出土する。このような状況下では、キンテロやウィルケが主張したような一部の人々のみがこの技術を熟知し、石刃生産の専門を行っていたとは考えにくい。一方で、土器新石器時代（前7千年紀）になるとPPNB式石刃技術は、石器製作で主体的な役割を果たさなくなり、徐々に忘れ去られていく。それでもケルクの事例のように、尖頭器の社会的ニーズからPPNB式石刃技術を保持する継承者は存在した。このような社会的背景の下で、PPNB式石刃技術の保持者は専門として石刃製作を行うようになったのではないだろうか。新石器時代における初期専門化の一例とみなせるように思える。

＊

新石器時代の専門化は様々な考古資料から論じられている。例えば、メソポタミアにおける土器生産の専門化（常木 2005）、黒曜石製石刃の専門的生産と流通（Balkan-Atlı and Binder 2012）、ビーズ製作と初期専門化（Wright et al. 2008）な

どがあげられる。さらには初期専門化と関連して、新石器時代における商品（commodity）の出現（Gebel 2010）、製品を交換する市場の存在（Aurenche and Kozłowski 1999）などの研究もあり、初期専門化をめぐる議論は専門化の起源だけではなく、交換・交易の形態、集団アイデンティティの形成といった新石器社会の様々な側面へと及ぶ。今後、初期専門化を念頭に、新石器時代の各種工芸を検討することで、西アジア新石器時代に起こった社会変容についてより理解を深められるだろう。

参考文献

- Arimura, M. (2019) Last PPNB blade maker in the Pottery Neolithic at Tell Ain el-Kerkh, northwest Syria: The demise of PPNB-type bidirectional blade technology. In: Nakamura, S., Adachi, T. and Abe, M. (eds.), *Decades in Deserts. Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*. Tokyo: Rokuichi-shobo, pp. 191–204.
- Aurenche, O. and Kozłowski, S.-K. (1999) *La Naissance du Néolithique au Proche-Orient*. Paris: Éditions Errance.
- Balkan-Atlı, N. and Binder, D. (2012) Neolithic obsidian workshop at Kömürcü-Kaletepe (Central Anatolia). In: Özdoğan, M., Başgelen, N. and Kuniholm, P. (eds.), *The Neolithic in Turkey. New excavations and new research. Vol. 3 – Central Turkey*. Istanbul: Archaeology and Art Publications, pp. 71–88.
- Baysal, E. (2013) Will the real specialist please stand up? Characterising early craft specialisation, a comparative approach for Neolithic Anatolia. *Documenta Praehistorica* 40,1: 233–246.
- Clark, J. E. (1995) Craft specialization as an archaeological category. *Research in Economic Anthropology* 16: 267–294.
- Gebel, H.G.K. (2010) Commodification and the formation of Early Neolithic social identity. The issues as

- seen from the southern Jordanian Highlands. In: Benz, M. (ed.), *The Principle of Sharing. Segregation and Construction of Social Identities at the Transition from Foraging to Farming*. Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment 14. Berlin: ex oriente, pp. 35–80.
- Goring-Morris, A. N. and Belfer-Cohen, A. (2014) The southern Levant (Cisjordan) during the Neolithic period. In: Killebrew, A. E. and Steiner, M. (eds.), *The Oxford Handbook of the Archaeology of the Levant: c. 8000-332 BCE*. Oxford: Oxford University Press, pp. 147–169.
- Perlès, C. (1992) Systems of exchange and organization of production in Neolithic Greece. *Journal of Mediterranean Archaeology* 5: 115–164.
- Quintero, L. A. and Wilke, P. J. (1995) Evolution and economic significance of naviform core-and-blade technology in the southern Levant. *Paléorient* 21,1: 17–33.
- Rosen, S. A. (1989). The origins of craft specialization: Lithic perspectives. In: Herskovitz, I. (ed.), *People and Culture in Change*. BAR International Series 508. Oxford, pp. 107–114.
- Rowan, Y. M. and Golden, J. (2009) The Chalcolithic period of the southern Levant: A synthetic review. *Journal of World Prehistory* 22: 1–92.
- Tsuneki, A. (2011) A glimpse of human life from the Neolithic cemetery at Tell el-Kerkh, Northwest Syria. *Documenta Praehistorica* 38: 83–95.
- Tsuneki, A. (2017) The burial of Neolithic blade producer. *Al-Rāfidān* 38: 39–45.
- Wright, K. I., Critchley, P. and Garrard, A. (2008) Stone bead technologies and early craft specialization: Insights from two Neolithic sites in eastern Jordan. *Levant* 40,2: 131–165.
- 有村 誠 (2013) 「西アジア新石器時代における PPN 式対向剥離石刃製作技術の研究」『旧石器研究』9 号、43–60 頁。
- 常木 晃 (2005) 「シリアの民族誌から見た土器生産の専門化」佐々木幹夫・齊藤正憲編『世界の土器づくり』同成社、61–82 頁。
- 西秋良宏 (2000) 「工芸の専門化と社会の複雑化 — 西アジア古代都市出現期の土器生産 —」『西アジア考古学』1、1–9 頁。

西アジア先史時代の物資交易

黒曜石交易・ビチュメン交易の研究

前田 修

筑波大学人文社会系

物資の交易は、古代西アジアの長い歴史を通して常に重要な社会・経済活動でありつづけた。特に、先史時代における物資交易の発展は、社会の複雑化の過程と密接に結びついており、交易を研究することは、都市化へ向かう社会変容の軌跡を追うために不可欠の研究課題である。地域社会どうしの有機的な結びつきを可能にした交易ネットワークの実態を探ることは、専門化の進展の問題（本書 27-33 ページ参照）とともに、都市文明が出現する歴史過程を理解するうえで核心をなす問題なのである。

先史時代において交易された物資は、腐敗せずに残存し、発掘調査によって遺跡から出土する石器、石製品、土器、金属製品、骨角器、貝類などのほか、今では消失してしまい考古資料としては形を残していない、木製品、革製品、食糧といった有機物まで、多岐にわたることは疑いない。その中で、物資交易研究に考古学的にアプローチするために有用な資料となるのが、黒曜石とビチュメン（天然アスファルト）である。この2つは、発掘調査によって西アジアの遺跡から一定量が出土することが珍しくないうえ、旧石器時代から青銅器時代、あるいはそれ以降の時代において、西アジアの広い範囲に流通し、利用された物資であった。さらに、これらの資料は、蛍光X線分析、

ガスクロマトグラフィ質量分析などの理化学的分析手法で化学組成を分析することで、その産地を推定することが可能である。遺跡から出土する黒曜石やビチュメンがどの産地から運ばれてきたのかを判別することが可能であり、物資交易を研究するうえでの重要な情報を提供してくれるのである。したがって、本研究では、西アジアにおける黒曜石とビチュメンの交易を研究対象とし、都市化へ向かう社会における交易ネットワークの発展過程を解明することを目標に研究を進めている。

黒曜石交易

黒曜石製の石器は、フリント製・チャート製石器（本書 19-20）とともに、先史時代に極めて重要な役割を果たした物質文化である。それは、石



図1 トルコ・カッパドキアの黒曜石原産地の1つであるギョルル・ダー（Göllüdağ）の黒曜石露頭

鏃やナイフなどの道具として機能的な役割を果たしたのみならず、装身具や石製容器の素材としても用いられ、文化的な嗜好性が反映される社会的な物質文化でもあった（本書 221 ページ参照）。機器分析によってあきらかにされる化学組成をもとにその産地を判別する事が可能であるが、古代西アジアの中心をなすレヴァント・メソポタミア地方で利用された黒曜石の原産地はすべて、アナトリアおよびコーカサスの山岳地域に限られることが知られており（図 1）、古代西アジアにおいて黒曜石が交易された様相を実証的にトレースすることが可能である。すなわち、西アジア各地のさまざまな時代の遺跡から出土する黒曜石の産地同定をおこなうことで、数千年の長い時間軸に沿ってこの地域の黒曜石交易の変遷を辿ることができるのである。

考古学における黒曜石産地同定研究の歴史は古いが、近年におけるハンドヘルド型蛍光 X 線分析装置（pXRF）の急速な普及や、SEM-EDS などのより高精度な分析機器の応用により、西アジアにおける黒曜石の分析事例はこの 10 年で格段に増加している（cf. 前田 2017 および本書 149-154 ページ参照）。また、現在のトルコ共和国にあたるアナトリア北東部やアルメニア共和国などのコーカサス地方における黒曜石原産地のフィールド調査も進展しており、産地同定のための基礎データが確固なものとなっている。こうした研究の情勢を背景に、本研究では、英国マンチェスター大学との共同研究として、Manchester Obsidian Laboratory (MOL) を立ち上げ、Stuart Campbell 教授、Elizabeth Healey 研究員らとともに pXRF を用いた黒曜石産地同定研究を進めている（Campbell and Healey 2016 参照）。現在 MOL ではアナトリア、コーカサスのほぼ全ての黒曜石産地をカバーする

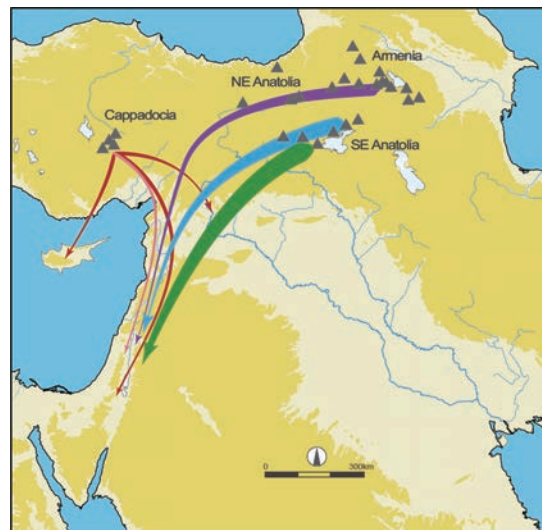


図 2 レヴァント地方の銅器時代における黒曜石の流通（赤：カッパドキア産、緑：ビンギョル産、青：メイダン・ダー産、紫：アルメニア・北東アナトリア産）

1549 点の原石標本（Manc pXRF source reference 3.71）を有している。また、旧石器時代から青銅器時代まで、数十遺跡から出土した、合計数千点の遺物資料をこれまでに分析している。その中には、1 つの遺跡において数百点の資料を分析した事例も多く含まれ、産地のバリエーションとその時間的変化について、数量的な分析も可能となっている。

その一例として、レヴァント地方の新石器時代から銅器時代までの黒曜石利用を見てみると、銅器時代（ハラフ期）において、黒曜石の流通パターンに大きな変化があることがわかってきた（図 2）。この時期には、それまで過半数を占めていた、ギョルル・ダー（Göllüdağ）、ネネジ・ダー（Nenezi Dağ）といったカッパドキア産黒曜石の利用頻度が減少し、南東アナトリアのビンギョル（Bingöl）産の黒曜石が増加するとともに、メイダン・ダー（Meydan Dağ）産の黒曜石の利用がはじまる。さらに、アルテニ（Arteni）などのアルメニアの黒曜石や、サルカムシュ（Sarıkamış）な

どの北東アナトリアの黒曜石がレヴァント各地において少量ながらも利用されるようになる。

このような黒曜石交易の変化の背景には、当時の社会状況の変化が深く関わっていると考えられ、交易ネットワークの変化から都市化へ向かう社会の発展を考察する上での貴重な情報となっている。資料を増やしてのさらなる分析が必要ではあるが、これまでの研究成果については、2018 年 9 月にバルセロナで開かれた European Association of Archaeologists (EAA 2018) において学会発表をおこなっている。

ビチュメン交易

現代われわれが利用するアスファルトは原油を精製する過程で生み出される残渣であるが、古代においては天然のアスファルト、すなわちビチュメンが、接着剤、防水材、防腐剤、黒色顔料として用いられた。遺跡を発掘すると、ビチュメンが表面にこびりついた石器や土器、レンガ片などが見つかることは珍しくない。

ビチュメンの産地同定は黒曜石ほど容易ではなく、これまでに分析された考古資料の数も限定的である。しかしながら、ビチュメンを構成する炭化水素に含まれる化合物の組成は、原油が生成される地質構造に応じて異なることが知られており、シリア、イラク、トルコ、イスラエル各地に散在するビチュメンの産地を判別する事が可能である。ビチュメンの産地同定に関してはコナンらのグループによる功績が大きく（例えば Connan 1999）、公開されている産地ビチュメンの化学組成データが利用可能となっている。そこで本研究では、ガスクロマトグラフィ質量分析 (GCMS) および同位体比質量分析 (IRMS) により、遺跡から出土したビチュメンの産地同定を進めている。研

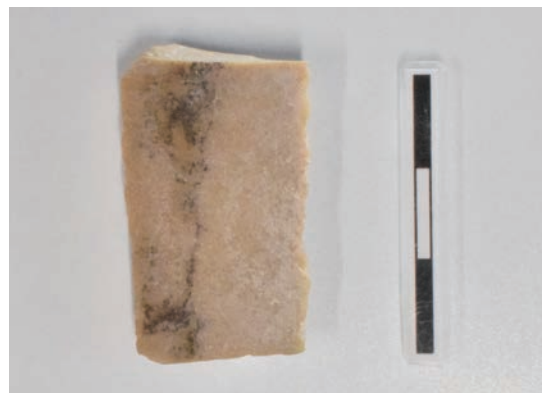


図3 鎌刃石器に付着したビチュメン。石器の左半が鎌の柄に差し込まれ、ビチュメンが接着剤として用いられたと考えられる。

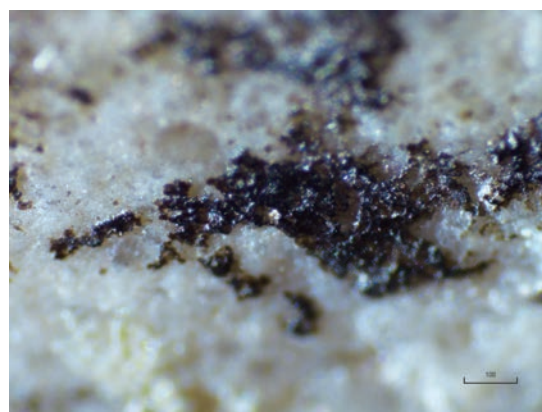


図4 鎌刃石器表面に付着したビチュメンの実体顕微鏡写真。

究が本格化するのこれからであり、まとまった結果を公表できる段階にはないため、ここでは現状でのビチュメン分析の概要と今後の見通しを述べるにとどめる。

現在分析している資料はおもに、イスラエルおよびシリアの青銅器時代の遺跡から出土した土器の表面に付着したビチュメン、筑波大学が発掘したシリアおよびイランの新石器時代遺跡から出土した石器に付着したビチュメンである。図3および図4は、鎌刃と呼ばれる石器の表面に付着したビチュメンである。鎌刃石器は木製・角製の柄に

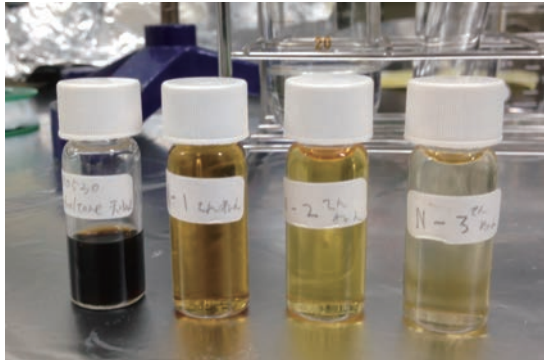


図5 ビチュメンに含まれる炭化水素の画分：左からアスファルテン、飽和炭化水素、芳香族炭化水素、レジン。

差し込まれ、穀物を刈り取る鎌として利用されたが、石器を柄に固着する接着剤としてビチュメンが用いられた。

分析にあたっては、石器表面から採集したビチュメンを溶媒で抽出し、シリカゲルクロマトグラフィーで画分を分離した後（図5）、IRMSで ^{13}C 同位体比を計測、GSMSによってステラン、テルパンなどのバイオマーカーを測定している。

産地同定にあたっては、これらの分析で得られた考古資料の化学組成を、コナンらによって公表されている産地ビチュメンのそれと比較する方法をとっている。さらに産地データを補足する目的で、2018年9月にトルコ共和国バトマン県南部に位置するボアズキョイ村近郊のビチュメン湧出地を訪れ、天然のビチュメン資料を採取した（図6）。現在これらの資料を分析中であるが、今後はこのような産地資料を増やすとともに、遺物



図6 トルコ、バトマン県ボアズキョイ村のビチュメン湧出地。石灰岩の土壌からビチュメンがしみ出ている。

資料の数を増やして研究を発展させていく予定である。特に銅石器時代から青銅器時代の資料を増やすことで、都市化へ向かうこの時代の社会における物資交易ネットワークの一端をあきらかにしていきたいと考えている。

参考文献

前田 修 2017: 「交易ネットワークの形成：新石器時代における黒曜石・海産貝類の流通」『季刊考古学』141号 41–44頁。

Campbell, S. and Healey, E. 2016: Multiple sources: The pXRF analysis of obsidian from Kenan Tepe, S.E. Turkey. *Journal of Archaeological Science: Reports* 10: 377–389.

Connan, J. 1999: Use and trade of bitumen in antiquity and prehistory: molecular archaeology reveals secrets of past civilizations. *Philosophical Transactions of the Royal Society London B* 354: 33–50.

新品種「発掘のごほうび」(デュラムコムギ)の育成登録

考古学から経済産業への貢献

丹 野 研 一

龍谷大学文学部

考古植物学の研究をベースとした新しいデュラムコムギ品種「発掘のごほうび」を育成し、農水省の種苗登録に出願した。デュラムコムギはスパゲッティなどのパスタ用の小麦で、国内2例目の品種になる。

本品種の特長としては、先行品種にくらべて麺にするための生地がつながりやすく、黄色であることがあげられる。また、料理を試作したシェフの言葉で言うと「パスタらしい味がしっかりとする」「風味が豊かな」ことがあげられる。野生種を交配した育成種であるために栽培は容易ではないが、野生種の特徴をひきついで粒形が細長く、また粒揃いが良いので、パスタだけでなくピラフなどこれまで日本でほとんどなかった粒食としての利用も期待できる。本品種の育成経過や特性などを、本稿では簡単に紹介したい。

なお、私のこれまでの研究では、早生デュラムコムギの開発成功について2017年にプレスリリースして各種メディアや学会に発表しているが、「発掘のごほうび」はそれらの早生種とは異なる先行品種を登録したものである。2018年11月に出願申請、年末に受理され、2019年2月26日に出願公表に至った。民間育種の強化が重要視されTPPが発効してから小麦の新品種が大学研究から創出されたことには意義があるといえる。

本品種の育成の経緯

本研究を開始した当時にはパスタ用の国内品種がまったく存在していなかった。私は海外での研究生活でデュラムコムギやその原種であるエンマーコムギ（古代小麦）をたくさん観察してきた。育種素材となる遺伝資源がデュラムコムギには豊富であることや、シリアや南仏などの現地で観察された栽培特性から日本の気候に適した品種改良が可能であることに気づき、スパゲッティなどに加工できる国産デュラムコムギを開発しようと2002年頃から様々な小麦栽培をするようになった。本品種については、帰国後の2007年春に当時住んでいた奈良市の自宅庭で交配を行い、翌年も植木鉢（プランター）で交配F1個体を栽培した。この当時は、商業生産レベルの品種ができるまでには数十年かかると予想していたので、当面の目標として、考古植物の解釈を助けるための遺伝実験素材を開発し、また博物館などでの展示利用のための教育素材を作るつもりであった。

交配は京都大学より分譲された野生エンマーコムギ亜種（アララティウム亜種）と米国農務省より分譲されたデュラムコムギ栽培種の間で行った。両親の選抜にはそれぞれの種として典型的な系統を選んだが、栽培性が優れること、またとく

に野生種（KU8941）についてはやや早生であることを観察していたためにこれを選んだ。雑種第3世代の遺伝分離集団のなかに黄色粒の個体を見出し、第4世代のときに良食味個体を選抜した。その後、早生性であり（評価としては「やや早生」、耐倒伏性（野生交配のため倒れやすいがなるべく稈の強いものを選んだ）、種子品質について選抜育成を繰り返した。

栽培管理が容易でないことから本品種の登録を見送っていたが、これを試作した篤農家が安定栽培に成功し、その子実品質と希少性から品種登録を強く求めてきた。実需者がいたので登録に至った。代わる品種がほとんどない現状では、栽培困難であることは実力のある農家にとっては宝となるわけだ。

このような経緯で、製麺時の生地形成や黄色色素量、子実表面のきれいさ、赤かび病のかかりにくさなど、品質面で優れている本品種「発掘のごほうび」が作出できた。

「発掘のごほうび」の食材としての特長

・国産スパゲッティなどのパスタができる

粉に風味があるので、国内各地のいろいろな食材とマッチングさせて、地方パスタをぜひ生産してもらいたい。生地形成はしやすいほうである。

・モチモチの生パスタを作ることができる

仕込み方法にもよるが、モチモチでかつ弾力もある生パスタを作ることができる（生地をこねて真空パックし、1～2日ほど寝かせてから製麺するとよい）。もちろん普通の生パスタもできる。粉から仕込んで、30分程度で食べることも可能



図1「発掘のごほうび」の生パスタ。料理研究家の秋山久美氏による滋賀県日野産の上質な鹿肉を用いた生パスタは、鹿肉の味に負けることなくパスタが調和していた。各地の食材と合わせた地方パスタが楽しみである（NHK「おはよう関西」他、NHK滋賀「湖東キャラバン」（生中継）などで紹介されました）。

である。アレルギー性が低いので、子供の料理体験など食育にも適している。

・国内ではまだあまり知られていない「茹で小麦」つまり粒食でも食べられる

細長い粒形で食べやすく、粒表面もきれいなので、茹で小麦（粒食）にも向いている。日本国内では粒食の小麦料理はまだほとんど知られていないが、欧州や中東ではよく好まれている。煮込み料理にそえて、ご飯のようにおいしく食べられ、ピラフやブルグルなどにも料理できる。粒食は、赤かび病がやや出にくい本品種の特徴が生かされた用途といえるが、しっかりした栽培技術が確保されていないと、この用途には生産できない。輸入麦は関税の問題のためにメーカーは全量を完全に粉に挽く。このことから粒食できるデュラムコムギは流通しないのが現状であった。本品種はこの希少な用途に利用することが可能である。

・粒の色は、デュラムコムギ特有のきれいな黄色

レモン色のようなきれいな黄色の種子で、もちろん天然色である。茹でると色はやや抜けてしまい、また製粉の仕方によっても色は変わり得るが、黄色色素値はメーカー市販粉とほぼ同じ値になっている。

・デュラムコムギらしい風味がきちんとある

これまで料理試作などでお世話になったシェフや料理研究家の方から意見を伺った。共通した意見として「パスタらしい風味がきちんとある」ことがあげられる。当たり前にも思われるかもしれないが、品種によっては味の少ないものもあり、このことは大事なことといえる。また「市販のデュラムコムギでは感じられない風味がある」、「やり方しだいでどんどん“とがった（個性的な）” 麺になってゆくだろう」、「太陽の光をぎゅっと閉じ込めた味がする」など有難いコメントをいただいた。私の栽培経験上、連作していない土地ではじめて栽培したときに、とくに風味が豊かになるようである。各地のテロワール・パスタが楽しみだ。

「発掘のごほうび」の栽培特性

本品種は従来の国内小麦品種とはまったく異なるコンセプトで改良を進めてきた。それは低投資の肥料で、高収ではないものの一定の収量を上げ、品質は安定しているという目標であった。現代の化学肥料の多施を前提とした農業は、欧州でとくに深刻になっており、地下水汚染などの問題を引き起こしている。現代農業とは真逆の思想で、本育成では環境にやさしい品種を目指した。

本品種はいわゆる古代小麦タイプの皮性種である。したがって稲作のように収穫後に籾摺りを

する作業が必要になる。また長稈であり非常に倒伏しやすい欠点をもっている。栽培は際立って難しいというわけではないが、観察して作業タイミングを決して逃さないことと、少肥に徹することが重要である。デュラムコムギは収穫期の降雨に非常に弱いためにこれまでに国内栽培が困難だった経緯がある。本品種はある程度は改善されているが、やはり収穫適期にピンポイントで収穫できないと全滅という結果になる。パンコムギとは作業方法に共通点は多いのだが、植物としてはまったく別の難物だと考えるべきである。

＜本品種の栽培生産で注意すべき点＞

- ・皮性であるため、もみすり作業が必要。もみすりは稲用の市販機種（メッシュ）を工夫することで使用可能（現在、メーカーと調整中）。
- ・皮性であるため、貯蔵スペースが通常子実よりも多く必要になる。
- ・長稈品種であり、非常に倒伏しやすい。現代的な多肥による多収栽培には不向き。
- ・倒伏しやすいので、風の強い地域での栽培は困難といえる。また、デュラムコムギの特性として赤かび病に弱いので、開花後とくに収穫期に湿気や降雨の多い土地でも難しい。防除を徹底する必要がある。
- ・この品種は都道府県の奨励品種ではないので、補助金等の対象にはならない。また収穫物の売り先も探さなければならない。一般農家ではなく、6次産業を考えている方に向く品種である。

＜本品種の栽培生産上の特長＞

・やや早生である

日本での小麦栽培は梅雨入り前に収穫するこ

とが重要であり、梅雨の長雨に収穫前の小麦があたりと穂発芽や赤かび病が発生して収穫皆無になる。本品種の収穫期は梅雨入りにはかかるが、降雨が本格化する前の時期に収穫が可能である（ただし秋に早播きしておく必要がある）。

・鳥害に遭わない

皮性種であり、粃が種子に固着していることから、鳥の力では種子を取り出せないで鳥害に遭わない。これまで鳥害のために小麦の栽培を断念していた農家は、日本中に数えきれないほどいる。私の品種改良では本品種だけでなく後継品種もその多くが皮性種であり、日本の田舎における冬の風景を緑に換えてゆきたいと考えている。

・今までとはコンセプトがまったく違う「少肥栽培」に適した品種である

現代小麦農業は、多収のために大量の化学肥料が投入されることが一般的である。一方、本品種は、肥沃な土壌であれば無施肥での栽培も可能である。むしろ肥料はごく少ないほうが良く、少しでも多いと倒伏する。逆にいえば倒伏しない程度にごく少肥で育てると、最後までうまく育つことから、慣れると栽培しやすい品種といえる。収量は少肥のため 150 kg/10 a かそれ以下と低いですが、この程度で穂数を少なく育てると倒れにくく、赤かび病も少なくなり、通常の硬質小麦の栽培では負担になる肥料コストが抑えられる。茎立期の追肥（穂肥）は稈の伸長を促すので禁物であるが、開花期に窒素肥料を少量追肥する（実肥）と子実グルテンの品質が向上する。収穫期を含めピンポイントでの的確な管理ができる方であれば、広い農地面積をつかい、財布にやさしい栽培ができるわけだ。

・デュラムコムギとしては赤かび病に強い部類

デュラムコムギには世界的にみても赤かび病抵抗性品種がきわめて少ないことが知られている。赤かび病は毒素を発生しうるので、規定値をこえると出荷停止処分と回収義務が生じるので、厳格な注意が必要である。パンコムギ以上の防除が必要である。本品種では赤かび病が発生しにくい傾向がみられているが、倒伏した場合には本品種でも著しく赤かび病が発生する。本品種にみられる赤かび病の出にくさは、野生種交配であることや皮性種であるために種子が粃で固く護られていることが関与しているのではと思われる。

・秋に早播きができる

パンコムギの一般的な品種よりも3週間前後の早播きが適している。このことから播種作業が、パンコムギとは基本的にはバッティングしない。本品種は冬季にゆっくりと幼穂分化するので、ある程度寒冷な地域でも栽培ができ、また暖地でも凍霜害に遭いにくい特性をもっている。逆に、秋に遅く播くと、収穫期は遅くなるので全滅するリスクが高まる。

*

考古学は、人類が何をしてきたのかを明らかにする学問であり、経済利益では測れない多大な価値を生み出すものである。しかし考古学は、ロマンはあるとしても、個人の儲けからはかけ離れた学問分野であり、専攻する学生も教員のポストも激減している。このままでは研究技術の継承も危ぶまれる現状を抱えている。本品種は、考古学の振興およびこれに類する状況の学術分野に社会の眼が少しでも向けられればとの思いから「発掘のごほうび」と命名した。

研究項目 A02 「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 02

古代西アジアにおける都市の景観と機能

計画研究 01-02：メソポタミア景観考古学 イラク・クルド地区における最近の研究

山 田 重 郎
筑波大学人文社会系

本稿は、2019年1月25日（金）に筑波大学東京キャンパス（121 教室）で行われた研究会（Workshop）Mesopotamian Landscape Archaeology: Recent Researches in Iraqi-Kurdistan（メソポタミア景観考古学：イラク・クルド地区における近年の研究調査）について報告する。

2018年の夏から開始された本領域研究は、西アジア都市の景観と社会的機能を時空間的にも、また方法論においても、多角的に研究することを目指している。この目的に照らして、考古学と文献学が協働して古代西アジア都市の「かたち」を考察することは、最も重要な課題の一つである。こうした問題意識に基づいて、景観考古学をテーマとする研究会を何度か開催し、研究者間の情報交換と協働を促進したい。その嚆矢となる第1回目の試みがこの研究会である。研究会は公開で、以下のプログラムによって実施された。

プログラム

13:00-13:15 Opening address:

“Topographical Terminology in Cuneiform Texts”

Shigeo Yamada (University of Tsukuba)

13:15-14:00 Lecture:

“The Archaeological Landscape of the Kurdistan Region of Iraq: Current Results and Future Prospects”

Jason Ur (Harvard University)

14:00-14:30: Discussion

14:30-14:45: Break

14:50-15:25: Presentation 1:

“Archaeology of Assyrian Landscape in the Shahrizor Plain, Slemani”

Shin'ichi Nishiyama (Chubu University)

15:25-16:00 Presentation 2:

“Considerations for the Spatial-context of the Archaeological Sites: Utilization of Multi-scale Remotely Sensed Data”

Nobuya Watanabe (Chubu University)

16:00-16:35 Presentation 3:

“Neolithization and the Landscape in the Chamchamal Area, Slemani”

Akira Tsuneki (University of Tsukuba)

16:35-16:50: Break

16:50-17:30: Discussion



図1 山田の導入・挨拶



図2 講演する Ur 氏

筆者（山田）が担当した導入（opening address）は、計画研究 02「古代西アジア都市の景観と機能」において期待される景観考古学と文献学との協働の可能性を、文献学者の立場から例証しようとするものであった。具体的なテーマは、2006 年から 2007 年に日本隊がテル・タバン（シリア北東部、ハッサケ県）で発見した 16 点の古バビロニア時代の楔形文字アッカド語書簡のうちの 3 点に現れる *salahum* という語と都市景観の関係である。古バビロニア時代の書簡史料に頻出する *sal(a)hum* は、城壁に囲まれた都市域のすぐ周辺に位置し、耕作地と果樹園が営まれる「灌漑により給水（アッカド語：*salāhum*）された土地」を意味するとする J.-M. Durand の学説が広く受け入れられてきた。ところが、テル・タバン出土の 3 点の書簡には、*salahum* が都市から「出ていく」可動性のある実体であることが確認される。また、マリとテル・タバンを含め、メソポタミア各地に由来する古バビロニア時代の 30 点ほどの書簡史料を精査すると、そのような「移動する」*sal(a)hum* の存在が散見される。筆者の見解では、*sal(a)hum* は、アムル語・アッカド語の語根 *slh* 「送り出す」に由来し、都市に所属して、都市とステップの間を移動する「家畜と人の群れ」を意味している。放牧や耕作のため都市からその外部へ移動する家畜



図3 発表する西山氏

と人（および荷車等）の痕跡は、衛星画像上に認められるテル（都市中心）から放射線状に残る多数の古代の「小道」の痕跡と照合可能である。これは、文献中に見られる都市景観に関する用語を収集し、それらを景観考古学のデータと照合するような研究から、都市とその後背地の景観を考古学的・文献学的に復元する可能性を例示している。

この導入に続いて、本研究会の基調講演が行われた。講演者はハーバード大学の Jason Ur 氏である。Ur 氏は、北メソポタミアの景観考古学の創始者の一人であった故 T. Wilkinson 氏と共に、シリア、イラク、イラン、トルコなどでフィールド・ワークに従事してきた景観考古学の第 2 世代の代表的な研究者である。Ur 氏の講演は、現在、イラクにおいて高レベルの自治を享受し、政治的にも安定し、UAV（ドローン）の使用にも寛容という、イラク・クルド地区の景観考古学調査に有利な状況を説明した。また、ジャジラと南メソポタミアがさかんに調査されてきたのに対し、クルド地区は、サダム・フセイン時代に考古学的調査が停滞したため、未知の調査対象として残されている点も指摘した。景観考古学の基本的な方法としては、（1）フィールド調査による遺物（土器片等）収集、（2）衛星画像（CORONA、HEXAGAN）

と航空写真によるリモート・センシング、(3) UAV(ドローン)を使用した調査をあげる。また、調査対象として(1) 中心的居住地としてのテル、(2) 水利施設としての水路、運河、カレーズ(カナート)、(3) 道路、通路、(4) 記念碑などをあげ、実例を映像で示して説明した。こうした調査・研究の環境と方法についての基礎的事項の整理に続いて、エルビル平野において Ur 氏の調査隊が実施してきた景観考古学的調査(Erbil Plain Archaeological Survey)の詳細について豊富な画像を用いて説明した。Ur 氏の調査目的は、前 8～7 世紀に西アジア全域に帝国として君臨したアッシリア王国の中核都市とその後背地において、開発がもたらした「人工的に生成された景観(imposed landscape)」を分析することである。すなわち、同地域の急速な都市化とそれにとまなうインフラ整備、ならび王権思想的記念碑の建立などが、どのように景観に影響を与えたかを明らかにすることである。筆者にとって、青銅器時代に存在していた中規模の都市の数が鉄器時代に減少し、そのかわりに多数の少規模の集落が発生するというセツルメント・パターンの変化や、ニネヴェの後背地に当たる北方の山沿いの地域で確認されるアッシリア王センナケリブによる大規模な水利事業(ダム、運河)の話が、とりわけ興味深かつ

た。締めくくりとして、将来の研究目標として、古代の定住、農耕、社会の複雑化、国家と神殿の活動などの景観への影響に加え、クルド人のサダム政権による迫害の歴史を景観考古学的に明らかにし、クルド人の国民的アイデンティティーの問題と合わせて考察したいと語っていたことは、土地の人々と協働して調査に従事する研究者が意を砕くべき問題意識として、印象深かった。

Ur 氏の基調講演を受けて、領域研究メンバーである 3 名の考古学者の発表が行われた。1 番目の西山伸一氏(中部大学)の発表は、同氏がクルディスタン南部スレイマニア地区の Yasin Tepe で実施している発掘調査(Yasin Tepe Archaeological Project)を中心に、アッシリア支配下の当該地域の景観を考古学的に考察した。前 9 世紀半ばにアッシリア王アッシュル・ナツィルパル 2 世(在位前 883–859)が占拠し、アッシリア風に Dūr-Aššur(アッシュルの砦)と名付けられた都市が Yasin Tepe 遺跡と同定される可能性を指摘し、新アッシリア時代の当該遺跡とその周辺の状況を解明する調査目的が説明された。遺丘周辺に広がる「下の町」の南東部において 2016 年から 2017 年に調査された発掘区(Operation A)では、鉄器時代(前 8～7 世紀頃)に由来し“Reception Suite”と呼ばれるアッシリアの宮殿などに見られる空間



図 4 発表する渡部氏



図 5 発表する常木氏



図6 会場の様子

を備えた大型複合建築物、ならびにそれに付随する家族墓が検出された。家族墓からは、バスタブ型テラコッタ製棺に入れられた5体ほどの人骨が金と青銅の装身具や器類を含む副葬品と共に発見された。また、棺の下方にも大量の人骨と金属製品、土器が発見された。また、2018年に行われた出土遺物のクリーニングの結果、複合建築物の床上から発見された青銅製首飾りに、アッカド語人名（父の名は西セム系）を持つ人物が息子をナブー神に献じたことを記した碑文がみつめられ、この都市の性格を考察するための新たなピースが加えられた。また、新たに明らかになった磁気探査の結果、複合建築物の北に広がる地域には密な居住はなく、運河らしき痕跡があることが明らかになり、新アッシリア時代の「下の町」の構造を再考するための興味深いデータが示された。今後、遺丘周辺にも注目し、(1)都市、(2)後背地、(3)地域というミクロ・マクロの視点から景観を調査・研究することを将来の目的として掲げた。

渡辺展也氏（中部大学）による第2の発表は、後述する常木氏ならびに先述の西山氏が実施する調査に加わり、渡辺氏がスレイマニア地区の複数の遺跡で実施したリモート・センシングの実例を、特に技術的問題を中心に解説した。ペシュダル平原東部の Qalat Said Ahmadan、シャフリゾー

ル平原の Yasin Tepe、チャムチャマル近郊の先史時代遺跡 Charmo と Turkaka など、渡辺氏が GPS と UAV を用いて行った地理的環境分析の実例に加え、中国の関中平原で渡部氏が実施した調査にも触れ、遺跡分布と地理的環境を GPS、UAV、衛星画像等をもちいて分析した結果を提示して、リモート・センシングによる調査の有効性と問題点を論じた。特に撮影範囲、高度、画像密度の相関関係を体系的に示し、従来型のドローンに加え、翼のある飛行機型 UAV により広範囲をカバーする調査方法や、収集した地理的データを特殊スコープの装着によりバーチャルに体験する技術など、最先端の試みを紹介した。

常木晃氏（筑波大学）による第3にして最後の発表は、渡部氏のリモート・センシング技術を活用し、チャムチャマル地域の複数の先史時代遺跡（Charmo [Jarmo]、Turkaka）において、常木氏が実施している考古学調査の概要を説明した。Charmo (Jarmo) は、1940～50年代にシカゴ大学東洋学研究所の Robert Braidwood によって組織された、当時としては極めて先進的・学際的な調査隊によって調査され、「新石器革命」の始まりを示す農耕と動物飼育を行っていた世界最古の農村として喧伝された著名な遺跡である。常木氏は、新たな調査によって、当該の溪谷地域の環境が現代と大きく異なることを示し、発掘隊に参加した安間氏（徳島大学）の地質調査の結果と総合することで、ワディの水利用の状況が現代よりも容易であったことを主張した。そして山麓の天水農耕を仮定した Braidwood らの理解を批判的に検討した。すなわち、新石器時代の農耕は、Braidwood らが考えたような天水のみに頼ったのではなく、チャルモ周辺のケスタ地形の砂岩と泥灰岩の境から湧出する泉の水を水源に用いて行われた、丘陵

地帯の帯水農耕である、という新たな仮説を提示した。

以上の講演・発表を通じて、イラク・クルド地域の近年の考古学的調査の一端が俎上に載せられ、調査方法・研究データの分析方法の問題点や将来の調査に関わる課題が活発に論じられた。先述の通り、この研究会は、都市研究と景観考古学に関わる課題を体系的に学んでいくために企画さ

れる一連の研究会の始まりを意味する。このささやかな研究会を皮切りに、来年度以降、さらに活動を活性化させていきたい。

末筆ながら、講演者、発表者に加え、司会を務めてくださった柴田大輔氏と前田修氏、企画を様々な角度から支えてくださった西アジア文明研究センターのスタッフと学生諸氏、そして参加者の皆さんにお礼申し上げる。

ラガシュ（ギルス）出土のエ・ミ文書における祭儀

対象・行為者・時・場所

唐 橋 文

中央大学文学部

本研究が用いる一次資料は、ティグリス・ユーフラテス両川によって形作られた沖積平野南東部に位置する都市国家ラガシュの遺跡から出土したエ・ミ文書である。シュメール語で記されたこれらの文書は現在 1800 点程知られており、初期王朝時代ラガシュ王朝最後の三人の王、エンエンタルジ、ルーガルアンダ、ウルカギナの治世（紀元前 2500~2350 年頃）に年代づけられている。いわゆる初期王朝時代第三期の後半にあたる。これらの文書は、ラガシュのギルス地区にあった「支配者妃のハウスホールド」（シュメール語で e_2-mi_2 「エ・ミ」と称され、文字通りには「女（妃）の家」の意）の様々な営みを支える経済活動の記録である。本研究では、エ・ミの祭儀に関わる活動（cultic activities）の中から、「供儀を行う」「供物を献げる」（ $giš\ be_2/e-tag$ ）や「供儀・供物」（ $nig_2-giš-tag-ga$ ）という表現を含む、神々や祖先への供儀・供物を記録する約 70 点を取り上げる。その中から祭儀の対象と行為者、祭儀が行われる時（祭月・祭日）と場所などのデータを収集し、それらを分析することによって、特に都市（内部・外部）と祭儀の関わり合いを中心に、支配者と妃がどのような祭儀をどのように行い、それに経済組織のエ・ミがどのように関わったかを明らかにしたい。本稿は、それを見据えながら、2018 年 2 月 5 日までに収

集されたデータを整理することで途中経過の報告としたい。適切に採集されなかったり、入力ミスのあったデータは、今後適切に修正・追加していきたいと考える。

*

前述のように、テーマに関連したテキストは約 70 点を数えるが、必要なデータを抽出しファイルメーカーを用いて電子化したのは、現時点でそのうちの 39 点である（付録 1 参照）。最初に典型的なテキストの表現と形式を概観し（§ 1）、次にそれら 39 点に記された祭儀の対象（§ 2）、祭儀の行為者（§ 3）、祭儀が行なわれた月（§ 4）、祭儀が行なわれた場所のデータ（§ 5）を提示する。

1. テキストの表現と形式

1-1. シュメール語の表現 $giš-tag$ について

シュメール語の表現 $giš-tag$ は、名詞 $giš$ （「木」）と動詞 tag （「触れる」）からなる複合動詞で、「供儀を行う」あるいは「供物を献げる」を意味する。エ・ミ文書の用法で、複合動詞 $giš-tag$ の動詞部分（verbal element） tag は、活用接頭辞（conjugation prefix）の be_2 - または e - をとり、その他の例は見当たらない。 $nig_2-giš-tag-ga$ は（ $nig_2-giš-ta$ と書かれる場合もあるが）、 nig_2 「物」を表す名詞と名

詞化された前述の複合動詞 *giš-tag-ga* からなる複合名詞で「供儀・供物」を意味する。

1-2. テキストの形式

giš—tag の活用形として、① *giš be₂-tag* または② *giš e-tag* が供物の品々が列挙された後に文書を締めくくる表現として用いられている。なお、*giš be₂-tag* と *giš e-tag* が同一文書に現れることもある（e.g., DP 053–054; Nik 1, 023）。

① *giš be₂-tag*

e.g., (羊 1 頭をニンギルス神に、羊 1 頭をババ神に) / *ezem-Y-a / ša₆-ša₆-ge / giš be₂-tag* 「Y の祭にササが献げた」(Nil 1, 150)

② *giš e-tag*

e.g., (羊 1 頭がエンエンタルジの *kianag-* チャペルへ) / *giš e-tag* 「献げられた」(DP 056)

giš e-tag は主語が明記されない時に用いられるケースが多いが、必ずしもそうとは言えず（e.g., DP 060; DP 067）、この用法については更なる研究が必要である。

nig₂-giš-tag-ga を含む表現は、①「何・誰のための供物」、②「誰による供物」に大別すること

ができる。

① *nig₂-giš-tag-ga* + 供物が献げられる神名や祭儀が行なわれる祭名

e.g., *nig₂-giš-tag-ga / ^dNin-mar^{ki}-ra* 「ニンマル神のための供物」(DP 059)

nig₂-giš-tag-ga / ezem ^dBa-ba₆-ka 「ババ神の祭のための供物」(DP 067)

② *nig₂-giš-tag-ga* + 人名あるいはタイトル

e.g., *nig₂-giš-tag-ga / Bara₂-nam-tar-ra / dam Lugal-an-da / ensi₂ / Lagaš^{ki}-ka* 「ラガシュの支配者ルーガルアンダの妻バラナムタラの供物」(DP 044)

nig₂-giš-tag-ga / ensi₂-ka-kam 「支配者の供物」(RTC 060)

2. 祭儀の対象

供儀や供物が誰に献げられているか、すなわち祭儀が誰のために行われているかに注目すると、神々、人々（祖先および生存者）、および（神格化された）物に大きく分けられる。

2-1. 神々

39 点のテキストグループに言及されている神々は表 1 の通りである。

2-2. 人々

祭儀の対象となっている人々は、主に初期王朝

表 1

^d Ama-nu-mu-dib	^d Asar	^d Ašnan	^d Ba-ba ₆
^d Bil ₃ -aga ₃ -mes	^d Dumu-zi	^d En-ki	^d Eš-ir-nun
^d Ga ₂ -tum ₃ -du ₁₀	^d Gan-gir ₂	^d Gan-tur ₃	^d Hendur-sag
^d Ig-alim	^d Igi-ama-še ₃	^d Inanna	^d Iškur
^d Lamma	^d Lugal-iri-bar	^d Lugal-uru ₁₁ ^{ki}	^d Mes-an-du
^d Nanše	^d Nin-a-zu	^d Nin-dar	^d Nin-dub
^d Nin-gir ₂ -su	^d Nin-hur-sag	^d Nin-mar ^{ki}	^d Nin-mu ₂
^d Nin-muš ₃ -bar	^d Nin-sag ₃	^d Nin-šubur	^d Nin-tu
^d Nin-ur ₃	^d Nin-x-ama-na	^d Nin-x-il ₂	^d PA-igi-du
^d PA-KAL	^d Šul-MUŠxPA	^d Šul-ša ₃ -ga-na	^d Ur-tur ₃

時代ラガシュ王家の祖先と文書が作成された時点でラガシュを統治していた王家のメンバーであったと考えられる。ウルカギナの治世下において、先代の王ルーガルアンダや先代のエンエンタルジだけでなく、ラガシュ王朝の創始者 Ur-Nanše およびその父 Gu-NI-DU が祀られている。ラガシュ王家の血統は一度断絶し、エンエンタルジの時点で新たになったと考えられていることから、現王家が前王家の人々を祖先として崇拝することによって擬似的な血縁関係を作り出し、自分たちの支配の正当性を主張したのではないかと推測される。また、女性も男性と同様に祀られており、エンエンタルジの妃ディムトゥル、ルーガルアンダの妃バラナムタラ、およびその他の女性たちが言及されている。ウルカギナの妃ササは、生存中に自分の像を作らせ、故ディムトゥルの像と一緒に神殿に安置させ供物を献げていた。

2-3. (神格化された) 物

na-ru₂-a「石柱(石碑、石板)」、alan(王・妃・王家のメンバーの)「(小) 像」、balag「ドラム」、

ub₃-ku₃「聖なる太鼓」などの物にも供物や供儀が献げられた(その他に zu₂-si, du₆, TAR-mu₂-a, gišimmar-uruda 等)。これらの物は神格化されていたと考えられる。

3. 祭儀の行為者

「供儀を行う」あるいは「供物を献げる」を意味する複合動詞 giš—tag の主語が誰かということ調べることによって、当該儀式の行為者が判明するであろう。現時点では、主語の大半が支配者の妃、ルーガルアンダの妃バラナムタラ、あるいはウルカギナの妃ササであるが、ルーガルアンダ自身も登場する(Nik 1, 151–152)。また、前述の表現 nig₂-giš-tag-ga ensi₂-ka-kam「支配者の供物」という表現もいくつかの文書に見られる。

4. 祭儀が行なわれた月

39 点のテキストに言及されている月名は単純に 21 を数える。それらを、Beld 2002: 203 Table 3-2 に示された「祭儀のサイクル」順に配給月の第 1 月から第 12 月までを並べると表 2 のよう

表 2

配給月	祭儀のサイクル	現在の月
1	iti ezem še gu ₇ ^d Nanše; iti ezem še gur ₁₀ -ku ₅	4-5 月
2	iti ezem še gu ₇ ^d Nin-gir ₂ -su	5-6 月
3	iti udu-še ₃ še a ^d Nanše; iti guru ₇ -im-du ₈ -a	6-7 月
4	iti udu-še ₃ še a ^d Nin-gir ₂ -su	7-8 月
5	iti har ₂ -ra ₂ -bi ₂ -mu ₂ -a ^d Nanše	8-9 月
6	iti mul-U ₄ -sag-e-ta-RU-a	9-10 月
7	iti siki-ba	10-11 月
8	iti ezm ^d Li ₉ -si ₄	11-12 月
9	iti ezem munu ₄ gu ₇ ^d Nanše	12-1 月
10	iti ezem munu ₄ gu ₇ ^d Nin-gir ₂ -su; iti ezem eš ₃ -e ₃	1-2 月
11	iti ezem ^d Lugal-uru ₁₁ ; iti ^d Lugal-iri-bar-ra	2-3 月
12	iti ezem ^d Ba-ba ₆ ; iti amar-a-a-si-ga; iti ezem ki-sal	3-4 月

になる。網掛けの月名をどの配給月におくかは、Beld 2002: 199 Table 3-1 に示された「配給と月の順序」に従った。斜体字の *iti ezem ki-sal* は、しばしば *iti ezem* ⁴Ba-ba と一緒に言及されるので、それと同じ月とみなす。

上記の月名の他に *iti ezem* ⁴Nin-gir₂-su, *iti ga₂ udu ur₄-ra, iti udu-še₃ še a-ka* が言及されている。

5. 祭儀が行なわれた場所

祭儀が行なわれた場所として、39 点のテキストに次のような地名—都市や地点、河川（堤を含む）や神殿の名前が言及されている。

5-1. 都市およびその他の地点

①は主に都市の名前で、都市国家ラガシュの中に含まれる三つの地区ラガシュ・ギルス・ニナに言及が見られる。なお、都市ウルクは、「ウルク神殿」(*e₂-Unug^{ki}*)、都市バドティビラは、「バドティビラ神殿」(*eb-Bad₃-dab₃-ra*) の形で登場する (§ 5.3 を参照)。エ・ミ文書群で地名 *Pa₅-sir₂* はしばしば地名の限定詞 *ki* なしで用いられるが、この文書のグループでもエンキ神と一緒に ⁴En-ki *Pa₅-sir₂-ra* と記述されている。②は「～の地」を意味する *ki* と普通名詞の ^{gis}*gigir₂* 「戦車」、^{gis}*gi-gid₂* 「葦」、*gu₂* 「堤」がそれぞれ結びついた形である。

① *Lagaš^{ki}, Gir₂-su^{ki}, Nina^{ki}, Me-kul-aba^{ki}, Ki-en-gi^{ki},*

Unug^{ki}, Bad₃-dab₃-ra, Pa₅-sir₂, AN-bad₃,

② *ki-^{gis}gigir₂, ki-^{gis}gi-gid₂ ki-gu₂, ki-su₃-PA-SIKIL*

その他に、地名ではないが、*nab (tilla_x)* 「広場」や *silā dagal* 「大通り」といった町の構成要素への言及がある。

5-2. 河川と堤

河川の名称として *id₂-ambar* 「アンバル川」と *id₂-edin* 「平地川」が言及されている。後者は *eb-id₂-edin-na* 「平地川（の）神殿」の形で登場する (§ 5.3 を参照)。川の堤あるいは土手を含む表現として、*gu₂-⁴Bil₃-aga₃-mes* 「ビルガメスの堤」、*gu₂-šu-nigin₂* 「全体²の堤」、*eg₂-ki-sur_x* 「キスルの土手」などをあげることができる。特に「ビルガメスの堤」は、死後に冥界の神となったビルガメスをその名前の中に取り込んでおり、祖先供養を考える上で重要な地名の一つと言える。

5-3. 神殿およびその他の建造物

シュメール語の *ki-a-nag* は「場所 - 水 - 飲む」という意味の三つの単語からなる複合名詞である。ここでは、Jagersma 2007 に従って *ki-a-nag* を葬祭用の「チャペル」と解釈する (表 3)。

ラガシュとニナにそれぞれ *kianag-* チャペルがあったこと、祖先の中では特にエンエンタルジが自分の *kianag-* チャペルを持っていたことが文書

表 3

Abzu-eg ₂	Abzu-gu ₂ -id ₂	Abzu-mah	An-ta-sur-ra
Ba-gara ₂	E ₂ -ad-da	E ₂ -en-na	E ₂ -gidri
E ₂ -ki-sal ₄ -la	E ₂ -Unug ^{ki}	Eb-Bad ₃ -dab ₃ -ra	Eb-gal
Eb-id ₂ -edin-na	Eb-ku ₆ -gu ₇	Ganun-mah	Gi-gu ₃ -na
Ki-a-nag	Ki-a-nag En-en ₃ -tar-zi	Ki-a-nag Lagaš ^{ki}	Ki-a-nag Nina ^{ki}
Ša ₃ -pa ₃ -da	Ti-ra-aš	Tur ₃ id ₂ -x-x-x	Ur-tur ₃

から読み取れる。また、ウルクとバドティビラが
ラガシュの祭儀関係文書に言及されているのも、
シュメール都市国家間の政治的・文化的影響関係
を考える上でたいへん興味深い。

略号表

BIN = Babylonian Inscriptions in the Collection of J. B. Nies

DP = M. F. Allotte de la Fu  , *Documents pr  sargoniques*

HSS = Harvard Semitic Series

Nik = M.V. Nikol'skij (Nik 1 のテキスト, 英語訳、
コメンタリーについては Selz 1989 を参照)

P = CDLI の P 番号

RTC = F. Thureau-Dangin, *Recueil des tablettes chaldeennes*

VS = Vorderasiatische Schriftdenkm  ler der
(K  niglichen) Museen zu Berlin

参考文献

Bartash, V. 2014. E₂-mi₂-‘Women’s Quarters’: The Earliest Written Evidence. In F. Buccellati et al. eds., *House and Household Economies in 3rd Millennium B.C.E. Syro-Mesopotamia*. Oxford: Archaeopress, pp. 9–20.

Bauer, Josef. 1969. Zum Totenkult im altsumerischen Lagash, in W. Voigt, ed., *XVII. Deutscher Orientalistentag: Vom 21. bis 27. Juli 1968 in W  rzburg*. ZDMG Suppl. I. Wiesbaden: Franz Steiner, pp. 107–114.

Beld, Scott G. 2002. The Queen of Lagash: Ritual Economy in a Sumerian State. Ph. D. dissertation. The University of Michigan.

Brisch, Nicole. 2006. The Priestess and the King: The Divine Kingship of    -  n. *JAOS* 126: 161–176.

Braun-Holzinger, Eva Andrea. 2013. *Fr  he G  tterdarstellungen in Mesopotamien*. Fribourg: Academic Press; G  ttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Cohen, Andrew. 2001. Dehistoricizing Strategies in

the Third-Millennium B.C.E. Royal Inscriptions and Rituals. In Tzvi Abusch, et al. eds., *Historiography in the Cuneiform World: Proceedings of the XLV^e Rencontre Assyriologique Internationale, Part I*. Bethesda, Maryland: CDL Press, pp. 99–111.

Cohen, Andrew. 2005. *Death Rituals, Ideology, and the Development of Early Mesopotamian Kingship: Toward a New Understanding of Iraq’s Royal Cemetery of Ur*. Leiden and Boston: Brill and Styx.

Cohen, Mark E. 2015. *Festivals and Calendars of the Ancient Near East*. Bethesda, Maryland: CDL Press.

Deimel, P. Anton. 1920. Die Listen   ber den Ahnenkult aus der Zeit Lugalandas und Urukaginas. *Orientalia* 2: 32–51.

Deimel, P. Anton. 1928. Getreidelieferungs (gar)-Listen aus der Zeit Urukaginas und seiner beiden Vorg  nger. *Orientalia Series Prior* 32: 1–83.

de Genouillac, H., 1909. *Tablettes sum  riennes archaiques*. Paris: Paul Geuthner.

Foxvog, Daniel A. 2007. Abgal’s and Carp Actors. *NABU* 2007, no, 67.

Foxvog, Daniel A. 2011. Aspects of Name-Giving in Presagonic Lagash, in W. Heimpel and G. Frantz-Szab  , eds., *Strings and Threads: A Celebration of the Works of Anne Draffkorn Kilmer*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, pp. 59–97.

Gabbay, Uri. 2018. Drums, Hearts, Bulls, and Dead Gods: The Theology of the Ancient Mesopotamian Kettledrum. *Journal of Ancient Near Eastern Religions* 18: 1–47.

Gadotti, Alhena. 2016. Mesopotamian Women’s Cultic Roles in Late 3rd –Early 2nd Millennia BCE. In S. L. Budin and J. M. Turfa eds., *Women in Antiquity: Real Women Across the Ancient World*. London and New York: Routledge, pp. 64–76.

George, Andrew R. 2003. *The Babylonian Gilgamesh Epic: Introduction, Critical Edition and Cuneiform Texts*. 2 vols. Oxford: Oxford University Press.

Georgoudi, Stella. 2010. Sacrificing to the Gods: An-

- cient Evidence and Modern Interpretations. In J. N. Bremmer and A. Erskine eds., *The Gods of Ancient Greece: Identities and Transformations*. Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 92–105.
- Heimpel, Wolfgang. 1998. A Circumambulation Rite. *ASJ* 20: 13–16.
- Jacquet, Antoine. 2012. Funerary Rites and Cult of the Ancestors during the Amorite Period: The Evidence of the Royal Archives of Mari, in *(Re-)Constructing Funerary Rituals in the Ancient Near East: Proceedings of the First International Symposium of the Tübingen Post-Graduate School “Symbols of the Dead” in May 2009*. Qatna Studies Supplementa 1. Wiesbaden: Harrassowitz, pp. 123–136.
- Jagersma, A., 2007. The Calendar of the Funerary Cult in Ancient Lagash. *BiOr* 64: 289–307.
- 唐橋文. 2017. 「ギルガメシュの死と死者供養」中央大学人文科学研究所編『続 英雄詩とは何か』研究叢書 64, 中央大学出版部, pp. 29–50.
- Katz, Dina. 2007. Sumerian Funerary Rituals in Context. In N. Laneri ed., *Performing Death: Social Analyses of Funerary Traditions in the Ancient Near East and Mediterranean*. Chicago: The Oriental Institute, pp. 167–188.
- Katz, Dina. 2015. Myth and Ritual Trough Tradition and Innovation. In Alfonso Archi, ed., *Tradition and Innovation in the Ancient Near East: Proceedings of the 57th Rencontre Assyriologique Internationale at Rome 4–8 July 2011*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, pp. 59–73.
- 前田徹. 1988. 「複合都市国家ラガシュ」『史朋』30 号, pp. 14–25.
- 前田徹. 2015. 「ウル第三王朝の王シュルギと英雄ギルガメシュ」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』60/4, pp. 5–19.
- 前田徹. 2017. 『初期メソポタミア史の研究』早稲田大学出版部.
- Maekawa, Kazuya. 1973-74. The Development of the é-mí in Lagash during Early Dynastic III. *Mesopotamia* 8–9: 77–144.
- Maekawa, Kazuya. 1987. Collective Labor Service in Girsu-Lagash: The Pre-Sargonic and Ur III Periods. In M. A. Powell ed., *Labor in the Ancient Near East*. American Oriental Series 68. New Haven, Connecticut: American Oriental Society, pp. 49–71.
- 前川和也編著. 2011. 『図説メソポタミア文明』河出書房新社.
- Magid, Glenn R. 1999. Temple Household and Land in Pre-Sargonic Girsu. In M. Hudson and B. A. Levine eds., *Urbanization and Land Ownership in the Ancient Near East*. Peabody Museum Bulletin 7. Cambridge, MA: Harvard University, pp. 322–329.
- Marchesi, G. and N. Marchetti. 2011. *Royal Statuary of Early Dynastic Mesopotamia*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns.
- Perlov, Boris. 1980. The Families of the Ensi's Urban and Gudea and Their Funerary Cult. In Bendt Alster, ed., *Death in Mesopotamia: XXVf Rencontre Assyriologique Internationale*. Copenhagen: Akademisk Forlag, pp. 77–81.
- Prentice, Rosemary. 2010. *The Exchange of Goods and Services in Pre-Sargonic Lagash*. AOAT 368. Münster: Ugarit-Verlag.
- Ragavan, Deena. 2013. Entering Other Worlds: Gates, Rituals, and Cosmic Journeys in Sumerian Sources. In D. Ragavan ed., *Heaven on Earth: Temples, Ritual, and Cosmic Symbolism in the Ancient World*. OIS 9. Chicago: The Oriental Institute, pp. 201–221.
- Rosengarten, Yvonne. 1960. *Le régime des offrandes dans la société sumérienne: d'après les textes présargoniques de Lagaš*. Paris: E. de Boccard.
- Rost, Stephanie. 2011. Irrigation Management in the Ur III Period: A Reconsideration Based on a Case Study of the Maintenance of the ÍD-NINA-ŠÈ-DU Canal of the Province Lagaš. In Gebhard J. Selz, ed., *The Empirical Dimension of Ancient Near Eastern Studies*. Wiener Offene Orientalistik. Wien: Lit Verlag, pp. 211–269.
- Sallaberger, Walther, and Ingo Schrakamp. 2015. The Presargonic Period. In W. Sallaberger and I. Schrakamp, eds., *History and Philology*. ARCANÉ 3.

Turnhout: Brepols, pp. 67–84.

Sanders, Seth L. 2012. Naming the Dead: Funerary Writing and Historical Change in the Iron Age Levant. *MAARAV* 19.1–2: 11–36.

Schrakamp, Ingo. 2015. “Urukagina, Sohn des En-gil-sa, des Stadtfürsten von Lagaš”: Zur Herkunft des Urukagina, des letzten Herrschers der 1. Dynastie von Lagaš. *AoF* 42 (1): 15–23.

Schrakamp, Ingo. 2015. Urukagina und die Geschichte von Lagaš am Ende der prä-sargonischen Zeit. In R. Dittmann and G. J. Selz, eds., *It's a Long Way to a Historiography of the Early Dynastic Period(s)*. Altertums-kunde des Vorderen Orients, Band 15. Münster: Ugarit Verlag, pp. 303–386.

Selz, Gebhard J. 1989. *Altsumerische Verwaltungstexte aus Lagaš*, Teil 1: *Die altsumerischen Wirtschaftsurkunden der Ermitage zu Leningrad*. FAOS 15/1.

Selz, Gebhard J. 1990. Studies in Early Syncretism: The Development of the Pantheon in Lagaš Examples for Inner-Sumerian Syncretism. *Acta Sumerologica* 12: 111–142.

Selz, Gebhard J. 1992. Eine Kultstatue der Herrschergemahlin Šaša: Ein Beitrag zum Problem der Vergöttlichung. *ASJ* 14: 245–268.

Selz, Gebhard J. 1993. *Altsumerische Verwaltungstexte aus Lagaš*, Teil 2: *Altsumerische Wirtschaftsurkunden aus amerikanischen Sammlungen* 1. Abschnitt. FAOS 15/2-1. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Selz, Gebhard J. 1993. *Altsumerische Verwaltungstexte aus Lagaš*, Teil 2: *Altsumerische Wirtschaftsurkunden aus amerikanischen Sammlungen*, 2. Abschnitt. FAOS 15/2-2. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Selz, Gebhard J. 1994. Verwaltungsurkunden in der Ermitage in St. Petersburg. *ASJ* 16: 207–229.

Selz, Gebhard J. 1995. Maš-da-ri-a und Verwandtes: Ein Versuch über da-ri-b ‘an der Seite führen’: ein zusammengesetztes Verbum und einige nominale Ableitungen. *ASJ* 17: 251–275.

Selz, Gebhard J. 1995. *Untersuchungen zur Götterwelt*

des altsumerischen Stadtstaates. Occasional Publications of the Samuel Noah Kramer Fund 13. Philadelphia: The University of Pennsylvania Museum.

Selz, Gebhard J. 1997. “The Holy Drum, The Spear and The Harp”: Towards an understanding of the Problems of Deification in Third Millennium Mesopotamia. In I. L. Finkel and M. J. Geller eds., *Sumerian Gods and their Representation*. Groningen: Styx Publications, pp. 167–213.

Selz, Gebhard J. 1998. Die Etana-Erzählung: Ursprung und Tradition eines der ältesten epischen Texte in einer semitischen Sprache. *ASJ* 20: 135–179.

Selz, Gebhard J. 2004. Familiäres: me-an-ne₂-si šeš munus. In H. Waetzoldt, ed., *Von Sumer Nach Ebla Zurück*. Heidelberger Studien zum Alten Orient, Band 9. Heidelberg: Heidelberger Orientverlag, pp. 237–241.

Selz, Gebhard J. 2010. ‘He put in order the accounts...’: Remarks on the Early Dynastic Background of Administrative Reorganizations in the Ur III State. In L. Kogan et al. eds., *Proceedings of the 53e Rencontre Assyriologique Internationale, Vol. 2: City Administration in the Ancient Near East. Babel und Bibel* 5. Winona Lake, Ind.: Eisenbrauns, pp. 5–30.

Selz, Gebhard J. 2011. Reconstructing the Old Sumerian Administrative Archives of the É-MÍ-É-^dBa-ba₆-Institution, in G. Barjamovic et al, eds., *Akkade Is King. A Collection of Papers by Friends and Colleagues Presented to Aage Westenholz on the Occasion of His 70th Birthday*. Leiden: NINO, pp. 273–286.

Skaist, Aaron. 1980. The Ancestor Cult and Succession in Mesopotamia. In Bendt Alster, ed., *Death in Mesopotamia: XXVI^e Rencontre Assyriologique Internationale*. Copenhagen: Akademisk Forlag, pp. 123–128.

Steinkeller, Piotr. 1992. Early Semitic Literature and Third Millennium Seals with Mythological Motifs. In Pelio Fronzaroli, ed., *Literature and Literary Language at Ebla*. Quaderni di Semitistica 18. Firenze: Università di Firenze, pp. 243–283.

Steinkeller, Piotr, 2001. New Light on the Hydrology and Topography of Southern Babylonia in the Third Millennium. *ZA* 91: 22–84.

Teinz, Katharina. 2012. How to Become an Ancestor—some Thoughts, in *(Re-)Constructing Funerary Rituals in the Anient Near East: Proceedings of the First International Symposium of the Tübingen Post-Graduate School “Symbols of the Dead” in May 2009*. Qaṭna Studies Supplementa 1. Wiesbaden:

Harrassowitz, pp. 235–43.

Veldhuis, Niek. 2001. The Solution of the Dream: A New Interpretation of Bilgames’ Dream. *JCS* 53: 133–148.

付録 1：データが電子化されたテキスト（2019 年 2 月 5 日現在）

BIN 08, 371 = P221502	DP 067 = P220717	Nik 1, 148 = P221917
DP 043 = P220693	DP 196 = P220846	Nik 1, 149 = P221918
DP 045 = P220695	DP 197 = P220847	Nik 1, 150 = P221919
DP 046 = P220696	DP 199 = P220849	Nik 1, 151 = P221920
DP 047 = P220697	DP 200 = P220850	Nik 1, 152 = P221921
DP 050 = P220700	DP 201 = P220851	Nik1, 153 = P221922
DP 053 = P220703	DP 203 = P220853	RTC 046 = P221443
DP 054 = P220704	DP 217 = P220867	RTC 047 = P221444
DP 056 = P220706	Erm 14330 = P225738	VS 14, 034 = P020048
DP 060 = P220710	HSS 03, 41 = P221350	VS 14, 074 = P020089
DP 061 = P220711	Nik 1, 023 = P221730	VS 14, 172 = P020183
DP 062 = P220712	Nik 1, 025 = P221732	VS 27, 085 = P020398
DP 064 = P220714	Nik 1, 028 = P221735	www Sotheby’s 002 = P430697

古代メソポタミア都市の伝統と景観に関する覚書 1

古バビロニア時代におけるマハヌム (Maḥanum) の事例

柴田 大輔

筑波大学人文社会系

この覚書はマリ文書などの古バビロニア文書に散見されるマハヌムを扱う。マハヌムは季節遊牧民が拠点にしていた場所だが、特定の地名（都市）とみなす説、シマル部族系の季節遊牧民の野営地と解する説など諸説あり、その解釈についてのコンセンサスが得られるには至っていない。そこでこの覚書ではマハヌムに言及する古バビロニア時代の文書を整理したい。

マリの事例

大多数のマハヌムの事例はマリ文書に由来する。まずは公刊されている文書の事例を整理する。最も著名な事例はマリ王ジムリリムの治世 10 (= 9¹) 年の年名であろう。この年名はマハヌムのアッドウ (Addu ša Maḥanim) と呼ばれた嵐の神アッドウ (アダド) の化身に玉座を奉納したことに言及する (*šanat Zimrī-Līm kussām rabītam ana Addu ša Maḥanim ušēlū* 「ジムリ・リムが大きな玉座をマハヌムのアッドウに奉納した年」)¹。

マハヌムのアッドウの玉座は他の文書にも登場する。行政文書にもこの神の玉座に関する記録が散見される。まず、ARM 25, no. 284 には「マ

ハヌムのアッドウの [玉座] のメッキ」(*iḥ-zi ša*^{gis}[GU.ZA] ⁽⁴⁾ *ša* ^dIŠKUR *ša ma-ḥa-ni*) (ll. 3f.) に用いられた銀の受領書（日付はジムリリム治世 6 (= 5²) 年第 8 月 21 日）が記されている²。ARM 21, no. 292 はこの神の玉座（ただし「玉座」は省略）を他の神々の玉座と共に言及する。

(1) ^{gis}GU.ZA ^dda-gan i-lī-re[?]-me-ni (2) ^{gis}GU.ZA *ša* an-nu-ni-tim i-lī-^dma-ma (3) ^{gis}GU.ZA *ša* ^dé-a su-lu[?]-^{x-x} (4) ^dIŠKUR *ša ma-ḥa-nim qí-iš-ti-^d[ma]-ma* (5) ^{gis}pa-áš-tum *ša* ^dEN.ZU la-ha-ba-^{x-x}

ダガンの玉座、イリー・レメニ；アヌニートウムの玉座、イリー・ママ；エアの玉座、スル・・・；マハヌムのアッドウ（の玉座？）、キーシュティ・ママ；シンの斧、ラハバ・・・

後述する通り、マハヌムのアッドウの玉座は未公開の手紙 A. 808, 4-9 でも話題になっている。他、マハヌムのアッドウとは明記されていないが、「アッドウの玉座」(^{gis}GU.ZA *ša* ^dIŠKUR) は ARM 23, no. 518, 4f. にも言及される。

読みは不確かだが、行政記録 ARM 7, no. 105

1 Charpin and Ziegler, FM 5, 258.

2 Cf. Schwemer, Wettergottgestalten, 303, fn. 2230.

にもマハヌム（？）のアドウの神殿財産に帰属すると思わしき金属（鉛？）に関する記録がある⁽²⁾ *ša a-sà-ak-ki-[im]* ⁽³⁾ *ša* ⁽⁴⁾ *ISKUR ša m[a-ḥa-ni-im]* ^(ki) (?) ⁽⁴⁾ *ša DUMU.MEŠ i[a-mi-na ...]* 「マハヌムのアドウの [...] の聖別された財産（「禁忌」のもの、ヤミナ族のもの）」³。

マリ王国の支配に服していた遊牧民の部族からスガゲートウ税として収集された牛や羊に関する行政記録コーパスがリオネル・マルティによって体系的に校訂されているが⁴、その内の一点の記録（FM 10, no. 38）にマハヌムが言及されている。

⁽¹⁾ [1 ME] UDU.ḪÁ ⁽²⁾ *[ša su-ga-g]u-ut ia-an-ši-ib-^dda-gan* ⁽³⁾ *[ša a-di-ni la šu]-ud-du-nu* ⁽⁴⁾ *[i-nu-ma ...]* ⁽⁵⁾ *[i-na] ma-ḥa-ni-im* ⁽⁶⁾ *[i-q]a-ab-bu-ú* ⁽⁷⁾ *[i]-na-ad-di-in*

ヤンツィブ・ダガンのスガゲートウ税（のため）の羊 100 頭、[現在までにまだ集] められていないもの。（欠損） [...] が] マハヌムにおいて（彼に）申し伝える [際に]、彼は（それを）渡すべし。（以下、日付が続く）

この通り文書は収集されていない 100 頭の羊について書き留める。断片的であり、文意は必ずしも明確ではないが、マハヌムにおいて申し伝えられ

る際にこの羊の引渡しが行われるべきことが記録される⁵。

なお、サムシ・アドウ時代の文書 ARM 2, no. 7, 19 に関してジャン（C.-F. Jean）は *a-na ma-[ḥa⁷]-ni-im^k]* 「マハヌムへ」という読解を推測しているが、これをコレーションしたデュランは *a-na m[a-k]ⁱ-[ta]-ni-im^{ki}* と読むように提案し⁶、さらにその後 *b[a-k]ⁱ-[ta]-ni-im^{ki}* と読みを変え⁷、この文書はマハヌムとは関係しないと論じている⁸。

ミハエル・ギシャーが校訂したマリ書簡 A.2434（Guichard, BBVO 20, 112–115, no. 4）にもマハヌムが登場する。この書簡の冒頭部は破損しているが、ハブール川上流域の都市シュフドゥムの王アムド・パ・エル（Amud-pā-El）がジムリリム王に宛てたと考えられる（Guichard, BBVO 20, 112）。この手紙では、アシュナックム（シャガル・バザル遺跡）の守備をジムリリム王に命じられたアムド・パ・エルが現地の状況を報告する。手紙の末尾はやや破損しているが、ギシャーの解釈によれば、住人が散り散りになったアシュナックムの守備をアムド・パ・エルがジムリリムに約束したようだ。この箇所にマハヌムが言及される。ギシャーの読解に基づきながら、当該箇所を引用する。

⁽²⁴⁾ *ù a-na-ku a-na aš-na-ak-ki-im^{ki} e-te-ru-ub* ⁽²⁵⁾ *ù*

3 Cf. Durand and Charpin, MARI 2, 79; Schwemer, Wettergottgestalten, 303, fn. 2231.

4 Marti, FM 10.

5 ほか、同じコーパスに帰属する家畜の記録 FM 10, no. 58 と no. 68 にも「羊 1 頭、マハヌム」（1 UDU *ma-ḥa-nu-um*）（no. 58, 8）、「羊 [n 頭]、ナハン（の）[マハヌ] ム」⁽⁸⁾ *[n UDU].ḪÁ* ⁽⁹⁾ *[ma-ḥa-nu]-um na-ḥa-an*）（no. 60, 8f.）というエントリーが確認できる。ナハン（Nahan）とはシマル系の一部族の呼称である（Ziegler and Langlois, MTT I/1, sub. Nahan）。マルティはこの用例が単語 *maḥanum* ではなく、別な記録にも登場する人名 Maḥannûm を指していると解釈する（Marti, FM 10, 95）。

6 Durand, LAPO 17, 40, fn. 63.

7 Cf. Archibab.

8 Durand, RA 105, 163.

{^rx x ^l} *a-la-ni ra-bé-e-tim_x*(TUM) ⁽²⁶⁾ *be-lí^l-ma an-ni-iš ul-li-iš* ⁽²⁷⁾ *na-ba^l-al-ku-us-sú-nu^o i-di* ⁽²⁸⁾ *ù be-lí-ma ka-la-ši-na i-di* ⁽²⁹⁾ *i^l-na-an-na ša-du-la-a-bu* ⁽³⁰⁾ *ù šu-ub-ra-am a-na še-er be-lí-ia* ⁽³¹⁾ [*u*]š-ta-ar-du-nim ⁽³²⁾ *a^l-na-ku a-la-am ri-qa-am ma-ḥa-na-am* ⁽³³⁾ [*a-na-ša*]-*ar^l*(?) *ù LÚ.MEŠ ša i-na* ⁽³⁴⁾ [*aš-na-ak-ki-im^{ki} wa-aš-bu it-t*]a-ás-pa^l-ḥu ⁽³⁵⁾ [*a-la-am*] *ri²-q[a^a-am]* *a^l-na-aš-ša^l-a[r]*

そして、私は（今）ちょうどアシュナックムに入城しました。それにしても、大都市（の人々）について、彼らがあちらこちらに通過（できる）ことを私の主人は（よく）ご存知です。私の主人は彼らの全てをお見通しです。今、シャドウラブとシュブラムが私の主人のところへ連れて来られました。私は、空の都市（すなわち）マハヌムを「守」ります。しかし、[アシュックム]に「住んでいた」人々は「散り」散りにされてしまいました。私は、空「になった都市」を守ります。

ギシャーはマハヌムを un (simple) bivouac 「(簡易) 野营地」と訳し、これを「空の都市」の言い換えと解する。住民が放棄した城壁は遊牧民の守りとしてのみ使われたとギシャーは指摘する⁹。ギシャーによる補完には推測にとどまる箇所もあるが、「空の都市」をアシュナックムと解するギシャーの提案は文脈に合い、その妥当性は確かに高い。ただし、マハヌムに関する別案としては「空の都市（と）マハヌム」と解して、放棄されたア

シュナックムとその近郊にあったマハヌムをアムド・パ・エルが守備したと考えることも可能だろうか。

ほか、未公開のマリ書簡中にマハヌムの事例が頻出していることをデュランが度々報告している¹⁰。以下、デュランによる書簡の引用部分を掲載する。まず、エシュヌンナの西方侵攻の際にハリ・ハドウン（Ḫali-ḫadun）が現状報告のためにジムリリムに送った一連の書簡の中の3点（A.3030, A.1005, A.988）にマハヌムが言及される¹¹。一点めの **A.3030**, 5'-8' の言及は次の通り¹²。

tup-pí an-né-e-em i-na ma-ḥa-nim / a-na še-er be-lí-ia ú-ša-bi-lam / ù ḪA.NA.MEŠ i-na ma-la-ḥa-tim^{ki} / [i]-pa-aḥ-ḥu-ur

この書板をマハヌムにおいて私の主人のところへ私は送ります。そして、マラフトウム（マルハトゥム）においてハナ遊牧民が集合します。

A.1005, 35-38 の言及は次の通り¹³。

u₄-um tup-pí an-né-e-em a-na še-er be-lí-ia / ú-ša-ab-bi-la-am / ša-né-em u₄-um-šu ḪA.NA.MEŠ / i-na ma-ḥa-nim a-na⁴ IŠKUR i-na-aq-qí

この書板を私の主人のところへ私が送る日、その翌日にハナ遊牧民たちはマハヌムにおいてアダドに犠牲を捧げます。

9 Guichard, BBVO 20, 115.

10 特に Amurru 3, 139-145 と RA 105, 157-163.

11 Durand, Amurru 3, 139ff.

12 Durand, Amurru 3, 140 with fn. 170 [ll. 5'-8'].

13 Durand, Amurru 3, 141 with fn. 173 [ll. 37-38]; Durand, RA 105, 159 [ll. 35-38].

A.988, 45–51 の言及は次の通り¹⁴。

iš-tu a-ka-du-um ip-ta-aṭ-ru ḪA.NA.MEŠ / *a-na*
U₄ 15.KAM wa-ar-ḫi-im an-ni-im pu-uḫ-ra-ta-am /
a-na ma-ḫa-nim ar-gu-um ar-ra-am ú-pa-ḫi-ir-ma /
^mla-ḫa-nu-yu-um wu-ú-ur-ti be-lí-ia i-na ar-ri-im id-
bu-ub / ù ḪA.NA.MEŠ a-na ṣa-ba-i-im i-ta-na-aš-
ša-aš / um-ma-a-mi iš-tu ma-ḫa-nim-ma ni-te-eb-bi-
ma a-na ṣa-ba-i-im / ni-it-ta-al-la-ak

アッカド人が解散した後、私は、ハナ遊牧民
たちがこの月の15日に集会をマハヌムで（開
催するよう）訴えました。私が *arrum* を招集
したところ、*arrum* でラハヌムが私の主人
の指示について（人々に）話しました。そう
したら、ハナ遊牧民たちは合戦（を起こそう）
と憤慨し、次のように（言いました）。「俺た
ちはマハヌムから出立し、合戦に行くぜ」と。

1点めの手紙（A.3030）に登場するマラフトウ
ム（*Malahatum*）はマルハトゥム（*Malhatum*）のヴァ
リエーションであり、この都市はハブール川流域
とバリフ川流域の間（キルダハトとトゥトゥルの
間）に位置付けられる¹⁵。このように、一連の書
簡はハブール川上流域の西部が舞台になっている
ため、デュランはここで言及されるマハヌムに関

しても上ジャジーラ西部に位置づける¹⁶。

アシュマト（*Ašmat*）の書簡にもマハヌムの事
例が散見される。デュランによればジムリリムの
治世初頭、エシュヌンナとの抗争前に年代づけ
られるというアシュマトの手紙 A.2470, 35–39 =
7'–10' にマハヌムが登場する¹⁷。

⁽³⁵⁾ *i-nu-ma a-la-k[u i-na] qa-ṣé-[e-ma]*¹⁸ ⁽³⁶⁾ *ki-ma*
a-na ma-ḫa-nim-ma a-la-ku ⁽³⁷⁾ *ṣa⁷¹-[na^{ku}]mu-úr-di*
pa-ni-ia a-ša-ak-ka-[a]n ⁽³⁸⁾ *ù ṣa-pí-il-tum ṣa-né-ṣa¹-*
et ⁽³⁹⁾ *[a-n]a qú-uṭ-tú-na-an^{ki} a-pá(BA)-zi-ir-ma* ⁽⁴⁰⁾
[aš-šum UDU.Ḫ]Á ṣi-na-ti a-ka-aš-ša-du ⁽⁴¹⁾ *[i-na*
li-i]ṣ² qa-ṣi-im-ma a-al-[a-a]k

私がステップ地帯を行く際、マハヌムへ行く
ように私はムルドゥ山へと進路をとります。
ただし、「下り」（南への進路）が変わります。
カトゥナンに向けて私は（姿を）隠し、それ
らの[羊]を襲撃する[ため]、ステップ地帯[を
通過して]行きます。

ムルドゥ山とはシンジャル山西端の山のことで
あり、カトゥナンはハブール川下流域に位置づけ
られる（おそらくテル・ファドガミ）。よってデュ
ランは、この手紙に言うマハヌムはシンジャル山
の南に広がる大砂漠地帯の北側に位置していたと

14 Durand, *Amurru* 3, 140 with fn. 171 [ll. 4f.], 141 with fn. 174 [ll. 45–51] and 172 [ll. 50f.].

15 Ziegler and Langlois, MTT I/1, sub. *Malhatum* (1) を参照。なお、他にもシンジャル山の近郊にマラフトウムと
いう地名が少なくとも二つ（大マラフトウムと小マラフトウム）ある。Ziegler and Langlois, MTT I/1, sub.
Malhatum (2–4) を参照。

16 Durand, *Amurru* 3, 141.

17 Durand, *Amurru* 3, 141 with fn. 176 [ll. 35–39]; Durand, RA 105, 163 [ll. 7'–10' (sic.)]; Durand and Guichard, FM 3,
33 に手紙全体の翻訳が引用されている。

18 Durand はこの箇所を *i-nu-ma a-la-k[u KASKAL] ṣi¹-na-ṣi-[ir]* と補完していたが（*Amurru* 3, 141, fn. 176）、そ
の後、考えを改めた（RA 105, 163）。

指摘する¹⁹。

さらに A.1191²⁰ もデュランによればアシュマト (Ašmat) がジムリリム王に宛てた手紙であると言う²¹。

⁽⁴⁾ *i-na ma-ḥa-nim LÚ.MEŠ ḪA.[N]A ka-lu-šu-n[u]*

⁽⁵⁾ *ip-ḥu-ur-ma²² ù aš-šum ša-mu-um iz-nu-nu⁽⁶⁾ a-na⁽⁷⁾ ḪŠKUR ni-ib-ki ù a-na šu-lum be-lí-ne⁽⁷⁾ ni-ik-ru-ub ù 2 LÚ.MEŠ i-na aḥ-ḥi ḥa-li-ḥa-du-[un]⁽⁸⁾ il-li-ku-nim-ma ki-a-am iq-bu-né-ši-im⁽⁹⁾ um-ma-mi i-na ma-an-za-zi-ka is-sú-ḥu-ka⁽¹⁰⁾ ù É-ka im-šu-²³ iš-me-ma ir-tú-ub ba-ke-[em]⁽¹¹⁾ ù aḥ-ḥu-šu it-ti-šu-ma i-ba-ku-ú⁽¹²⁾ aḥ-ḥu-šu ù šu-ú ip-ḥu-ru-nim ki-a-am⁽¹³⁾ iq-bu-nim ...*

全てのハナ遊牧民がマハヌムにおいて集まりました。そうしたら、雨が降ったため、私たちはアッドウに嘆き、私たちの主人の健康のために祈願しました。そして、ハリ・ハドゥ[ン]の兄弟たちの内の二人がこちらに来て、次のように私たちに話しました。「彼らはあなたの立場からあなたを引き離しました。そして、あなたの家を「略奪」しました」と。彼はそれを聞き、泣きはじめました。彼の兄弟たちも彼と共に泣いていました。彼の兄弟た

ちと彼は集まってきて、次のように私に言いました。

さらにアシュマトの手紙における事例として A.3101, ll. 3–17 がある²³。

[a-l]um_x(LAM) de-et^{ki} p[a-ri-i]k-ma²⁴ 'ù¹ bi-ri-it DUMU.MEŠ ia-mi-na ir-ḥa-aš- / ma / [i-na] a-wa-tim ú-ni-iḥ-šu-nu-[t]i / [et]-bé-em-ma ša¹ a-la-¹ki¹-im / [al-l]i-kam-ma ḪA.NA.MEŠ ša ki-ma / [i]k-[šú-d]u ú-ni-iḥ / [ù] a-na m[u-u]l-ḥa-tim^{ki} ak-[š]u-dam-ma / 'LÚ¹ ḪA.NA.MEŠ ša ki-ma di-na-am / ù a-wa-tam i-na ia-da-ma-ra-aš / 'i¹-šu-ú ú-še-ši-ir-ma / ḥa-da-an pu-ḥu-ur-tim / [i-n]a É ḪŠKUR ša ma-ḥa-nim^{ki} / [i-na] re-eš ITI.KAM an-ni-im / [i]-na É-it ḪŠKUR U₄ '7¹.KAM / [u]n-qf-in úš-ša-ab

デール市は進路を妨げられ、そして、ヤミナ族の間で騒動が起きました²⁵。私は彼ら(シマル族)の文句をなだめました²⁶。[私]は出立し、進める(だけ)の(道のり)を(急いで)[やって来]て、到着したハナ遊牧民をなだめました。そして、私はムルハトゥムに到着し、イダマラツに関して訴えと文句があるハナ遊

19 Durand, Amurru 3, 141.

20 Durand, ARM 26/1, p. 492 [ll. 4–13]; Schwemer, Wettergottgestalten, 303 [ll. 4–13]; Durand, RA 105, 159 [ll. 4–7].

21 Durand, RA 105, 159.

22 この箇所の翻字は Durand, RA 105, 159 に基づく。デュランはこの箇所を当初 *ka-lu-šu pu-[uḥ-ra-am]* ⁽⁵⁾ *ip-ḥu-ur-ma* と翻字していた (Durand, ARM XXVI/1, p. 492)。

23 Durand, RA 105, 161.

24 デュランの訳は La porte de Dêr est barricadée. また *p[a-ri-i]k-ma* は *p[a-ri-i]q-ma* と翻字されている (Durand, RA 105, 161)。

25 *irḥaš* の訳はデュランに依る (il y a eu des palabres)。動詞はマリ文書に特有。CAD は *raḥāšu D* という項目を用意し、文脈から to gather(?) という訳を提案する (CAD R, 75)。

26 文字通りには「私は文句に関して彼らをなだめました」。

牧民たちを調停しました。マハヌムのアッドウの神殿〔における〕集会の時（です）。今月の初めにアッドウの神殿において7日間私は「両輪」に滞在します²⁷。

さらに別なアシュマドの手紙 A. 861, 3–6 における類例も報告されている²⁸。

⁴IŠKUR ša ma-ḥa-nim U₄ 7.KAM un-qa-tim / wa-ša-ba-am i-ri-ša-an-ni / ⁴IŠKUR ú-ša-al-la-am a-na de-er^{ki} / ga-aš-ši-im^{ki} ù za-na-si^{ki} a-la-ak

マハヌムのアッドウは7日間「輪」に滞在することを私に求めました。私はアッドウを（つづがなく）お連れいたし（／私はアッドウ（の望みを）全て叶え）²⁹、デール、ガッシュム、ザナスに行きます。

なお、マハヌムは言及されていないようだが、上の手紙2点で問題になっている「輪」（unqum, unqātum）は別なアシュマドの手紙 A.252, 5–14 でも話題になっている。マハヌムの事例ではないが引用する³⁰。

be-lí ke-e-em ú-wa-i-ra-an-ni / [um-ma-a-m]i i-nu-ma i-na un-qa-tim / [te-te₉-eb-b]u-ú / [SÍSKUR.R]E-ia / [i-qí] / [i-na-a]n-na a-di U₄ 7.KAM / i-na un-qa-tim e-te₉-eb-bi / tup-pí be-lí-ia / li-il-li-kam-ma / a-šar ki-ma be-lí i-qa-ab-bi / lu-qí-šu

私の主人は次のように私に命じました。「おまえが「輪」から出立する時、私の（ための）犠牲を捧げなさい」と。今や、私は七日までには「輪」から出立します。私の主人の書板が私の元に届きますように。私の主の仰せの通りに私は（犠牲を）捧げましょう。

ハリ・ハドゥンとアシュマト以外の書簡の事例では、まずイバル・エルの手紙 A.4262, 20–44 でマハヌムが話題になっている³¹。デュランによれば、この手紙はジムリリム治世後半にイバル・エルがシンジャル山南のクルダからジムリリムに送ったものと言う。

(20) [... lu-u]p-ḥu-ur-ma (21) ṛi¹-n[a-an-na i-na z]a-ḥi-ba-an^{ki} (22) [i-n]a gi₅(KI)-ma-ar-ti-ia a-pa-ḥu-[ur] (23) šum-ma ḥa-am-mu-ra-bi iš-tap-ra-am (24) [1 l]i-im ša-ba-am a-na še-ri-šu (25) [a-ṭ]a-ra-ad ù 1

27 デュランの解釈と異なる。デュランの読解にしたがって訳せば「集会の時です。私は、マハヌムのアッドウの神殿において今月の終わりに7日間アダドの神殿において両輪に滞在します」（C'est le moment du rassemblement; dans le temple du dieu de l'Orage du campement, à la fin de ce mois-ci, je résiderai sept jours dans les deux Anneaux (unqîn), dans le temple du dieu de l'Orage)。

28 Durand, ARM 26/1, p. 84 [ll. 3–6]; Schwemer, Wettergottgestalten, 304 [ll. 3–6]; Durand, RA 105, 162 [ll. 3–7 (sic.)].

29 šullumum の用法に関してシュウェーマーとデュランの解釈は別れる。シュウェーマーは通例通りに Ich werde (den Wunsch des) Addu ganz befriedigen と訳すが（Schwemer, Wettergottgestalten, 304）、デュランはこの動詞の意味を escorter à bon port と解し、J'amènerai (ensuite) à bon port le dieu de l'Orage と訳す（Durand, RA 105, 162 with fn. 33）。

30 Durand, RA 105, 161f. [ll. 5–14]. なお、「輪」の類例に関してはサメタル（Sammetar）の書簡 A. 1226, 7'f. 「[n]日からの私の出向ゆえに私は「輪」から出立しました・・・」（ù aš-šum a-l[a]-ki-i[a] iš-tu U₄ [x.KAM] / i-na un-qa-tim et-bi ...）が知られる（Durand, ARM 26/1, 84 [ll. 7'f.]）。

31 Durand, Amurru 3, 142 [ll. 20–44].

li-im ša-ba-am ⁽²⁶⁾ [š]a a-na še-er be-lí-ia a-tà-ra-dam ⁽²⁷⁾ ʾa-na za-ḥi-ba-an-ma a-tà-ra-sú-nu-[tī] ⁽²⁸⁾ ú-u[m tup-p]í a[n-n]é-em ⁽²⁹⁾ i-na ma-ḥa-nim^{ki} a-na še-[er] ⁽³⁰⁾ be-lí-ia ú-ša-bi-[lam] ⁽³¹⁾ iš-tu ma-ḥa-nim^{ki} a-na na-we-[im] ⁽³²⁾ ša na-ḥa-li aš-šum ḥu-ur-pá(BA)-tim ⁽³³⁾ ša ḤA.NA.MEŠ a-al-la-ak ⁽³⁴⁾ ú ki-ma pa-ni-ia-ma te-em LUGAL.MEŠ-ni ⁽³⁵⁾ ša ma-at i-da-ma-ra-aš^{ki} ⁽³⁶⁾ a-am-ma-ra-am-ma a-na be-lí-ia ⁽³⁷⁾ a-ša-pa-ra-am DUMU.MEŠ šī-ip-[rī] ⁽³⁸⁾ ša be-lí i-ša-pa-ra-am a-na z[a-ḥi-ba-an^{ki}] ⁽³⁹⁾ li-il₅-li-kam ša-ni-tam [i-na-an-na] ⁽⁴⁰⁾ [n]a-wu-um ša na-ḥa-li ma-[la ba-šu-ú] ⁽⁴¹⁾ [i]-na mi-qí-tim šu-um-[ru-uš] ⁽⁴²⁾ ʾu¹ DUMU.MEŠ šī-ip-ri-i[a] ⁽⁴³⁾ [la uḥ-ḥ]a-ra-[am] ⁽⁴⁴⁾ [be]-lí ar-ḥi-iš li-iṭ-ru-dam

[・・・を私は] 招集しま [しょう]。そして、今、私は、[ザ] ヒバン [において] 私の全 (勢力) [によって] 招集します。もし (クルダの) ハンムラビが私に (手紙を) 書いてきたのなら、[私は] 彼のところに [一] 千の軍隊を派遣します。そして、私の主人のところに私が派遣すべき一千の軍隊をザヒバンに私は派遣します。この書板をマハヌムにおいて私の主人のところに私が送る日、ハナ遊牧民達の天幕ゆえに私はマハヌムからワディの牧草地 (nawûm) へと行きます。そして、私の意図する通りに、それらイダマラツの王達の報告を私は調べ、私の主人に報告します。(よって) 私の主人が私に送ってきた使者 (「使者たち」) はザ[ヒバン]に来るべきです。別件ですが、[あるだけ全ての] ワディの牧草地 (nawûm) は

疫病 (／怠慢?) によって [現在] 酷く荒れて [います。] それゆえ、私の使者たちに関しては、[遅れることのないように] 私の主人は急いでこちらに派遣してください。

上述の A.3030 同様にこの手紙もマハヌムにおいて認められた。この手紙の地理的背景を理解する上で鍵になる町ザヒバンの場所是不確定だが、この手紙と関連するイバル・エルの別な手紙 A.915 も手掛かりにしながら、デュランはシマル系の遊牧民がマハヌムをザヒバンに移動させた可能性を指摘し、さらに、ザヒバンを新アッシリア時代におけるザッバン (Zabban) と同定する³²。ザッバンはディヤラ川の中流域に位置づけられるため、もしデュランの推測が正しければこの手紙のマハヌムがはるか東方に位置したことになる。ただし、このデュランの推測には当然異論もあり、アントワーン・ジャケはこの地名を上メソポタミアの西半分 (バリフ川のデルタとヤムートバルの間) に探す³³。なお、これらアシュマト、ハリ・ハドゥン、イバル・エルの書簡を手掛かりにデュランは、上メソポタミア王国の崩壊以前はマハヌムがシンジャル山の南にあったが (アシュマトの書簡)、エシュヌンナとの抗争の際にイダ・マラツ (ハブール川上流域) の西方に移動したこと (ハリ・ハドゥンの書簡)、さらに、この抗争の終結後にはシンジャル山南に戻ったと考えられるものの、エシュヌンナの陥落後に今度は東方に移動したこと (イバル・エルの書簡) を提案する³⁴。

最後に、ヤバサ部族のメルフムであるイバル・

32 Durand, Amurru 3, 144.

33 Jacquet, BBVO 24, 122 with fn. 40; Ziegler and Langlois, MTT I/1, sub. Zahiban.

34 Durand, Amurru 3, 144f.

ピ・エル（Ibāl-pī-El）がジムリリム王に宛てた A.808, 4–9 におけるマハヌムの事例が加わる³⁵。この手紙は、前述の文書にも記録されるマハヌムのアッドウの玉座奉納について言及する。

tup-pa-am ša be-lí ú-ša-bi-lam eš-me / aš-šum
^{gis}GU.ZA ša ^dIŠKUR a-na ma-ḥa-nim / šu-li-im ù
e-le-šu be-lí / iš-pu-ra-am ṭe₄-em e-le-e be-lí-ia /
IGI LÚ su-ga-gi.MEŠ ù ^{lu}ŠU.GI₄ ḤA.NA.MEŠ / aš-
ku-un-ma

私の主人が私に送ってくださった書板を私は確認しました。アッドウの玉座をマハヌムに献上すること、そして彼が（境内に？）登ることにして私の主人は私にお伝えになりました。私は、私の主人の登場の知らせをスガグムたちとハナ遊牧民の長老たちの前で報告しました。

南バビロニアの事例

点数は少ないが、後期古バビロニア時代に由来するバビロニア文書に「マハヌムの人」が登場する。まず、バビロン王アンミツァドウカの治世 15 年³⁶、この王はシッパル・ヤフルルムの役人マルドゥク・ムシャリム、マルドゥク・ラマサシュ、シン・ベール・アプリームに複数の手紙を書き、襲撃に備えてこの都市の防御を強化するように命じた（AbB 1, no. 2; AbB 7, no. 49; AbB 7, no. 50; AbB 10, no. 150）。さらに、この王の命令をマルドゥク・ムシャリムが彼の上司（šāpirum）に

伝言した書簡 CTMMA 1, no. 69 も発見されている。その具体的な指示の中に「マハヌムの人 は城壁から降りてきてはならない」（LÚ ma-ḥa-nim i-na BĀD la ú-ur-ra-ad）という命令が含まれる³⁷。なお、この一連の書簡に帰属する別な手紙 AbB 6, no. 190 では役人マルドゥク・ムシャリムがヌムハの兵士をシッパル・ヤフルルムの城壁の上に登らせて、防備に当たったことが報告されている。ヌムハとはシンジャル山の南東に広がる地域を指す地名である。シャルパンはこれら城壁を守るマハヌムの人とヌムハ人を同一視し、ヌムハ人が具体的にはマハヌムから来た可能性を指摘した³⁸。確かに書簡からは両者がともに城壁の上で防備に当たっていたことを読み取れるが、両者が同一のグループであることが明言されているわけではないため、このシャルパンの解釈はあくまで憶測にとどまる。

ほか、ドウル・アビエシュフに由来すると考えられる行政記録 2 点（CUSAS 29, nos. 162 and 163）にもマハヌムが登場する。両者ともアンミディタナ治世 5 年の第 2 月 9 日に日づけられており、内容は武器の分配の記録。この CUSAS 29, no. 163, 3 にダムルム市の（担当になった？）マハヌムの人が入力されており（LÚ ma-ḥa-nu¹ ḤI.GAR^{ki}「ダムルムのマハヌムの人」）、さらに CUSAS 29, no. 162, 3 にも同様に読解可能な入力がある（12 LÚ² ma²-ḥa-nu ḤI.GAR^{ki} NÍG.ŠU DINGIR-šu-ib-ni-¹šu¹「ダムルムのマハヌムの人 12 人、イルシュ・イブニシュの所有」）。この

35 Durand, RA 105, 160 (ll. 4–9).

36 日付は AbB 1, no. 2, 27–30 と AbB 10, no. 150, 32–34 に残っている。

37 AbB 1, no. 2, 17; AbB 7, no. 49, 3'; AbB 7, no. 50, 18; AbB 10, no. 150, 18; CTMMA 1, no. 69, 9. マルドゥク・ムシャリムが王命を転送した書簡 CTMMA 1, no. 69, 9 のもと LÚ ma-a-nim 綴られている。

38 Charpin, NABU 2001/37.

マハヌムのエントリーの前にはマシュカンシャ
ピルの兵士と王宮の門を守る兵士がエントリー
されている (CUSAS 29, nos. 162 || 163, ll. 1f.: ⁽¹⁾
70 ÉRIN MAŠ.KÁN.ŠABRA^{ki} ⁽²⁾ 10 ÉRIN ʾKÁ Éʾ.

GAL)。このため、上記アンミツアドウカ治世に
おけるシッパル・ヤフルルムの防御の事例と同様
に、マハヌムの人々は衛兵として勤務していたと推
測できよう。

エマル文書における親族用語

lú.meš *aḥḥū* “兄弟たち”

山 田 雅 道

中央大学

1. はじめに¹

シリア領ユーフラテス川大湾曲部の右岸にあった遺跡メスケネ・カディメ（古代名エマル）では、約 1,100 点の（シュメール・）アッカド語文書（前 1275–1175 年頃）が出土した。これには不動産売買や養子縁組、遺言書など各種の契約書が多数含まれ、当時のエマル市民がどのような社会を営んでいたのかを知る上で重要な資料となっている²。

この時代、エマルは在来の現地王朝を保持していたものの、ヒッタイトの支配下に置かれており、ヒッタイト領シリアを管轄する衛星国カルケミシュを直接的な宗主としていた。エマル出土のアッカド語文書に関しては、字体・正書法・用語法・文法などの点で異なる二つの書記伝統の存在が指摘されてきたが、おそらくこうした政治状況を反映するのであろう。これらは一般的には文書の形状と相関関係にあり、粘土板文書としては標準的な縦長の「シリア型」(= S) と例外的な横長の「シリア・ヒッタイト型」(= H) に分類できる³。どち

らもエマル人に関する文書でありながら、前者がエマル在来の公的権威との結びつきを示すのに対し、後者ではヒッタイト系の権威との関係がしばしば認められる。このことから、シリア型がエマル在来の書記伝統を反映するのに対し、シリア・ヒッタイト型は外来の、ヒッタイトと何らかの関係をもつ書記伝統に由来すると考えられている。

本稿が扱う lú.meš *aḥḥū* は主としてシリア型文書で用いられるものの、シリア・ヒッタイト型文書にもごく少数ながら現れる術語である。*aḥḥū* 自体は名詞 *aḥu*（シュメログラムは ŠEŠ）「兄弟」の複数形であるが、そのシリア型における表記に関しては、特殊なアッカドグラム AH が使用され（例：LÚ.MEŠ.AH.ḪÁ, LÚ.MEŠ.AH-ḥu）、限定符 lú.meš を伴う点が特徴である。他方シリア・ヒッタイト型では、同じく限定符は付くものの、アッカドグラムは使用されず音節文字のみで表記される⁴。エマル文書では PN₁ ŠEŠ ša PN₂ 「Pilsu-Dagan の兄弟 Išsur-Dagan」(Emar VI 137 [S]: 20) や AH-

1 本稿では紙幅の制約上、議論の内容を一部割愛し記述を簡略化するとともに、脚注や参考文献への言及も最小限に留めたことをお断りしておく。

2 エマル文書の年代に関し Yamada 2013 を参照 (cf. Cohen 2013)。本稿で使用する同文書の略号は以下の通り：Emar VI = Arnaud 1985–87; RE = Beckman 1996; TS = Arnaud 1991。

3 これら二つの書記伝統に関しては、先行研究を含め Cohen 2013, 282–284; また池田 1996 を参照。

4 よって例えば同じ AH-ḥu という綴りに対し、シリア型では (*aḥ-ḥu* ももちろん可能ながら AH.ḪÁ との整合性を優先して) AH-ḥu、シリア・ヒッタイト型では *aḥ-ḥu* と、本稿では異なった形の翻字を採用する。なお問題となる文字 AH の字体の違いに関し、池田 1996, 4–5 参照。

ḥu-šu「彼の兄弟たち」(Emar VI 176 [S]: 36) のように通常の *aḥu* の用法が認められる一方で、例えば Namarti の息子 Qiri-Dagan、Ḥagalla の息子 Itur-Dagan、Aššura'u の息子 Zu-Ba'la、Baba の息子 Madgali-Dagan と「我が代理人(?)」が ^{lú.meš}*aḥḥū* と呼ばれる事例 (RE 7 [H]: 1–3; 下記 § IV 参照) が存在する。父名が異なるため、彼らは実の「兄弟たち」ではありえない。これら兄弟ならざる“兄弟たち”とは一体何者であろうか。

この問題に関し、筆者を含め従来の研究者は ^{lú.meš}*aḥḥū* を広義の兄弟、すなわち「親族」として理解してきた⁵。しかし最近、S. デマル＝ラフォンはこれを「同輩」(Egaux) と解し、彼らを非血縁的な有力 (élite) 市民集団とする新説を提出した (Démare-Lafont 2012, esp. RE 7 に関し p. 132 参照)。これに対しまず我々の念頭に浮かぶ反例は、LÚ.MEŠ.AḤ.ḤÁ ša LUGAL-ri「王の“兄弟たち”」(Emar VI 17 [S]: 4) であろう。筆者が見る限り、ここで彼らが「王族」以外である可能性は低い。しかしこれは同語の例外的な用例であること、また他方、新説が現在学界において支持を集めつつあることも事実である (例: Fijałkowska 2015, 37; Pfoh 2018, 492 n. 20)。

そこで本稿では、この ^{lú.meš}*aḥḥū* は血縁集団「親族」か非血縁的な市民集団かという問題を取り上げ、同語の意味を考究する。まず頻度の高い用法を中心に具体的なシリア型文書に即してその事例を検討し、旧来の「親族」説が正しいことを示す。

そして次にシリア・ヒッタイト型文書から、デマル＝ラフォンが新説を唱える最初の論拠とした上記 RE 7 テキストの再検討を行い、ここからは「市民集団」説が成立しがたいことを明らかにしたい。

II. ^{lú.meš}*aḥḥū* の主要な用法

シリア型のエマル文書中、術語 ^{lú.meš}*aḥḥū* は主として以下の三つの文脈 (役割) で用いられる。それぞれ例を挙げて示せば、以下の通りである。

1. 私的不動産売買契約における罰金の受領者 (例: Emar VI 130: 19–24; TS 67: 21–25):

ša urra(m) šēram X ibaqqaru 1 līm KÙ.BABBAR^{pa}
ana ^dNIN.URTA/URU^{ki} 1 līm KÙ.BABBAR^{pa} ana
^{lú.meš}AḤ.ḤÁ/AḤ^{bi} Ì.LÁ.E

将来、X (当該の不動産) の権利を主張する者は、銀 1,000 (シクル) をニムルタ神 / 市に、銀 1,000 (シクル) を“兄弟たち”に支払うべし。

2. 財産相続関係契約 (esp. 遺言書) の立会人 (例: RE 8: 2–4; 37: 1–4):

PN₁ DUMU PN₂ ina bulṭišu ^{lú.meš}AḤ.ḤÁ/AḤ^{bi}-šu
ušēšib (...) kīam iqbi

PN₂ の息子 PN₁ はその生前に彼の“兄弟たち”を座らせ(...)以下のように言った。

3. 私的不動産 (家屋、廃屋・敷地) 売買契約における *qubūru* 金の受領者 (例: Emar VI 111: 20–24 [a+b & c+d]; 20: 18–22 [a+b & D]):

[n]inda ḥukku kašip ^{giš}BANŠUR Ì.GIŠ pašiš a + b
qubūru É^{ti} nadnū 1 GÍN KÙ.BABBAR^{pa}
^{lú.meš}AḤ^{bu} mahṛū c + d

5 例えば Arnaud 1991, 16–17; Bellotto 1995; Beckman 1996, 12–13; 山田 1998a, 6–7. Cf. Viano 2010, 134–142 (esp. p. 140: “members of the family circle but not necessarily relatives”). 一般論として、*aḥḥū*「兄弟たち」が「親族」をも意味することは、ある意味当然である。ある一族を表す基本表現は DUMU.MEŠ PN「PN の息子たち」であるので、用語上、この集合 (名祖 PN の子孫) の構成要素は互いに *aḥu*「兄弟」ということになる。逆に彼らを集成した *aḥḥū*「兄弟たち」は「一族、親族」に他ならない。また彼らは同一集団の構成員という点では対等なので、ここから「同輩、同僚」といった二次的な意味が派生するが、このような用法は LÚ.MEŠ.AḤ.ḤÁ ša É^dud-ḥa「ウドハ神殿の“兄弟たち”」(Emar VI 446 [S]: 36) にも認めることができる。

hukku パンは砕かれ、テーブルには油が塗られた。
その家の *qubūru* は与えられ、“兄弟たち”は
銀 1 シクルを受け取った。

^[ninda]*hukku kašip* ^{giš}BANŠUR Ī.GIŠ *pašiš* a+b
1 GÍN *qabūra ša É* ^{lu.meš} *AḪ.ḪÁ maḥrū* D

hukku パンは砕かれ、テーブルには油が塗られた。
“兄弟たち”はその家の *qubūru* (銀) 1 シクル
を受け取った。

しかしこれらの文面を漫然と見る限りでは、問題の ^{lu.meš}*ahḫū* が血縁的「親族」なのか非血縁的「市民集団」なのかの判断はつげがたい。そこで具体的なテキストに即した仔細な検討が必要となるが、これを次節において行う。もっとも最初に取り上げた TS 82 における用例は例外的ながら、これは ŠEŠ/*aḫū* 「兄弟」と区別された ^{lu.meš}*ahḫū* “兄弟たち”の意味を考える上で不可欠であるとの判断に基づく。

III. 検証：親族用語としての ^{lu.meš}*ahḫū*

1. TS 82 (S)：兄弟の債務の代理返済による家屋の取得

⁸É-tu₄ ^{ša} ^{ma-a} DUMU *a-bi-ia* ⁹ù ^{ma} ^{ga} ^{ri-bu} ŠEŠ-
šu ¹⁰30 GÍN *ḫu-bu-la-ti-šu* ¹¹i-pu-ul ù ^{É-ti-šu} ¹²ki-
ma KÙ.BABBAR-*pí-šu il-qè* ¹³ur-ra-am *še-ra-*
am ¹⁴LÚ.MEŠ.AḪ.ḪÁ-šu ¹⁵aš-šum <sup>É-ti an-ni-
im ¹⁶UGU-*ḫi* ^{ma} ^{ga} ^{ri-bi} ¹⁷ú-ul *i-ra-gu-mu* ¹⁸ša *i-ra-*
gu₅-um¹ ¹⁹2 li-im KÙ.BABBAR *a-na É.GAL* ²⁰Ì.
LÁ.E.MEŠ ²¹šum-ma ^{ma-a} ²²iš-tu KÁ-bi URU.
DIDLÍ.ḪÁ ²³i-li-ia ²⁴30 GÍN KÙ.BABBAR Ì.LÁ.
E.MEŠ ²⁵É-ta-šu *li-il-qè* ...</sup>

(前略：家屋の描写) ⁸(これは) Abiya の息子
Aya の家であった。⁹⁻¹²彼の兄弟 Garibu が彼の
債務(銀)30 シクルを支払い、彼の銀の代わりに
彼の家を取った。¹³⁻¹⁷将来、彼の“兄弟たち”
は、この家に関して Garibu に対し権利を主張
しない。¹⁸⁻²⁰権利を主張する者は、銀 2,000 (シ

クル)を王宮に支払うべし。²¹⁻²⁵もし Aya が町々
の門から現れるならば、彼は銀 30 シクルを支
払い、彼の家を取るべし。(下略：証人リスト)

これは Aya が債務を抱えたまま失踪したため、
その兄弟 Garibu が彼の債務を返済し、その代わ
りに Aya の家を取得したことを認めた文書であ
る。正当な所有権請求を行えるのは、将来帰還す
るかもしれない Aya 一人とされる。証人リスト
(26-32 行)には(王) Elli (26 行) 以下、王弟 3 人
(ŠEŠ-šu: Yaši-Dagan, Zuzu, Hemiya) が名を連ねて
いる(27-29 行)。

こうした家族内の財産相続に関し、ŠEŠ (*aḫū*)
「兄弟」と区別され、不当とされながらも所有権
を主張できる人々 ^{lu.meš}*ahḫū* として考えられるの
は、もちろん Aya と Garibu の親族であって市民
集団ではなかろう。実際、他の文書では取得し
た財産に対する所有権請求が禁止された、換言
すればその可能性のある人々として、例えば以下
の人々が言及されている：NUMUN.MEŠ *ša a-bi-*
<ia>「(我が)父の子孫」中の DUMU.MEŠ ^mPN「Abda
の息子たち」(RE 15 [S]: 17-18); また ^mPN₁ DUMU
PN₂ ù ŠEŠ.MEŠ *ša a-bi-šu-nu*「Ḫutammanu の息子
Abdu と彼ら(債務奴隷となった男児たち)の父
の兄弟たち」の後者(Emar VI 205 [H]: 17-18)。い
ずれも財産所有者ないし被所有者の血縁者である
ことは、上記の解釈を補完する。

2. RE 35 (S)：兄弟による相続分の耕地購入

¹A.ŠÀ *ma-la ma-šú-¹ú¹* ²i-na KÁ *iš-šu-ni(-)*[...] ³ḪA.LA ^mri-*ši-^d[da-gan]* ⁴DUMU *É-ti-^dda-gan*
⁵*ma-la it-ti* LÚ.MEŠ.AḪ-*ḫi*[*i-šu*] ⁶i-ka-ša¹-ad-šu ...
¹⁹「ša¹ ur-[ra-a]m [š]e-ra-am ²⁰A.ŠÀ ¹i¹-b[a-qa-r]u
²¹1 li-im KÙ.BABBAR-p[a] ²²a-na URU.KI 1 *li-*
im KÙ.BABBAR-pa] ²³a-na LÚ.M[EŠ.AḪ-*ḫi*]i-šu
²⁴Ì.LÁ.¹E¹ ... ²⁸NA₄ LÚ.MEŠ.AḪ-*ḫi* ²⁹「NA₄¹ zu-

aš-[tar¹-t]i

¹⁻² Iššuni[...] 門 (地区) にある耕地の全域。
³⁻⁶ (これは) [彼の] “兄 [弟] たち” とともに相続していた限りの Biti-Dagan の息子 Riši-[Dagan] の相続分であった⁶。(中略：同じ Biti-Dagan の息子 Ba‘lu-abu による同耕地の購入)¹⁹⁻²⁴ [将] 来、(この) 耕地の権利を主 [張す] る者は、銀 1,000 (シクル) を市に、[銀] 1,000 (シクル) を彼の “[兄弟た] ち” に支払うべし。(中略：証人リスト)²⁸ 印章 (!) : “兄弟たち”、²⁹ 印章 (!) : Zu-Ašt[art]i。

この文書によると、父 Biti-Dagan が死去した後、息子 Riši-Dagan は彼の “兄弟たち” とともにその遺産を相続したが、そのうち彼が得た相続分の耕地をその兄弟 Ba‘lu-abu が購入した。そして将来、新所有者 Ba‘lu-abu に対しこの耕地の所有権を主張する者に関しては、エマル市と彼の “兄弟たち” に支払うべき重い罰金が課され、そのような請求者の出現を予防している。

通常、父の財産を相続するのは彼の息子たちであって、市民集団ではないことは常識に属する。実際 RE 35 と同様の共同相続の文脈において言及されるのは、例えば次の人々である：ŠEŠ.MEŠ-šú (Emar VI 215 [H]: 8), ŠEŠ.ĤÁ(-šú) (Emar VI 225 [H]: 10; TS 51 [S]: 4)。これらはいずれも「彼（共同相続者の一人）の兄弟たち」を意味する。では、このことは Riši-Dagan の “兄弟たち” (RE 35: 5) が実の兄弟たちと同義であることを意味するであろうか。もちろんそう考える必要はない。ある人物の遺産を相続する際、彼の息子ばかりか親族（特に兄弟）がこれに与ることが時折認められるので（例：TS 75 [H]: 19’-21’）、ここでもそのような可

能性を考慮に入れて「親族」と理解するのが最良であろう。

この場合、RE 35 は上記 § II.1 で触れた罰金の受領者として言及される “兄弟たち” (23’ 行) が (Ba‘lu-abu の、さらには父 Biti-Dagan の) 「親族」に他ならないことを証明する。さらに 28’ 行が示すように、この一族が共通の印章を用いていた点は興味深い。ここからは血縁集団としての彼らの紐帯が強固であった様子が窺われる。

3. TS 35 (S) : Nai-Dagan(?) による全財産贈与

¹ iš-tu U₄-mi an-ni-[i]m ² na-i-[^dKU]R² ‘DUMU¹ a-‘bu-^dKUR¹ ³ ‘i-na¹ [bu-ul-tú-ti-š]u ⁴ LÚ.MEŠ. AĤ.ĤÁ-šú ú-šē-šī-ib-ma ⁵ ki-ia-am iq-bi ⁶ a-nu-um-ma É-ti-‘ia¹ ⁷ ĤA.LA.ĤÁ-ia ša URU.KI ⁸ ù [š]a A.ŠÀ.ĤÁ ‘ma¹-la i[t-t]i ⁹ LÚ.MEŠ.AĤ.ĤÁ-ia ‘ik¹-šú-‘da¹-an-ni ¹⁰ mi-im-mu-ia ki-ma ša¹ na-[a]h-la-t[i]-ia ¹¹ a-na ‘la-aĥ-ma DUMU da-nu-i ¹² ad-din-šú-nu ú-pár-ri-ir-šú-nu ¹³ ur-ra-am šē-ra-am ¹⁴ LÚ. MEŠ.AĤ.ĤÁ-ia ¹⁵ aš-šum É-tu₄-ia ¹⁶ ù ĤA.LA.ĤÁ-ia ¹⁷ a-na UGU-ĥi ¹⁸ ‘la-aĥ-ma ¹⁹ ú-ul i-ra-gu₅-mu ²⁰ ša i-ra-gu₅-um ²¹ 2 li-im KÙ.BABBAR ²² a-na É. GAL ²³ ‘[L].Á.E ²⁴ IGI píl-‘sú¹-^dda-gan ²⁵ DUMU ‘IM-GAL ²⁶ IGI a-ĥi-ma-lik ŠEŠ-š[š]u ²⁷ IGI ú-ka-li ²⁸ DUMU tu-ra-^dda-gan ²⁹ IGI iš-šur-^dKUR ³⁰ IGI ‘iš¹-bi-‘ia¹ ³¹ DUMU ri-x [...] ³² IGI EN-ma-lik DUB.SAR

¹⁻⁵ 本日より、Abu-Dagan の息子 Nai-[Daga]n(?) は [そ] の [生前] に彼の “兄弟たち” を座らせ、以下のように言った、⁶⁻¹² 「今、我が家、我が “兄弟たち” と [と] もに相続した限りの市内外の我が相続分⁷、我が (その他) 諸々 (に関し)、私は我が相続財産に属するものとして Danu’u の息子 Laḥma にそれらを与え、それらを引き渡した。¹³⁻¹⁹ 将来、我が “兄弟たち” は、我が家と我が相続分に関して Laḥma に対し権利を

6 直訳：「(これは) [彼の] “兄 [弟] たち” と [と] もに彼に届く限りの Biti-Dagan の息子 Riši-[Dagan] の相続分であった」。

7 直訳：「我が “兄弟たち” とともに私に届いた限りの市と野の我が相続分」。

主張しない。²⁰⁻²³ 権利を主張する者は、銀 2,000 (シクル) を王宮に [支] 払うべし」と。

²⁴⁻²⁵ 証人：Ba'lu-kabar の息子 Pilsu-Dagan、²⁶ 証人：[彼] の兄弟 Ahi-malik、²⁷⁻²⁸ 証人：Tura-Dagan の息子 Ukali、²⁹ 証人：Iššur-Dagan、³⁰⁻³¹ 証人：Ri...[...] の息子 Išbiya、³² 証人：書記 Belu-malik。

6-12 行に関して厳密な文意の把握には若干問題があるものの (cf. 15-16 行)、ここでは Nai-Dagan(?) が全財産、すなわち父の遺産の相続分とその後自ら蓄えた私的財産を、彼の *naḥlatu* 「相続財産」 (cf. 聖書ヘブル語 *naḥālāh*) の範疇に分類される財産として Lahma なる人物に贈与した、と理解しておく。彼ら 2 人が血縁関係にあったか否かは不明ながら、いずれにせよこの契約は (王) Pilsu-Dagan を筆頭とする証人団によって保証され、これに違反する者たちには重い罰金刑が課せられている。

この文書に言及された 3 回の ^{lu.mes} *ahhū* のうち、第二のそれ (9 行) は RE 35 (§ III.2) において見た遺産の共同相続者であるから、Nai-Dagan(?) の「親族」と解して何ら問題あるまい。また第三のそれ (14 行) も TS 82 (§ III.1) を扱った際に論じた取得財産 (特に家族内での) に対する所有権請求者であり、同じく彼の「親族」である。ならば第一のそれ、すなわち同じ「彼の“兄弟たち”」 (4 行) も同様に Nai-Dagan(?) の「親族」を指すことに疑問の余地はあるまい。そしてこれは財産相続関係契約の立会人 (§ II.2) に該当する事例であることから、そのような ^{lu.mes} *ahhū* もまた当事者と血縁関係にある「親族」を意味することの証明が得られる。

IV. RE 7 (H) の再検討

以上の検討からは、^{lu.mes} *ahhū* が「親族」を意味することが明らかと思われる。それなのに何故デ

マル＝ラフォンは非血縁的「市民集団」説を唱えられたのであろうか。彼女の議論の出発点となった RE 7 テキストを再検討しよう。

¹ *qí-ri-^dKUR DUMU na-mar-ti^m i-túr-^dKUR DUMU ḥa-ga-al-^lla¹ ²zu-ba-la¹ DUMU aš-šu-ra-i^m ma-ad-ga¹⁴-li-^dKUR DUMU ba-ba³ ù ri-i-^lbi¹ LÚ.MEŠ.ah-ḥu-ú a-kán-na iq-bu-ú⁴ ma-a¹ É¹ ḥa-ba-ú ma-la ma-šú-ú ZAG-šú É ḥa-ba-ú⁵ DUMU. MEŠ^m be-li GÜB-šú É ḥa-ba-ú DUMU. MEŠ^m ti-im-ma⁶ pa-nu-šu bi-iš-ḥ[u] EGIR-šú ḤUR.SAG. qa-aš-šu⁷ ^mta¹-da-ar-ri DUMU tu-qa-ki⁷ GÍN KÙ.BABBAR it-ta-an-na-<na>-ší-mi⁸ ù U₄.2.KAM i-na É-šu ul-ta-qí-la-an-na-a-ší⁹ É ḥa-ba-a an-ni-ta₅ na-at-ta-an-na-aš-šu-um-mi¹⁰ šum-ma i-na EGIR U₄-mi DUMU ŠEŠ-ni ma-am-ma a-kán-na¹¹ ⁱ-qáb¹-bi ma-a É ḥa-ba-a a-na-^lku¹ e-le-eq-qè-mi¹² [ù] ^la¹-lam/la¹² il-la-a-an ša^m tá-da-ar-ri a-na ŠEŠ.ḤÁ a-na-an-din-mi¹³ [KÙ.BABBAR] ^lÉ¹ ḥa-ba-i 3-šú a-na ^mtá-da¹-ar-ri li-din¹⁴ [šum-ma] ^li¹-na EGIR U₄-mi DUB-pu ša É ḥa-ba-i¹⁵ [an-ni-i] ša a-na ^mtá-da-ar-ri ni-id-dí-nu¹⁶ [iš-tu] le-^let¹ ŠE[Š-n] ⁱù¹ šum-ma i[š]¹(UŠ)-^ltu¹ ¹⁷[le-et] DUMU ŠEŠ-ni il-la-a 1 me-at KÙ.BABBAR¹⁸ <a-na> [^dKUR] EN ŠEŠ.ḤÁ¹ 1 me-at KÙ.BABBAR <a-na> ^mtá-da-ar-ri¹⁹ [li-din] ^lÉ¹ ḥa-^lba¹-a ^lli¹-qè²⁰ [šum-ma DUMU] URU. e-mar ma-am-ma il-la-a a-kán-na²¹ [i]-qáb-bi ma-a ^lÉ¹ ḥa-ba-ú at-tu-ia-mi²² [L]Ú.MEŠ.ah-ḥu-ú EN di-ni-šu ^mtá-da-ar-ri ^lza¹-a-ku²³ >x< NA₄.KIŠIB¹ ^dKUR EN ŠEŠ.ḤÁ²⁴ NA₄.KIŠIB ^mqí-ri-^dKUR GAL ŠEŠ.ḤÁ²⁵ NA₄.KIŠIB ^mzu-ba-la DUMU aš-šu-ra-^li¹*

¹⁻³ Namarti の息子 Qiri-Dagan、Ḥagalla の息子 Itur-Dagan、Aššura'u の息子 Zu-Ba'la、Baba の息子 Madgali-Dagan、および我が代理人 (?), (すなわち) “兄弟たち” は以下のように言った、⁴⁻⁶ 「*ḥaba'u* 家屋の全域：その右 (側) は Belī の息子たちの *ḥaba'u* 家屋、その左 (側) は Timma の息子たちの *ḥaba'u* 家屋、その前 (側) は水 [路] (?), その後ろ (側) はカッシュ山。⁷⁻⁹ Tuqaki の息子 Tadarri は銀 7 シクルを我ら (!) に与え、その翌日、彼の家で我らに (そ

の銀を)量った(ので)、我らはこの *ḥaba'u* 家屋を彼に与えた。^{10–13}もし将来、我らの兄弟の息子の誰かが以下のように(すなわち)『私はその *ḥaba'u* 家屋を取り、Tadarri の(羊)よりも良い羊を兄弟たちに与える』と言うならば、*ḥaba'u* 家屋の[銀]の3倍を Tadarri に与えるべし。^{14–19}[もし]将来、我らが Tadarri に与えた[この]*ḥaba'u* 家屋の文書が[我]らの兄[弟]のもと[から]、もしくは我らの兄弟の息子の[もとか]ら現れたならば、銀100(シクル)を兄弟たちの主[ダガン神](に)、銀100(シクル)を Tadarri (に)[与え]、(この)*ḥaba'u* 家屋を取るべし。^{20–22}[もし]エマル市[民]の誰かが現れ、以下のように(すなわち)『(この)*ḥaba'u* 家屋は我が物である』と言うならば、“兄弟たち”が彼の訴訟相手であり、Tadarri は(その任を)免除される」と。

²³印章：兄弟たちの主ダガン神、²⁴印章：兄弟たちの長 Qiri-Dagan、²⁵印章：Aššura'u の息子 Zu-Ba'la。

注解：

3行：G. ベックマンは *ri-i-bī* を人名と取るが (Beckman 1996, 11–12)、他の4人とは異なり限定符^mと父名を欠くので、支持できない。しかしその読み方と意味は筆者にも不明である。ここでは全く暫定的ながら、*ribī* 「我が代理人」と取っておく。ここで「我」とは誰かが問題となるが、1人称単数の人物はこの文書中に言及されない(ただし1人称複数7–10、15–17行に言及される)ので、彼は背後にいてこの文書を書かせた人物ということになる。ならばこの文書の受益者 Tadarri ではないかとの推測が可能であるが、その場合は彼自身が ^{lú.meš}*ahhū* の一員であったことになる。

4行：その立地条件 (esp. 「山」[6行]) および将来一族の中から現れるかもしれない所有権請求者の発言内容 (11–12行) から判断して、É *ḥaba'u* とはエマル市郊外に立地する、一族の共同家畜管理施設であると理解されよう。こうした施設は同じ場所(適地)に集まっていたことが4–5行から窺われる。

8行：ベックマンは “he paid us” と訳すが

(Beckman 1996, 12)、動詞 *šaḳālu* D の意味 “to pay” は OA 限定 (CAD Š/2, 9–10a [mng. 7]; AHw, 1178b [D mng. 1]) なので採用せず、“to weigh” (CAD Š/2, 9a [mng. 5]; AHw, 178b [mng. 2]) と理解する。この前の文(7行)と内容的に何が異なるのかという問題に関し、筆者は Tadarri が支払う約束(法的宣言)をした翌日に実際に銀を計量して支払ったか、彼が支払った銀7シクルを念のため翌日自宅で量って重量を再確認したか、二つの可能性を考える。

12行：Cf. [*ki² a²-h*]*a²-iš il-la-a-an ša¹ Tá-da¹-ar-ri*, “(I will give) [in an equal] fashion² the ... of Tadarri” (Beckman 1996, 12)。

18行：Cf. [*a-na*] en šeš.h[*i¹⁷*].a², “[to] the lord of our ‘brother’” (ibid.). 次注も参照。

23行：ベックマンは ^{lú.kur.en}<en²> šeš.hi.a, “Dagan-bēlu, ‘<lord> of the brothers’” と読むが (ibid.)、次行に GAL ŠEŠ.HÁ 「兄弟たちの長」が言及されており、これと酷似した職務者「兄弟たちの主」の存在は想像しがたい。筆者は「兄弟たちの長」Qiri-Dagan がこの親族集団の長であり (cf. 1行)、それより上位者となればもはや人ではなく、その集団の神(ダガン)であろうと考える。

文書の内容については特に説明を要すまい。ここでまず指摘すべきは、RE 7を一読すれば術語 ^{lú.meš}*ahhū* (3, 22行) が親族用語であることは明白だという点である。本文書中の1人称複数は全て彼らを指すが、その発言中「我らの兄弟」(16行)や「我らの兄弟の息子」(10, 17行)は、^{lú.meš}*ahhū* が血縁集団であってこそ十分に意味をなす表現だからである。実際、隣接する他の *ḥaba'u* 家屋が DUMU.MEŠ PN 「Beli/ Timma の息子たち」(5行)、すなわち PN (名祖) 一族 — 最低でも家族 — の所有物であったことを考慮すれば、本物件だけ非血縁集団の所有物であったと考える合理的な理由は皆無であろう。筆者は、デマル＝ラフォンが何故この文書に基づいて「市民集団」説を主張でき

たのか、理解に苦しむ。

では、この ^{lu.mes}ahhū の語義はシリア型文書で見た「親族」と同じであろうか。この文書に関する限り、筆者は懐疑的である。というのも、むしろ ^{ahhū} (ŠEŠ.HÁ) 「兄弟たち」(12, 18, 23–24 行) の方が、この一般的な語義にふさわしいように思われるからである。特に後者には共通の「長」(24 行) と「神」(18!, 23 行) がいて、それぞれ印章を有していた事実は、こうした解釈を強く促すといえよう⁸。これに対し、^{lu.mes}ahhū は具体的には冒頭の 5 人(1–3 行)であり、限定的集団との印象を受ける。また(一族外の)エマル市民が所有権を主張する際に対応する者も(22 行)、現実的には親族全員ではなくその代表者であろうと推測される。とすれば ^{lu.mes}ahhū とは ^{ahhū} 「親族」の一部、その「幹部会、代表者たち」と理解するのが妥当ではないだろう。

どちらも親族用語であることに変わりはないものの、もしこの ^{lu.mes}ahhū < ^{ahhū} という解釈が正しい場合、シリア・ヒッタイト型文書における用語法はシリア型文書のそれとは異なっていた可能性が示唆される。書記伝統の違いが親族用語の用法にも及んでいたことになり、これは興味深い問題といえよう。

V. おわりに

以上の検討からは、エマル文書における術語 ^{lu.mes}ahhū は親族用語であって、非血縁的な「市民集団」を意味するのではではないことが明らかとなった。特に §§ II–III において見たように、頻度の高い三つの用法中、二つ (§ II.1–2) について証

明を得たことは重要である。残る一つ (§ II.3) に関しても、この解釈が支持される感触を筆者は得ている。というのも *qubūru* (直訳:「墓」) を扱った別稿 (Yamada forthcoming) において、これを一族の祖霊礼拝施設と解する結論に至ったからで、私見によると *qubūru* 金とは、上記施設を備えた一族の現ないし旧本宅を売却するに際し、この不動産に対する請求権の放棄と引き換えに購入者から一族の人々(実際にはその代表者たち)が受け取る銀、すなわち金銭であったと理解される。もしこの解釈が正しいならば、私的不動産(家屋、廃屋・敷地)売買契約における *qubūru* 金の受領者 ^{lu.mes}ahhū と「親族」の親和性は高いと言わなければならない。

ここで強調しておきたいのは、*Emar VI 446: 36* (上記注 5 参照) のような例外はあるものの、^{lu.mes}ahhū = 「親族」という結論がシリア型文書のテキスト分析から導かれたという事実である。既に述べたようにシリア型はエマル在来の書記伝統であるから、その文書に記された内容はこの都市社会の伝統的特徴を反映している可能性が高い⁹。^{lu.mes}ahhū が主として家族における財産の取得や譲渡との関わりで登場する事実は、エマル人が核家族よりも上位の血縁集団への強い帰属意識をもっていたこと、また同時に同集団による規制を強く受けていたことの表れであろう。ただし、この集団がどの程度の規模(拡大家族 or 氏族)であったのかについては、残念ながら議論のための手がかりを欠く。

他方、§ IV で扱ったシリア・ヒッタイト型文書 *RE 7* では、やや状況が異なる。筆者のテキスト

8 Cf. “兄弟たち”の印章(上記 *RE 35: 28*)。

9 例えば王権に対する市当局の権威の相対的独立性は、その好例である(山田 1998b, 147–153 参照)。

理解が正しければ、そこでは *ahhū^{ba}* が「親族」であり、*lu.mes ahhū* はその「幹部会、代表者たち」を指す術語である。これは外来の書記伝統であったがゆえに、その書記がエマル在来用語法（発音 /*ahhū*/ 自体は同じなので正書法）に精通していなかった状況を物語っているのであろうか¹⁰。RE 7 読解の経験からは、シリア・ヒッタイト型文書における親族用語 *ahhū*（限定符の有無にかかわらず）を再検討するという新たな課題が導かれる。

参考文献

- Arnaud, D. 1985–87: *Recherches au pays d'Aštata: Emar VI.1–4*, Paris.
- Arnaud, D. 1991: *Textes syriens de l'âge du Bronze récent* (AuOrS 1), Sabadell.
- Beckman, G. 1996: *Texts from the Vicinity of Emar in the Collection of Jonathan Rosen* (HANE/M 2), Padova.
- Bellotto, N. 1995: "I LÚ.MEŠ.*ah-ḫi-a* a Emar," *AoF* 22, 210–228.
- Cohen, Y. 2013: "Problems in the History and Chronology of Emar," *Kaskal* 10, 281–294.
- Démare-Lafont, S. 2012: "Les « Frères » en Syrie à l'époque du Bronze récent: Réflexions et hypothèses," in: G. Wilhelm (ed.), *Organization, Representation, and Symbols of Power in the Ancient Near East* (= CRRAI 54), Winona Lake, IN, 129–141.
- Fijałkowska, L. 2015: "Politics and Social Needs in 2nd Millennium Syrian Sale Formularies: The Case of Emar," in: E. Jacob (ed.), *Sale and Community Documents from the Ancient World: Individuals' Autonomy and State Interference in the Ancient World*, Trieste, 29–40.
- Pfloh, E. 2018: "Reconsidering International Relations in Southwest Asia during the Late Bronze Age," in: P. Attinger et al. (eds.), *Text and Image* (OBO SA 40 = CRRAI 61), Leuven / Paris / Bristol, CT, 489–496.
- Viano, M. 2010: "Community and Individuals at Emar," *AoF* 37, 132–152.
- Yamada, M. 2013: "The Chronology of the Emar Texts Reassessed," *Orient* 48, 125–156.
- Yamada, M. forthcoming: "The *qubūru* and Ancestor Worship in Emar."
- 池田潤 1996: 「エマルにおけるスクライバル・トラディション」『オリエント』39/2, 1–15.
- 山田雅道 1998a: 「エマル文書を読む (4)」『古代オリエント』(NHK 学園機関誌) 55, 5–8.
- 山田雅道 1998b: 「エマル市とヒッタイト帝国：シリアの都市社会における自治と支配」『オリエント世界 –7 世紀』(岩波講座 世界歴史 2) 岩波書店, 145–162.

10 詳細には立ち入らないが、*lu.mes ahhū* が現れるもう一つのシリア・ヒッタイト型文書 *Emar VI 181* においても、同語の用法 (1, 13 行; cf. ŠEŠ.MEŠ = *ahhū^{mes}* [14–15 行]) には若干のぎこちなさを指摘することができる。

前9世紀におけるアッシリアの拡大

佐野 克司

筑波大学人文社会系

アッシュルナツイルパル2世とシャルマネセル3世の治世を最盛期とする前9世紀は、前8世紀半ばから本格的に始まる「帝国期」と区別してしばしば「先帝国期」と称される（Yamada 2000, 1）。この「先帝国期」という時代区分の中で、これまで多くの研究者はアッシュルナツイルパル2世とシャルマネセル3世の治世の間には「変化」なき「連続性」があると考えてきた。なぜなら、二人の王は彼らの前任者たちよりもアッシリアの領土を大幅に拡大することに成功したからである。このような伝統的な見方に疑問を呈し、近年新たな時代区分を提案したのが Liverani である。Liverani は、アッシュル・ダン2世からアッシュルナツイルパル2世の王碑文に散見される「レコンキスタ」を強調する表現が、シャルマネセル3世の王碑文にはもはやほとんど見いだされないと指摘し、アッシュルナツイルパル2世とシャルマネセル3世の時代は明確に区別される必要があると主張した。Liverani によると、アッシュルナツイルパル2世とシャルマネセル3世の領土拡大の目的は大きく異なっていた。すなわち、アッシュルナツイルパル2世は、中アッシリア時代にトゥクルティ・ニヌルタ1世とティグラト・ピレセル1世がユーフラテスボーダーとナイリボーダー（伝統的国境）内において確立した

アッシリアの統治権を回復するために進軍して行った。アッシュルナツイルパル2世が取り戻した伝統的国境内の領土は、*mātu* ないし *pāḫatu* と呼ばれるユニットに編成され、中アッシリア時代にすでに存在していた行政システムに基づいて統治された。土着の王たちに支配されていた国々をアッシリア固有の行政ユニットに変更していくというプログラムは、アッシュルナツイルパル2世によって完遂されたため、彼の後継者であるシャルマネセル3世は伝統的国境の外側に目を向けた軍事遠征を行った。その際に、彼は前王が伝統的国境内において行ったように征服した国々を行政州として直接併合するのではなく、属国化していくことを企てた（Liverani 2004）。この Liverani のアッシリアの拡大にかんする新たな理論は、彼がかつて唱えたネットワーク理論と大きく異なる（Liverani 1988）。おそらく、Liverani は彼のネットワーク理論を批判した Postgate の考えを受け入れて新たな拡大モデルを提唱したと想定されるが（Postgate 1992, 255-256）、当該の Postgate 論文には何の言及もしていない。Liverani は、アッシュルナツイルパル2世の時代に伝統的国境内の全域が州行政システムに組み込まれたと考える自らの論拠として以下の碑文の表現を挙げている。ina KUR.KUR.MEŠ šá a-pe-lu-ši-na-a-ni LÚ.GAR-nu.

MEŠ-a al-ta-kan ur-du-ti ú-pu-šu「私が支配した諸国に、私は我が総督たちを置き、（その結果、）彼らは私のために奉仕を行った」。確かに、この表現は我々にアッシュルナツィルパル2世が征服したすべての国を画一的にアッシリアの行政州として組み込んだかのような印象を与える。しかしながら、Liverani は、すでに Yamada がこの表現は行政州や基地としてアッシリアに直接併合された場所のみならず、アッシリアの総督と見なされた地方の王たちが支配する国々をも含んでいるのではないかという考えを提示していることを見逃している (Yamada 2000, 303)。Yamada の解釈は理にかなっており、受け入れることができる。ただし、彼は地方の諸王がアッシリアの総督と見なされたと考え得る根拠を示しておらず、また実際に「総督」の称号を有する王たちとアッシリアの州行政システムとの関係は不明であると述べ、以後この問題は扱っていない (Yamada 2000, 305)。よって、報告者は、2015 年に出版された自身の論文の中において Yamada の考えを支持しつつ、アッシリア王碑文において言及されている「総督」の称号を有する地方の王たちは、アッシリアに服属したのちにアッシリアの総督としての地位を与えられた「属国王」であった、との新たな解釈を提出した。つまり彼らの国は直接ではなく、理念的・観念的にアッシリアに併合されたという考えである (Sano 2015)。アッシュルナツィルパル2世が自らの王碑文において「私はハブフ国に私の総督を置いた」と主張しているにもかかわらず、同時に当該国から人質を取っていることは報告者の考えが正しいことを示唆している。またアッシュルナツィルパル2世が彼の王碑文において「人質たちを取る者」という称号を自らに与えていることも看過してはならない。報告者はアッシュルナ

ツィルパル2世の王碑文から、直接併合された場所（国や都市）、属国化された場所、そして理念的・観念的に併合された場所を網羅的に調べ上げ、この時代におけるアッシリアの拡大は Liverani が主張したような単純なモデルでは理解し得ないことを証明した。さらに、近年出版された論文においては、すでにアッシュルナツィルパル2世が伝統的国境の外側に複数の属国を確立していたこと、そしてシャルマネセル3世の時代においても伝統的国境の内側に理念的・観念的に併合された複数の属国が存在したことを強調し、二人の王の治世はこれまでのように歴史的連続性において理解されなければならないと結論付けた (Sano 2017)。

上記で言及した報告者の2本の論文は、研究の国際的発信という観点において最善とは言い難いドイツ語で書かれている。それゆえ、報告者は2本の論文を一つにまとめ、さらに先帝国期全体を射程に入れた、より詳細な研究を英語で出版したいと常々考えていた。幸運にも、山田重郎教授をリーダーとする研究プロジェクトに研究協力者として参加する機会を得たため、これをテーマとして選び、山田教授と共同研究を行うことに決めた。研究成果は共著論文としてまとめ、2022年の3月末までに査読付き欧文研究誌に投稿することを予定している。

参考文献

Liverani, M. 1988, "The Growth of the Assyrian Empire in the Habur/Middle Euphrates Area: A New Paradigm", *SAAB* 2/2, 81-98.

Liverani, M. 2004, "Assyria in the Ninth Century: Continuity or Change?", in: G. Frame — L.S. Wilding (Hrsg.), *From the Upper Sea to the Lower Sea: Studies on the History of Assyria and Babylonia in Honour of A.K. Grayson (PIHANS 101)*, 213-226.

Postgate, J. N. 1992, “The Land of Assur and the Yoke of Assur”, *WA* 23/3, 247-263.

Sano, K. 2015, Die Expansion des assyrischen Reiches unter Aššurnasirpal II., *Aula Orientalis* 33/2, 323-331.

Sano, K. 2017, Die Etablierung der assyrischen Herrschaft in der Regierungszeit Salmanassars III.: Noch-

malige Überlegungen zur Frage der Kontinuität des 9. Jahrhunderts v.Chr., *Studia Mesopotamica* 4, 181-195.

Yamada, S. 2000, *The Construction of the Assyrian Empire. A Historical Study of the Inscriptions of Shalmaneser III (859-824 BC) Relating to His Campaigns to the West (CHANE 3)*, Leiden.

アッシリア帝国東部辺境の拠点都市 ヤシン・テペ遺跡の調査と イラク・クルディスタンの考古学（2018 年度）

西山 伸一
中部大学人文学部

1. はじめに

都市の成立から展開までをみる本科研費「都市文明の本質」で、計画研究 02 に属する研究プロジェクトとしてイラク・クルディスタン自治区（図 1）におけるヤシン・テペ遺跡（Yasin Tepe、または Gird-i Yasin Tepe。正確には「ヤーシーン・テペ」と発音）（図 2・図 3）に焦点をあてた考古学・文献学的研究がある。この研究では、ヤシン・テペ遺跡の発掘を含む考古学調査と周辺地域の踏査を合わせて、特に地方に所在する拠点都市の構造と歴史的位置づけを解明するのが大きな目的である。それとともに西アジアで現在最も精力的に考古学調査が展開されている地域の 1 つであるイラク・クルディスタン地域の考古学研究に貢献することも目的の 1 つに含まれている。遺跡調査プロジェクトは、Yasin Tepe Archaeological Project (YAP) と名付けられ、中部大学、筑波大学、国士舘大学などの研究者らで構成されている。

ヤシン・テペ遺跡は、世界最古の「帝国」とされる新アッシリア帝国の東部国境地帯に位置する拠点都市である。遺跡は、イラク・クルディスタン南部にあるスレーマニー（スレイマーニーヤ）県最大級のテル型遺跡で、県都スレーマニーから約 30 キロ南方にあるシャフリゾール平原の北西部に位置する。この遺跡とよく対比されるのが、

同じシャフリゾール平原の南東部に位置するバクル・アワ (Bakr Awa) 遺跡である。この遺跡は、E. A. Speiser らの研究 (1928) から、前 9 世紀前半、Ashurnasirpal II の王室碑文に見られる Zamua の地の拠点都市 Dur Aššur (バビロニア第 5 王朝時代 [前 11 世紀] は Attila と呼ばれる町) と考えられてきた。しかし、1970 年代および 2010 年から継続している発掘調査では、アッシリア帝国時代に相当する鉄器時代の遺構はわずかしこ検出されていない。現在遺跡調査をすすめるハイデルベルグ大学調査隊 (P. ミグルス隊長) は、「下の町 (Lower Town)」東部の調査を中心に進めているが主に古バビロニア時代 (前 2 千年紀前半) の遺構が出土している。最近の情報では、バクル・アワの発掘調査は近々に終焉するとのことである。鉄器時代の痕跡が希薄であることから、研究者の中には、Dur Aššur をバクル・アワ以外に求める意見も出されている (例えば Liverani 1992: 56)。

このような中で 2015 年に開始されたヤシン・テペのフィールド調査は、この地域 (シャフリゾール平原) の新たな鉄器時代の考古学資料を提供することとなっている。初年度は UAV による測量調査 (5 月、9 月)、表面採集調査を実施し、2016 年より「下の町」南東部において、発掘調査を開始した。その成果は、日本西アジア考古学



図1 イラク・クルディスタン自治区

会と古代オリエント博物館が共催する「西アジア発掘調査報告会」で毎年報告されている（西山ほか 2017; 2018）。また国際学会においてもその成果を報告してきた（Nishiyama 2017）。これまでの成果（特に 2016 年と 2017 年の発掘調査）を簡単にまとめると、1）「下の町」が鉄器時代（新アッシリア時代）に広く居住されていることが推測される、2）「下の町」東部では、近代の土壤削平により鉄器時代の層が表土層直下で検出される、3）鉄器時代の層は、少なくとも前 8～7 世紀に

年代づけられる、4）Reception Suite という新アッシリアの建造物で大型邸宅や宮殿などに見られる「応接空間」が出土、5）上記の邸宅の地下に「未盗掘」のレンガ墓を発見した、というものである。これらの成果からヤシン・テペには確実に鉄器時代の、それも厚く広い堆積があることが確認できた。この遺跡が Dur Aššur である確実な証拠はまだないが、鉄器時代の拠点集落であることは確かである。今後の調査で地名等を記した文字資料の発見が期待される。

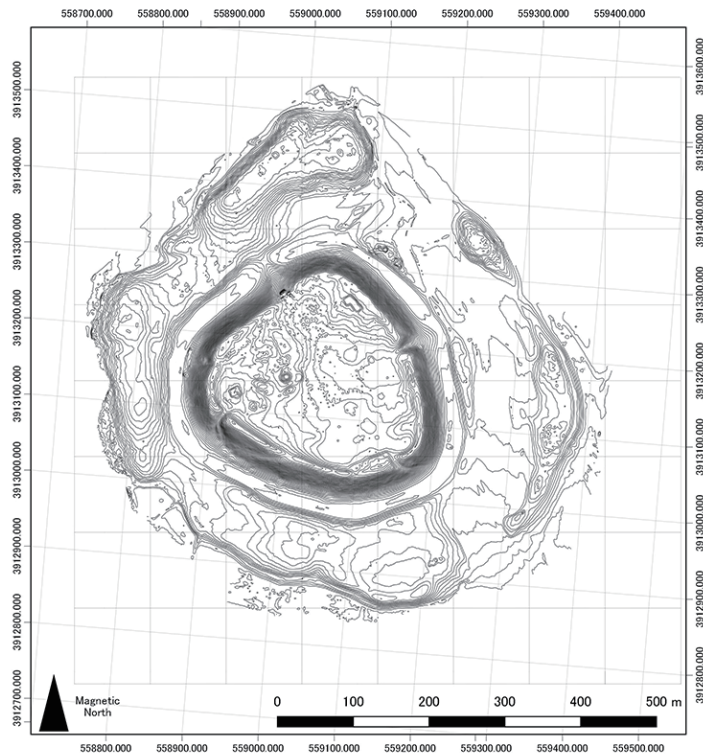


図 2 ヤシン・テペ遺跡：等高線図



図 3 ヤシン・テペ遺跡：遺跡南東方向から

2. イラク・クルディスタンの考古学

ここで、イラク・クルディスタン地域の考古学事情について今一度簡単な説明を加えておきたい（大津・下釜 2014; 常木 2016 も参照）。イラク、つまりメソポタミアの考古学は 20 世紀において激動の歴史を歩んできた。これはイラクとい

う人工国家が歩んだ道のりと重なるところが多い。クルディスタンは、クルド民族が主たる人口を占める地域で、イラク、イラン、トルコ、シリアの国境地帯にまたがる。重要なポイントは、クルドが好んで国境地帯に住んだわけではなく、クルドの住む地域に国境線がひかれたということである。イラク・クルディスタンは、現在のイラク共和国の中のクルド民族の居住地を指す言葉で主にザグロスの山岳地帯に相当する。この地域は、1920 年度から欧米やイラクの調査隊が本格的に展開することとなり、1950 年代の先史時代を対象としたシカゴ大学の「イラク・ジャルモ」プロジェクトでピークを迎

える。その後、政治的理由により、この地域における外国隊の調査が停止される。1970 年代にはイラク文化遺産庁から派遣された調査隊による発掘や踏査が行われたが、サダム政権によるクルド抑圧さらにイラン・イラク戦争(1980-1988 年)によってこの地域の考古学調査はほぼ停止状態となった。

その後、1991 年の湾岸戦争、さらに同年のクルド民族蜂起を経て、1992 年にクルディスタン地域政府（KRG）が設立される。これをもってイラク・クルディスタン地域は、「事実上」の自治を確立することとなった。地域政府にはイラク中央政府のような各省が配置され、独自の行政組織が稼働している。さらにイラク戦争後（2003 年以降）、この地域は、治安の安定と石油資源により、欧米資本が流入し、空前の経済成長を迎え

た。それによってイラク・クルディスタン地域は、イラクの他地域とは別格の社会発展を遂げることになる。2010 年前後から地域政府の文化財総局は、積極的に外国調査隊を受け入れるようになり、考古学調査の件数の飛躍的増加を見ることとなった。これには、シリア内戦の開始により多くの外国調査隊がシリアでのフィールド調査を停止せざるを得なかった事情も影響している。事実、イラク・クルディスタンで調査を行う多くの調査隊がかつてはシリアで活動していたのである。現在スレーマニー県のみでも 20 隊ほどの調査隊が活動中である。スレーマニー県以外ではドホーク、アルビール、ゲルミアンなどの地域でも外国隊が調査を展開している。ちなみに日本の調査隊で初めてクルディスタン地域で発掘調査を実施したのは、2014 年の筑波大学調査隊（隊長：常木晃）であり（常木 2016）、ヤシン・テペの調査もこの調査隊より分派して調査を実施している。

一方、イラク全体でみれば、近年ではイラク南部（いわゆるメソポタミア文明の中心地）でも治安の安定化にともない欧米の調査隊が徐々に活動を展開している。しかし、件数と規模においてはイラク・クルディスタン地域がイラク国内で最も考古学調査が盛んな地域といえる（例えば Altaweel and McMahon 2018 参照）。この地域が政治的理由から 30 年あまり考古学調査が停止されていたことを考えると、今後ますます調査研究によって新しい発見が相次ぐことが予測される (Ur 2017 参照)。

3. 2018 年のフィールド調査

さて、ヤシン・テペ遺跡における 2018 年のフィールド調査について報告する。期間は、8 月 18 日から 9 月 20 日の約 1 か月間であった。前半の約



図4 レンガ墓出土遺物の保存修復作業風景

2 週間は、2017 年に未盗掘のレンガ墓より出土した遺物に関して、1) 整理作業、および 2) 緊急的保存修復措置を実施した。2) については東京藝術大学の青木繁夫客員教授に担当していただいた（図 4）。このレンガ墓（図 5）は、ヴォールト式の天井部をもち、すべて焼成レンガで作られている。内部には 2 時期の埋葬が確認された。最初の埋葬は、レンガ敷きの床に直接置かれた埋葬（2～3 名？）であり、次いでその埋葬を埋め、テラコッタ製棺が埋葬された（図 6）。この棺は、北メソポタミア鉄器時代によく見られる形態で、より高級なものは青銅で作られていた。この棺には 5 名（？）の遺体が埋葬されており、今後の研究によって親族関係が明らかになると考えられる。類似した形態のレンガ墓は、アルビールの城塞周辺の緊急調査や、アッシリアの古都アッシュル遺跡などで出土している。つまり、この墓はアッシリア文化の影響を強く受けたものであり、ヤシン・テペ遺跡にアッシリア文化が確実に流入していることを示している。この墓は、イラク・クルディスタン地域ではまれな「未盗掘墓」であったため多くの遺物が出土した。しかし、2017 年 9 月のクルディスタン自治区の独立を問う住民投票にともなう混乱によって、未整理のままスレー



図5 2017年出土の未盗掘レンガ墓



図6 レンガ墓内部で発見されたテラコッタ製棺

マニー文化財局の倉庫に保管されていた。今回の整理作業は、その遺物整理と緊急的な保存修復措置を施すことである。特に棺の中や墓室内で発見された青銅製品は著しく腐食しており、写真や実測作業をする前に保存修復措置が必須であった。

幸い2週間以内の短い期間で基本的な措置は施され、写真等の記録作業が可能となった。将来的にこれらの遺物についてはスレーマニー博物館での展示を考えているが、それにはより時間をかけた保存修復措置が必要となる。

今回の遺物の整理作業で特筆すべき成果を2点だけ記しておく。1つは、楔形文字資料の発見である。遺物は、青銅製のトルク型ネックレスで、2017年にOperation Aで検出した小型のReception Suiteの床面で発見した。今回青木客員教授によるクリーニングにより三日月型の板部分に2行にわたる奉納碑文が刻まれていることが発見された。山田重郎筑波大学教授の解読によると碑文の内容は、ナブー神殿に（神殿奴隷として）息子をささげる内容である。この遺物については近々に出版し、学界の意見を仰ぐ予定であるが、確実に新アッシリア時代に属する文字資料が出土したことから、今後の文字資料の発見に大きな期待が持てる。

もう1つは、棺の内部に堆積していた土壌（すべて採取し、保管していた）を精査した結果、数百点に達すると考えられる直径2ミリほどのビーズが発見された。ビーズは、カーネリアン、ファイアンス、メノウ、金などからなり、この時代のアッシリア風の埋葬としてはかなり豪華なものであった。また金製と銀製の指輪、イヤリング、象牙製品、ガラス容器、鉄製品なども含まれていた。ビーズの石材にはクルディスタンで採取されるブルーシスト（青色片岩）なども含まれ、今後ビーズの原料採集地と製作地の問題にアプローチする資料が得られている。

フィールド調査としては、今回は、時間的都合から発掘調査ではなく、地下探査と踏査に重点をおいた。地下探査は、ドイツの探査会社（Eastern



図7 ドイツの探査会社の磁気探査機材

Atlas GmbH）に依頼した磁気探査（図7）と、筑波大学より派遣された辰巳祐樹非常勤研究員によるレーダー探査を実施した。前者については、遺跡の「下の町」の東半分の大半（約6ヘクタール）を探索し、様々なアノマリー（異常部）が検出された。興味深いのは「レンガ墓」と思われるアノマリーと、探査会社が「溝もしくは運河」と呼ぶ線状のアノマリーである。上記のようなレンガ墓がわりと裕福な家族によって構築されているとすると、「下の町」に複数の墓があっても不思議ではない。また町の内部に線状の構築物があることは、住宅区を分ける「壁」とみなすよりも「運河」と考える方が適切な気がしている。というのも、ヤシン・テペ周辺は、現在でも水が豊富であり、特にベスタンスールの泉を水源とする運河が遺跡周辺をいくつも流れている。それに加え、遺跡の南西を流れるタンジェロ川も豊かな水量を誇る。冬季になると雨が降るため、運河や川の水量が増える。現在でも、冬から春は水のため遺跡周辺の土壌が柔らかくなり、自動車はもちろんトラクターでさえも遺跡に近づくことは困難となる。古代においても現代と同じように遺跡へのアプローチが冬から春にかけてはそれほど変わらないと考え、ヤシン・テペのような拠点都市への人や



図8 デスカラ遺跡遠景：村によって遺跡が削平されている。

物資の運搬が、水路や運河を使って行われたことはあながち無理な想像ではない。それが下の町の内部まで伸びていた可能性もある。想像をたくましくすれば、ちょうどヴェネツィア、アムステルダム、大阪などのような水都（すいと）のようであったと思えばわかりやすいであろうか。この線状アノマリーについては、ヤシン・テペの都市構造を知るうえで極めて重要であると考え、近い将来発掘によって確認したいと考えている。

最後に考古学踏査について述べる。今年度は、遺跡の「下の町」東半分と、遺跡近郊のテル型遺跡を踏査した。「下の町」では、土地区画を利用しつつ地表面をいくつかのエリアにわけて数名でくまなく歩きながら遺物を採集した。大半は土器片であり、大まかな分類によればその大半は鉄器時代の土器であった。このことから「下の町」東半分の広い範囲には鉄器時代の層が存在することが明らかになった。

周辺遺跡の踏査では、まず遺跡のすぐ近郊にある2つの遺跡（ニスカ・ジョウ、ハーク・ホル）を調査した。遺跡をいくつかの区画にわけ、数名で各区画から遺物を採集する方法である。また2キロ圏内にある2つの遺跡（テル・マーリフ、テル・カラゴル）も踏査した。これらはいずれも鉄器時

代の土器が採集されたことから新アッシリア時代のヤシン・テペと同時期に存在した集落である可能性が高い。これらの近接する集落は、これまで見落とされがちだった都市近郊における集落の空間分析を研究するデータを得ることができた。またハーク・ホールとカラゴルでは、鉄器時代と考えられる焼成レンガ片が採集されたことから、これらの集落になにかしらの大型建造物が存在した可能性が指摘できる。これらの遺跡以外では、ヤシン・テペから南西に延びるワディ渓谷を踏査した。この渓谷は、ヤシン・テペに南西方向からアプローチするルート上にあると考えられる。ここでは、ヤシン・テペから約5キロ南西にあるデスカラ(図8)、さらに5キロ進んだ渓谷の一番奥にあるアハマド・アフを踏査した。どちらも鉄器時代を含むが、前者は、ハラフ期から青銅器時代までの厚い堆積、後者はイスラーム時代の厚い堆積が確認できた。このうち、デスカラは、村の住宅によりマウンド周辺が著しく削平されており、緊急的な調査と記録が必要であると感じた。

4. まとめ

2018年度は、発掘調査こそ実施しなかったものの、1)レンガ墓の出土遺物整理および保存修復作業、2)「下の町」の地下探査(磁気およびレーダー探査)、そして3)「下の町」および周辺遺跡の踏査を行うことができた。これらは、次のフィールド調査シーズンを迎えるにあたり重要なタスクであり、ヤシン・テペ遺跡の都市構造や周辺景観を知るうえで貴重なデータを得ることができた。来年度は、可能であれば地下探査の結果に基づいて「下の町」の何方所かで発掘調査を実施し、新アッシリア帝国の拠点都市ヤシン・テペの歴史にアプローチしてみたいと思う。

謝辞

フィールド調査にあたっては、常木晃(筑波大学教授)、山田重郎(筑波大学教授)、安間了(徳島大学教授)、青木繁夫(東京藝術大学客員教授)、辰巳祐樹(筑波大学非常勤研究員)、ジャンニ・アブドゥル=マッシーハ(レバノン大学)、ムハンマド・アブドゥル=サーテル(レバノン大学)の協力を得た。また現地においては、カマル・ラシード・ラヒーム(スレーマニー文化財局局長)、ハシム・ハマー・アブドゥッラー(スレーマニー博物館館長)、ラワー・カリーム・サーレフ(スレーマニー文化財局職員)、オスマーン・タウフィーク・ファッタ(スレーマニー大学講師)ならびにスレーマニー文化財局・スレーマニー博物館職員の惜しめない協力を得た。上記各人に対し記して感謝申し上げます。

なお、ヤシン・テペ遺跡の調査には、本計画研究の科研費のほか、基盤研究(A)「文献学・考古学の協働による紀元前18～8世紀の上メソポタミアの歴史研究」(代表:山田重郎)(課題番号16H01948)、「古代メソポタミア北部における歴史時代の物質文化の研究」(代表:沼本宏俊)(課題番号18H00743)、および中部大学特別研究費(A)からの支援も受けた。

参考文献

Altaweel, M. and McMahon, A. 2018 Recent Archaeology in Iraq, *Iraq* 80, pp. 263-266.

Liverani, M. 1992. *Studies on the Annals of Ashurnasirpal II, vol.2: Topographical Analysis*, Rome: Università di Roma, "La Sapienza".

Nishiyama, S. 2017. Iron Age Village and City in Iraqi Kurdistan: Results from Qalat Said Ahmadian and Yasin Tepe, *2017 ASOR Annual Meeting Boston Program and Abstract Book*, p. 99. Boston: American

Schools of Oriental Research.

西山伸一・常木晃・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・沼本宏俊・山田重郎・渡部展ほか 2017「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第1次（2016年）」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集：平成28年度考古学が語る古代オリエント』、pp. 16-20、日本西アジア考古学会。

西山伸一・ハーシム・ハマー・アブドゥッラー・常木晃・山田重郎・沼本宏俊 2018「アッシリア帝国東部辺境を掘る－イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ考古学プロジェクト・第2次（2017年）」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集：平成29年度考古学が語る古代オリエント』、pp. 17-21、日本西アジア考古学会。

大津忠彦・下釜和也 2014「イラク・クルディスタンの考古学－課題と可能性－」『筑紫女学園

大学・短期大学部人間文化研究所年報』25、pp. 1-18。

常木晃 2016「筑波大学のイラク・クルディスタン地域における考古学調査」『2012-2016年科学研究費補助金「新学術領域研究（研究領域提案型）」現代文明の基層としての古代西アジア文明 Newsletter』7、pp. 1-6。

Speiser, E. A. 1928. Southern Kurdistan in the Annals of Ashurnasirpal and Today, *The Annual of the American Schools of Oriental Research*, 8 (for 1926-1927), pp. 1-41. Boston: American Schools of Oriental Research.

Ur, J. 2017. The Archaeological Renaissance in the Kurdistan Region of Iraq, *Near Eastern Archaeology*, 80 (3), pp. 176-187.

エルサレム陥落時の新バビロニア諸将 (エレミヤ書 39:3) について

『聖書協会共同訳』刊行に寄せて

三津間 康幸
東京大学大学院総合文化研究科

都市エルサレムは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地として、西アジアの都市研究上、重要な位置を占める。そしてユダヤ教、キリスト教の正典である『旧約聖書』は、紀元前のエルサレムを知るための重要な史料となっている。『旧約聖書』「列王記上」「列王記下」は西暦紀元前 10 世紀から前 6 世紀までエルサレムを首都として存続したユダ王国（ダビデ王朝）の諸王の歴史を扱っており、「列王記下」25:1-4 には、紀元前 587/586 年、新興の大国新バビロニアのネブカドネザル 2 世によってエルサレムが陥落し、王国が滅亡した時の様子が記されている。この「列王記下」25 章 1-4 節と並行する箇所が「エレミヤ書」39:1-4 であり、特に 39:3 には「列王記下」に記されていない情報が見られる。エルサレムに新バビロニア軍が侵入した後の描写である。2018 年 12 月に刊行された『聖書：聖書協会共同訳』では¹、この節は次のように和訳される。

バビロンの王のすべての高官が来て、中央の門に座を設けた。彼らはネレガル・サル・エツェル、サムガル・ネブ、侍従長サル・セキム、指揮官ネレガル・サル・エツェル、およびバビロンの王の他のすべての高官たちである。

ここには新バビロニア（バビロン）王ネブカドネザルの将軍が 4 人挙げられている。特にこの部分（以下、「将軍リスト」と呼称）について、『聖書協会共同訳』「エレミヤ書」の底本となっている *Biblia Hebraica Stuttgartensia* (BHS) のヘブライ語テキストを転写して示すと、次のようになる。

*nēraḡal śar-’eṣer samgar-nəḥû śar-səḳîm raḥ-sārîs
nēraḡal śar-’eṣer raḥ-māḡ*

このリストには奇妙な点がある。ネレガル・サル・エツェルが 2 度出てくこと、そして前 2 者（ネレガル・サル・エツェル、サムガル・ネブ）は単に名前のみが挙げられているのに対し、後 2 者には「侍従長サル・セキム、指揮官ネレガル・サル・エツェル」と、役職が付されていることである。

後者の問題は、「サムガル・ネブ」という人名を實在のものではなく、ヘブライ語聖書の伝承過程で生じた幽霊語と考えれば解決する。すなわち、最初に出てくるネレガル・サル・エツェルの官職名として「サムガル」があると理解し、「ネブ」はアッカド語の神名ナブーの転写で、人名の構成素であることは間違いないが、「サムガル」ではなく、後方の「サル・セキム」と一体ととらえ、「ネ

1 『聖書：聖書協会共同訳：旧約聖書続編付き』日本聖書協会、2018 年、(旧) 1235 頁。

ブ・サル・セキム」という人名を構成していると理解するのである。「サムガル（子音だけ取り出せば *smgr*）」はアッカド語の官職名 *simṣāgir* の転写であり², *simṣāgir* は新バビロニアにおいてティグリス川東方の一属州を管轄する総督ないし知事職である³。そして將軍リストでこの職にあるとされる人物ネレガル・サル・エツェル（アッカド語ではネルガル・シャル・ウツル *Nergal-šarru-ušur*）こそ、後に新バビロニアの王位に就く、通称ネリグリッサルと呼ばれる人物（在位前 560/559-556/555 年）に他ならない。*simṣāgir* としてのネリグリッサルは、*Hofkalendar* と呼ばれる、イスタンブール考古学博物館所蔵の八角粘土柱（プリズム）EŞ 7834 に刻まれたアッカド語碑文に現れる⁴。このプリズムはバビロンの南宮殿（旧宮殿）の西側への拡張部分から発見されたもので、ネブカドネザル 2 世による拡張事業と、それに貢献した帝国要人の一覧を示す。*simṣāgir* のネリグリッサルは第 vi* 欄 21' に、バビロニア（アッカド）の要人の一人として言及される。

將軍リストの「侍従長」はアッカド語の *rab ša rēši* に相当し、新バビロニアでは軍事的な任務も担う職であった。また「侍従長」の名前は先述の通り「ネブ」が先頭に付くと、「ネブ・サル・セ

キム」になるが、ネブカドネザル 2 世時代の史料から、ユルサは *rab ša rēši* 職にナブー・シャルーッス・ウキーン *Nabû-šarrūssu-ukīn* という人物が就任していたことを明らかにし、この人物とネブ・サル・セキムを同定した⁵。「指揮官」はアッカド語の *rab mungi* に相当し、その職務はおそらく兵車や騎兵の指揮官である。將軍リストにおける在職者が、最初に出てくる「サムガル（総督または知事）」と同名のネレガル・サル・エツェルとされていることについて、ユルサは書き手の誤りを想定するが⁶、同名異人で同時期にそれぞれ「サムガル」と「指揮官」を務めたネルガル・シャル・ウツルたちがいた可能性もあるであろう。注釈書ではこの立場をとっているものもある⁷。この問題については、今後新しい史料（*rab mungi* のネルガル・シャル・ウツルに言及するような）が得られることを期待して、ここではこれ以上深くは立ち入らないことにする。

筆者は、エレミヤ書 39:3 の「サムガル・ネブ」を幽霊語とすることについて、旧約聖書のギリシア語訳、いわゆる七十人訳からも支持が得られることを指摘したい。「エレミヤ書」39:3 の將軍リストに相当する箇所は七十人訳では「エレミヤ書」46:3 にある。この部分のギリシア語テキストを

2 「サムガル」のアッカド語原形、在職者の同定については、Michael Jursa, “Der neubabylonische Hof,” in *Der Achämenidenhof*, ed. Bruno Jacobs, and Robert Rollinger (Wiesbaden: Harrassowitz, 2010), 85 を参照。

3 *simṣāgir* の管轄地域については Jursa, “Der neubabylonische Hof,” 96-97 参照。

4 EŞ 7834 の概要やテキストは、Rocio Da Riva, “Nebuchadnezzar II’s Prism (EŞ 7834): A New Edition,” *Zeitschrift für Assyriologie* 103 (2013): 196-229 参照。

5 「侍従長」職のアッカド語原形やその職務、ネブ・サル・セキムの同定については、Michael Jursa, “Nabû-šarrūssu-ukīn, *rab ša rēši*, und „Nebusarsekim“ (Jer. 39:3),” *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* (2008): 9-10; Jursa, “Der neubabylonische Hof,” 87-88 参照。

6 このことと「指揮官」職のアッカド語原形やその職務、当時の在職者については、Jursa, “Der neubabylonische Hof,” 85-86 参照。

7 Jack R. Lundbom, *Jeremiah 37-52*, The Anchor Bible 21C (New York: Doubleday, 2004), 85.

Rahlfs-Hanhart のテキストによって示すと、次のようになる。

Ναργαλασαρ καὶ Σαμαγωθ καὶ Ναβουσαχαρ καὶ
Ναβουσαρις καὶ Ναγαργασανασερ Ραβαμαγ

このテキストはアッカド語の固有名詞や官職名のヘブライ語表記経由をギリシア文字で転写するという、きわめて複雑な作業の結果生まれたものであり、ここからアッカド語の固有名詞や官職名を復元することは非常に難しい。直接の資料となったヘブライ語テキストを復元することにも困難が伴うが、少なくともそこにはサムガル・ネブという人名が存在していなかったことは明らかである。その部分は Σαμαγωθ καὶ Ναβουσαχαρ と転写され、「サムガル」に相当する Σαμαγωθ が独立した単語として扱われているからである。また「ネブ」は「サル・セキム」とともに一つの人名を構成していたことも明らかである。七十人訳では、ヘブライ語テキストの「ネブ」に相当する Ναβου- が「サル・セキム」の縮んだ形と思われる -σαχαρ とともに Ναβουσαχαρ という人名を構成しているからである⁸。

上記のような議論を踏まえ、エレミヤ書 39:3 の将軍リストについて新しい日本語訳を提案するとすれば、それは

総督(あるいは知事) ネレガル・サル・エツェル、
侍従長ネブ・サル・セキム、指揮官ネレガル・
サル・エツェル、

といったものになるであろう。これはルンドボムの英訳である⁹、

Nergalsharezer the Samgar, Nebusarsechim the
Rab-saris, Nergalsharezer the Rab-mag,

とも一致する。このように解釈することによって、このリストは3人の将軍に対してそれぞれ役職名を表示するものとなり、人名に対して役職名が付いたり付かなかったりする不均等は解消される。

エレミヤ書 39:3 のヘブライ語テキストに「サムガル・ネブ」なる人名が存在するとの BHS および『聖書協会共同訳』の解釈は、伝統的なヘブライ語聖書のテキストであるマソラ本文に基づいている。マソラ本文を尊重して聖書テキストを校訂し、翻訳をすべきとの立場は決して無視してはならない。しかし、BHS が主に依拠するマソラ本文は、後 1008 年に作られ、旧約聖書全体を含むレニングラード写本である¹⁰。さらに古い「エレミヤ書」のテキストとしては、後 10 世紀前半のアレッポ写本やペテルブルク預言書写本に含まれるもの、そして後 895 年のカイロ預言者写本に含まれるものがある¹¹。しかし、これらを参照しても、「エレミヤ書」のヘブライ語テキストは、その後 9 世紀末の姿までしかさかのぼれない(図 1 の写真は、アレッポ写本でエレミヤ書 39:3 が記された部分。「サムガル・ネブ」を赤線で囲い強調)。

これに対し、「エレミヤ書」を含む七十人訳の主要な写本にはヴァティカン写本、シナイ写本(い

8 ルンドボムも Ναβουσαχαρ が「ネブ」と「サル・セキム」が一つの人名を構成することの根拠と指摘する (Lundbom, *Jeremiah* 37-52, 85)。

9 Lundbom, *Jeremiah* 37-52, 80.

10 エルンスト・ヴェルトヴァイン (鍋谷堯爾、本間敏雄訳)『旧約聖書の本文研究』日本基督教団出版局、1997 年、63、72-73 頁。

11 ヴェルトヴァイン『旧約聖書の本文研究』、61-64 頁。

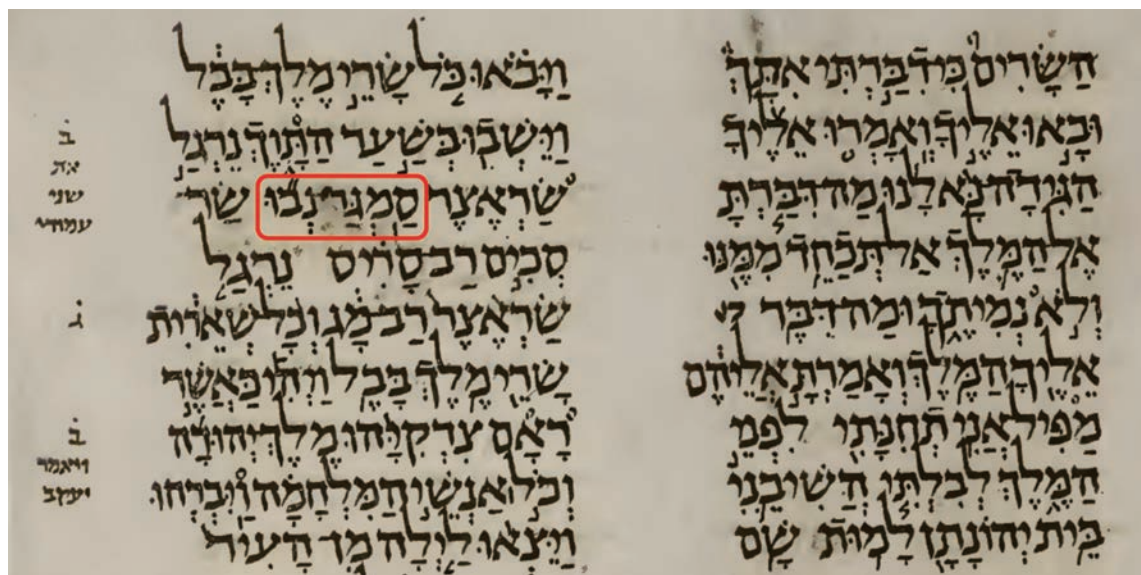


图 1

らの観察も尊重すべきである。多角的な視点から史実とテキスト伝承の双方を尊重する翻訳が行われ、聖書を手に取る人々に史実をより明確に反映した情報が伝わることを願ってやまない。また聖書学、歴史学の間での議論を活発化し、新しい聖書翻訳の可能性を探ることで、聖書が重要な手掛かりを提供する、エルサレムをはじめとする西アジア古代都市の研究を一層発展させていくことが、研究者にとっての今後の任務となるであろう。

12 ヴェルトヴァイン『旧約聖書の本文研究』、111-112 頁。

田舎の史料から都市を眺める

ーアウロマン文書を例にー

春 田 晴 郎

東海大学文化社会学部

1. オウラーマーン（ハウラーマーン）と アウロマン文書

2000年5月、私はロンドンの大英図書館で2000年ほど前の羊皮紙文書3点を調査していた。イラン北西部、現コルデスターン（クルディスターン）州のオウラーマーン（あるいはウーラーマーン、クルド語ハウラーマーン）地区の洞穴から出土した、いわゆるアウロマン文書と呼ばれる紀元前1世紀～後1世紀に書かれた3点の文書である。正式な発掘調査からではなく20世紀の初めに存在が知られたもので、羊皮紙文書は他にもあったらしいが散逸してしまい、結局3点が大英博物館の所蔵となった。大英図書館の分離に伴いこちらに保管されている。

その時の主たる研究対象は、アウロマン文書 No.3 と呼ばれる後53年に記されたパルティア語の文書であり、内容は葡萄畑の売買である。その際の研究成果は2002年に発表され[春田2001(2002)]、そのうちの新解釈の主要部分はアルシャク（アルサケス）朝パルティアの史料集成の中でも反映されている。

その後、2004年には出土地そのものではないがオウラーマーン地区を訪れることもできた。図1は、中心的な町であるオウラーマーン・タフトの景観である。山岳地のクルド集落では、階段

状に家が立ち並び、下の層の屋根が上の層の通路になっているところがあるが、オウラーマーン・タフトはその代表的な例である。クルド人監督バフマン・ゴバーディーの映画『わが故郷の歌』でも結婚式のシーンで登場する。いずれにしても、都市的な景観とはかけ離れている。アウロマン文書 No.3 の書かれた地は（後述する Nos.1-2 と同様に）不明であるが、内容としてはやはり都市とは無縁である。

さて、ここで以下論じていくのは残りの2点、アウロマン文書 No.1 (88/87 BCE) と同 No.2 (22/21 BCE) という2点のギリシア語で書かれた羊皮紙文書である。こちらは既に1915年にミンズが公刊するとともに詳細や訳注を付けている[Minns 1915]。2点ともやはり葡萄畑の売買文書である。内容としては、都市と関係あるとはいえない。にもかかわらず、この2点のギリシア語文書は、西アジア都市について補助的ではあるが非常に重要な情報を与えてくれる。

2. アウロマン文書 Nos.1-2 の重要性 とくに楔形文字の終焉と関連して

史料の非常に乏しいアルシャク朝パルティア時代にとって、年号と王妃の名が記してあるアウロマン文書 Nos.1-2 は、それだけで重要である。た



図1 オウラーマーネ・タフトの景観

だし、王の名はアルサケースとのみ記してあるのとくに No.1 に関しては、暦の問題（年初はいつか）とあいまってどの文書の王が誰なのか、一致は見られていない。

それ以上に歴史的に意味を持つのは、No.1 と No.2 のギリシア文字の書体、とくに両者の差である。これはそれ単独でも無視できない意義を持つが、Graeco-Babyloniaca という、粘土板に楔形文字によるアッカド語とそのギリシア文字転写を表記している文書群の、ギリシア文字の書体と比較する時に際立って重要となる。というのは、ゲラーという楔形文字研究者は 1997 年にこの Graeco-Babyloniaca という粘土板について“ギリシア文字のパレオグラフィ”を最も主要な根拠として、新しいものは紀元後 2 世紀にまであたる、としているからである [Geller 1997]。彼の主張が正しいければ、楔形文字使用の最も遅い確認例ということになる。

ところが、アウロマン文書 Nos.1-2 の字体を見れば、そのような主張が成り立たないことは明白

である。ゲラーの論が出て 1 年余に出版された研究ノートの中で私はこう述べた：“彼の主張は全く根拠薄弱である。これらの文書を紀元後に比定する直接的根拠は、パレオグラフィとどの音がどのギリシア文字に転写されるかという考察がなく、あとはすべて情況証拠である。直接的根拠のうち、パレオグラフィについては、ゲラーの表 [Geller1997:95] と紀元前 1 世紀のアウロマン文書 Nos.1, 2 の表 [Minns1915:26] を並べて見れば了解できるように、“Graeco-Babylonica” 文書の特徴は、紀元前 1 世紀のものとみても、なんら問題はない。たとえば、ゲラーが紀元後 2 世紀かそれ以降と判断したテキスト HSM1137[Geller1983] の字体の“N”は、アウロマン文書 No.28（バビロニア方式の暦なら、紀元前 21/20 年）の字形 — 現在の小文字の“v”とほぼ同形 — よりも古い形態を保っている。転写に関する考察も同様である”[春田 1998 (1999): 192 n.22]。2007 年にヴェステンホルツは Graeco-Babyloniaca についてより包括的な考察を行ない、やはりゲラーの年代比定を厳し

く批判している [Westenholz 2007]。アウロマン文書 Nos.1-2 の字体についても、注で引かれている。惜しむらくは、字体の比較そのものを当の論文中で図示しなかったことで、そのためかヴェステンホルツの正当な指摘がアッシリア学で未だに十分行き渡っていないのではまことに残念である。とはいえ、Graeco-Babyloniaca テキストの年代について、私は 20 年前の記述がそのまま有効であると考えている。

もちろん、楔形文字の終焉がそのまま古代メソポタミア文明の終焉に直結するわけではないが、この世界最古の都市文明の溶解過程を考察する際に、都市的要素に乏しいギリシア語羊皮紙文書が重要な示唆を与えうる、ということ自体が面白い。

なお古代メソポタミア文明の溶解について付言すれば、私は、楔形文字によるバビロニア天文学を生むのに必要な神殿組織などが、すでにセレウコス朝時代中期以降、支配者にとって必要な天文とくに暦計算のために「温存」されてきたものであり、楔形文字天文学に代わるギリシア・ヘレニズム天文学がアルシャク朝パルティアに広まるとともにその存在意義を失い消えていった、という仮説を考えている。ただ、このような大きなテーマについては別の専論が必要となるのでここではこれ以上の言及を控える。

3. アウロマン文書 Nos.1-2 の作成地と書記

アウロマン文書 Nos.1-2 には、それぞれヒュパルキア（州の下位の行政区画で郡、県に相当）名、宿駅（stathmos）名、村名、葡萄畑名が記されている。このうち、宿駅名を除く 3 つは両文書でほぼ同一である。60 数年の時を隔てた同じ葡萄畑の売買について扱っているとみなすのが妥当であろう。これらの地名について、エドモンズが考察

を加えている [Edmonds 1952]。彼によると、両文書のヒュパルキア名、村名に近い地名はオウラーマーン地区には見いだせない。よく似た名が存在するのはイラク領クルディスタン、スレーマニーの南西を北西－南東方向に走るカラ・ダーグ山地周辺であり、アウロマン文書 Nos.1-2 に登場する地名は、そちらがふさわしい。

二千年前の文書に現れる地名比定は容易ではなく、エドモンズの説も立証というにはほど遠いが、近年日本隊も含め考古学調査が急速に進むイラク領クルディスタンであるから、スレーマニー周辺でもヘレニズム～アルシャク朝期にかけてアウロマン文書 Nos.1-2 の内容と関係するような発見があるかもしれない。

ヘレニズム～アルシャク朝期の宿駅（スタトモス）の機能は、よく分からないが、地方行政の中に組み込まれていたらしい。宿駅という訳が適当であるかどうか分からないが、ここでは一応そう訳しておく。アウロマン文書 Nos.1-2 については、書記の名は記されていないが、長い王の称号や複数の王妃の名等も含めて、売り主あるいは買い主が書けたとはとても思えず、専門の書記が作成筆記したものであることは間違いない。宿駅がその作成地であった可能性もある。売り主買い主らは村からやってきたことになる。

さて、2 つの文書で宿駅名だけ異なっている、と述べた。60 余年の間に別の宿駅に代わったのかもしれない。同じ宿駅で名称だけ変更された可能性もある。しかし、もう一つ、別の可能性をここで指摘しておきたい。

宿駅名はアウロマン文書 No.1 では Baithabarta（文書での形は複数与格 Baithabartois）、同 No.2 では Desakdis /Desakdi(da) となっている。全く異なっており、それ以上考察する余地はないかに見

える。一見して、Baithabarta はアラム語風であり、Desakdis はイラン語風である。

しかし、Baithabarta はやや奇妙な語形である。アラム語として前半は baiθā「家、神殿」の限定相、後半は bartā「城砦」あるいは「娘」の限定相と分解できるが、地名で $\sqrt{\text{byt}}$ が使われる時は構成相の bēθ（アッカド語では bīt）が通例（Bethlehem など）で、限定相はあるとしてもきわめて珍しい。後半 bartā は「城砦」ならアッカド語 birtu から bir- と短母音で借用された形で birtā > bartā と変化したものとみることができる（長母音 bīr- の形の方が多く、こちらは限定相では bīrəθā となる）。

Desakdis については、中期西イラン語（パルティア語、中期ペルシア語）で、前半は *dēsak < *dēs-「形造る」+ 接尾辞 -ak と、後半は diz「城砦、都城」（パルティア語）と解釈できるだろう。意味を考えると、Baithabarta と非常によく似ている。

単なる推測ではあるが、両文書の宿駅名は実は同一の名称を表わしていたのではないか。Baithabarta は元々はアラム文字で BYT'BRT' と表記されそれを本来ならパルティア語で Dēsakdis と訓読みすべきだったのを、ギリシア語を記す書記がそのことを知らずにアラム文字表記通りに写したものである。このようなアラム語詞を訓読みしてパルティア語を表記することは前2世紀後半から行なわれていた。トルクメニスタンのニサ出土陶片文書はそうして書かれている（もっともニサ文書では固有名詞は表音表記されるが）。また、冒頭に記したほかならぬアウロマン文書 No.3 もそのようなアラム語訓読語詞を多用した表記である。もし、この大胆な推測が正しいければ、文書を記した書記は宿駅の正しい名を知らなかったことになる。イラン・イラク内陸部ではギリシア語契約文書を記せる書記は、おそら

くは都市にしかおらず、契約書作成などで求められれば、地方の宿駅などに出向いて、村からやってきた売り主買い主証人たちの前で文書を作成した、そのような状況があったのかもしれない。

BYT'BRT' /Dēsakdis/ 自体は大胆な推測であって、あくまで可能性の一つにすぎない。しかし、書記は都市にのみ閉じこもっていたわけではなく、必要あれば田舎まで出向いて文書作成ほかさまざまな作業に携わっていたであろうことは想像に難くない。ニサ出土陶片文書でも、古ニサ城市（当時の名ミフルダートキルト）にいた書記が葡萄酒畑から葡萄酒を運んできている例が見られる。アウロマン文書 Nos.1-2 における宿駅名の相違は、少なくともそのような都市と田舎とを繋ぐ書記の行動に思いをめぐらすきっかけを与えてくれる。

参考文献

春田 晴郎 1998(1999): アルシャク朝パルティアの一次史料 — バビロン天文日誌第3巻の公刊 —、『オリエント』、41-2, 181-193.

春田 晴郎 2001(2002): アウロマン文書 No.3(大英図書館 Or.8115)の新訳、『オリエント』、44-2, 125-134.

Edmonds, C. J. 1952: The Place Names of the Avroman Parchments, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 14-3, 478-482.

Geller, M. J. 1983: More Graeco-Babyloniaca, *Zeitschrift für Assyriologie*, 73, 114-120.

Geller, M. J. 1997: The Last Wedge, *Zeitschrift für Assyriologie*, 87, 43-95.

Minns, E. H. 1915: Parchments of the Parthian Period from Avroman in Kurdistan, *Journal of Hellenic Studies*, 35, 22-65, Pls. I-III.

Westenholz, A. 2007: The Graeco-Babyloniaca Once Again, *Zeitschrift für Assyriologie*, 97, 262-313.

研究項目 A02「古代西アジア都市の景観と構造」

計画研究 03

「古代エジプトにおける都市の景観と構造」

計画研究 03「古代エジプトにおける都市の 景観と構造」2018 年度活動報告

近藤 二郎¹・河合 望²

¹ 早稲田大学文学学術院 ² 金沢大学新学術創成研究機構

はじめに

エジプト考古学では、これまで低位砂漠に位置するピラミッド、墓地、神殿などの記念建造物的遺構の発掘調査が中心に進められており、ナイル川の両岸の沖積地に位置する集落や都市の調査研究は遅れていた。これは、墓地や神殿などの発掘調査により建築美術的に質の高い資料が得られるという点によるものだけでなく、古代の都市、集落の多くが現代の都市、集落の下に埋没している場合が多く、発掘調査が困難であるということにもよる。しかし、これまでの調査研究の対象の偏りの反省などから 20 世紀後半より都市、集落の発掘調査が増加し、それらの様相が明らかになりつつある。これに呼応するかのように、従来のエジプト学において研究の比重が置かれていた墓地や神殿の研究も都市の構造や景観との関係の文脈で理解することが重要になってきた。このような研究の動向を受けて、本研究班では、前 4 千年紀の先王朝時代から古代末期までの古代エジプト各地の都市の景観とその構造について、文書史料と考古資料の双方から研究し、その発生と変容について通時的・共時的に解明することを目的とする。

本計画研究班では、今後の計画として、以下

のような目標を掲げている。第 1 に、古代の都市景観あるいは都市間のネットワークの復元については、衛星画像解析や物理探査データ、考古地理データと都市の分布や都市の諸要素を記した文書史料とを比較し、各時代の都市の景観を復元する。第 2 に、テーベやメンフィスといった中心的都市の神殿や王宮に関わる祝祭に基づく都市の構造や、墓地の形成と発展との関係についても、考古資料と文献史料を駆使して解明する。第 3 に、都市の構造については、建築史学の視点から古代エジプトにおける都市計画の詳細な分析を行い、その成果を通時的な都市の形成と発展を含めて都市景観の復元に反映させる。第 4 に、ヘレニズム時代から古代末期については、ナイル川流域の都市だけでなく、ギリシア・ローマ世界との接点である地中海との関係を含めて、新段階のエジプトの都市の変容についても明らかにする。

2018 年度においては、上記の研究目標の具体的な実施方法について模索あるいは準備をしている段階にある。本稿では、各研究分担者および研究協力者の今年度の主要な研究成果の概要について、古代エジプト史の時系列にそって報告する。

(近藤二郎・河合 望)

研究成果報告

1. 先王朝時代の都市研究

（馬場 匡浩）

古代エジプトにおける都市の萌芽は、文明成立直前の先王朝時代（4千年紀）にさかのぼる。エジプト南部に位置するヒエラコンポリス遺跡は、先王朝時代で最大規模を誇り、最初の都市化が興った地として知られている。ここでみられる都市の構成要素は、宗教的公共施設を中核に、それに付随する工房群や王宮の大型家屋、一般集落、そして墓地である。当該遺跡では、支配者の墓地が確認されており、それは集落から隔離された砂漠の奥地に位置する。エジプト的集落の特徴は、その地域で信仰する神を祀る神殿を中心に据え、離れた砂漠地帯に墓地を置くレイアウトにあるが、その端緒がヒエラコンポリス遺跡にあるといえる。

本研究の目的は、これら都市の構成要素を発掘調査によってより具体的に明らかにすることにある。そこで本年度は、これまでの研究成果を踏まえ、工房における活動内容の解明に焦点を絞った。具体的にはビール醸造である。当該遺跡では、公共施設および支配者墓地に隣接してビール醸造址と考えられる施設が複数検出されている。王朝時代をみれば明らかにのように、儀礼祭祀のアイテムまたは副葬品としてビールが不可欠であったと考えられるが、そのビールの同定と醸造方法についてはまだ明らかとなっていない。そこで現在、植物学、醸造学、有機化学、生物学など考古学以外の分野の研究者との共同研究を進めている。理化学的分析により、穀物発酵の明確な証拠と、添加物の存在を突き止めた。また、原料は主にエンマーコムギの麦芽であり、粗く砕いたものと製粉したものの2種類が使われていることが判明し

た。前者はアミラーゼを、後者はアミラーゼが分解しやすいデンプンを豊富に用意するためと考えられる。新王国時代のビールについても同様の醸造方法が提唱されており、つまり当初から複雑な工程を経ていたことが明らかとなった。

2. 先王朝時代～古王国時代の都市研究

（高宮 いづみ）

この時期の古代エジプトの都市と集落について、近年 N. Moeller の著作（Moeller, N. 2016: *The Archaeology of Urbanism in Ancient Egypt*. Cambridge, Cambridge University Press）が出版されており、最新の都市の構造と発展に関する見解が資料とともに提示されていて、指針となる良著である。しかしながら、ここでは事例としてすでに重要性が認識されてきた主要な遺跡が取り上げられているのみで、マクロの視点から古代エジプトの集落構造が十分に検討されたとはいえないように思われる。本研究課題で成果を上げるためには、まずは最新のマイナーな遺跡を含めた調査動向および研究動向を把握する必要があった。

先王朝時代についてはすでに概ね資料収集は終えているので、本年度は主に古王国時代に関して、文献リストの作成と文献収集を行った。ただし、古王国時代の社会背景に関する資料収集も含むと膨大な数になるため、いずれも本年度中には未完である。

現在多数の遺跡で集落の発掘調査が進行中であり、最新情報収集が必要な中で、国内で開催された講演会・シンポジウムは情報収集のために非常に有益な機会であった。2018年10月13・14日に早稲田大学で開催されたシンポジウム「エジプト文明の起源を探る：ヒエラコンポリス遺跡における近年の発掘調査」（早稲田大学高等研究所）

では、先王朝時代最大の集落遺跡ヒエラコンボリスについて、最新の調査成果を R. Friedmann 隊長、馬場匡浩氏等が発表を行い、その後会談の機会があった。また、2019 年 1 月 31 日に京都大学で開催された Felix Arnold 氏（マドリード・ドイツ考古学研究所上席研究員）による講演会「砂漠の中の庭園：エジプト・ダハシュールの屈折ピラミッドにおける近年の発掘調査」（京都大学アフリカ学術研究拠点推進ユニットほか）では、第 4 王朝スネフル王のピラミッド河岸神殿付近の最新調査の成果が語られ、河岸神殿の北方に当時の集落が検出されたという。従来古王国時代の集落を論じる際に河岸神殿直近の集落（おそらく神官の居住域）のみが検討対象になっていたが、その外側の集落の考察が不可欠であることが改めて認識された。

本年度中に資料集した限りでも、都市に関する考古学的資料が増加しつつあるだけでなく、考古学的史料と文献史的史料および図像学的史料との連携を踏まえた研究が著しく進展しつつある状況がうかがえる。本研究課題の開始当初は、ある程度マクロな視点からの都市の構造と発展を盛り込む予定であったが、今年度の収集資料からの知見を踏まえて、来年度以降の研究計画の方向性に修正を加えたい。

3. 初期王朝時代・プトレマイオス朝時代の都市 および王の表象の変化の研究

（中野 智章）

古代エジプトにおける都市の景観と構造を明らかにするため、1）国家形成期における首都メンフィス域の様相、2）首都を中心とした都市における王の表象の変化、3）ギリシア世界などとの接触の中でエジプトの都市がどのような変化を遂

げたか、の 3 点について研究を進めている。それらの点に関し、今年度は以下のような発表を行った。来年度はそれらの出版を進めたい。

- ・エジプト第 1 王朝のサッカラ墓地における付属墓について（日本オリエント学会第 60 回大会 2018 年 10 月 14 日）

エジプト初期王朝時代第 1 王朝の首都メンフィスに付属するサッカラ墓地につき、付属墓の位置や構造、埋葬状況、副葬品等の観点から、それら付属墓を有する大型墓の被葬者が王族並びに高位の役人である可能性が高いことを指摘するとともに、当時の首都メンフィスの性格について言及した。

- ・京都大学の古代エジプト資料（日本オリエント学会第 60 回大会 2018 年 10 月 14 日）

ナウクラティスなどの都市から出土した遺物などを保有する、京都大学所蔵の古代エジプト資料につき、ポスター発表を行った。同遺跡については、近年大英博物館を中心に資料の見直しが進められており、京都大学の資料についても年代観の再検討が図られている。

- ・Tiny Objects can tell the Truth: British Influence on the Birth of Japanese Archaeology. The Japan Society Lecture, London, UK 2018 年 8 月 20 日

日本考古学の発展にエジプト考古学の方法論がどのように影響を与えたかを、京都大学所蔵の資料などを用いて論じた。ナウクラティスやダフネといった都市遺跡の研究につき、その進展をあわせて紹介した。

- ・Between Old and New: A Marker of Kingship on the Statues of Ptolemaic Kings. Fourth Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World: Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World, Nagoya University

2018 年 9 月 5 日

プトレマイオス朝の都市などに設置された王像の意味と役割につき、ベルトの装飾を中心に論じた（ただし本発表は、名古屋大学周藤芳幸氏を研究代表者とする科研費基盤研究（A）「古代地中海世界における知の動態と文化的記憶」のシンポジウムで行ったものである）。

4. 古代エジプト都市に関する文献学的研究 （内田 杉彦）

古代エジプトにおける地震

エジプトにおける地震の頻度と規模に関する観測データについて述べ、古代エジプトで発生したとみられる地震の痕跡、特に 1998 年以降、テーベ西岸で続けられているドイツ・エジプト合同調査隊の研究によって明らかとなった新王国後期のテーベ大地震の痕跡について詳述した。続いて、当時の葬祭文書に示される地震の概念を検討し、「ピラミッドテキスト」においては、オシリスの殺害者として罰せられるセト神の「震え」が地震とされ、死者の再生とともに大地の神ゲブが笑い、それが地震となること、「門の書」においては太陽神の冥界の旅路を守る門番の神々のなかに地震を神格化した存在が含まれることを指摘した。古代エジプト人は文字資料で見る限り地震を肯定的に捉えており、その背景には、大きな被害を及ぼす地震が稀であったこと（そうした大地震は忌むべきものであり文字資料に残される余地はなかったこと）、被害をもたらさない程度の地震は世界秩序の一環として認められていたという事情があったと考えられる。

フィールド調査

中部エジプト・アコリス遺跡調査（アコリス考古学プロジェクト：川西宏幸隊長）に 2018 年 12

月 25 日から 2019 年 1 月 14 日まで参加した。付近のニューミニア採石場銘文調査にも参加予定であったが、エジプト側の事情から中止となり、アコリス南遺跡出土の文字資料、特にパピルス文書断片の検討を行った。

その他

古代エジプトの「居住地」概念を示す用語、新王国時代の文学ジャンル「都市の賛美」などについて文献を収集し、検討中である。現在のところ、古代エジプト人の「居住地」は、神殿を中核とする物流拠点（*niwt*）、（独自の神殿を市域内には持たないが）物流の拠点（*dmi*）、神殿がなく物流の拠点でもない村落（*why*）であるように思えるが、さらに検討を要する。「都市の賛美」は、実際には王権と神々への賛美であるとする（Quack による）研究に説得力があり、「都市概念」の研究資料としては限界があるように思える。

5. オベリスクの建造方法に関する研究 （西本 真一）

オベリスクは古王国時代から見られるが、一本石から造られる大型のものが立てられるようになったのは中王国時代以降である。神殿の塔門の正面に立てられ、遠くからも良く見えたであろう。古代エジプトの都市の景観を扱う際には、重要な建造物として扱われるべきである。特にプトレマイオス時代になると、アレクサンドリアへ何本ものオベリスクが運ばれて、町なかの各所に配された。

これがどのように設計されたかを巡る研究は、しかしエジプト学においてほとんどなされてこなかった。物理学者や天文学者、建築家などのさまざまな研究者たちが設計方法を細かく検討を重ねているピラミッドの場合と比べると、その差

は一目瞭然である。理由のひとつは、オベリスクで観察される歪みが大きいことが挙げられよう。ピラミッドとは異なって、例えばオベリスクの底面には正方形が望まれたと考えられるが、4つの辺の長さにはかなりの誤差があることが良く知られている。このためにピラミッドとは違い、オベリスクはかなりいい加減に造られたとみなされている。通常は2本が対として造られたはずであるが、正確な同形同大にはなっていないことが多く、また寸法についても詳しく測られていないオベリスクが見られる。こうしたオベリスクを巡る研究上のいくつかの欠点が、正確に造られていないオベリスクという印象を作り出し、オベリスクの設計方法の研究は無駄だといった誤解を招くこととなった。

さらには、研究者たちが古代で用いられた長さの尺度であるキュービットに関してあまり注意を払ってこなかったため、長さや幅といった基本的な寸法を52.5 cmで割り、その値が端数のないキュービットの完数にならなければ、そこで分析を中止するという場合も多々見られる。

このような現状の中で、もう一度、オベリスクの設計方法を考え直すために、歪みが大きいことで知られるイスタンブールのオベリスクと最古の大型のオベリスクとして有名なマタリーヤのオベリスクを観察し、他方でトルコの国立考古博物館やトリノ・エジプト博物館に収蔵されている物差しを2019年3月末に研究する予定である。

6. ナイル・デルタの景観復元：

アレクサンドリアの後背地域を中心に (長谷川 奏)

本研究は、古代エジプトの都市景観研究の中で、古代末期を扱う分野の成果報告の一部である。こ

こでは、研究対象の地域を、ナイル・デルタのアレクサンドリアの後背地に設定した。当該の研究エリアの中には、現在、エジプト西方デルタ調査隊が調査を進めている考古学遺跡（Kom al-Diba'）があるので、ここを重要な研究対象として、その周域の古代景観を復元する手法をとっていく。研究対象の潟湖（イドウク湖）は、第26王朝が建設したギリシア人の交易都市ナウクラティスと、地中海沿岸の海運を一手に担ったカノプスとを結ぶナイル支流が走っていた場にも近く、同王朝の強い影響下にあったと推測される。アレクサンドリアが建設されてからは、当地は首都圏に近接した場として、外来政権が地域権力を掌握する過程での最初期の重要拠点であったであろう。しかし伝統的なヘレニズム古典考古学では、低地はその生産性の低さから重要性が見過ごされてきた。実際のところ、潟湖周辺には海進に由来する強い塩基性土壌が残され、開発されたのは1960年代になってからである。一方、19世紀半ばの遺跡分布地図(Mahmud-Bey 1872)には、当該の潟湖周辺に多くの遺跡分布が記されており、それらの多くはヘレニズム時代の活動痕跡を有する。集約的な農業が困難な場であるので、その生活はナイル流域の農民とは異なり、脆弱ないくつかの生業を取り結んだ「生業複合」に依拠したものであったであろう。

当該の遺跡は、古砂丘の上に形成された集落遺跡である。南北二つの丘のうち、集落遺跡と思われる南丘陵は6 haを測り、丘の頂部は麓から10 mほどの標高差を測る。一方の北丘陵は、150 x 150 m程度の広さで、標高は最も高いところで6 m程度を測る。これら2つの丘陵に対して、地表面探査を行い、双方とも活動時期の中心はヘレニズム時代にありながらも、南丘陵は明らかに神

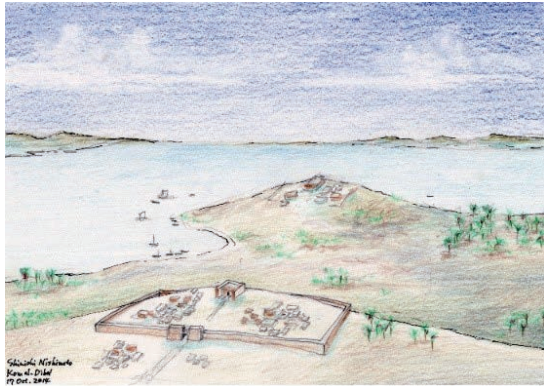


図1 Kom al-Diba' 遺跡の景観復元（西本真一 画）



図2 Kom al-Diba' 遺跡東の砂丘丘陵の景観復元
（西本真一 画）



図3 イドゥク湖東端、ラシード支流近郊の景観復元
（西本真一 画）

殿周域住居（家屋・家畜小屋・倉庫・街路等）である一方で、北丘陵には住居痕跡が希薄であり、ランドマーク的な建造物が建てられていたことが

推測された（図1）。

この Kom al-Diba' の景観復元を足がかりにして、2018 年度には、特に遺跡の東方側の景観復元を試みた。遺跡直近の東側には、広大な砂丘丘陵が広がっていたと推測され、丘陵頂部の村落が経済活動の中心となっていたと思われる（図2）。一方、さらに東側には、ラシード支流が流れるが、ここはまたイドゥク湖東端との接点であり、広大な沼沢地が広がり、水際が重要な居住域であった。ナイル沿岸部は河岸段丘を利用した可耕地となっていた歴史トピックをここでは入れ込んである（図3）。

プトレマイオス朝時代都市研究

2018 年 6 月 17 日に、第 17 回歴史家協会大会（関西学院大学）で記念講演「プトレマイオス朝エジプト史研究と考古学」を行い、プトレマイオス朝エジプト史研究に果たすべき考古学の役割について論じた。

2018 年 9 月 3 日から 7 日まで、国外から 13 名、国内から 8 名の報告者を迎えて国際研究集会 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World を名古屋大学で主催し、9 月 6 日には、自ら Social Resilience and Organization of Knowledge in Ptolemaic Egypt と題する報告も行った。この報告では、プトレマイオス朝が 3 世紀間にわたって存続することができた理由について、アコリス遺跡の調査からこれまで得られた知見に基づいて論じ、在地社会における経済活動の末端におけるエジプト人とギリシア人との協働のあり方が鍵となっていたことを主張した。

2019 年 1 月 2 日から 21 日まで、中エジプト、アコリス遺跡で、第三中間期の集落遺跡の調査を行い、ヘレニズム時代の都市域の範囲についても

表面調査を継続した。この調査には、菊地のどか（博士前期課程 2 年、プトレマイオス朝エジプト史）と清水麻里奈（博士前期課程 1 年、プトレマイオス朝宗教史）も参加し、それぞれの関心から調査に貢献した。

2019 年 2 月 22 日から 23 日には、国外から 9 名、国内から 7 名の報告者を迎えて、国際研究集会

Gardens: History, Reception, and Scientific Analyses を名古屋大学で開催し、23 日には Garden and the Naissance of Archaic Greek Sanctuaries と題する報告を行った。この報告では、古代エジプトにおける庭園と古代ギリシアにおける庭園の比較を中心に、地中海世界における庭園文化の動態について論じた。

古代エジプトの祝祭都市テーベの景観と構造

近 藤 二 郎
早稲田大学文学学術院

はじめに

かつて、古代エジプトを「都市なき文明」と称することがあった。この表現は、アメリカ人のエジプト学者 J・A・ウィルソン (J. A. Wilson) が、1958 年 12 月にシカゴ大学で開催された「シンポジウム・City invincible」での発表 “New Kingdom Egypt: civilization without cities” (「新王国時代のエジプト：都市なき文明」) に由来するものである。「都市なき文明」という言葉は、その後も、古代エジプト文明を表現する場合に、しばしば使われた言い回しであった。ウィルソンは、古代エジプトでは、メソポタミアにおける「都市」のように、巨大な都市の中央部と農耕可能な後背地からなる独立した都市国家とは異なり、巨大な都市の中央部を必要としない低密度で広大な農耕地からなるものであると定義している (Wilson 1960, Snape 2014)。その意味で、「都市なき文明」という言い回しは、このことを強調したものであって、古代エジプトにおいては、西アジア的な都市は存在しなかったと言っていると見なすことができるであろう。

本稿では、ナイル川流域の南北の二大中心拠点であるメンフィス (Memphis) とテーベ (Thebes) のうち、南エジプトの拠点都市テーベ (上エジプト第 4 ノモス) を例として取り上げ、その祝祭都市

としての特徴を概観してみよう。第 1 中間期のエジプト全土を再統一して、中王国を樹立した第 11 王朝と第 2 中間期のヒクソス (Hyksos) による異民族支配を打倒して新王国を樹立した第 17・18 王朝は、ともに上エジプト第 4 ノモスの州都テーベ Thebes (古代名ウアセト *W3st*) を本拠地とする王朝であった。上エジプト第 4 ノモスの主神アメン・ラーの聖地カルナク神殿を中心とする南の拠点であった。ヤロミール・マレク (Malek, Jaromir) は、第 1 中間期・第 2 中間期に使われる「中間期」という時代区分名称については、使用には否定的であり、第 1 中間期のテーベ侯を第 1 テーベ王国 (再統一前までの第 11 王朝)、そして第 2 中間期のテーベ侯を第 2 テーベ王国と呼んでいる。

上エジプト第 4 ノモスが歴史上で最初に注目を受けるのは、これよりも早い古王国第 4 王朝時代のことである。エジプトの首都カイロ市の南郊のアル＝ギザ台地に造営された第 4 王朝メンカウラー王 (在位：前 2514～前 2486 年頃) の第 3 ピラミッドの河岸神殿で、メンカウラー王とハトホル女神、上エジプト第 4 ノモスの男神の 3 体像 (トリアード) が発見され、現在、カイロ・エジプト博物館に所蔵・展示されている (JE 40678)。その後、古王国第 6 王朝時代になると、テーベ西岸の

アル＝コーカ (al-Khokha) 地区に、集中的に岩窟墓が造営されている。これらの岩窟墓は、中王国や新王国時代などのネクロポリス・テーベの岩窟墓と比べて、標高の低い地点に造営されていることが特徴となっている。

1. 第 11 王朝時代のテーベ

マレクが「第 1 テーベ王国」と呼んだ時代勢力が、再統一する前の第 11 王朝である。第 11 王朝アンテフ 1 世（在位：前 2105 年頃）、アンテフ 2 世（在位：前 2103 ～前 2054 年頃）、アンテフ 3 世（在位：前 2054 ～前 2046 年頃）の 3 基の王墓はサフ墓 (Saff) の形式で、いずれもアル＝ターリフ (al-Tarif) 地区に造営されている。カルナクのアメン神殿からは、アメン・ラーの名前を刻したアンテフ 2 世時代の石柱が発見されている。アル＝ターリフにある 3 基のサフ墓の軸線は、おおよそテーベ東岸のカルナク神殿の方向を指しているようにも見えるが、それらが示準する方位は曖昧であり、まだアメン・ラーの聖地としてのカルナ

ク神殿は確立されていないように思える。

2. 谷の祭

第 11 王朝メンチュヘテプ 2 世（在位：前 2046 ～前 1995 年頃）によって、エジプトは前 2025/20 年頃に再統一され、「中王国時代」となる。この時期にアメン・ラー神の聖地としてカルナク神殿が形成・整備されていく。また、第 11 王朝のアンテフ 1 ～ 3 世の 3 基の王墓は、アル＝ターリフに造営されていたが、メンチュヘテプ 2 世の墓所（葬送複合体）は、それよりもずっと南のアル＝ディール・アル＝バハリに造営された（図 1-3）。このことがテーベの都市の配置にとって画期となったのである。

アル＝ディール・アル＝バハリは、テーベ西岸で最も特徴的な地形をした場所である。英語で、しばしば “bay (湾)” と呼ばれる大きく挟れた地形となっている。また、ナイル川を挟んでアメン・ラー神の聖地カルナクと対峙している。近年のボーリング調査によるとテーベ東岸に位置するカル

ナクは、かつて「島」であったとされ、この「島」に、アメン・ラー神の聖地となる神殿が、建設されたのであろう。古代エジプトのヘリオポリスの創世神話では、この世界は、最初、ヌンと呼ばれる混沌とした大海だけが存在していたが、その大海からアトゥム神（完全にラー神と同一視されておりラー・アトゥム神と呼ばれる）が、自力で出現する。アトゥム神は最初、大海の中を漂っていたが、やがて「原



図 1 アル＝ディール・アル＝バハリ、メンチュヘテプ 2 世墓所とハトシェプスト女王葬祭殿



図2 メンチュヘテプ2世墓所



図3 メンチュヘテプ2世墓所（崖上より）

初の丘」と称する小高い丘が出現し、台地が誕生するとしている。まさに「島」は、大海から出現した陸地であり、聖地の要素をもつものである。こうして、テーベ東岸に、アメン・ラー神の聖地としてカルナク神殿が誕生し、そして、ナイル川を挟んで、対峙した位置にあるアル＝ディール・アル＝バハリが特別な存在として脚光を浴びることになった。

テーベの重要な大祭のひとつに「谷の祭」がある。古代エジプト語では、「谷の美しき祭」の名前がある。この祭礼の起源は、第11王朝のメンチュヘテプ2世治世まで遡るとされている。この祭礼は、シェムウ季第2月に、カルナクのアメン・ラー神が、聖船に乗りナイル川西岸にわたり、カルナクのアメン大神殿と対峙する位置にあるアル

＝デール・アル＝バハリ (al-Deir al-Bahri) のメンチュヘテプ2世神殿を目指して巡行し、翌日には再び東岸のカルナクに戻るものであった。ネブヘペトラ（メンチュヘテプ2世の即位名）の谷と呼ばれたアル＝アサシーフ (al-Asasif) 地区からアル＝ディール・アル＝バハリ地区一帯で祭が最高潮に達したことから「谷の祭」と呼ばれるようになったとされている。谷の祭は、その後も新王国時代・末期王朝時代を通じてテーベで重要な祭礼であり、新王国時代以降は、第18王朝のハトシェプスト女王葬祭殿が目的地となり、カルナクのアメン大神殿とテーベの領域の東西軸を決める重要な祭礼であった。おそらく、現在、カルナクのアメン大神殿の東西を貫く主軸線、そして、アル＝ディール・アル＝バハリのメンチュヘテプ2世葬

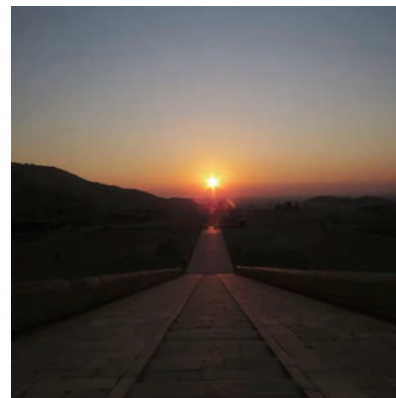
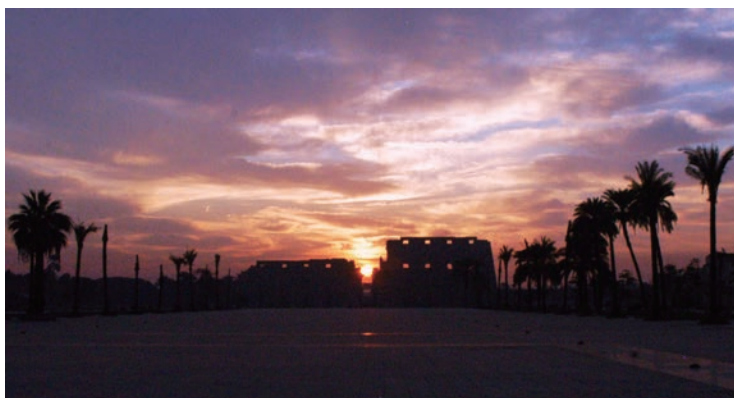


図4 カルナク、アメン大神殿（左）とアル＝ディール・アル＝バハリ（右）の冬至の夜明け



図5 ルクソール神殿



図6 オペトの大祭のレリーフ

送複合体やハトシェプスト女王葬祭殿の参道の角度が、冬至の太陽の日の出方向（ 116° ）とほぼ一致していることは、このエジプト南の中心拠点都市であるテーベの最も重要な東西軸を決める上で太陽の運行という絶対的な要素を加える意味をも持っている（図4）。

3. オペトの大祭

テーベでおこなわれたもうひとつの祭礼が、オペトの大祭である。この祭礼は、古代エジプト新王国時代における最大の祭礼のひとつである。アケト季の第2月にカルナクのアメン・ラー神が、カルナク神殿の副殿で南に位置するルクソール神殿（図5）に妻であるムウト（ムト）を訪ねる祭礼である。その起源は不詳であるが、第18王朝のハトシェプスト女王時代に確立されたと見られる。この時代、カルナクのアメン大神殿の南北軸が東西の主軸線に付加されたことから推測できる。

祭礼の期間に関しては、第18王朝トトメス3世時代には、ア

ケト季の第2月15日から11日間行われていたのに対して、第20王朝ラメセス3世時代にはアケト季の第2月19日から24日間と第18王朝のほぼ2倍の期間実施されている。このオペトの大祭は、テーベの領域を画するためにも重要な役割を果たしていた（図6）。

アメン・ラー神が居住するカルナク神殿は、ナイル川を挟んで西岸のアル＝ディール・アル＝バハリ神殿と対峙しており、その延長上に王の墓地である「王家の谷」が位置している（図7・図8）。王家の谷の起源については、未だに不明な部分が



図7 テーベ西岸、王家の谷・東谷



図 8 テーベのレイアウト

多いが、現在までのところ王家の谷に造営された最古の王墓は、第 18 王朝のハトシェプスト女王と父トメス 1 世の合葬墓（KV 20）であり、この時期に確立されたものと想像できる。また、アメン・ラー神が訪れるルクソール神殿は、妻であるムウト女神の居住地としての意味合いがあり、ルクソール神殿を挟み対峙する場所に、マディーナト・ハブ神殿が位置している。第 18 王朝時代前期の小神殿があることから、第 18 王朝前期には、東岸のルクソール神殿との関連が明確化している。

さらに、マディーナト・ハブ神殿のさらに西側に「王妃の谷」が位置していることも示唆的である。現在の王妃の谷が確立するのは第 19 王朝ラメセス 2 世時代になってからである。このように王都テーベの都市としてのレイアウトが決定される背景には、テーベで毎年行われた二大祭礼である「谷の祭」と「オペトの大祭」が、果たした役

割が大きかった。新王国時代の王都テーベの範囲を推定する根拠となるが、当時の人々が生活した市街区の発掘が進んでいないことから、具体的な都市像を描くことは現状ではできない。

まとめ

古代エジプトにおける都市研究は、その全体像を扱うものが少ない。それには、一部のピラミッドや王墓の造営に使われた作業員たちが居住した労働者の住宅などや王宮址などから論じられることが多く、都市の領域や機能などについては研究は不十分である。

南北に細長いナイル川流域の古代エジプトでは、北のメンフィスと南のテーベの 2 つの中心拠点が存在し、統治が行われていた。2 大拠点のひとつであるテーベの都市のレイアウトは、「谷の祭」と「オペト祭」という 2 つの祭礼によって決定されていた。ナイル川東岸に位置したカルナク

のアメン大神殿を起点とし、祭礼の順路によって区画された地域が、都市テーベの領域であった。新王国時代の都市研究は、マルカタ（古代名ペル・ハイ）やテル・アル＝アマルナ（古代名アケト・アテン）王宮址を除くと、都市全体の規模や構造を扱ったものがほとんどないことを指摘しておきたい。

参考文献

- Moeller, Nadine 2016, *The Archaeology of Urbanism in Ancient Egypt: From the Predynastic Period to the End of the Middle Kingdom*, Cambridge.
- Snape, Steven 2014, *The Complete Cities of Ancient Egypt*, London (スティーヴン・スネイプ、大城道則訳 2015 『古代エジプト都市百科：王と神と民衆の生活』、東洋書林)。
- Wenke, Robert J. 2009, *The Ancient Egyptian State: The Origins of Egyptian Culture (c.8000-2000 BC)*, Cambridge.
- Wilson, J. A. 1960, "New Kingdom Egypt: civilization without cities", in *City invincible: a Symposium on Urbanization and Cultural Development in the Ancient Near East* held at the Oriental Institute of the University of Chicago, December 4-7, 1958, in *Symposium on Urbanization and Cultural Development in the Ancient Near East*, (ed. by) Carl H. Kraeling and Robert McCormick Adams, Chicago, pp.124-164.
- 岡田保良 2004「都市」日本オリエント学会(編)『古代オリエント事典』、岩波書店、630-631 頁。
- 古谷野 晃 1998『古代エジプト都市文明の誕生』、古今書院。
- 近藤二郎 1996「ネクロポリス・テーベの領域の確立 — その歴史の変遷と基本構成に関する覚書 —」、『エジプト学研究』第4号、早稲田大学エジプト学会、43-57 頁。
- 近藤二郎 1997『エジプトの考古学』（世界の考古学④）、同成社。
- 近藤二郎 1998「アメンヘテプ三世とその時代」『岩波講座世界歴史2 オリエント世界』、岩波書店。
- 近藤二郎 2008『エジプト考古学』、早稲田大学。
- 日本オリエント学会（編）2004『古代オリエント事典』、岩波書店、233-251 頁。
- 吉成 薫 2004「ノモス」日本オリエント学会（編）『古代オリエント事典』、岩波書店、663-665 頁。

メンフィスとその墓地の景観と構造についての予察

ー古王国時代と新王国時代を中心としてー

河 合 望

金沢大学新学術創成研究機構

はじめに

「メンフィス」は、前 3000 年頃の王朝時代開闢以来、古代エジプトの極めて重要な行政や経済の中心地であった。この地名は、南サッカラに位置する古王国時代第 6 王朝のペピ 1 世のピラミッド複合体の名前「メン＝ネフェル（「確固とした美しい」の意）」のギリシア語訛りの表記である。ちなみに現在のミート・ラヒーナ村に位置する「メンフィス遺跡」に位置するプタハ神殿複合体は、「フウト・カー・プタハ（プタハ神のカーの館）」と呼ばれ、これがギリシア語に訛って「アイギュプトス」となり、現在の国名「エジプト」となった。メンフィスは、中王国時代から政治、宗教の中心地となるテーベと並び、王朝時代を通じてエジプトの中心都市として存在した。

近年の土壌のボーリング調査によると、初期王朝時代のメンフィスは、サッカラ遺跡の北東に位置するアブ・シール村付近に存在していたと考えられている。調査を実施したジェフリーズによれば、初期王朝時代のナイル川は、今日よりも西側に位置し、徐々に東側に流路を変え、メンフィスの位置もナイル川の流路の変化に伴い、東側に移動していったと考えられている（図 1）（Jeffreys and Tavares 1994: 143-173; Bunberry et al. 2017: 71-96）。現在の所謂「メンフィス遺跡」は、中王国時

代以降の集落や神殿が中心であるが、現代の居住地が広範囲に覆っているため、発掘調査が進展しておらず、依然として全貌は把握できていない。

メンフィスに居を構えていた王や高官は西側の砂漠に位置するサッカラを始めとする広大なネクロポリスに埋葬された。このメンフィス・ネクロポリスは、北はアブ・ロアシュ、南はメイドゥームまでの約 80 km の長さの広大な墓域である（図 2）。古王国時代と中王国時代には王のピラミッドが各地に造営され、王朝時代の全時代にわたって主要な墓域として発展した。本稿では、南のテーベと並ぶ古代エジプト王朝時代の極めて重要な都市であるメンフィスとその墓地について、特に顕著な古王国時代と新王国時代を中心に解説する。

前三千年紀のメンフィス

前述のように、初期のメンフィスの位置はボーリング調査によって北サッカラ台地の東側の沖積土中に位置していると考えられている。この初期のメンフィスを見下ろすように、初期王朝時代の王に準じる高官のマスタバ墓は北サッカラの台地の崖際に造営された（中野 2017）。第 1 王朝では、王墓は上エジプトのアビドスに造営されたが、第 2 王朝になると少なくと

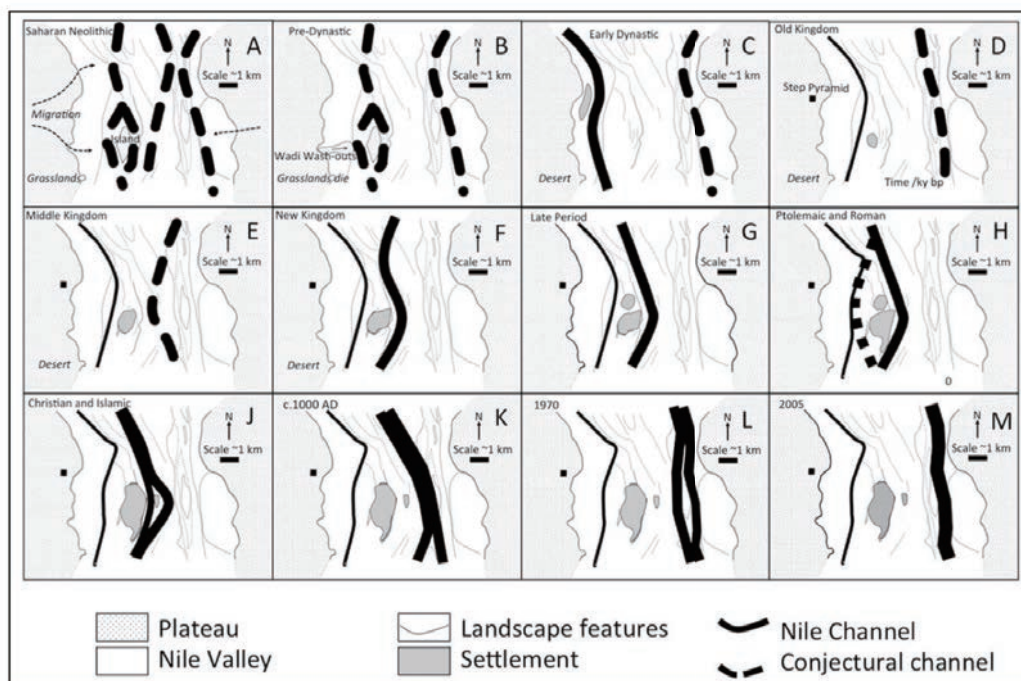


図1 新石器時代から現代までのメンフィス周辺地域のナイル川と集落の移動 (Bunbury et al. 2017: 78, Fig. 5)



図2 古王国時代のメンフィスとその基地の分布 (Barta 2005: 179, fig. 2 を改変)

も3人の王がサッカラに王墓を造営した。これらの王墓は、アビドスに造営された王墓と異なり、多数の通廊を持つ複雑な地下構造を持ち、来世における王宮を表したものとされている (Lacher-Raschdorff 2014)。また第2王朝の末には、アビドスに造営された葬祭周壁に類似した構造の南北約 650 m x 東西約 350 m の巨大な矩形の周壁、「ギスル・アル＝ムディール」が造営され、サッカラにおける王による建造物の造営が活発化した。

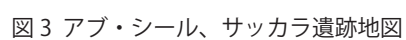
このような初期王朝時代の王墓および王の葬祭建造物の発展の頂点が、サッカラに造営された古王国時代第3王朝のジェセル（ネチェリケト）王の階段ピラミッドである。この最初のピラミッドは、第2王朝の2基の王墓の北に位置し、北東のアブ・シール湖の方角に伸びる巨大なワディにも接する位置にある（図3）。アブ・シール湖は、現在のアブ・シール村付近に位置した当時のメンフィスに近く、この湖から巨大なワディに入るルートが当時のメンフィスからサッカラ墓地の主要なアクセス・ルートであったと考えられている (Barta 1999: 107-116)。日本の調査隊が2003年にアブ・シール南丘陵遺跡で発見した石積遺構は、ピラミッドではないものの、その築造技術がジェセル王の階段ピラミッドのそれと類似しており、ほぼ同時代の大型石造建造物と考えられている (Yoshimura, Kawai and Kashiwagi 2005)。この遺構も王によって造営された建造物とみられ、他の第3王朝の王の葬祭建造物と同様に、アブ・シール湖から南西に延びる巨大なワディに面している。

ピラミッド建設とメンフィス・ネクロポリスの発展

第2王朝にサッカラで2基の階段ピラミッドが造営された後、ピラミッドなどの王の葬祭施設や

高官の墓地はメンフィスの西側の砂漠に点在して建設されるようになった。さらに、メンフィスの東岸には先王朝時代から古王国時代第4王朝まで墓地が発展したヘルワンが位置する。ナイル川や沖積地に営まれた各都市や墓地を繋ぐ水路を駆使した簡便な移動により、このような広大な墓域での造墓活動が展開された。バインズらは、首都の機能を持つ王宮、行政施設、記念建造物などは、特定の場所に集中して存在していたのではなく、広大なメンフィス・ネクロポリスに対応する砂漠と緑地縁辺部のエリアの中で王の治世ごとに交替したと指摘している (cf. Bains 2016: 32-35)。一方でバルタは、メンフィスが古王国時代を通じて首都としてほぼ同じ場所に存在していたとしている (Barta 2005: 183)。古王国時代の首都あるいは王都の位置の問題は未だに決着をみていない。

第4王朝初代のスネフェル王は、まずファイユーム盆地に近いメイドウムにピラミッドを造営した。このピラミッドで初めて河岸神殿、参道、葬祭殿をピラミッドの東側に配した複合体が出現した。メイドウムは、首都メンフィスから約 50 km 南に位置しており、ここにピラミッドが造営された理由については、ピラミッドの建設が可能な良質な石灰岩の岩盤が存在することと、周囲に人口密度の高い中心的な集落が存在し、ナイル川とファイユーム盆地の結節点に位置したためと考えられている (Barta 2005: 181)。また、王宮や行政施設もピラミッドに隣接して造営された可能性がある。そして、理由は定かではないが、スネフェル王は治世第16年にダハシュールでピラミッドの建設を開始した。ダハシュールで最初に造営されたピラミッドは、メイドウムのピラミッドよりも大型のピラミッドとして計画されていたが、建設途中で亀裂が生じたため、角度を変



更し、屈折ピラミッドとなったと考えられている。また、近年のドイツ考古学研究所による屈折ピラミッドの河岸神殿の発掘調査によれば、石造の河岸神殿の北に、庭園を備えた日乾煉瓦製の祭祀施設が位置し、その北側に神官の住居と思われる大型の住居などが位置していることが明らかになった。また、河岸神殿の東側には日乾煉瓦製の参道の遺構があり、そのさらに東には港が存在したとみられている (Arnold 2014)。港の両側には、大規模に矩形に岩盤が削平された痕跡が確認された。また、屈折ピラミッドの東西の中心軸の延長線上の緑地の縁辺部に矩形の人造湖の存在が指摘されており (恵多谷ほか 2010)、これらを含めてスネフェル王の王宮複合体が造営されたと考えられる。まだ発掘はされていないが、周辺には王の居住地や行政施設などが存在していたと推測された。

スネフェル王は、最終的に赤ピラミッドで知られる方錐形のピラミッドを屈折ピラミッドの北に完成させ、王は最終的にここに埋葬されたとみられる。バルタは、スネフェル王の時代に大きな社会的画期があったと指摘している。この時代に膨大な資源と労働力が、ピラミッド建設に向けられ、王以外の葬祭祭祀や墓の規模は小型化した。これに伴い、日々の祭祀の維持を目的とした、規格化された供献用ミニチュア土器が回転轆轤で生産されるようになり、石製容器の代用土器として「メイドウム・ウェア」が出現した (Barta 1995)。この変化は、王権によってピラミッド建設の重点化が図られ、葬祭儀礼が規格化されたことを意味する。

続くクフ王はギザに最大のピラミッドを造営した。ギザ台地は、巨大なピラミッドを造営するのに適した立地条件を満たしていたからである。シュタデルマンは、ピラミッドの造営地の移動

について、王都の移動をその理由に挙げているが (Stadelmann 1985: 76-77)、バルタは、クフ王がギザに王都を移動したために、そこにピラミッドが建設されたのではなく、ピラミッドの建設のために数千人の労働者のための居住施設、食糧生産のための工房、食料の供給が近傍で新たに維持されなければならなかったため、集落が発展したと指摘している (Barta 2005: 183)。

レーナーによるギザ墓地の南東に位置する集落の調査は、従来の古王国時代の理解を大きく塗り替えた。通称「カラスの壁 (Heit el-Ghurab)」と呼ばれるこの集落址からは、ピラミッド建設労働者の居住施設とみられる遺構が検出されており、1600 ～ 2000 名の労働者を収容できたという。そのほかに自給自足が可能な宿泊施設、ピラミッド建設監督官の領地、倉庫、パン焼窯、穀倉庫、行政施設、恒常的な労働者住居などが明らかになっている (Lehner 1997) (図 4)。

クフ王による大ピラミッドの建設は、父スネフェル王以上に王以外の人物の葬祭施設の制約をもたらし、クフ王の王族や高官のマスタバ墓は、王のピラミッドの周囲に標準規格化された配置を示している。また、マスタバ墓の装飾は、石版ステラのみで制約された (Manuelian 2003)。このことから、非常に中央集権化した時代であったことが推測される。

クフ王の後継者ジェドエフラー王は、ギザから数キロ北に位置するアブ・ロアシュの丘陵頂部に古王国時代で最も高い標高に位置するピラミッドを造営したが、次のカフラー王は再びギザ台地に戻り、クフ王のピラミッドの南西に自らのピラミッドを造営した。また、太陽神ラーとの関係により強固にするため、スフィンクスと太陽神ラーに捧げた神殿を造営した。カフラー王の後継者メ

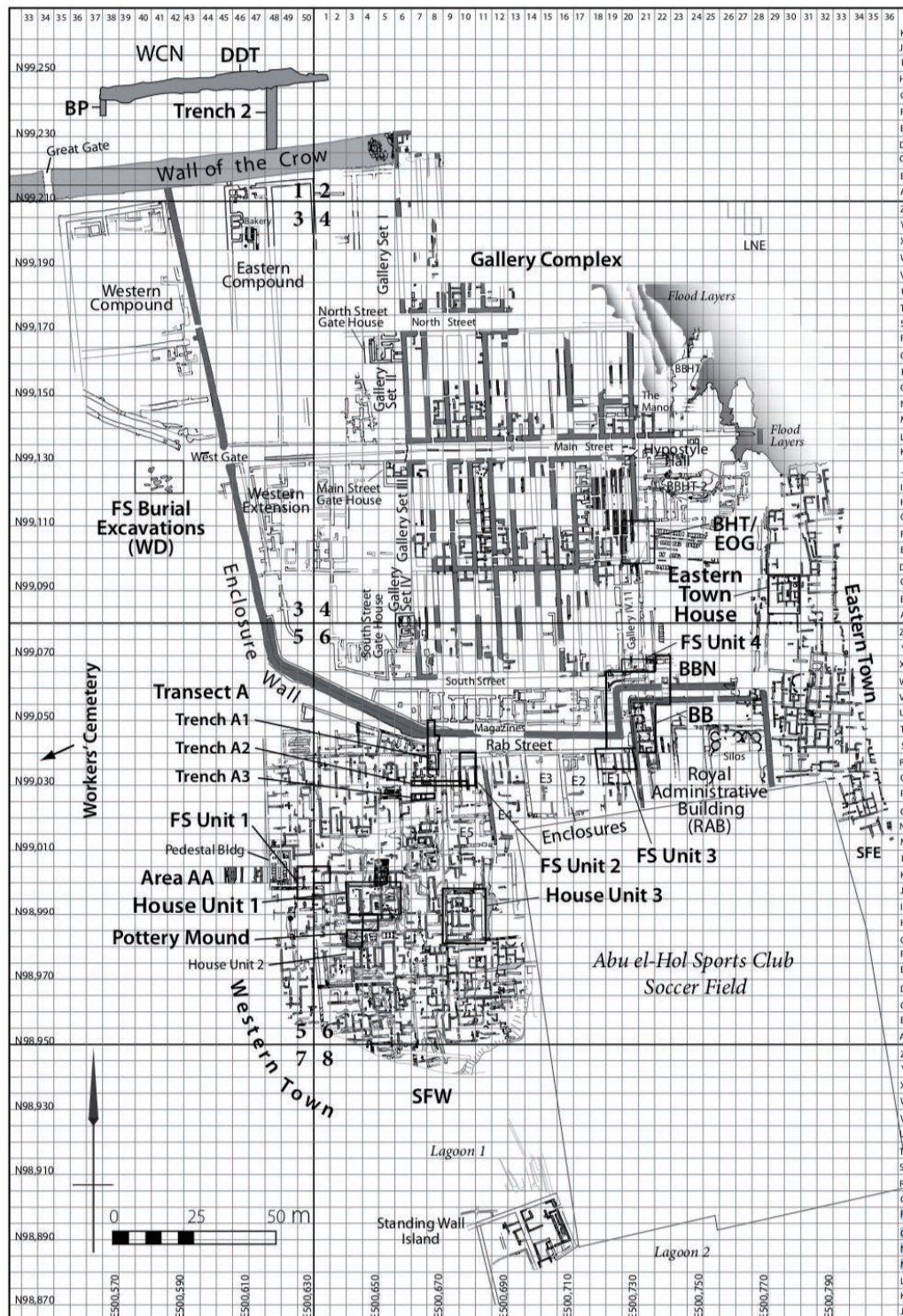


図4 ギザ台地南東の「カラスの壁 (Heit el-Ghurab)」の集落 (Moeller 2016: Fig. 5.11)



図 5 中王国時代以降のメンフィスとサッカラ遺跡 ©Google Earth

ンカウラー王はカフラー王のピラミッドの南西に先代 2 基のピラミッドの体積の 8 分の 1 の規模のピラミッドを造営した。このピラミッドから巨大モニュメントよりもピラミッド複合体の象徴性が増加し、葬祭殿内部の倉庫の規模に重きが置かれるようになったと考えられている (Barta 2005: 185)。

第 5 王朝初代のウセルカフ王は、再びサッカラにピラミッドを造営した。ただし、ピラミッドに加えて、アブ・シールに太陽神殿を建造した。以降、第 5 王朝の王はアブ・シールでピラミッドを造営するようになり、同時に太陽神殿も造営することとなる。第 5 王朝のピラミッドではピラミッドそのものの小型化に伴い、葬祭殿の装飾が増え、倉庫の面積が拡大の一途を辿った (Barta 2005: 185-186)。さらに第 6 王朝になるとサッカラを中心に王のピラミッドが造営されたが、これらの王のピラミッドの寸法は標準規格化され、葬祭殿内部の倉庫の面積が最大となる。壁画装飾の増加と葬祭殿の倉庫の面積の拡大は、ピラミッド複合体にお

いて祭儀が重視されたことによるものと指摘されている (Barta 2013: 265)。

一方、高官の墓は厳しく規制された第 4 王朝とは異なり、第 5 王朝以降は王のピラミッドの位置との関係で規定されなくなった。特にニウセルラー王の治世において、高官の墓が豪壮化し、家族墓が発展した。これは役人の世襲化と関連すると考えられている。第 6 王朝になると家族墓が隆盛となるだけでなく、高官の墓が上エジプトの諸地方に移動する。これは王家の墓地に埋葬されるよりも、在地のエリートとの関係の強化が重要であると考えられたためとされる (Barta 2013: 267-269)。

古王国時代の崩壊とともに、エジプトは分裂状態となった。北のヘラクレオポリスを首都とする第 10 王朝と南のテーベを首都とする第 11 王朝の間で内戦が続き、第 11 王朝のメンチュヘテプ 2 世によって国土は再統一された。第 12 王朝初代のアメンエムハト 1 世は、全土の支配を強化するため首都をテーベからファイユームに近いイ

チタウイに遷都し、自らのピラミッドをイチタウイの西岸（現在のリシュト）に造営した（Arnold 1991）。中王国時代におけるメンフィス・ネクロポリスでは、ダハシュールに再び王のピラミッドが数基建設されるが、センウセレト 3 世の治世までは地方分権が続き、地方豪族は自らの根拠地に墓を造営し続けたため、古王国時代のような大規模な墓地の発展はみられなかった。

新王国時代のメンフィスとそのネクロポリス

エジプトは第 2 中間期において、デルタ地帯北東部のアヴァリスを首都とする西アジア系のヒクソス王朝（第 15 王朝）がパレスチナからエジプト中部までを支配し、テーベの第 17 王朝が国土解放戦争によりヒクソス王朝を放逐するまで、メンフィス・ネクロポリスもその影響が見られた（河合 2011）。第 18 王朝のトトメス 3 世の治世では、メンフィスは古王国時代以来再び行政・経済の中心地となった。また、エジプト北部の行政を統括する「北の宰相」が任命されたことが文献資料から知られている。この頃から歴代の王は、メンフィスに居館を構え、南のテーベには国家神アメンの祝祭の時に訪れるようになった。アクエンアテン王の治世に一時的に首都はアマルナに遷都されたが、トウトアンクアメン王の治世に再びメンフィスが首都となり、行政、経済の中心地となった。新王国時代のメンフィスは、主神であるプタハ神殿を中心とする現在のメンフィスの遺跡に位置し、以降プトレマイオス朝時代に同じ場所に都市機能が集中していたと考えられている。しかし、メンフィスの都市遺跡の発掘調査は一部を除き、進んでおらず、時代ごとの都市の発展の全体像は把握できていない。

現在のミート・ラヒーナ村の「メンフィス遺跡」



図 6 メンフィスのプタハ神殿の大列柱室の遺構
（河合撮影）

の中心に位置するプタハ神殿は、メンフィス最大の神殿であったとされる（図 6）。ピートリーによるプタハ神殿の日乾煉瓦周壁の記録によれば、神殿域の面積は 275,000 m²であったと概算され、テーベのカルナク・アメン大神殿の面積に匹敵するエジプト最大級の規模であった（Petrie 1909）。しかし、遺構は現在のミート・ラヒーナ村の民家と近接しているため、発掘調査の実施は困難であり、ラメセス 2 世の造営による神殿域内の西側の塔門とそこから繋がる列柱室を除けば、内部の詳細な遺構配置はほとんど明らかになっていない。神殿域内部には、中王国時代第 12 王朝のアメンエムハト 3 世のまぐさ石や第 18 王朝のアメンヘテプ 3 世の建造物の石材なども発見されているが、本来の位置は不明である。プタハ神殿の周辺では、複数の遺構の存在が明らかになっており、神殿域の南西角付近のコム・アル＝ラビーアではプタハ神の小神殿とハトホル女神の小神殿が位置している。さらに、神殿域の東側にあるコム・アル＝カラ地区では、プタハ神殿址と第 19 王朝のメルエンプタハ王の王宮址も発見されている。しかし、文献史料から知られる新王国時代の歴代の王のメンフィスの王宮の位置は考古学的には明ら

かになっていない。

メンフィスにおける新王国時代の集落の発展を明らかにする上で重要なのは、コム・アル＝ラビーア地区で発見された集落址の発掘調査成果である。1980 年代、英国エジプト探査協会によって重点的な発掘調査が行われ、出土した膨大な土器群の精査を通して、中王国時代から第3中間期にかけての集落の発展が明らかにされている (Jeffreys 1985; 2006; Aston and Jeffreys 2007)。

さらに、メンフィスの北側にはネイト神殿が存在し、南側にハトホル神殿が存在することが文献史料から知られているが、考古学的に遺構の存在は確認されていない。第19王朝のセティ1世のアビドスの葬祭殿のソカルの祠堂の壁面には、メンフィスのさまざまな神々の聖所のリストが記されているが (Bains

2015: 31)、これらの位置も不明である。キッチン
は、文献史料の記述と考古学的発掘調査の成果から、ラメセス2世の治世頃のメンフィスの都市構造について推測している (図7) (Kitchen 1982: 114)。それによれば、メンフィス北部には行政施設が位置し、北から新王国時代の歴代の王が使用した「アアケペルラーの家」と呼ばれたトトメス1世の王宮、セティ1世の王宮、ラメセス2世の王宮、メルエンプタハ王の王宮が位置したとする。しかし、都市の中心は、「白い壁」と呼ばれた初期の王宮が位置した場所で、その南にメンフィスの主神であるプタハの大神殿があり、その西には新王国時代の歴代の王の記念神殿が位置していた

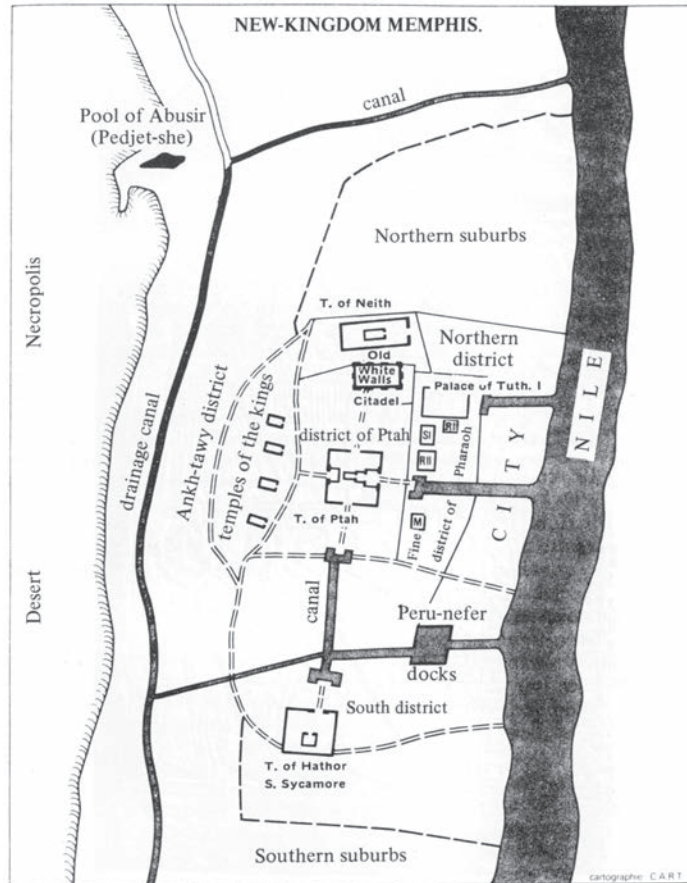


図7 キッチンによる新王国時代のメンフィスの想像図
(Kitchen 1982: 114, Fig. 38)

という。そして、北端部にはネイト神殿、南には当時の港であった「ペル・ネフェル」があり、その南西の郊外地区にハトホル神殿が位置していたと推測している。前述のように、メンフィスとその周辺の集落遺跡の発掘調査は進んでおらず、これらはあくまでも推測によるものであるが、かなりの確信に新王国時代のメンフィスの構造を示したものと言える。

ところで、新王国時代のメンフィスにおける高官の墓は、古王国時代同様にサッカラを中心とする西岸のネクロポリスに造営された。おそらく、新王国時代のサッカラでは、メンフィスの主神であるプタハの聖獣アピス牛の埋葬地セラペウムへ

の参道や、新王国時代に神格化された古王国時代の王の祭祀などに関係して墓地が発展していったと思われる。サッカラの新王国時代の墓地で本格的な発掘調査が開始されたのは 1970 年代からであった。特にウナス王のピラミッド参道の南側では、19 世紀にプロシア（現在のドイツ）のレプシウスがツタンカーメン王の財務長官マヤの墓を発見したが、その位置は長い間不明であった。オランダ・英国合同調査隊はレプシウスの記録に基づいてマヤの墓の再発見を試みたが、発見された遺構は、ツタンカーメン王の治世の大將軍および摂政で、後に王になったホルエムヘブの墓であった。その後、マヤの墓を含むツタンカーメン王からラメセス 2 世時代の高官の墓を複数発見している (Martin 1990)。また、その北側ではカイロ大学の調査隊が同じくラメセス 2 世の宰相などの高官墓を発見した (Tawfik 1991)。これらの墓はトゥーム・チャペルと呼ばれる礼拝室付近にピラミッドを頂く、神殿を小型化した形態の上部構造を持つ特徴的な墓である。さらに、1980 年代からフランス隊が、末期王朝時代の聖猫の集団墓地、ブバステイオンにて新王国時代の岩窟墓群を発見した。この地域では、アメンヘテプ 3 世時代の北の宰相アペルエルやツタンカーメンの乳母マヤの墓などの岩窟墓が検出されている (Zivie 2003)。

1990 年代から開始された日本隊によるメンフィス・ネクロポリスにおける発掘調査により新たな新王国時代の墓地が確認された。サッカラの北西部に位置するアブ・シール南丘陵ではラメセス 2 世の第 4 王子カエムワセトの葬祭殿とイシスネフェルトの墓が発見され (Yoshimura and Takamiya 2000; Kawai 2014)、ダハシュール北遺跡では、前述の中王国時代の墓以外に第 18 王朝後半からラメセス朝の墓が多数発見されている

(Yoshimura and Hasegawa 2000)。

以上のように 20 世紀の後半から本格的な発掘調査が行われてきたメンフィス・ネクロポリスの新王国時代の墓については、18 世紀以降に流出した多数の記念物や遺物が欧米の博物館に収蔵されているものの依然として墓の位置が不明なものが多い。また、メンフィスは第 18 王朝のトトメス 3 世の治世頃から行政・経済の中心となったことが知られているにもかかわらず、当時の人々の墓の位置も明らかになっていない (Martin 2000; Gessler-Löhr 2004)。このような問題を明らかにするため、金沢大学を中心とする日本隊は北サッカラで踏査を開始し、2016 年に新たな新王国時代の墓地を確認することに成功し、2017 年より新王国時代の岩窟墓が存在すると想定される北サッカラ台地の東端部で発掘調査を開始した (河合ほか 2017a; 河合ほか 2017b; 河合ほか 2018)。

メンフィス・ネクロポリスの新王国時代の墓地の発掘調査により今後、当時の首都であったメンフィスの高官の業績、同時地域の埋葬習慣、美術、工芸技術、宗教の様相がさらに明らかになり、従来テーベの資料に偏重していた新王国時代の歴史が塗り替えられることが期待される。

まとめにかえて

本稿では、古王国時代と新王国時代を中心に王朝時代開闢より首都が置かれたメンフィスおよびその墓地の景観と構造に関して若干の予察を行った。まだ網羅的に問題点が抽出されているとは言えないが概観を提示した。メンフィスの位置については、初期王朝時代に北サッカラ台地の東側、あるいは現在のアブ・シール村のあたりであったと推測され、その後ナイル川の流路の東漸により、その位置も変化していったことが明らか

となっている。古王国時代のメンフィスの位置に関しては、同一の場所にあったとする説と、王のピラミッドごとに王都や行政施設が移動したとする説の2つの説に二分されている状況である。当時の王宮や行政施設が考古学的に確認されていない现阶段では、確定することが困難であるが、近年発掘調査が増加しているピラミッドに隣接する集落の発掘調査の進展により、より具体的な様相が明らかになるであろう。新王国時代のメンフィスについては、文献史料で知られる王宮や神殿等の建造物の位置が、ほとんど考古学的に確認されておらず、都市遺跡の発掘は進展していない。

一方で、従来エジプト考古学においてピラミッドや墓地の発掘調査が盛んであったために膨大な資料が蓄積されており、メンフィスの都市そのものの資料ではないが、メンフィスにおける技術、物流、信仰、あるいはメンフィスの高官の業績について明らかにすることが可能である。古王国時代の墓地の調査は比較的進展しているものの、新王国時代の墓地の調査は近年になってようやく増加してきた。今後、以上のような側面についてより包括的に明らかになることが期待される。

参考文献

- Arnold, D. 1991 "Amenemhat I and the Early Twelfth Dynasty at Thebes." *Metropolitan Museum Journal*, vol. 26: 5-41.
- Arnold, F. 2014 "Ein Garten des Königs Snofru in Dahschur, Untersuchungen am Taltempel der Knickpyramide 2012-2014." *Sokar* 29: 6-13.
- Aston, D. and Jeffreys, D. 2007 *The survey of Memphis III: Excavations at Kom Rabia (site RAT): Post-Ramesside levels and pottery: The third intermediate period levels*, London.
- Bains, J. 2015 "Ancient Egyptian cities: monumental-ity and performance." in Yoffee, N. (ed.), *The Cambridge World History, Vol. III. Early Cities in Comparative Perspective, 4000 BCE-1200 CE*, Cambridge: Cambridge University Press: 27-47.
- Bårta, M. 1995 "Pottery inventory and the beginning of the IVth Dynasty." *Göttinger Miszellen* 149: 15-24.
- Bårta, M. 1999 "The Title 'priest of Heket' during the Egyptian Old Kingdom." *Journal of Near Eastern Studies*, 58 (2):107-116.
- Bårta, M. 2005 "Location of the Old Kingdom Pyramids in Egypt." *Cambridge Archaeological Journal* 15 (2): 177-191.
- Bårta, M. 2013 "Egyptian kingship during the Old Kingdom." in Hill, J.A., Jones, P. and Morales, A.J. (eds.), *Experiencing Power, Generating Authority: Cosmos, Politics. and Ideology of Kingship in Ancient Egypt and Mesopotamia*, Philadelphia: University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology.
- Bunbury, J., Tavares, Ana., Pennington, B. and Gonçalves, P. 2017 "Development of the Memphite floodplain landscape and settlement symbiosis in the Egyptian capital zone." in Willems, H. and Dahms, J-M. (eds.), *The Nile: Natural and Cultural Landscape in Egypt*: 71-96.
- Gessler-Löhr, B. 2007 "Pre-Amarna tomb chapels in the Teti cemetery north at Saqqara." *Bulletin of the Australian Centre for Egyptology*, vol. 18: 65-108.
- Jeffreys, D. 1985 *The Survey of Memphis I*. London: Egypt Exploration Society.
- Jeffreys, D. 2006 *The Survey of Memphis V: Kom Rabia: the New Kingdom settlement (levels II - V)*, London
- Jeffreys, D and A. Tavares 1994 "The historic landscape of Early Dynastic Memphis." *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abt. Kairo*: 143-173.
- Kitchen, K.A. 1982 *Pharaoh Triumphant: The Life and Time of Ramesses II*. Warminster: Aris & Phillips.

- Kawai, N. 2014 “The New Kingdom Tomb Chapel of Isisnofret at Northwest Saqqara.” Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Supplément aux annales du service des antiquités de l’Égypte Cahier no. 43. Cairo, Ministry of Antiquities: 69-90.
- Lacher-Raschdorff, C. 2014 *Das Grab des Königs Ninetjer in Saqqara. Architektonische Entwicklung frühzeitlicher Grabanlagen in Ägypten* (Archäologische Veröffentlichungen. 125). Wiesbaden: Harrassowitz.
- Lehner, M. 1997 *The Complete Pyramids*, London: Thames & Hudson.
- Martin, G.T. 1991 *The Hidden Tombs of Memphis: New Discoveries from the time of Tutankhamun and Ramesses the Great*, London and New York: Thames & Hudson.
- Martin, G.T. 2000 “Memphis: the status of a residence city in the Eighteenth Dynasty.” in Barta, M. and Krejci, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, Praha: 99-120.
- Moeller, N. 2016 *The Archaeology of Urbanism in Ancient Egypt: From the Predynastic Period to the End of the Middle Kingdom*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Stadelmann, R. 1985 *Die Ägyptischen Pyramiden. Vom Ziegelbau zum Weltwunder*. Mainz: Phillip von Zabern.
- Tawfik, S. 1991 “Recently Excavated Ramesside Tombs at Saqqara,” *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abt. Kairo* 47: 403-409.
- Yoshimura, S. and Takamiya, H. 2000 “Waseda University Excavations at North Saqqara from 1991 to 1999,” in Barta, M. and Krejci, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, Praha: 161-172.
- Yoshimura, S. and Hasegawa, S. 2000 “New Kingdom Necropolis at Dahshur: The tomb of Ipay and its vicinity.” in Barta, M. and Krejci, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, Praha: 145-160.
- Yoshimura, S., Kawai, N. and Kashiwagi, H. 2005 “A sacred hillside at northwest Saqqara: A preliminary report on the Excavations 2001-2003,” *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abt. Kairo* 61: 361-402.
- Zivie, A. P. 2000 “La résurrection de hypogées du Nouvel Empire à Saqqara,” in Barta, M. and Krejci, J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, Praha: 174-192.
- Zivie, A. P. 2003 *Les Tombeaux retrouvés de Saqqara*, Paris: Editions du Rocher.
- 恵多谷雅ほか 2010 「QuickBird 画像による古代エジプトの港湾施設 Site No.49 の発見について」『写真測量とリモートセンシング』49 巻 4 号: pp. 269-273.
- 河合望 2011 「葬制から探る古代エジプト第 2 中間期末から新王国時代初期の社会様相の一側面ーアブ・シール南丘陵遺跡の集団埋葬を中心としてー」『古代』第 125 号、早稲田大学考古学会、pp. 69-96.
- 河合望ほか 2017a 「第 1 次北サッカラ遺跡踏査概報」『エジプト学研究』第 23 号、日本エジプト学会、pp. 127-144.
- 河合望ほか 2017b 「第 2 次北サッカラ遺跡踏査概報」『エジプト学研究』第 23 号、日本エジプト学会、pp. 145-181.
- 河合望 2017 「メンフィス・ネクロポリスの調査研究」常木晃・西秋良宏・山内和也（編）『季刊考古学』第 141 号・特集 西アジア考古学・最新研究の動向』、雄山閣、pp. 83-86.
- 河合望ほか 2018 「第 3 次北サッカラ遺跡調査概報：試掘調査」『エジプト学研究』第 24 号、日本エジプト学会、pp. 82-112.

研究項目 B01 「西アジアの環境と資源」

計画研究 04

古代西アジアをめぐる水と土と都市の
相生・相克と都市鉱山の起源

計画研究 04「西アジアをめぐる水と土と都市の 相生・相克と都市鉱山の起源」研究成果報告

安 間 了

徳島大学社会産業理工学研究部

概要

計画研究 B01 は西アジアにおけるおもに初期都市文明の勃興から成熟期にいたるまでの時期に焦点をあて、これらの時代の都市を取り巻く環境の変動や都市鉱山化の進行過程について、地球環境学的・地球化学的な観点から明らかにしていく予定である。平成 30 年度の計画研究 B01 班の主だった活動については、以下 5 つの標題の調査報告・研究報告を分担執筆した。

- 黒澤正紀・池端 慶・荒川洋二・丸岡照幸・笹 公和「都市鉱山の起源：金属濃集からみた古代都市化」
- 若狭 幸・黒澤正紀「セルビア共和国におけるローマ時代および近代～現世の鉱山および鉱山跡における試料採取と顕微鏡観察結果」
- 浅原良浩・南 雅代・ラズーリ ハディ・アジジ ホセイン「西アジアの古環境復元に向けて－イラン北西部のザグロス山脈に分布する石灰質化学沈殿岩の現地調査報告」
- 安間 了・前田 修・常木 晃「イラク国北部 Qalat Said Ahmadian 出土の黒曜石製石器の化学組成と原産地推定」
- 下岡順直・野口 淳・マラー カシド・ヴィーサル グラム・シャイク ニロファー・近藤英

夫「南パキスタン・シンド地方のタール砂漠西縁砂丘堆積物の OSL 年代」(英文)

冶金考古学分野におけるニューフロンティアの開拓を目指して、本年度予算の大部分を用いて、筑波大学に超微量元素・同位体分析システムを整備した。固体試料の金属濃度を測定するためのレーザーアブレーション ICP-MS 分析装置、試料に含まれる鉱物相を同定するための X 線回折装置、金属同位体比を精密に測定するためのマルチコレクター型 ICP-MS などが地球進化科学専攻に納入され、考古試料分析測定のための国内拠点が形成される見込みである（黒澤ほかによる報告参照）。また、徳島大学にも X 線回折装置が納入され、今後メソポタミア氾濫原堆積物の系統的な分析を行う予定である。

個別報告で記述した事項のほか、本計画研究では以下のような研究の進展があった。

- イラク国北部クルド人自治区のスレイマニヤ県において、計画研究 01 および 02 で発掘中のチャルモ地域で地質調査を行い、チャルモ地域の初期農耕は完全な天水農耕であったわけではなく、地下水利用も行われていた可能性を指摘した。

- ii) チャルモ付近に発達するケスタ地形（図 1）の形成速度と、チャルモ遺跡で生活が営まれていた時期の古景観を復元するため、地形を規制する砂岩層（昨年度採取済）中に含まれる宇宙線生成核種を用いた地形露出年代の測定を継続して試行中である。地形年代測定に利用される方解石・石英の含有を XRD で確認したものの、ターゲット鉱物が細粒であるため、鉱物の回収と洗浄についてさらに検討中である。



図 1 Charmo 付近のケスタ地形と露出する砂岩層

- iii) スレイマニヤ博物館において 2014 年度・2015 年度の Qalat Said Ahmadan および 2016 年度から継続中の Charmo 遺跡の発掘により出土した陶片の pXRF による化学分析を行った。Charmo 産の黒曜石についても分析を行ったが、地層年代の決定とデータの解析は今後の課題である。
- iv) スレイマニヤに分布するオフィオライト及び酸性深成岩類の予備的調査（図 2）を行い、いくつかの鉱床の分布を確認した。来年度からはイラン・イラクの現地研究協力者とともに、浅原・安間を中心に組織的な鉱床調査を開始する予定である。



図 2 Qalat Said Ahmadan 東部に分布する閃長岩の産状

- v) スレイマニヤ博物館において金属器やコインなどの収蔵物、2017 年度のヤシンテペ発掘調査によって出土した金属器、ガラスビーズなどの出土品について、pXRF による化学

分析を行った。詳細な解析は今後の予定であるが、銀・銅・青銅の副成分についてのデータが得られ、現地での金属製収蔵物の

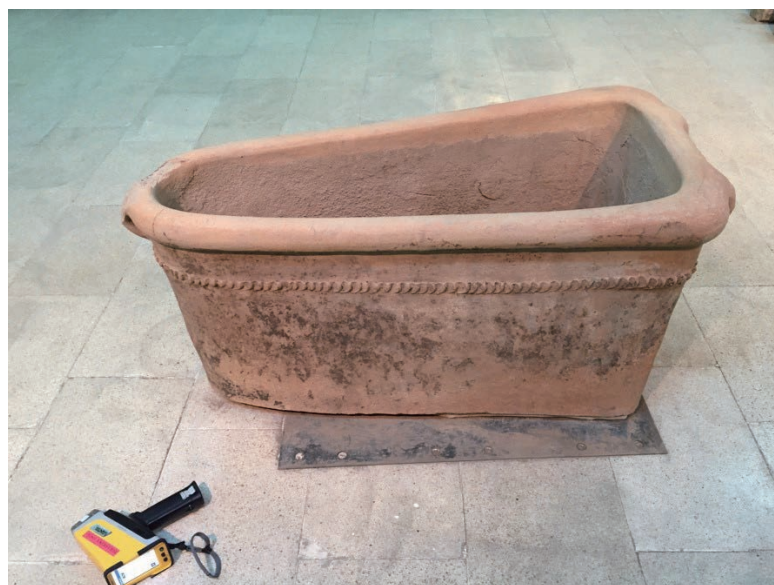


図3 スレイマニヤ博物館内における収蔵物の pXRF による化学分析調査状況

- 組成データベース構築に向けて、展望が開かれた。
- vi) ヤシンテペで発掘された未盗掘墓土壌の測定をしたところ、600 ppm の銀の濃集を認めた。洗浄したテラコッタ製の棺（図3、および本書 81-88 ページ参照）の底部にも 700 ppm を越える銀の濃集があった。未盗掘墓直上の表土では銀の濃集は認められていないので、来年度の発掘時には同時代の地層よりも深い層準で、未盗掘墓周辺部での銀異常のマッピングをおこない、銀汚染の進行メカニズムについて明らかにしていきたい。
- vii) メソポタミア下流域で黎明期の都市と都市を維持した水路網の変遷についての調査を開始した。古代都市遺構の発掘調査を行っている国際グループと共同して、年度中に Girsu 近郊でボーリング調査を行う予定である。来年度は柱状試料の現地記載を行ったのちに一部試料を輸入し、淡水環境の開始時期などの堆積環境の変化や、都市鉱山化の開始時期の推定などに必要な詳細な分析のために試料を供する。また、来年度からは Uruk や Umm al-Aqarib などの古代都市以降近傍でのボーリング調査を推進する。Umm al-Aqarib では光励起ルミネッセンス法（OSL）などを用いて砂丘の移動速度を見積もる予定である。
- viii) 現地研究者の協力を得て、イランの8都市で月ごとの降水採取を開始した。これらの試料については、降水に含まれる固形物（風成塵）を分離し、降水組成と風成塵組成の季節変化、風成塵の風送過程と起源を明らかにしていく。また、河川水についても、系統的な採取を開始した。これまでの調査で中性～アルカリ性の降水の組成が、西ア

ジアの水環境や風化・堆積過程に大きな影響を与えていることが予察されており、おもとの水供給源である降水から、河川水・地下水として海に戻るまでの西アジアにおける水環境の動態を明らかにしていく予定である。

ix) 鍾乳石の年代を決定することで、ペルシャ地方が湿潤であった時期の推定を継続的に試みた。予察的なデータは得られているが、来年度からは、地下水年代の決定とあわせて、さらに深く追求する必要がある。

都市鉱山の起源

金属濃集からみた古代都市化

黒澤 正紀¹・池端 慶¹・荒川 洋二¹・丸岡 照幸¹・笹 公和²

¹筑波大学生命環境系 ²筑波大学数理物質系

1. 都市鉱山の起源：金属濃集からみた古代都市化の研究計画

金属利用は、人類の発展に大きな進歩をもたらしたが、この進歩には都市の成立という、さらに重要な要素関わっている。都市には、人・物資・文化・技術・ネットワークの集積があり、その成立過程で、金属の人為的集積が行われ、一部は周辺に廃棄される。近年、この集積・廃棄された金属の回収・再利用が進められ、鉱山から金属を採取するのではなく、都市に集積した金属を再利用するという意味の「都市鉱山」として注目されてきた。金属資源を輸入に頼る日本では重要な先端課題であり、資源地質学の分野でも多様な研究が進められている。本計画研究では、この都市鉱山の起源が近代・現代ではなく、古代都市が成立した過程にその萌芽があるという新たな観点から、都市化に向かう古代遺跡の遺物の金属成分を分析し、遺跡への金属集積の様子から都市鉱山の起源と内在する課題について明らかにすることを目的としている。

世界最初の都市は、古代西アジア地域で誕生したとされる。ウバイド後期（前 4600 年頃）に都市的特徴を持つ集落が出現し始め、ウルク期中期（前 3600 年頃）にはほぼ都市に近い集落が、ウルク期末期（前 3300 年頃）には完成形としての都

市がメソポタミア地域で誕生した。したがって、ウルクおよびそれ以前のウバイド期に属する遺跡から出土する遺物を年代ごとに分析して追跡することで、都市形成と金属の関係、都市鉱山の起源の解明が可能となる。

好都合なことに、古代西アジアの人々は用具や交換材として利用するために金属を積極的に集めており、金属流通のための交易路の開拓、トルコの高原地帯での鉱山開発、遠方での鉱山都市の建設までも手掛けている。特に、交換材としての銀の利用を積極的に進めた点に特徴があり、本研究でも銀および関連する重金属を中心に微量元素分析・同位体分析を進める。また、金属を産出した古代鉱山遺跡の鉱石試料の分析を図ることで、金属の起源・流通過程の解明も進める予定である。

分析試料としては、土器・竈材・木炭・金属器、硫黄・重金属、土壌・室内・人骨などが対象となる。西アジア地域は、筑波大学の考古学・文献学の研究グループが盛んに研究を進めてきた場所であり、考古学グループからの資料提供、本計画研究の他のメンバーからの採取試料を中心に分析を進める。また、都市が成立した紀元前 3 千年頃には楔形文字文書の情報があるため、文献学からの情報も検討可能となる。

土器・石器・建材・金属器などに含まれる金属成分の分析は、既に考古科学の分野で実施されているが、対象試料が多成分・多相系であるため、相の同定・分離および相ごとの分析が、高分解能・高精度の情報を得るための基本となる。これは、自然過程あるいは人為過程によって生じた、相同士の間での元素や同位体の再分配・偏りを個別に分析することで、生じた過程の情報が得られるからである。そのため、従来実施されていた、複数の相を含む遺物を均質に粉碎して分析する方法では、この偏り・再分配を通じた過程情報を高精度に読み出すのが難しかった。このような相の同定・分離および相ごとの分析は、鉱物学・地質学の得意とする領域であり、本研究でも、鉱物学・地質学の強みを生かした解析を通じて、従来の考古科学情報を一新するデータを提出することを眼目とする。今回は、さらにその目的を先鋭化させるため、新たに「マルチコレクター型 ICP 質量分析計システム」を導入することにした。

今年度は、考古学・環境科学試料の微量元素・同位体を分析するためのマルチコレクター型 ICP 質量分析計システムの構想化と導入、古代鉱山遺跡からの製錬廃棄物のスラグ（鉱滓・鍍）の調査、西アジアでの金属製錬準備段階を検討するための古代シリアの土器の焼成温度の検討を行っており、本報告では、それぞれの概要について記す。

2. マルチコレクター型 ICP 質量分析計システムの導入

人類の金属利用も西アジアに淵源を発しており、都市国家発達と金属の集積過程の解明は、人類の技術進歩解明の観点からも重要な課題となっている。ここでは、西アジアで誕生した銀を中心とする流通経済の発展と採掘・製錬および都市へ

の集積機構を、土器・土製品・原料鉱石などの遺物に残された銅・亜鉛・カドミウム・錫・銀などの金属同位体比をトレーサーとして追跡し、人類史における金属利用と都市鉱山の誕生過程を解明する新たな手法として、マルチコレクター型 ICP 質量分析計システムを導入することにした。

このシステムでは、最初に、土製品・木炭・石器・原料鉱石などの破片をそのまま顕微鏡観察し、金属の付着・製錬跡・原料鉱物が存在していると考えられる部分を確認する。その確認した試料について、①レーザーアブレーション装置（LA）の付設した②四重極型誘導結合プラズマ質量分析計（ICP-MS）で、破片状態のまま分析し、銅・亜鉛・カドミウム・錫・銀などの金属濃集の程度を調べる。その後、金属濃集部分を切断分離・破碎し、③微量固体試料 X 線判別装置（XRD）を用いて、その金属濃集が自然由来あるいは原料由来の金属硫化物なのか、人為起源の金属酸化物か合金粒子かを判別する。判別した試料は、酸・アルカリで溶液化し、溶液化試料を樹脂カラムなどで測定対象元素（銅・亜鉛・カドミウム・錫・銀など）ごとに分画する。分画した溶液試料の分画程度や純度は②の ICP-MS で再度チェックする。十分な純度で分離された溶液試料について、必要に応じて、④脱溶媒・オートサンプラー試料導入装置で前段濃縮し、最終的に⑤マルチコレクター型誘導結合プラズマ質量分析計（MC-ICP-MS, 図 1）で、試料の金属同位体比を精密測定する。金属濃集部分がレーザーアブレーション可能な場合は、①と⑤を結合させた LA-ICP-MS で金属同位体比を測定する。

それらの工程を実現するため、今回は以下の装置を組み併せた、分析システム一式を導入した。

- ① NWR213 レーザーアブレーション装置 (New Wave Research 社)
- ② Agilent 7800 四重極型誘導結合プラズマ質量分析計 (Agilent 社)
- ③ MiniFlex 600/TEII 微量固体試料 X 線判別装置 (リガク社)
- ④ Aridus 3 脱溶媒・ASX-110FR オートサンプラー試料導入装置 (Teledyne 社 /Catec 社)
- ⑤ Plasma 3 マルチコレクター型誘導結合プラズマ質量分析計 (Nu Instruments 社)



図 1 マルチコレクター型誘導結合プラズマ質量分析計 (Nu Instruments 社、Plasma 3)。

この分析システムによって、考古遺物に含まれる微量金属の存在状態の確定（相同定）と金属同位体比の効率的な精密測定が初めて可能となり、大幅な作業時間の短縮だけでなく、考古学に対する新たな知見や信頼性の高いデータを得ることが可能になる。システムの各部は、既に利用が進んでいる装置からなるが、一体となって系統的に考古学資料の分析に運用・利用された例はない。今後の考古資料の元素・同位体分析の標準法となるように、現在、分析法の準備等を進めている段階である。

3. 古代ローマ時代の銀 - 鉛 - 亜鉛鉱山での製錬廃棄物の重金属

金属の大量利用には、鉱脈から鉱石を採取し、鉱石から金属を抽出する製錬作業を必要とする。その際、鉱山周囲への不要な脈石（採鉱時の捨て石）、製錬場周囲に製錬廃棄物のスラグ（鉱滓・鍍）が多量に排出される。脈石やスラグには、残存する金属硫化物や有害な重金属不純物（As, Te, Sb, Pb 等）が含まれ、周辺環境への重金属汚染の原因となる可能性がある一方、金属を再度抽出する資源としても利用できる。実際、古代鉱山のス

ラグを「金属鉱石」として再利用した例は多い。これらの状況は、原初の都市鉱山の成立過程を検討する上でも重要な情報となる。今回は、金属製錬技術がほぼ完成された頃の、古代ローマ最大の銀 - 鉛 - 亜鉛鉱山であるセルビアのコスマイ鉱山のスラグについて検討した。

バルカン地域は、アルプス - ヒマラヤ造山帯に沿って分布するテチス鉱床生成ベルトの中に位置し、イラン高原・トルコ山岳地帯から連なるオフィオライトや貫入火成岩体に関連した無数の金属鉱床が胚胎している。中でもセルビア共和国は、高硫化系・浅熱水性の金属鉱床、斑岩銅型・スカルン型の銅・金鉱床、鉱染型・堆積層内型の硫化物・金鉱床が卓越し、ヨーロッパ有数の鉱産資源に恵まれている。こうした状況から、バルカン地域は、早くから鉱山開発が進められ、紀元前 6000 年頃には自然銅の鍛造・熱加工利用も行われており、それ以降は古代西アジアへの金属供給源の 1 つとなった可能性がある。

コスマイ鉱山は、セルビアの首都ベオグラードの南東 40 km の丘陵地帯に位置する。周辺に幅広く分布する白亜紀の砂岩泥岩・炭酸塩岩の母岩に、花崗岩起源の流紋岩岩脈や火山角礫岩が貫入し、それらの貫入に伴う熱水作用によって金属鉱床が

形成された。鉱床は、浅熱水性の銀鉱脈および、泥質炭酸塩岩・石灰岩を交代した多金属型鉛・亜鉛硫化物鉱脈からなる。紀元前から採掘されたが、ローマ時代に鉛・亜鉛・銀の鉱山として盛んに開発され、紀元3世紀頃にはローマ帝国で最も重要な鉱山の1つとなった。近年、資源再開発のための調査が進み、高品位の鉛・亜鉛・銀の鉱脈が地下に伏在することも明らかにされている。母岩は珪質化と緑泥石・緑簾石化の熱水変質を受け、細粒の黄鉄鉱・硫砒鉄鉱を鉱染状に含む部分は金に富む。鉱脈は、銀を含む方鉛鉱・閃亜鉛鉱・黄鉄鉱を主とし、少量の黄銅鉱・硫砒鉄鉱・四面銅鉱・白鉄鉱・自然金を含む。この産状は、イラン高原・トルコ山岳地帯の古代の鉛・亜鉛・銀鉱山の鉱脈と同じタイプで、そのスラグの調査は、紀元前4千年紀から3千年紀の金属鉱山開発・金属製錬を検討する際にも重要な情報となる。

鉱山の周囲には多量の脈石とスラグが分布している。今回は、珪質化された砂岩の脈石と花崗岩の脈石、および4世紀頃の産物と考えられるスラグについて検討を行った。これらの試料は、研究分担者の若狭幸先生（秋田大学）から提供いただいたもので、鉱山付近の状況については本書137-142ページの報告をご参照いただきたい。

最初に、珪質化された脈石と花崗閃緑岩の脈石をX線検出器付き走査型電子顕微鏡（SEM-EDS）で観察した。珪質化された脈石では、方解石の細脈に少量の鉄酸化物（磁鉄鉱）・黄鉄鉱・黄銅鉱、稀に灰鉄輝石・鉄カンラン石を含み、黄銅鉱の一部は銅藍と磁鉄鉱に変質していた。花崗閃緑岩の脈石には点状あるいは脈状に黄銅鉱・黄鉄鉱・磁鉄鉱を含んでいた。両者ともに、鉛・亜鉛硫化物は認められなかった。

次にスラグ試料を観察したところ、硫化鉱物

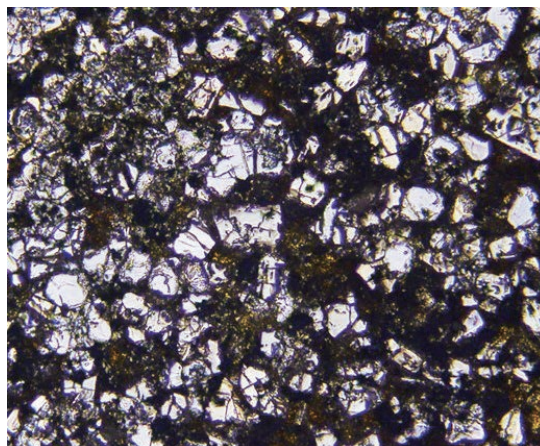


図2 コスマイ鉱山の塩基性スラグ（偏光顕微鏡写真）。透明柱状の結晶は鉄カンラン石。鉱物粒子間の黒色部分はガラスと硫化物（写真横幅2 mm）。

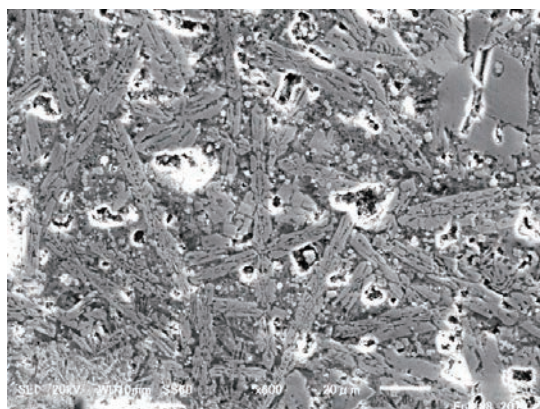


図3 コスマイ鉱山の塩基性スラグ（走査電子顕微鏡写真）。柱状の結晶は急冷の際に析出した鉄カンラン石、正方形は鉄スピネル、鉱物粒子間は鉄・カルシウム・アルミを多く含むガラス。

を製錬する際に生じる典型的な塩基性スラグの組織が観察された（図2）。透明な粗粒結晶の鉄カンラン石自形結晶、その周囲の黒色部分はガラスと硫化物からなる。また、部分的には、高温から急冷された際にできるスピニフェックス組織を示す（図3）。図3の柱状の析出結晶は、少量のMn・Znを含む鉄カンラン石の樹枝状結晶で、高温から急冷された際にできるスピニフェックス組織を示す。正方形の微小結晶は、ほとんどがZn

を含む鉄スピネルである。少量の鉄酸化物（磁鉄鉱）・カリ長石も存在する。鉱物粒子間は Ca-Fe-Al 系の珪酸塩ガラスで、少量の S, K, P, Zn を含む。ガラス組成は、融剤としての石灰成分が少なかった可能性を示唆する。これらの組織に、自形から半自形の硫化物結晶が散在する。硫化物は方鉛鉱と黄鉄鉱が多く、少量の閃亜鉛鉱からなる。多量の方鉛鉱析出物は、スラグの平均組成に数%の Pb を含むことと調和的である。他方、黄銅鉱はほとんど観察されず、黄鉄鉱にやや Cu を多く含むものが観察された。

全体として、スラグは非常に SiO₂ に乏しく、1000 °C 以上で充分融解され、急冷されたことが分かる。スラグ中の亜鉛は、閃亜鉛鉱としても析出しているが、様々な析出結晶やガラスにも含有され、冷却の際に複数の相に分散する挙動を示す。黄銅鉱の析出結晶が確認できなかったのも、同様の原因かもしれない。今後、さらに詳細な検討を進める予定である。

今回のスラグ中の多量の方鉛鉱は、鉱石の鉛品位が高いことを示すと共に、金属鉛の回収が充分でなかった可能性も示す。製錬活動やスラグ・脈石に由来する鉛が、鉱山周辺の表層土壌や植物体の高い Pb 濃度の原因とも報告されており、鉱山開発の負の側面となっている。他方、スラグ中の残存鉛の多さが、後代にスラグを金属原料として再活用できたことにつながっている。紀元前 4 千年紀から 3 千年紀にイラン高原やトルコ高原地帯で開発された鉛・亜鉛・銀タイプの鉱山でも同様な状況が生じていたと推測される。また、セルビアでの金属製錬で大気中に放出された人為起源鉛は、同国内の泥炭地に堆積・捕捉され、高い Pb 濃集として記録されているとの報告がある。都市鉱山の環境インパクトとしても注目される。

4. 紀元前 7 千年紀の土器に残された高温発生技術

金属の利用には、金属製錬・加工等に必要な高温発生・高温制御技術が不可欠である。以前の新学術領域研究『現代文明の基層としての古代西アジア文明』（2012 ～ 2016 年度）での研究過程で、都市形成期以前の紀元前 7000 年～ 6000 年のイラン及びシリアの遺跡から出土した土器には、その高温発生技術の片鱗が表れていることを確認していた。特に、文明の先進地域であった地中海沿岸レヴァント地域のテル・エル＝ケルク 2 号丘遺跡では副葬品として銅鉱石（孔雀石）のビーズが出土しており、金属利用直前の高温発生技術レベルとの関連を検討する上で注目される。そこで、今回、同遺跡から出土した土器に記録された高温発生技術について再検討することにした。

テル・エル＝ケルク 2 号丘遺跡は、トルコ国境に程近いシリア北西部のエル・ルージュ盆地の南部にある。エル・ルージュ盆地は石灰岩の山地に囲まれた地溝盆地で、同遺跡は、盆地内の扇状地上にあり、新石器時代の 2 つの遺跡と隣接している。発掘の結果、12 層の定住遺構が確認され、上部の第 6 層から第 1 層までは多量の土器が出土し、最下部の第 12 層から第 7 層までは土器が出土しない先土器新石器時代にあたる。暦年較正された炭素 14 年代で、第 6 層～ 1 層は前 7000 ～ 6600 年の年代を示し、第 6 層から出土した土器は、西アジアの土器新石器時代で最初期に出現した土器とされる。今回は、第 6 層～ 1 層から出土した土器片 20 点について、粉末 X 線回折（XRD）で土器の胎土に含まれる鉱物粒子を確認し、SEM-EDS で鉱物粒子の示す分解あるいは部分熔融を示す組織を観察することで土器の焼成温度を推定した。

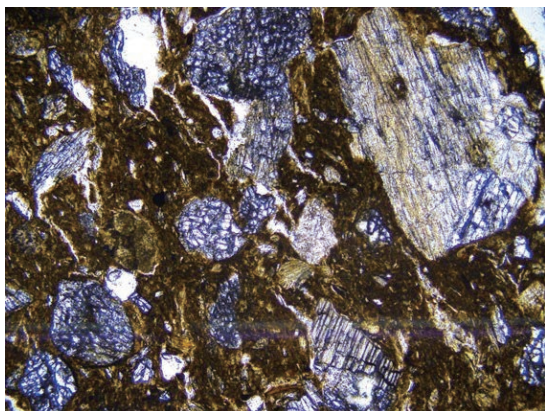


図4 角閃石タイプの暗色磨研土器（偏光顕微鏡写真）。大きな角閃石（アクチノ閃石）と普通輝石の破片を主に含む（写真横幅 0.7 mm）。

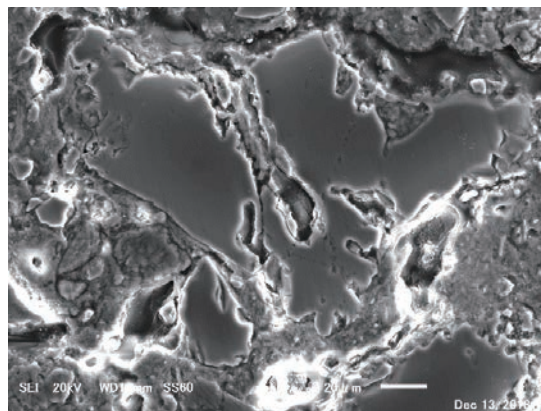


図5 胎土中の斜長石の単結晶粒子（中央）。輪郭の一部が溶けて失われ、不規則形状になっている。結晶の縁の部分に薄いガラス皮膜が認められる（走査電子顕微鏡写真）。

第6層から1層の土器は、表面が暗灰色～暗黄褐色で磨研が施され、内部が黒褐色～茶褐色で黒芯の無い、胎土に多量の鉱物粒を含んでいた。ほとんどは暗色磨研土器で、第6層と第5層の土器の一部にはケルク式土器が含まれていた。これらの土器片を切断して薄片に加工し、偏光顕微鏡での観察後、SEM-EDSで観察・分析した。切断片の一部は、粉末にしてXRD測定用試料とした。

各層の土器の構成鉱物を偏光顕微鏡とSEM-EDSで観察した結果、暗色磨研土器は、多量のアクチノ閃石・普通輝石・斜長石・石英を含む角閃石タイプ（図4）と、多量の方解石・石英を含む方解石タイプが存在した。ケルク土器は基本的に角閃石タイプであった。いずれのタイプの土器も、胎土中の粘土部分はほとんどスメクタイト、一部試料はイライト・スメクタイト混合層粘土鉱物の組成を示した。各層の方解石タイプの暗色磨研土器に含まれる方解石粒子は熱分解された組織を示し、各層の角閃石タイプに含まれる斜長石・

普通輝石には部分溶融した組織（図5）が、角閃石には熱変質が認められた。また、XRD測定では、全ての土器で粘土鉱物と雲母の回折ピークが消えていたが、ムライト等の高温生成鉱物のピークは認められなかった。それらの鉱物・粘土鉱物の生成温度・消滅温度から推定すると、土器の焼成温度は950℃付近であったことが示された。

同遺跡から土器焼成窯は未発見であるが、前7000年頃に既に1000℃近い高温発生技術が修得されていたことが推測された。この温度は、金属銅の融点（1085℃）には達していないが、銅製錬の最初の段階とされる銅酸化物・銅炭酸塩の還元が必要とされる温度（700～800℃）には充分到達している。但し、斜長石・普通輝石粒子の加熱程度は部分溶融に留まっており、短時間の高温発生にとどまっていた可能性が高い。金属製錬の準備段階を検討するためには、土器の焼成温度だけでなく、高温継続時間についても検討が必要と考えられる。

セルビア共和国におけるローマ時代・近代～現世の 鉱山・鉱山跡における試料採取と顕微鏡観察結果

若狭 幸¹・黒澤 正紀²

¹ 秋田大学大学院国際資源学研究科 ² 筑波大学生命環境系

1. はじめに

セルビア共和国（以下セルビア）は東欧、バルカン半島中西部の内陸の、かつてのユーゴスラビアに属した地域の中央に位置しており、政治的にもその中心となる国であった。現在も、その当時の中心地であったベオグラードを首都としている。地理的にトルコとロシアを結ぶ交通の要所となっていることから、この地域は東ローマ帝国の領域であった。そのため、セルビアには、世界遺産となっているガムジグラード＝ロムリアーナをはじめ、東ローマ帝国時代の遺跡が点在している。

一方で、セルビアは地質資源にも恵まれている。ヨーロッパでも最大規模の銅鉱山であるボール鉱山地域では、世界各地の大手鉱山会社が参入し、鉱業活動が活発に行われている。その他にも、小規模なものから大規模なものまで、現在掘削活動が行われているものや、採掘が行われていない鉱山跡も多数存在する。これらの鉱山跡は現世のものから近代、ローマ時代のもので含まれると言われる。鉱山跡の調査は、ローマ時代から現在までの冶金技術の発展や伝播の歴史を解明することにつながる。また、この地域と西アジアの鉱業技術や生産物との比較は、西アジアの都市機能の発展の解明につながると考えられる。そこで、著者はローマ時代、近代、現世それぞれの鉱山およ

び鉱山跡において、いくつか鉱業活動によって生成された遺物である、精錬スラグと鉱山廃棄物と見られる岩石を採取し、その顕微鏡観察を実施した。本論はその概要を報告する。

2. 調査地域

調査対象地域はベオグラード郊外に位置するコスマイ（Kosmaj）鉱山跡地とボール（Bor）鉱山周辺の鉱山跡地および現世のボール鉱山地域である（図1）。

コスマイ鉱山跡地は、ベオグラードの30 kmほど南部に位置しており、丘陵地に大規模な鉱山廃棄物が分布する（図2）。ボール冶金研究所（MMI-Bor）のレポートによると、この地域における鉱山活動は110年前、および2000年前のも



図1 調査地域

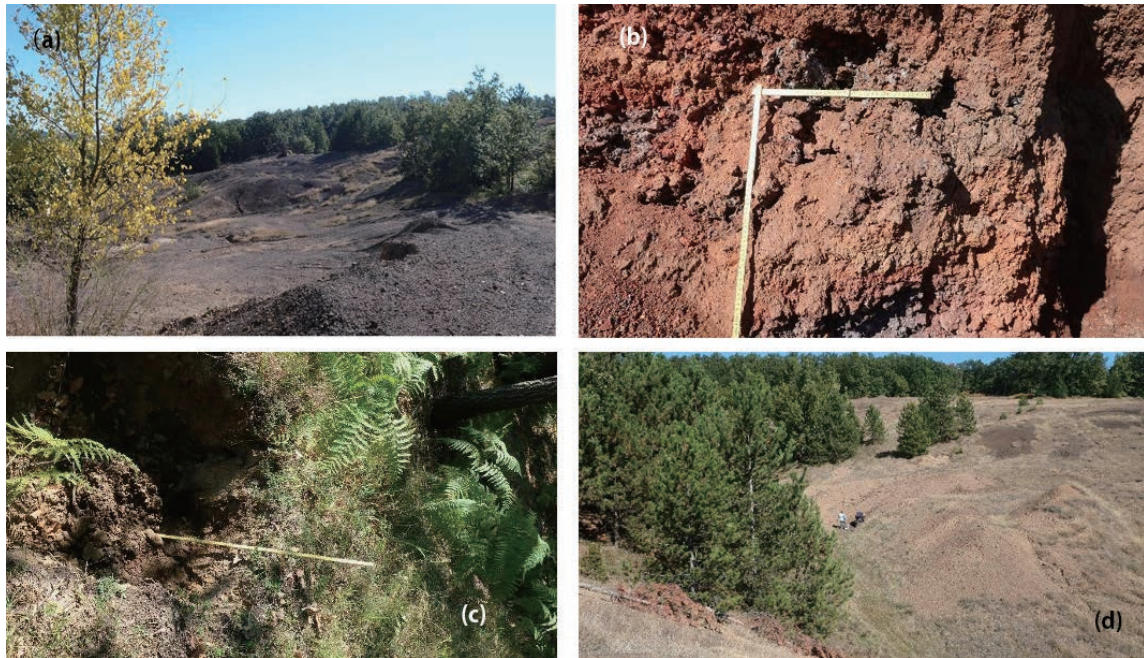


図2 コスマイ鉱山跡地：(a) Kosmaj1、(b) Kosmaj2、(c) Kosmaj4、(d) Kosmaj5

のであり、鉱山廃棄物の量は少なくとも 500 万トンあると見積もられている。この地域の考古学博物館の調査では、皇帝トラヤン時代から 4 世紀まで採掘が行われていたとされている。また、いくつかの歴史学的なデータから、ローマ時代だけで 100 万トンのスラグが生成されたといわれている。さらに、考古学的調査により、約 50 個のローマ帝国時代の坑口が発見されており、12 箇所の採掘場は考古学博物館に登録されている。一方で、18 世紀のオーストリア領であった時代に、採掘活動が再開され、さらに精錬スラグを再利用され始めたと考えられている。この期間に生成されたスラグ中の鉛含有量は 5～6% である。アーカイブデータには、この精錬活動は 1907 年、すなわち 110 年前が最後であると記録されている。

この記録にあるように、コスマイ鉱山跡地では、ローマ時代および近代に鉱業活動が行われていたようである。通常、鉱業生産技術は時代とと

もに発達しているため、より新しい時代に作られた鉱業遺跡のほうが大規模になる。そのため、コスマイ鉱山跡地のうち、現在観察できる廃棄物のほとんどが近代に作られたものと考えられる。ローマ時代の遺物を発掘するためには発掘作業が必要になるが、今回は、地形的な観察から、ローマ時代の遺物の可能性がある場所を推定した。すなわち、近代鉱業活動の遺物と見られるものをいくつか、ローマ時代の可能性のある地形からいくつかの遺物資料を採取した（図 2）。

一方で、ボール鉱山地域は、ベオグラードから約 150 km 南東に位置するボール市に存在する（図 1）。現在いくつかの鉱山が稼働中であり、その中でも Zijin Bor Copper が採掘中の地域はヨーロッパでも最大規模の銅の生産量を持つ。この Zijin Bor Copper が管理する鉱山地域は、1903 年から大規模な採掘が開始された。最初はフランスによる開発であったが、世界の政治情勢の変化に

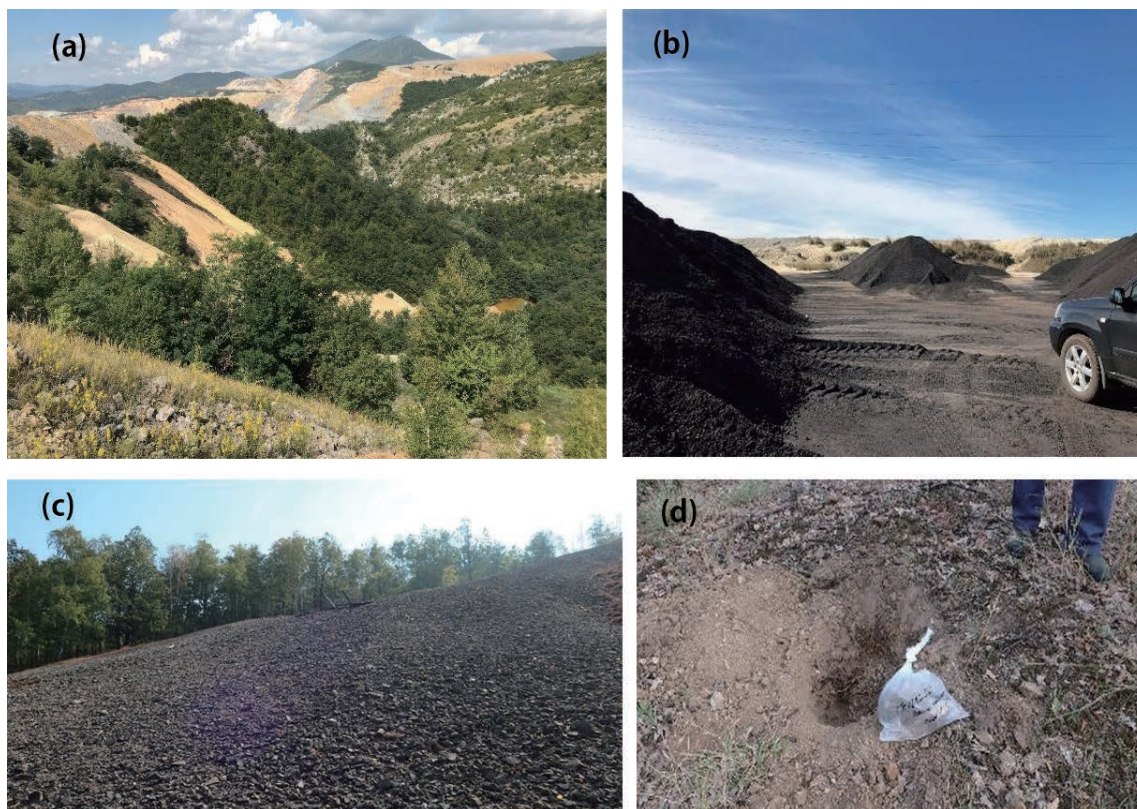


図 3 (a) 現世のボール鉱山、(b) ボール鉱山のスラグ置き場、(c) ボール鉱山地域に点在するローマ時代のも
と考えられる鉱山廃棄物の堆積場 (Roman mine south)、(d) Roman mine north

に伴い、ドイツ、ユーゴスラビアと採掘権を持つ国が変わり、最終的にはセルビアの国有の鉱山となった。さらに、社会体制の変化により民営化され、RTB-Bor 社が鉱業権を取得した。現在は、中国に本社を持つ Zijin Bor Copper が 63% の鉱業権を持ち、鉱業が続けられている。ボール鉱山地域における大規模な採掘は、このように国家的な大型プロジェクトによるものであるが、一方で、小規模な採掘坑や鉱山廃棄物と見られる土砂堆積物が点在する。住民へのインタビューによると、これらの小規模な鉱山跡はローマ時代のものであると先祖から聞いていると言う。

そこで、ボール鉱山地域においては、現在稼働中のボール鉱山から、精錬スラグを 1 点、鉱山

廃棄物を 1 点採取した。また、ボール鉱山地域の北部に位置するクリベリ村に存在する鉱山廃棄物堆積場から 2 箇所 (Roman mine north, Roman mine south) 選び、それぞれから試料を採取した (図 3)。

3. 試料の顕微鏡観察結果

各試料の顕微鏡観察によると、以下のようなことが明らかになった (表 1)。すなわち、コスマイ鉱山跡地では 6 つの試料を採取し、そのうち 2 つがスラグであり、そのほかの 4 つが採掘時の脈石であると考えられた。スラグの一つはローマ時代の産物の可能性がある。もう一方のスラグは 110 年前のスラグである可能性が高い。脈石と考えられる鉱山廃棄物のうちの一つは岩石表面の皮

表 1 セルビアの鉱山および鉱山跡地で採取した試料の顕微鏡観察結果

Sample name	UTM	X_m	Y_m	顕微鏡観察結果
Kosmaj 1	34	461108	4932481	珪質の溶融スラグ。析出結晶・炭化物を含む。Kosmaj 2のスラグに比べて、高密度で流動構造がしっかり発達しており、相対的に高温で出来たと考えられるため、後代（数百年前？）の産物の可能性あり。
Kosmaj 2	34	461052	4932509	珪質の溶融スラグ。析出結晶が発達。地面にそのまま落下したようで、細かいレキを含む。Kosmaj 1のスラグに比べて、多孔質で流動構造が弱く、ローマ時代の産物の可能性あり。
Kosmaj 3	34	460890	4932635	鉱床採掘時の脈石。白雲母を含み、源岩は花崗岩類。熱水流体による鉱化作用の影響を受けており、微小な磁鉄鉱・閃亜鉛鉱を含み、表面に鉄・マンガンの酸化被膜および亜鉛の水酸化物と思われる微少結晶が認められる。皮膜の発達程度から、やや古い産物の可能性あり。
Kosmaj 4	34	460769	4931696	鉱床採掘時の脈石。源岩は花崗岩類もしくは砂岩。鉱化作用の影響は認められないが、熱水による細かい石英脈が認められる。鉱体からやや離れた部分の岩石。
Kosmaj 5	34	460888	4931543	脈石の可能性あり。石灰岩質の部分と珪質（変質した花崗岩類？）が混在しており、表面の一部に溶融スラグと木炭が付着している。
Kosmaj 6	34	460888	4931543	鉱床採掘時の脈石。源岩は花崗岩類か斑岩。熱水によって変質している、鉱化作用の影響は認められない。
Saraka overburden 2	34	590120	4885577	鉱床採掘時の脈石。源岩は花崗岩類で、黒雲母花崗岩か花崗閃緑岩と思われるが、熱水流体による鉱化作用の影響を受けており、微小であるが多量の磁鉄鉱・黄鉄鉱・閃亜鉛鉱、少量の黄銅鉱・方鉛鉱が認められる。おそらく、鉱床の富鉱部の周辺部分に位置した岩石と考えられる。 硫化鉱物（黄鉄鉱・閃亜鉛鉱・黄銅鉱・方鉛鉱）を多く含むため、地表での化学的風化によって、重金属を含む薄い酸性流体の発生源となる可能性がある。この種の脈石の量が少ない場合は環境への影響はそれほど大きくはないが、多いとやや問題となる。
Slag of Old-Bor	34	589389	4879858	石灰の粉末の様な物に柱状結晶が混在している。溶融スラグかどうかはつきりしないため、今後、詳細に調べる。
Roman mine South	34	583873	4888491	鉱床採掘時の脈石。緑泥石化した柱状結晶（元は角閃石か輝石）を含み、源岩は花崗岩類。熱水変質の影響を強く受けているが、鉱化作用の影響は明確ではない。微小な磁鉄を多量に含み、表面に孔雀石と考えられる被膜が付着する。
Roman mine North	34	583973	4889556	鉱床採掘時の脈石。源岩は石灰岩ないし石灰質の堆積岩と思われる。微小な磁鉄鉱・閃亜鉛鉱を含み、表面に鉄・マンガンの酸化被膜が付着する。

膜が発達した古い時代の産物の可能性がある。また、時代は定かではないが、脈石と考えられるものに溶融スラグと木炭が付着していたものもあった。

現世のボール鉱山地域の廃棄物は、鉱床採掘の際の脈石と考えられ、磁鉄鉱、黄鉄鉱、閃亜鉛鉱、黄銅鉱、方鉛鉱が認められた。現世のスラグについては観察では明確な結果が得られなかつ

た。一方で、ボール鉱山地域の Roman mine south で取得した鉱山廃棄物から得た試料は、緑泥石化した柱状結晶を含む花崗岩類の脈石と考えられ、孔雀石と見られる皮膜が観察された。もう一つの Roman mine North から得られた試料も同様に脈石であり、源岩は石灰岩ないし石灰質の堆積岩で、微小な磁鉄鉱、閃亜鉛鉱を含み、表面に鉄、マンガンの酸化皮膜が観察された。

4. 今後の展望

本研究では、セルビア共和国において現世、近代、ローマ時代の鉱山および鉱山跡から鉱業活動の遺物である、精錬スラグと鉱山廃棄物と見られる岩石を採取し、その顕微鏡観察を実施した。その結果、ローマ時代の産物と考えられるスラグおよび鉱山廃棄物が発見された。ローマ時代の産物であれば、西アジア研究で得られる鉱業生産物と比較することによって、その文明の関連性や物資の移動などの都市化に伴う資源集積システ

ム、コミュニケーション網の発達過程を解明することにつながる。今後、微量元素分析などの詳細な化学分析を実施することにより、ローマ時代におけるセルビア周辺の冶金技術の解明し、西アジアの都市文明との関連について明らかにしていきたい。

謝辞：本調査はセルビア共和国ボール冶金研究所（Mining and Metallurgy, Bor）のスタッフの協力によって実施された。ここに謝意を表する。

西アジアの古環境復元に向けて

－イラン北西部のザグロス山脈に分布する 石灰質化学沈殿岩の現地調査報告－

浅原 良浩¹・南 雅代²・ラズーリ ハディ³・アジジ ホセイン⁴

¹名古屋大学大学院環境学研究科 ²名古屋大学宇宙地球環境研究所
³クルディスタン大学理学部（イラン） ⁴クルディタン大学工学部（イラン）

1. はじめに

西アジアにおける古環境変動の解明を目的とし、2018年10月に筆者ら4名はイラン北西部に数多く分布する石灰質化学沈殿岩の現地調査を行った。2011年より筆者の浅原とアジジは、イラン北西部のザグロス造山帯およびその周辺域の火成活動と鉱床の成因解析に関する共同研究を実施している。その現地調査の中で、ジュラ系・白亜系の深成岩・半深成岩体の周辺に分布する中生界の石灰岩や、第三紀・第四紀の火山の周辺域に分布する温泉生成物のトラバーチンにも注目し、火成活動とトラバーチン生成の関係、またこの地域の古環境解析へのトラバーチンの利用の可能性について検討してきた。2018年度より新学術領域研究（研究領域提案型）計画研究「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」を開始するにあたり、トラバーチンを利用した古環境解析を本格的に実施する。

ザグロス造山帯は、アルプス・ヒマラヤ造山帯の間に位置し、イラン西部を南東から北西に、さらにイラク、トルコに延びている。ザグロス造山帯は、ジュラ紀から白亜紀にネオテチス海プレートが小イランプレート（ユーラシアプレートの一部）の下に沈み込み、さらにアラビアプレートが衝突し、形成されたと考えられている。ザグロ

ス山脈の北東縁にザグロス衝上断層が走り、南西側にザグロス衝上帯（Zagros Fold Belt）、北東側にサナンダジ・シルジャン帯（Sanandaj Sirjan Zone）が平行に走っている（図1）。ザグロス衝上帯には、シルル系から白亜系の石灰岩が広く分布しており、サナンダジ・シルジャン帯には主に古生界と中生界の石灰岩などの堆積岩、火成岩とその変成岩が分布している。このように、ザグロス衝上帯、サナンダジ・シルジャン帯には石灰岩が広く分布している。

これらの石灰岩が、雨水、地表水、地下水など

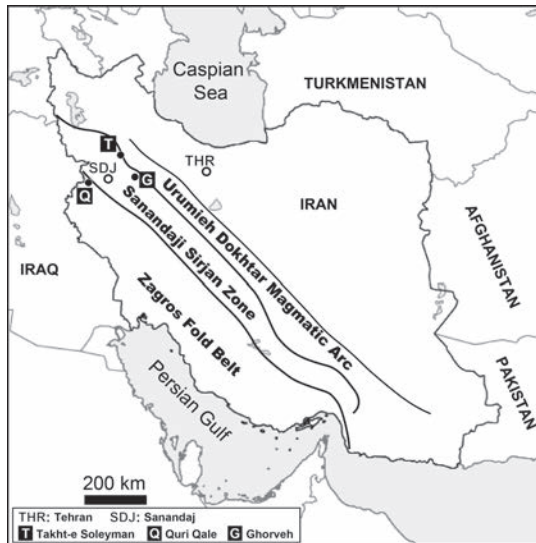
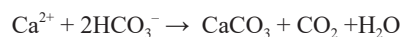


図1 簡略化したイランの地質構造図。Stöcklin (1968) および Nouri et al. (2018) の地質図をもとに作成。

によって一旦溶解し、再度沈殿した化学沈殿岩がトラバーチンである。トラバーチンには、鍾乳石や温泉生成物など、組織・構造や生成過程、産状によって様々な分類、名称がある。ザグロス衝上帯には鍾乳洞が多く発達しており、サナンダジ・シルジャン帯北部では第三紀から第四紀の火成活動にともなう温泉生成物のトラバーチンが多産する。

この炭酸カルシウムの沈殿過程は、基本的には次の化学反応式で表せる。



例えば、温泉生成物のトラバーチンの場合、湧水（温泉水）が湧出する時、地下の高い圧力で水に溶け込んでいた二酸化炭素（炭酸イオン）が圧力解放によって脱ガスし、溶存していたカルシウムイオン（ Ca^{2+} ）が炭酸カルシウム（ CaCO_3 ）を生成して沈殿する。この沈殿物は、湧水の化学組成などの情報、沈殿生成時の温度などの情報を記録していることが期待される。

本研究は、イラン北西部の石灰質化学沈殿岩を利用し、西アジアの古環境変動解析を行うことである。この地域のトラバーチンについては、Zarasvandi et al. (in press)、Roshanak et al. (2018)などの先行研究があるが、トラバーチン岩石試料の化学分析、炭素・酸素同位体分析が中心であり、古環境解析への利用を視野に入れた年代測定や、湧水とトラバーチンの両試料の分析結果の直接対比はほとんど行われていない。本研究では、(1) 形成年代の推定、(2) 形成速度の推定、(3) 地下水の起源解析、および (4) 古環境復元、を目的とする。まず、目的の (1)、(2) のトラバーチンの形成年代および形成速度の推定を行うため、炭素 14 (^{14}C) 年代の適用を試みる。この年代データに基づき、さらに形成プロセスを検討し、イラン北西部の古環境復元試料としてのトラバーチン

の可能性を検討する。

本報告では、イラン北西部のザグロス衝上帯に分布する鍾乳洞と、サナンダジ・シルジャン帯のタカブ〜ゴルベ地域に分布するトラバーチンの調査地域の地質概要と採取試料について説明する。最後に、クルディスタン大学で行ったセミナー講演について報告する。

2. 調査方法

調査は、イラン北西部・クルディスタン州の州都サナンダジ市にある国立の総合大学クルディスタン大学を拠点とし、日帰りで各地の調査を実施した。2018 年 10 月 14 日から 10 月 24 日の期間に、イラン北西部のケルマンシャー州、西アゼルバイジャン州、クルディスタン州において鍾乳洞、トラバーチン鉱山などの石灰質化学沈殿岩の現地調査を行い、岩石試料および水試料の採取を実施した。採水試料については、空気（大気）が混入しないよう、100 mL ボトルに満水になるまで採水して密栓した。試料ボトルには、ガスの遮断性が高いプラスチック容器、PAN 製（アクリルニトリル製）ボトル（ニッコー・ハンセン社）を使用した。現場では、採水時にコンパクト型水質計で温度、pH、導電率、カルシウムイオン（ Ca^{2+} ）濃度も測定した。

3. 調査地の地質概要と石灰質化学沈殿岩

a) コリカレ洞窟

コリカレ（Quri Qale、Quli Qaleh）洞窟は、イラン北西部・ケルマンシャー州西部のラバンサー（Ravansar）市の中心から約 30 km 北に位置する鍾乳洞であり、観光地にもなっている。この地域は地下水が豊富であり、ラバンサー市の中心には湧水の池がある。市街地からコリカレ洞窟に向か

う道路沿いには鍾乳洞が点在している。コリカレ洞窟は全長約 13 km と言われているが、一般の人が立ち入ることができるのは入口から 200 ～ 300 m までである。

コリカレ洞窟付近の地質図は入手できていないが、近接する “Kamyaran” と “Paweh and west Paweh” の 10 万分の 1 地質図（イラン地質調査所発行）によると、ザグロス衝上断層の南西のザグロス衝上帯の中に位置しており、中生代初期（ジュラ紀）の堆積岩（石灰岩、チャート、頁岩）が分布している。

洞窟内の空気は、比較的“乾いた”感じがあり、滴下している水量は少なく、現在は鍾乳石の発達は停止しつつあると推察された。洞窟内で滴下水を採取したが、100 mL のボトルを満たすのに 30 分以上かかった。立入禁止となっている洞窟の奥のエリアでの採水を洞窟の管理者に依頼したところ、採水量は十分にあったことから、洞窟の奥は現在も滴下水も多く、鍾乳石が発達している可能性がある。

当初、滴下水中の無機炭酸と石筍の ^{14}C 濃度と化学組成を対比するために滴下水と石筍のセットでの採取を予定していたが、古環境解析に利用可能な大きさを持つ、現在成長中の石筍は採取できなかった。コリカレ洞窟の石筍については、ラズーリらが数年前に採取した石筍を保有しており、その試料を利用する予定である。

b) タフテ・ソレイマーン

タフテ・ソレイマーン（Takht-e Soleyman）は、イラン北西部・西アゼルバイジャン州タカブ（Takab）市から約 20 km 北に位置する。標高は約 2000 m である。タフテ・ソレイマーンは、ササン朝時代の国教・ゾロアスター教の聖地であり、

ササン朝時代の宗教施設群やフレグ・ウルス時代の宮殿遺跡群の史跡である。2003 年には世界遺産に指定されている。これらの遺構は、直径約 100 m、水深約 100 m の円形の湖を中心とした円形台地に建てられているが、この円形台地がトラバーチンで構成されている。現在も湖底から水が湧き出しており、この湧き出した水は、現在は水路を通して史跡の外へ流れ出ている。タフテ・ソレイマーンの約 2 km 西の道路沿いには、高さ約 100 m の円錐状のトラバーチンの山、ゼンダン・ソレイマーン（Zendan-e Soleyman）があり、さらに約 2 km 西の道路沿いには温泉施設を備えた公園もある。

“Takht-e Soleyman” の 10 万分の 1 地質図によると、タフテ・ソレイマーンの地域には南北 1 ～ 2 km、東西 5 km にわたって第四系のトラバーチン堆積物が広がっており、その周りは新第三系の赤色泥灰岩（marl）・砂岩に接している。この地域は、東西に伸びるゼンダン・ソレイマーン断層上に位置しており、トラバーチンを形成する地下水の起源・経路と密接に関係していることが推察される。約 5 km 東には、北北西－南南東に伸びるキナルジェ・チャタグ（Qeynarjeh Chartagh）断層があり、これは約 100 km 東にあるタブリース断層や約 150 km 西にあるザグロス衝上断層と平行に延びている。このタフテ・ソレイマーンの南側には、幅 10 km 以上の広がりを持つ第四系のトラバーチン堆積物もある。

この地域は、イラン・ザグロス造山帯のサナダジ・シルジャン帯の中の、第三紀から第四紀の火成活動が活発なハマダン－タブリース火山帯（Hamadan-Tabriz volcanic belt: HTV belt; Azizi and Moinevaziri, 2009）に位置しており、これらのトラバーチンは熱水活動で生じた石灰質化学沈殿岩

と考えられている (e.g. Roshanak et al., 2018)。この遺跡の湖およびその周辺地域では、現在も地下水や温泉が湧き出し、様々な規模のトラバーチンの円形台地が多数形成されている。しかしながら、この地域のトラバーチンの形成年代や形成過程についての詳細な科学的調査は少ないのが現状である。また、この地域のトラバーチン試料の古環境解析への利用可能性は検討されていない。

本調査では、トラバーチンを生成する湧水中の無機炭酸の ^{14}C 濃度を分析するため、タフテ・ソレイマーンの湖水を採取した。さらに、湧水中の無機炭酸とトラバーチンの ^{14}C 濃度を直接対比するため、タフテ・ソレイマーンに近接するゼンダン・ソレイマーンで湧水とトラバーチンの試料採取を行った。ゼンダン・ソレイマーンを中心では現在湧水はなく、頂上は直径 10 m ほどの穴が空いており、頂上から地上付近の高さまで円柱状の空洞となっている。空洞からは硫化水素の臭いがわずかにあり、火山起源のガスと考えられる。2018 年 10 月の調査時には、このゼンダン・ソレイマーンの麓に小さな湧水があり、直径 3 ~ 4 m の小さな水溜りのような池になっていた。この湧水から、水試料とこの水溜りの池の底から“できたて”のトラバーチンを採取するとともに、この小さな池の周辺にある、比較的形成時期が新しいと考えられるトラバーチン試料も採取した。ゼンダン・ソレイマーンの山からは、2017 年に筆者の一人ラズーリらが層序にしたがって連続的にトラバーチン試料を採取しており、これらの試料の分析も行う予定である。

c) ゴルベ地域

ゴルベ (Ghorveh, Qorveh) 市のトラバーチン地域は、タフテ・ソレイマーンの南南東約 150

km に位置している。クルディスタン州ゴルベ市の市街地から約 5 km 北には、セリッシュ地区 (Serish Abad) のトラバーチン鉱山が、その約 10 km 東にはババ・ゲーゲー地区 (Baba Gorgor) の湧水とトラバーチンがある (図 2)。いずれの標高も約 1700 m である。“Ghorveh” の 10 万分の 1 地質図によると、市街地の北部の地域は、第四系のトラバーチンが広がり、新第三系の石灰質岩石に接している。近隣には第三紀、第四紀の火山岩が分布する (e.g. Azizi et al., 2014)。ゴルベ地域は、タフテ・ソレイマーン地域と同じく、サナンダジ・シルジャン帯の中のハマダン - タブリース火山帯に含まれる。ババ・ゲーゲーの約 40 km 東には、イラン最大級の鍾乳洞とも言われているアリ・サドル洞窟 (Ali Sadr Cave) があるが、これもハマダン - タブリース火山帯に位置している。

世界的に有名なアリ・サドル洞窟のような観光地ではないものの、ババ・ゲーゲーも観光地となっており、湧き水やトラバーチンの丘が旅行者の憩いの場となっている。ババ・ゲーゲーの周辺の村には葡萄畑が多く見られる。石灰質の土壌は葡萄の生育に適しており、良質のワインが輸出されているとのことである。Roshanak et al. (2018) は、ババ・ゲーゲーのトラバーチンの鉱物学的観察と炭素・酸素同位体分析の結果から地下水の起源について考察しているが、地下水（湧水）そのものの分析は行っていない。また、 ^{14}C 濃度も分析されていない。本調査では、湧水とトラバーチンの ^{14}C 濃度、化学組成の直接対比を行うため、トラバーチンと湧水の採取を行った。

ババ・ゲーゲーのモスクの南側の小さな湧水池、モスク脇（東側）の小さな湧水池、モスクの北東約 300 m の小高い丘の上の湧水池で採水を行った。モスクの南側と脇の小さな湧水池は、2017

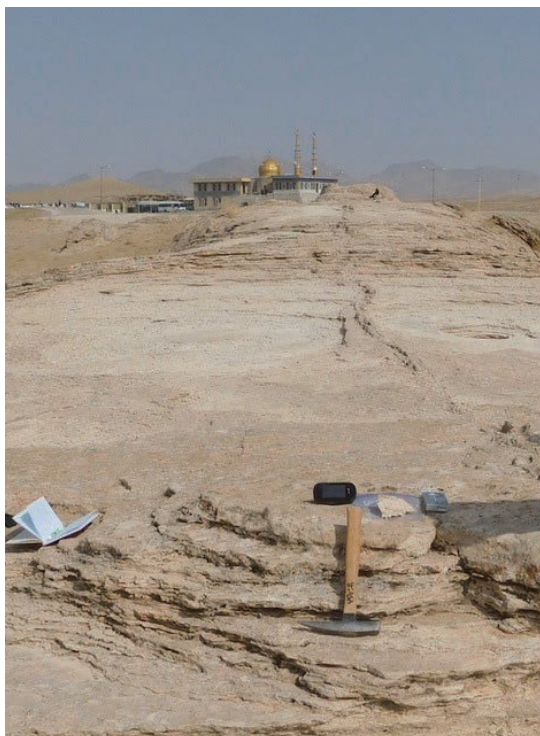


図2 ゴルベ地域ババ・グーグーのトラバーチンの丘。全長約 300 m の細長い丘で、奥に見えるモスクの周辺では湧水が 2 箇所見られた。さらに 300 m 進んだところには少し大きなトラバーチンの丘があり、中央に湧水池があった。

年 6 月に浅原が予備調査で訪れた際には、地面から少し湧き出している程度であったが、2018 年 10 月には湧水量も増え、大きくなっていた。丘の上の湧水池は、鉄分で褐色に濁っていたが、池の中心付近からガスとともに活発に湧水している様子が観察できた。大量の鉄分は、地下水に溶存していた二価鉄が大気に触れて酸化して、水酸化鉄（III）として沈殿したものと考えられるが、多量の溶存鉄を含む地下水は一般的には火山起源を示唆している。モスク周辺の小さな湧水池付近では硫化水素の臭いがしたこと、また、池の底には硫化物と思われる黒い沈殿物が見られたことも、地下水が火山起源であることを強く示唆している。

モスクから約 50 m 南には、高さ約 5 m、幅約

5 m の約 300 m 長の細長いトラバーチンの丘がある。このトラバーチンの丘には湧水は見られないが、モスク付近の湧水の位置関係などから推察すると、最近まで湧水によって成長していた可能性がある。このトラバーチンの丘からは、時系列的な分析ができるよう、層序を確認しながら連続的に岩石試料を採取した。

セリッシュのトラバーチン鉱山は、セリッシュの集落から 2 km 東にある、現在も稼働中の鉱山である。イラン北西部のトラバーチンは世界的にも有名であり、国内利用だけでなく海外にも輸出され、石材として広く用いられている。

近接するババ・グーグーの湧水、トラバーチンとの対比を目的として、この鉱山内でも湧水とトラバーチンの岩石試料を採取した。鉱山では、きれいな露頭を観察することができ、層序を明瞭に確認できることから、今後、この鉱山のトラバーチンを連続的に試料採取することも検討している。

4. おわりに

本調査期間中の 10 月 21 日には、筆者の浅原と南は、同じく筆者のラズーリとアジジが所属するクルディスタン大学の理学部において、地球科学や鉱山学の分野の教員・学生向けのセミナー講演を行った。講演題目は次のとおりである。

Asahara, Y., Mano, K., Tsuboi, M., Azizi, H., Shin, K., Lee, S.G., “Sr-Nd-Fe isotopic constraints on the origin of Kiruna-type deposit in Zanjan, NW Iran”.

Minami, M., “Radiocarbon dating: its principle, method and application”

両テーマに共通する同位体分析は、現在の地球科学・環境科学・考古学における年代決定や起源解析に欠かせないものである。浅原は、アジジと共同で 2011 年より実施しているイラン国内の鉱

床成因解析に関する共同研究の成果の紹介として、「イラン北西部の磁鉄鉱床の地球化学的・同位体的特徴と成因」について講演した。また、南は、今後のクルディスタン大学の研究者との共同研究の強化を見据え、古環境復元の基盤にもなる「 ^{14}C 年代測定の基礎と ^{14}C に関する最新の地球化学」について講演した。英語に不慣れな学生にも配慮し、講演の前と後にアジジがペルシャ語による解説を加えたおかげで、議論がより一層深められた。質疑応答では、年代測定、同位体分析の技術やその応用について活発な議論が交わされた。イランは、地質学的にも考古学的にも世界的に重要な地域であるが、様々な制約からイラン国内での同位体分析・年代測定が困難であり、このような背景から同位体地球化学への関心が高い。

2018 年 10 月の本調査で採取した試料および 2016 ~ 2017 年に採取した試料については、現在、化学分析・同位体分析、 ^{14}C 年代測定を進めており、 ^{14}C 年代を中心にデータが取得されつつある。これらのデータに基づき、2019 年度にはイラン北西部を中心に石灰質岩石の調査地域を広げ、西アジアの古環境復元に適した試料の探索を進める。これらのデータの詳細については、学術雑誌にて発表する予定である。

謝辞

本調査を実施するにあたり、名古屋大学環境学研究科とクルディスタン大学工学部の部局間学術交流協定（平成 25 年締結）に基づき、クルディスタン大学からビザ発給、鉱山調査の許可申請、調査用車両の手配など、多大な支援を受けた。本研究は、平成 30–34 年度の新学術領域研究（研究

領域提案型）計画研究（課題番号 18H05447, 研究代表者 安間了）と平成 29–32 年度基盤研究 (A)（海外学術）（課題番号 17H01671, 研究代表者 浅原良浩）の支援を受けた。また、 ^{14}C 年代測定では、名古屋大学宇宙地球環境研究所の平成 30 年度加速器質量分析装置等利用（共同利用）(No. 300907) の支援を受けた。ここに記して謝意を表する。

参考文献

- Azizi, H. and Moinevaziri, H. (2009) Review of the tectonic setting of Cretaceous to Quaternary volcanism in northwestern Iran. *Journal of Geodynamics* 47, 167–179.
- Azizi, H., Asahara, Y., Tsuboi, M., Takemura, K. and Razani, S. (2014) The role of heterogenetic mantle in the genesis of adakites northeast of Sanandaj, northwestern Iran. *Chemie der Erde* 74, 87–97.
- Nouri, F., Azizi, H., Stern, R.J., Asahara, Y., Khodaparast, S., Madanipour, S. and Yamamoto, K. (2018) Zircon U–Pb dating, geochemistry and evolution of the Late Eocene Saveh magmatic complex, central Iran: Partial melts of sub-continental lithospheric mantle and magmatic differentiation. *Lithos* 314–315, 274–292.
- Roshanak, R., Moore, F., Zarasvandi, A., Keshavarzi, B. and Gratzner, R. (2018) Stable isotope geochemistry and petrography of the Qorveh–Takab travertines in northwest Iran. *Austrian Journal of Earth Sciences* 111, 64–74.
- Stöcklin, J. (1968) Structural history and tectonics of Iran: a review. *AAPG Bulletin* 52, 1229–1258.
- Zarasvandi, A., Roshanak, R., Gratzner, R., Pourkaseb, H. and Moore, F. (in press) Stable isotope geochemistry of travertines from northern Urumieh–Dokhtar volcano-plutonic belt, Iran. *Carbonates and Evaporites* DOI: 10.1007/s13146-017-0405-y

イラク国北部 Qalat Said Ahmadan 出土の 黒曜石製石器の化学組成と原産地推定

安間 了¹・前田 修²・常木 晃²

¹ 徳島大学社会産業理工学研究部 ² 筑波大学人文社会系

1. はじめに

黒曜石は石器の材料として普遍的に用いられているが、農耕文明・都市文明の発祥の地として知られるチグリス・ユーフラテス川流域ではその産出は限られており、とくに中・下流域の平野部、いわゆるメソポタミア地方ではまったく産出がみられない。このため、メソポタミア地方で黒曜石製の石器が認められる場合、ただちに長距離輸送を伴う外来物であることが判断できる。したがって、黒曜石の原産地を特定することができれば、都鄙交通のパターンやその時空間的な変化の指標として利用することが可能である。

黒曜石は火山活動に伴って産出する。噴出した溶岩が水に接したりして急冷した場合、鉱物の結晶化を伴わないガラス質の黒曜石が形成される。チグリス・ユーフラテス川上流域の東部アナトリア地方、その北方のアルメニア地方、カッパドキアを中心とする中部アナトリア地方では、アラビア半島の衝突に伴って褶曲山地が形成されるとともに、活発な火山活動が認められる。これらの地域では多くの黒曜石の産出が報告されており、その化学組成については、原産地推定を目論む考古学者によって、地球化学的議論にも充分たえる品質のデータが報告されている（図1: Chataigner and Gratuze, 2014a, b; Frahm, 2012, Frahm et al.,

2016; Poupeau et al., 2010)。一部産地不明の化学組成をもつ黒曜石も残されているものの、原産地推定を行うためのデータベースは良くそろっていると言つてよい状況にある。

一方、石器として出土する黒曜石の化学分析は、各種分析機材の普及とともに、初期には主

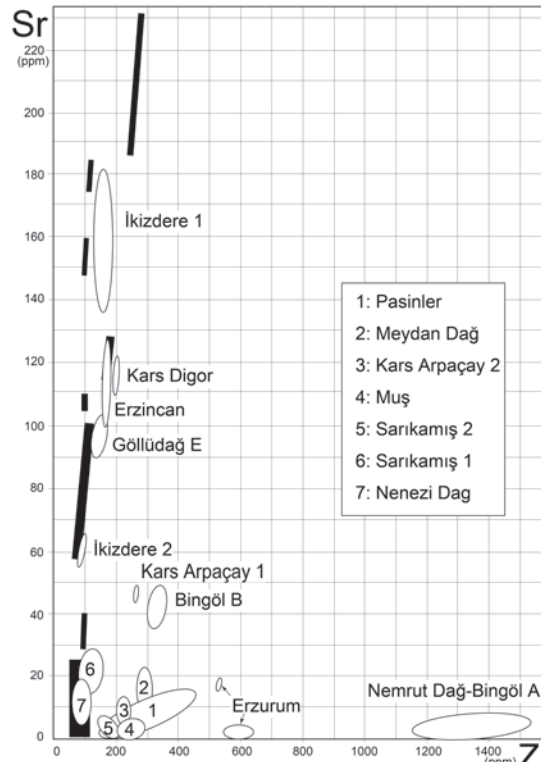


図1 アナトリア地方（楕円）およびアルメニア地方産黒曜石（黒四角）の化学組成幅



図2 Qalat Said Ahmadan 位置図。赤三角は比定された黒曜石産地、青三角はその他の黒曜石産地を示す。B: Bingöl, M: Meydan Dağ, N: Nemrut Dağ, S: Sarıkamış。

に大学・博物館などに収蔵されたコレクションを対象におこなわれ、大きな成果をあげてきた (Maeda, 2009; Campbell and Healey, 2016 ほかマンチェスター大学を中心とする多くの論文がある)。可搬型 XRF (pXRF) などの小型機材が普及してきた現在では発掘地での測定が可能になってきた (Frahm et al., 2014)。この研究では、イラク国北部クルド人自治区のスレイマニヤで発掘され、国外への持ち出し困難な黒曜石試料を、現地で測定した例を紹介する。今回化学分析値を報告する試料は、2014 年と 2015 年の 2 シーズンにわたって常木らによって発掘されたスレイマニヤ県北部 Qaladizah 市北方に位置する Qalat Said Ahmadan で出土した黒曜石である (図 2, Tsuneki et al., 2014, 2015)。

2. 研究方法

本研究では 2017 年にリリースされた可搬型

XRF Olympus VANTA (Frahm, 2017) を黒曜石試料が保管されている Slemani 博物館にもちこみ、研究室の一角を使って測定を行った (図 3)。発掘時にバケツごとに洗浄・分離し、まとめられた黒曜石製石器試料を、写真の番号 (図 4) にしたがつて片端から測定を行った。前処理は、試料表面の汚れを水道水と歯ブラシで落とし、水気をぬぐい、エタノールで表面を拭き取ったうえで自然乾燥させた。表面に白色鉱物が付着している場合 (図 4 の②)、これが少量でまばらに分布する場合は歯科用のスクレーパーやピンセットなどを使用して除去し洗浄したうえで測定を行ったが、多量に付着して測定に影響があると判断した場合には、測定は行わなかった。

測定条件は電圧 40 kV、電流 40 μ A、照射時間は Beam 1 が 20 秒、Beam 2 が 30 秒である。測定の精度と確度を確認するため、産業技術総合研究所が配布する火成岩標準試料 (JB-2 玄武岩、JA-1



図3 Slemani 博物館における測定状況

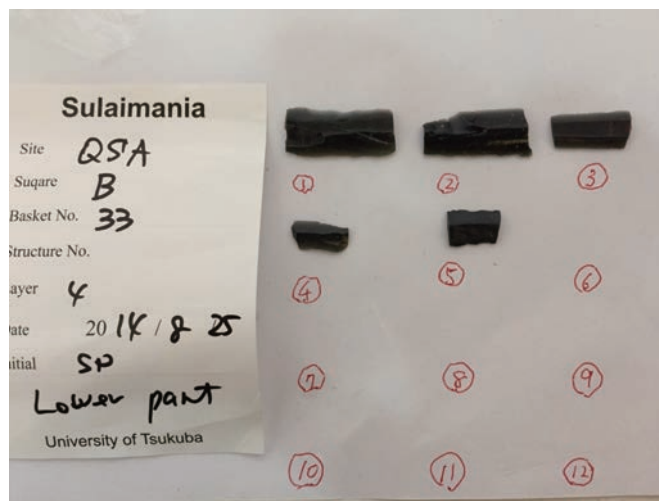


図4 Qalat Said Ahmadan 出土の黒曜石と測定番号。
写真横幅は ~15 cm

安山岩、JA-2 高マグネシウム安山岩、JR-2 流紋岩、JG-1 花崗岩、JG-2 花崗岩および JGb-1 斑れい岩) および堆積岩標準試料 (JDo-1 ドロマイト、JLs-1 石灰岩、JLk-1 湖成堆積物、JSd-1, 3 河川堆積物) の繰り返し測定を、未知試料の分析の合間に適宜行った。繰り返し測定精度あるいは試料の均質性をみつめるため、全ての測定は同じ測定条件で3回ずつ行った。

測定は照射口を上向きにした VANTA を下部に装着した X 線遮蔽ワークステーションの中で行った (図3)。粉末状標準試料の測定は、容器に入れたうえでプロレンフィルムを通して行っているため、少しでも分析条件を整えるために黒曜石試料についても VANTA 照射口のうえにプロレンフィルムを敷いたうえで行った。黒曜石試料の厚みが測定値に与える影響についてはさらに検討の余地がある。幅 1 mm 以下の薄い試料では、主要元素組成にある程度の影響を及ぼしているようであり、あきらかに異常値と考えられるデータは削除した。

3. 結果

標準試料の繰り返し測定の結果はさらに検討する必要があるが、測定可能なもっとも軽い元素である Mg についても、1.5% 以上存在している場合には濃度の 15% 程度の標準偏差で測定可能であった。以下の議論で用いられる Zr, Fe, Sr, Mn についてはさまざまな濃度を持つ標準試料の推奨値と一致する結果が得られた。それぞれの元素の検出限界を一桁以上超える濃度を持つ場合、繰り返し測定の標準偏差は 5% 以下であった。

識別図として良く用いられる Zr-Sr 散布図上では、Qalat Said Ahmadan 産黒曜石は主に 4 グループに分けられる (図5)。ここでは、1000 ppm を越える高い Zr 含有量を持ち Sr をほとんど含まない黒曜石をグループ 1、Zr は 300 ppm 程度で Sr 含有量が 40 ppm を越えるものをグループ 2、おなじく Zr は 300 ppm 程度でありながら Sr 含有量が 30 ppm を越えないものをグループ 3、Zr が 100 ppm 程度で 30 ppm 以下の Sr を含む黒曜石をグループ 4 とする。グループ 1 の黒曜石は、岩石

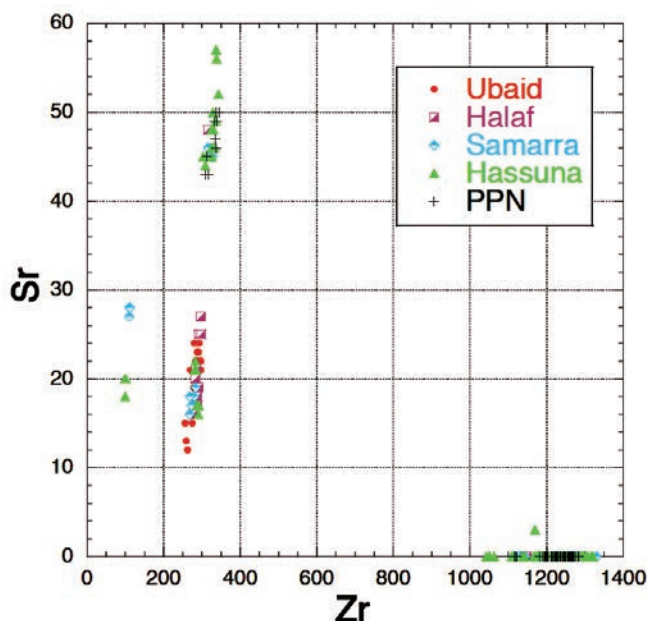


図5：Qalat Said Ahmadan 産黒曜石の Zr-Sr プロット（一試料あたり3回の計測値をプロット）。

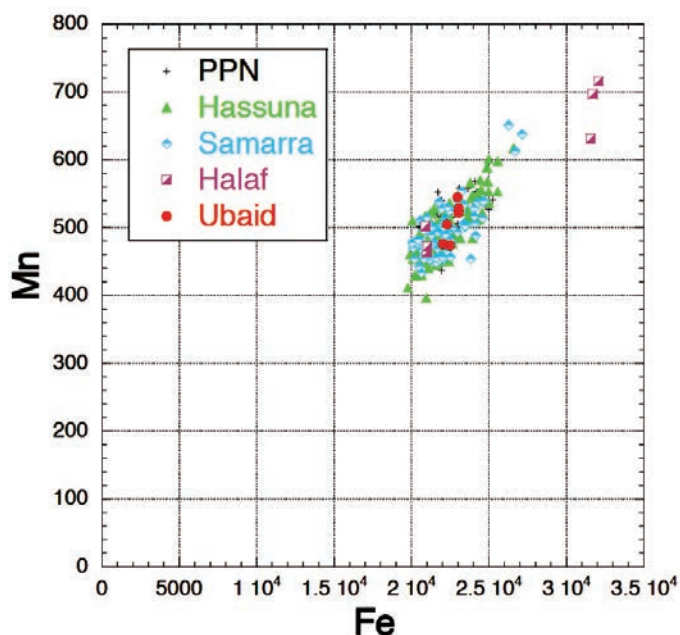


図6 Qalat Said Ahmadan 産グループ1 黒曜石の Fe-Mn プロット。ウバイド期、ハラフ期、サマッラ期黒曜石の組成分布を際立たせるため、図5とプロット順を逆にしている。

学的には per-alkaline に分類され、光に透かすと緑がかったため、肉眼でも識別可能である。Zr 含有量の少ない黒曜石は calc-alkaline に分類されるが、3つのグループを併せても、グループ1の出土点数には及ばない。

これまでに公表されている論文の黒曜石原産地データ（図1：Campbell and Healey, 2016; Chataigner and Gratuze, 2014a, b; Frahm, 2012; Frahm et al., 2016; Nishiaki et al., 2019; Poupeau et al., 2010）と照らし合わせると、グループ1の黒曜石の産地としては Nemrut Dağ あるいは Bingöl A に、グループ2の黒曜石は Bingöl B、グループ3の黒曜石は Meydan Dağ に比定できるようである。2試料しかなかったグループ4の黒曜石産地としては北東アナトリアの Sarıkamış 1 かアルメニア産である可能性が大きい（図1）。

名古屋大学グループによって決定された ^{14}C 年代（Minami and Tomiyama, 2015）および同じ地層から出土する土器の様式（Tsuneki et al., 2015）から総合的に求められた黒曜石出土層の年代情報（Tsuneki et al., 2016）を用いて組成を時代ごとに色分けしてみる（図5, 6）と、以下のようなことが明らかになった。I) グループ1の黒曜石は、先土器新石器時代末期からサマッラ期にかけてもっとも多用されており、ウバイド期にいたるまでその利用は継続されている（図6）。II) ハッスーナ期には識別された全てのグループにわたる黒

曜石石材が用いられている（図 5）。III) サマッラ－ハラフ期と時代がくだるにつれて黒曜石石材の多様性は乏しくなり、ウバイド期にはグループ 3 の黒曜石が多く利用されるようになる（図 5）。

先土器新石器時代末期に多く出土するグループ 1（Nemrut Dağ または Bingöl A）およびグループ 2（Bingöl B）の黒曜石産地は Van 湖にほど近い南東アナトリアに位置しており、この時代には 300 km の距離を越えてスレイマニヤ北部まで南東アナトリア産黒曜石が多くもたらされていたと考えられる。ハッスーナ期には、さらに北方からの黒曜石ももたらされるようになった可能性があるが、ウバイド期には距離的に近接する Meydan Dağ 産の黒曜石の利用に落ち着いたようである。

4. まとめ

インフラ設備が良好とは言えず、十分に試料洗浄を行うこともできない環境の中での測定ではあったが、議論に十分に耐えうるデータが取得できた。

先土器新石器時代末期には 2 グループの黒曜石が利用されていたにすぎないが、ハッスーナ期には Qalat Said Ahmadan に出現する全てのグループの黒曜石が利用されており、さまざまな試みがなされていたことが推定される。サマッラ期からハラフ期にかけては黒曜石の多様性はだんだん収束していく傾向にあり、ウバイド期にはごく限られた産地の黒曜石が利用されていることがわかった。

グループ 1 の黒曜石の産地としては Nemrut Dağ あるいは Bingöl A が、グループ 2 には Bingöl B、グループ 3 の黒曜石産地には Meydan Dağ が比定されそうである。やや北方からもたらされた可能性を残すグループ 4 を除き、ほかの産地は全て Van 湖周辺部の南東アナトリアに位置

している。先土器新石器時代末期には、スレイマニヤ北部にも南東アナトリア産の黒曜石が多くもたらされていたことが確認された。

今後はチャルモなど周辺遺跡からの黒曜石組成情報を収集し、データベースを構築するとともに、長距離交易発達の実像をさらに詳細に明らかにしていく予定である。

謝辞

本研究で使用した Olympus 社製 pXRF VANTA は、研究協力者の大阪学院大学・渡辺千香子准教授が採択された科学研究費補助金（基盤研究 B）17H04493「アッシリア浮彫の石材分析から挑む産地同定と復元」によって購入したものである。議論に利用した ^{14}C 年代は、研究協力者の名古屋大学・南雅代准教授に測定していただいた。これらの方々に深く感謝いたします。

参考文献

- Campbell, S. and Healey, E., 2016, Multiple sources: The pXRF analysis of obsidian from Kenan Tepe, S.E. Turkey, *Journal of Archaeological Science: Reports*, 10, 377–89.
- Chataigner, C. and Gratuze, B., 2014a, New data on the exploitation of obsidian in the southern Caucasus (Armenia, Georgia) and eastern Turkey, part 1: Source characterization, *Archaeometry*, 56, 25–47.
- Chataigner, C. and Gratuze, B., 2014b, New data on the exploitation of obsidian in the southern Caucasus (Armenia, Georgia) and eastern Turkey, part 2: Obsidian procurement from the Upper Palaeolithic to the Late Bronze Age, *Archaeometry*, 56, 48–69.
- Frahm, E., 2012, Distinguishing Nemrut Dağ and Bingöl obsidians: Geochemical and landscape differences and the archaeological implications, *Journal of Archaeological Science*, 39, 1436–44.

Frahm, E., 2017, First hands-on tests of an Olympus VANTA portable XRF analyzer to source Armenian obsidian artifacts, *International Association for Obsidian Studies Bulletin*, 58, 8–23.

Frahm, E., Schmidt, B. A., Gasparyan, B., Yeritsyan, B., Karapetian, S., Meliksetian, K. and Adler, D. S., 2014, Ten seconds in the field: Rapid Armenian obsidian sourcing with portable XRF to inform excavations and surveys, *Journal of Archaeological Science*, 41, 333–48.

Frahm, E., Campbell, S. and Healey, E., 2016, Caucasus connections? New data and interpretations for Armenian obsidian in northern Mesopotamia, *Journal of Archaeological Science: Reports*, 9, 543–64.

Maeda, O., 2009. *The Materiality of Obsidian and the Practice of Obsidian Use in the Neolithic Near East*. PhD thesis. University of Manchester.

Minami, M. and Tomiyama, S., 2015. Radiocarbon dating of charcoal remains excavated from Qalat Said Ahmadian, Al-Rafidan, 36, 53–57.

Nishiaki, Y., Maeda, O., Kannari, T., Nagai, M.,

Healey, E., Guliyev, F. and Campbell, S., 2019. Obsidian provenance analyses at Göytepe, Azerbaijan: Implications for understanding Neolithic socioeconomies in the southern Caucasus, *Archaeometry*, doi: 10.1111/arc.12457.

Poupeau, G., Le Bourdonnec, F-X., Carter, T., Delerue, S., Shackley, M. S., Barrat, J-A., Dubernet, S., Moretto, P., Calligaro, T., Milic, M., Kobayashi, K., 2010. The use of SEM-EDS, PIXE and EDXRF for obsidian provenance studies in the Near East: a case study from Neolithic Çatalhöyük (central Anatolia), *Journal of Archaeological Science*, 37, 2705–2720.

Tsuneki, A., Rasheed, K., Saber, S. A., Nishiyama, S., Anma, R., Ismail, B. B., Hasegawa, A., Tatsumi, Y., Miyauchi, Y., Jammo, S., Makino, M. and Kudo, Y., 2015. Excavations at Qalat Said Ahmadian, Slemani, Iraq-Kurdistan: First Interim Report (2014 Season), *Al-Rafidan*, 36, 1–50.

Tsuneki, A., Rasheed, K., Saber, S. A., Nishiyama, S., Watanabe, N., Greenfield, T., Ismail, B. B., Tatsumi, Y., Minami, M., 2016. Excavations at Qalat Said Ahmadian, Qaladizah, Iraq-Kurdistan: Second Interim Report (2015 Season), *Al-Rafidan*, 37, 89–142.

OPTICALLY STIMULATED LUMINESCENCE DATING OF DUNE SAND SEDIMENTS IN THE WESTERN MARGIN OF THE THAR DESERT AT SINDH, SOUTHERN PAKISTAN

Yorinao Shitaoka¹, Atsushi Noguchi², Qasid H. Mallah³,
Ghulam M. Veesar³, Nilofer Shaikh⁴, Hideo Kondo⁵

¹Department of Environment Systems, Rissho University, ²NPO–Japanese Centre for South Asian Cultural Heritage, ³Department of Archaeology, Shah Abdul Latif University, ⁴Center for Documentation and Conservation of the Heritage of Sindh, Endowment Fund Trust, ⁵School of Letters, Tokai University

1. Introduction

For archeological and geological investigations of desert regions, collecting organic material is rare because of the extremely dry conditions. Therefore, application of radiocarbon dating is difficult, as is ascertaining the age of desert sediments. Optically stimulated luminescence (OSL) dating (Huntley et al., 1985), which is used to find the elapsed time since sediment was last exposed to daylight, can provide chronological information for desert environments. The burial dose as a Paleodose of sediments is measured using the OSL signal. Optical age was calculated from the paleodose divided by the annual dose as the dose absorbed from natural radiation per year.

Several studies have used luminescence dating to elucidate sand mobilization activity in extreme western, southern, and northern margins of the Thar Desert. Using thermoluminescence (TL), Chawla et al. (1992) investigated dunes in the western extremity of the Thar Desert, western Rajasthan, considering the residual TL level. Their data suggest a peak in sand mobilization activity at ca. 14 ka. Since then, sand mobilization decreased because of the proliferation of moisture during 13–6 ka. Singhvi et al. (1982) measured the ages of stabilized sand dunes in the southern margin of the

Thar Desert, Rajasthan, using TL, considering the residual TL level. The ages at the greatest depth of sand dunes were indicated as 16,190 a and 20,280 a. Juyal et al. (2003) used blue-green light-stimulated luminescence with the multiple aliquot protocol to measure aeolian deposits in the southern margin of the Thar Desert, eastern Gujarat. Their main conclusions were that the dune deposition commenced at around 26 ka, corresponding to Oxygen Isotope Stage 3, and that it continued episodically until ca. 5 ka. During 12–8 ka, aeolian deposition was subdued because of enhanced moisture. Saini and Mujtaba (2010) used OSL dating based on the single aliquot regenerative-dose (SAR) protocol (Murray and Wintle, 2000). A chronology of sand profiles in the northern margins of the Thar Desert was compiled by Shitaoka et al. (2012).

This report described OSL data obtained at Sindh in southern Pakistan at the western margin of the Thar Desert. For Paleodoses, OSL measurements using the SAR protocol were performed.

2. Sample collection and preparation

We collected samples from the Veesar Valley at Sindh, southern Pakistan (Fig. 1) from Loc. 1 (N 27° 1' 13.6", E 68° 44' 35.5") and Loc. 2 (N 27° 1'

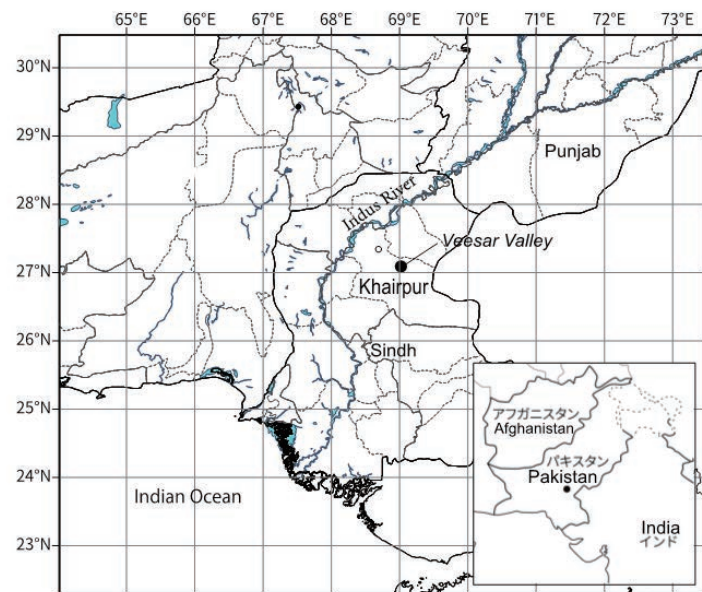


Fig. 1 Location map showing the Veesar Valley at Sindh, southern Pakistan.

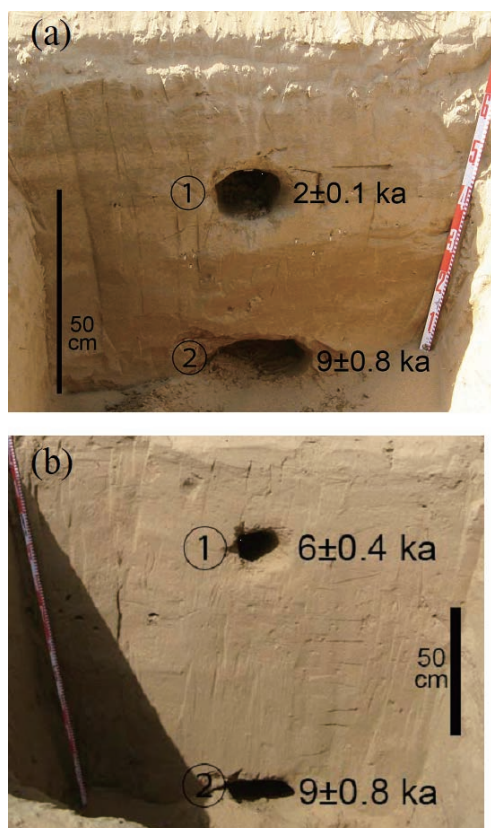


Fig. 2 Photographs of a representative section of each site: (a) Loc. 1 and (b) Loc. 2.

27.6", E 68° 44' 48") sites. At Loc. 1 and Loc. 2, two samples were collected respectively from above (sample 1) and below (sample 2) (Fig. 2). These samples were dune sand (Fig. 3). All samples were collected after the top surface layer had been removed into the cleaned sections.

We extracted the size fraction of 50–150 μm from each sample. Samples were treated for removing organic matter and carbonate, respectively, using 10% hydrogen peroxide and 20% hydrochloric acid. Non-magnetic minerals were separated from magnetic minerals using a Franz magnetic separator. To remove non-magnetic minerals including feldspar, except quartz, and the external alpha-dosed layer of quartz surface, etching was done using 20% hydrofluoric acid (HF) for 90 min and 46% HF for 40 or 70 min. Then samples were dry-sieved to obtain 75–125 μm size fractions. The purity of the etched quartz, i.e., feldspar contaminations, was verified by measuring the in-

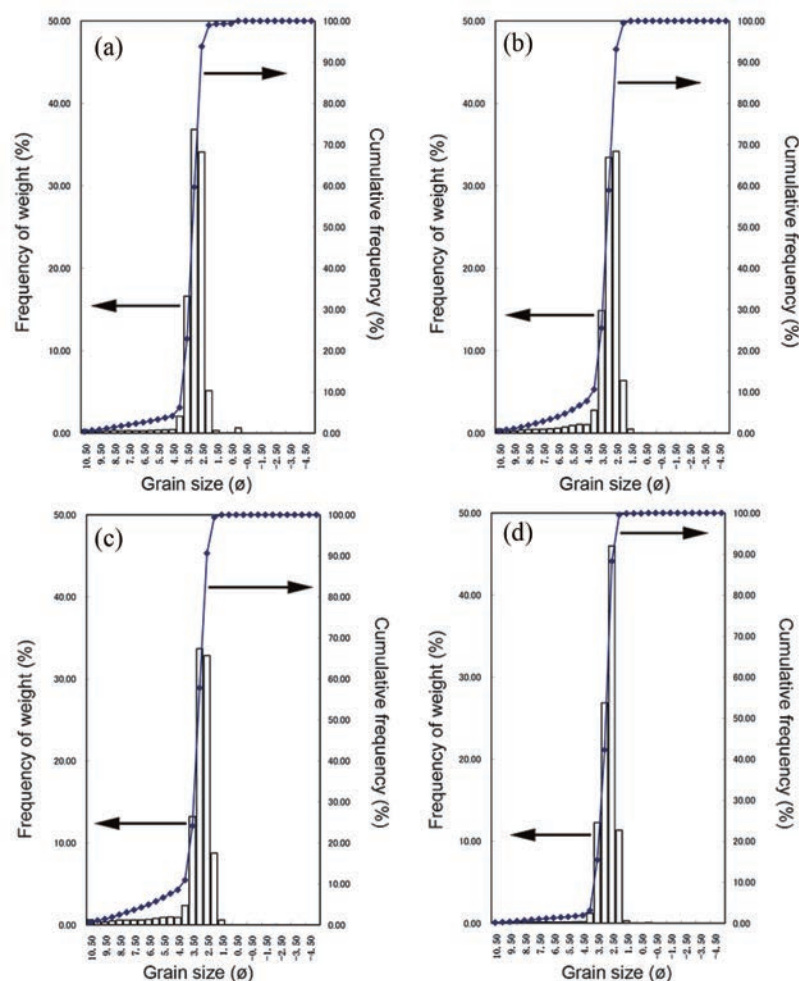


Fig. 3 Grain-size distributions at dated samples: (a) sample 1 at Loc. 1 and (b) sample 2 at Loc. 1; (c) sample 1 at Loc. 2; (d) sample 2 at Loc. 2.

fra-red stimulated luminescence (IRSL) (Shitaoka and Nagatomo, 2013). Conditions used for IRSL measurements to check the feldspar mixture were 60°C reading temperature with infrared stimulation power of 86.9 mW/cm². It was an IRSL signal at the instrumental background level.

3. OSL measurements and annual dose estimation

All OSL measurements were taken using an OSL/TL reader (NRL-99-OSTL) (Nagatomo et al.,

2007; 2009) equipped with an array of 32 blue LEDs (470 nm). The OSL from a sample was detected using a photomultiplier tube (R1140P; Hamamatsu Photonics K.K.) fitted with 2 mm thick optical filter (U-340; Hoya Corp.). Irradiation was conducted using a Risø ⁹⁰Sr/⁹⁰Y beta source (dose rate 0.07 Gy/s) built into the OSL reader. Dose–response curves for Paleodose estimation were constructed using the SAR procedure shown in Table 1. Preheat conditions were selected as 220°C for 60 s by the preheat temperature plateau of 200–260°C (Fig. 4) for sample 1 of Loc. 2. A dose

Table 1 SAR procedure used for this study.

Step	Treatment	Observed
1 ^(a)	Give dose, D_i	-
2	Preheat (220°C for 60 s)	-
3	Stimulate for 100 s at 125°C	L_i
4	Give test dose, 3 Gy	-
5	Cut heat (200°C)	-
6	Stimulate for 100 s at 125°C	T_i
7	Stimulate for 40 s at 280°C	-
8	Return to 1	-

^(a) Step 1: For the natural sample, $i = 0$ and $D_0 = 0$ Gy.

recovery test ($n=4$) applied for sample 2 of Loc. 1 showed a $1.06 \pm 0.24\%$ administered dose after bleaching using an artificial solar system.

Annual doses were measured using a high-resolution gamma-ray spectrometer. The concentrations of U, Th, and K in the samples were analyzed using a Ge detector (EGSP 8785; Eurisys Mesures). The annual doses were calculated as the sum of the beta and gamma dose rates using the conversion factors given by Adamiec and Aitken (1998). Contributions of the cosmic dose rate to the annual dose were assumed to follow values reported by Shitaoka et al. (2012).

4. Results and discussion

Of measurement aliquots for each sample, aliquots accepted the recycling tests and the recuperation tests proposed by Wintle and Murray (2006) were

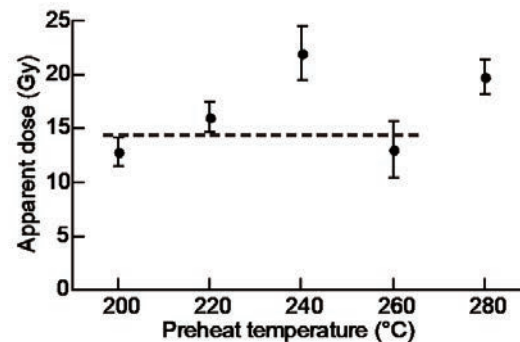


Fig. 4 Preheat temperature plateau dataset for sample 2 at Loc. 2. Each point represents the average of three aliquots at each temperature.

used for Paleodose estimation (Table 2). The Paleodose values and errors were estimated using a Monte Carlo method (Duller, 2007; Shitaoka and Nagatomo, 2013). Radial plots (Vermeesch, 2009) for all samples are presented in Fig. 5. The overdispersion values of sample 1 and sample 2 in Loc. 1 were, respectively, 54% and 35%. The overdispersion values of sample 1 and sample 2 in Loc. 2 were, respectively, 24% and 11%. Following Olley et al. (2004), a sedimentary sample with overdispersion of less than 20% was fully bleached. It is inferred that Loc. 1 and Loc. 2 samples have partially bleached sediments, except sample 2 in Loc. 2. Radial plots for all samples were calculated using the finite mixture model (Roberts et al., 2000). Paleodose distributions for each sample were found at two or three discrete dose components (Fig. 5). Final Paleodoses for the respective samples were calculated

Table 2 Results of OSL dating.

	Sample No.	No. of aliquots accepted/measured	Overdispersion (%)	Aliquots (n) ^a	Paleodose Gy	U (ppm)	Th (ppm)	K (wt%)	Water content (%)	Cosmic dose (mGy/a)	Annual dose mGy/a	OSL age ka
Loc. 1	1	10/11	54	6	4.2 ± 0.3	1.39 ± 0.25	9.51 ± 0.43	1.36 ± 0.15	3	0.10	2.48 ± 0.13	2 ± 0.1
	2	13/19	35	6	24.6 ± 1.6	1.79 ± 0.25	9.13 ± 0.43	1.46 ± 0.15	2	0.10	2.69 ± 0.15	9 ± 0.8
Loc. 2	1	9/9	24	6	17.0 ± 0.8	2.61 ± 0.27	7.33 ± 0.44	1.48 ± 0.15	2	0.10	2.76 ± 0.14	6 ± 0.4
	2	9/9	11	6	23.5 ± 1.4	1.68 ± 0.25	8.18 ± 0.42	1.41 ± 0.15	1	0.10	2.56 ± 0.17	9 ± 0.8

^a n is the number of aliquots of main component contributing to the Paleodose estimation using the finite mixture model.

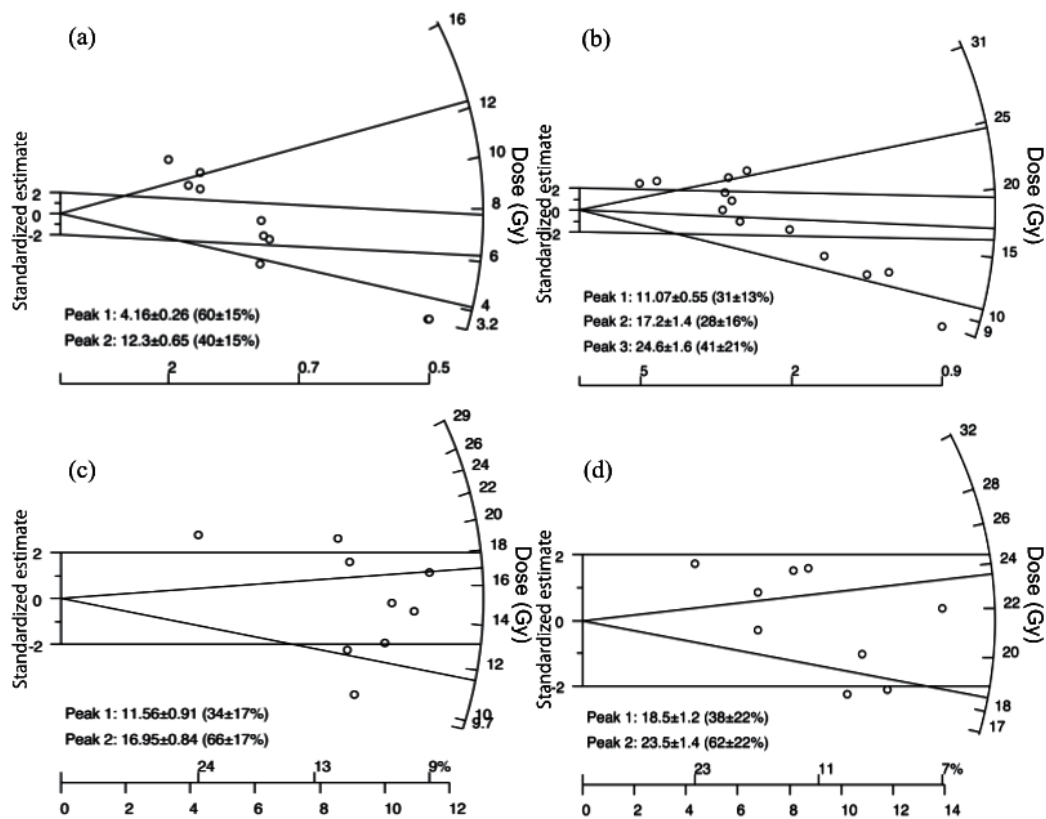


Fig. 5 Dose distributions for all samples are shown using the radial plots: (a) sample 1 at Loc. 1 and (b) sample 2 at Loc. 1; (c) sample 1 at Loc. 2; (d) sample 2 at Loc. 2. Distributions were fitted using the finite mixture model. Peaks 1–3 were the percentage of aliquots contained in each population and the Paleodose values of respective components.

using the dominant dose component, following methods reported by Gliganic et al. (2012). All OSL ages are presented in Table 2. The OSL ages of respective sites were consistent with their respective stratigraphic positions (Fig. 2).

5. Conclusion

We conducted OSL dating of coarse quartz extracted from dune sand at Veesar Valley of Sindh, southern Pakistan at the western margin of the Thar Desert. The OSL-estimated ages were found to be ca. 2–9 ka. These ages were fairly consistent with results

obtained for other areas of the Thar Desert. Our data demonstrate the possibility of assessing the burial age of desert sediments. Results show that OSL dating can serve as a chronometer for sediments in desert regions.

References

- Adamic, G., Aitken, M.J., 1998. Dose-rate conversion factors: update. *Ancient TL* 16, 37–50.
- Chawala, S., Dhir, R.P., Singhvi, A.K., 1992. Thermoluminescence chronology of sand profiles in the Thar Desert and their implications. *Quaternary Science Reviews* 11(1-2), 25-32. DOI 10.1016/0277-3791(92)90038-A.

- Duller, G.A.T., 2007. Assessing the error on equivalent dose estimates derived from single aliquot regenerative dose measurements. *Ancient TL* 25, 15–24.
- Glignani, L.A., Jacobs, Z., Roberts, R., Domínguez-Rodrigo, M., Mabulla, A.Z.P., 2012. New ages for Middle and Later stone age deposits at Mumba rockshelter, Tanzania: optically stimulated luminescence dating of quartz and feldspar grains. *Journal of Human Evolution* 62, 533–547. DOI 10.1016/j.jhevol.2012.02.004.
- Huntley, D.J., Godfrey-Smith, D.I., Thewalt, M.L.W., 1985. Optical dating of sediments. *Nature* 313, 105–107.
- Juyal, N., Kar, A., Rajaguru, S.N., Singhvi, A.K., 2003. Luminescence chronology of aeolian deposition during the late quaternary on the southern margin of Thar Desert, India. *Quaternary International* 104(1), 87–98, DOI 10.1016/S1040-6182(02)00137-4.
- Murray, A.S., Wintle, A.G., 2000. Luminescence dating of quartz using an improved single-aliquot regenerative-dose protocol. *Radiation Measurements* 32, 57–73. DOI 10.1016/S1350-4487(99)00253-X.
- Nagatomo, T., Shitaoka, Y., Kunikita, D., 2007. IRSL Dating of the Sediments at the Neolithic Sites in the Russian Far East. *Bulletin of Nara University of Education* 56, 1–6. (in Japanese with English abstract)
- Nagatomo, T., Shitaoka, Y., Namioka, H., Sagawa M., Wei, Q., 2009. OSL Dating of the Strata at Paleolithic Sites in the Nihewan Basin, China. *Acta Anthropologica Sinica* 28-3, 276–284. (in English and Chinese)
- Olley, J.M., De Deckker, P., Roberts, R.G., Fifield, L.K., Yoshida, H., Hancock, G., 2004. Optical dating of deep-sea sediments using single grains of quartz: a comparison with radiocarbon. *Sedimentary Geology* 169(3-4), 175–189. DOI 10.1016/j.sed-geo.2004.05.005.
- Roberts, R.G., Galbraith, R.F., Yoshida, H., Laslett, G.M., Olley, J.M., 2000. Distinguishing dose populations in sediment mixtures: a test of single-grain optical dating procedures using mixtures of laboratory-dosed quartz. *Radiation Measurements* 32, 459–465.
- Saini, H.S., Mujtaba, S.A.I., 2010. Luminescence dating of the sediments from a buried channel loop in Fatehabad area, Haryana: insight into Vedic Saraswati River and its environment. *Geochronometria* 37, 29–35. DOI 10.2478/v10003-010-0021-5.
- Shitaoka, Y., Maemoku, H., Nagatomo, T., 2012. Quartz OSL dating of sand dunes in Ghaggar Basin, northwestern India. *Geochronometria* 39(3), 221–226. DOI 10.2478/s13386-012-0012-6.
- Shitaoka, Y., Nagatomo, T., 2013. OSL dating using quartz fine grains extracted from loess in Upper Palaeolithic sites of Nihewan Basin, northern China. *Geochronometria* 40, 311–316. DOI 10.2478/s13386-013-0123-8.
- Singhvi, A.K., Sharma, Y.P., Agrawal, D.P., 1982. Thermoluminescence dating of sand dune in Rajasthan. *Nature* 295, 313–315. DOI 10.1038/295313a0.
- Vermeesch, P., 2009. RadialPlotter: A Java application for fission track, luminescence and other radial plots. *Radiation Measurements* 44, 409–410. DOI 10.1016/j.radmeas.2009.05.003.
- Wintle, A.G., Murray, A.S., 2006. A review of quartz optically stimulated luminescence characteristics and their relevance in single-aliquot regeneration dating protocols. *Radiation Measurements* 41, 369–391. DOI 10.1016/j.radmeas.2005.11.001.

研究項目 C01「中世～現代の西アジア都市」

計画研究 05

中世から近代の西アジア・イスラーム都市の
構造に関する歴史学的研究

サファヴィー朝下のイスファハーンと新ジュルファー

近世西アジア都市の非ムスリム街区

守 川 知 子

東京大学大学院人文社会系研究科

イスラーム時代の西アジア社会の特徴のひとつは、ムスリムが多数を占める「イスラーム社会」であったとはいえ、20世紀にいたるまで、一定の非ムスリム人口を抱えていたことであろう。それは都市であっても農村であっても同様である。非ムスリムは、キリスト教徒のこともあれば、ドルーズ派やユダヤ教徒、ヤズィーディー、アフレ・ハック、マンダ教徒など、実にさまざまである。本稿では試みに、17世紀のサファヴィー朝イラン（ペルシア）の都イスファハーンに新設された非ムスリム街区である「新ジュルファー」を事例に、“イスラーム都市”のなかの「非ムスリム街区」とそこに暮らす人々について考えてみたい。

I

イスファハーンは、イラン高原のほぼ中央部に位置し、古来交易の結節点として栄えてきたイラン随一の都市である。16世紀末、サファヴィー朝のシャー・アッバース1世（在位1588-1629年）はこの地を新たな首都に選ぶと、金曜モスクを中心とする「旧市街」とは別に、ザーヤンデルード

川により近いところに王宮や新広場（「王の広場（メイダーネ・シャー）」、現在のイマーム広場）、そして新広場を取り囲むモスクやバーザールなど、新市街の都市計画に着手した。

1603年、国内を平定したシャー・アッバースは対オスマン戦役のためにコーカサスに遠征した。アッバースはこの遠征に際して、当時、国際交易で名をはせていたコーカサス地方のアルメニア人たちを強制的にイラン本土へ移住させた。このときに移住したアルメニア人の数は数万戸にのぼったと言われている¹。

アルメニア人たちはカスピ海南岸のギーランやザグロス山中のハマダーンなどイラン各地に送られたが、なかでも多くの人々が送られたのが、シャーのおひざ元のイスファハーンであった。イスファハーンに移ったアルメニア人たちはザーヤンデルード川の南側に居住を許され、そこに自分たちのコミュニティを形成した。移住者の大半はアラス河畔のジュルファー（ジュガーイ）村からの出身であったため、この地区は「新ジュルファー」と呼ばれた²。

1 強制的に移住させられた人々の数については、30万人以上、あるいは6万戸と見積もられている。うち半数は、冬を前にした移動や気候の相違のために命を落としたとされる（A'rābī Hāshemī (2016), *Arāmana-yi Julfā-yi naw dar 'aṣr-i Ṣafavī*, pp. 80-82）。

2 ジュルファーの表記は、Julfā, Zulpha, Djulfa, Tzulpha, Giolfā, Ciolfā など様々である。サファヴィー朝期の新ジュルファーについては、Ghougassian (1998), *The Emergence of the Armenian Diocese of New Julfa* および Baghdiantz-McCabe (2005), “Princely Suburb, Armenian Quarter or Christian Ghetto?” が参考になる。



図 1

最初に新ジュルファアの位置を確認しておきたい。図 1 の地図にあるように、イスファハーンの市壁および市街地はザーヤンデルド川の北側で展開したのに対し、新ジュルファアはザーヤンデルド川の南岸に位置する。1677 年にイスファハーンを訪れた John Fryer は、川を渡った先にある新ジュルファアの立地について、「サザークとロンドンの立地と同様である」と述べる³。

市壁を大きく拡大し、その外側にも市街地が広がったサファヴィー朝期には、ザーヤンデルド川に新たに何本かの橋が架けられた。その中のひとつが、チャハールバグ大通り⁴と直結する「三十三橋（スィ・オ・セ・ポル）」である。この橋はその名のとおりに 33 のアーチをもつ、全長約 300 メートルの壮麗な橋であり、建築者の名にちなみ、「アッラーヴェルディ・ハーンの橋」と呼

3 Fryer, *A New Account of East-India and Persia*, p. 265. 異なる宗教や出自の人々がいわゆる「川向こう」に集住するケースは世界中で見られる。ヴェネツィア（イタリア）のスピナルンガ島や運河に囲まれたカンナレジオ地区のユダヤ教徒のゲットー、クラクフ（ポーランド）のユダヤ教徒地区であるカジミエシュ地区のほか、長崎の出島も同様の機能があったと考えてよいのではなかろうか。川や堀や運河はそもそも天然の「壁」を形成することから、交通・流通という“つなぐ”役割のみならず、社会の“分断・阻害”などの機能も果たす。都市における「川」の役割については今後さらに検討が必要であろう。

4 フランス人のシャルダンとは、チャハールバグ大遊歩道を「これまで私が見たり話に聞いたりしたことのあるなかでも最も美しい遊歩道である」と述べる（『シャルダン『イスファハーン誌』研究』、121 頁）。

ばれている（シャルダンによると、別名は「ジュルファア橋」⁵）。アッラーヴェルディ・ハーン（1613 年没）は、ジョージア生まれのキリスト教徒であったが、1570 年代のサファヴィー朝のコーカサス遠征の際に捕虜としてとらえられてシャー直属のゴラーム軍に編入され、イスラーム教に改宗した。その後、シャー・アッバースの謀議にて功をなし、アッバース治世下で最も影響力がある人物として名をはせた⁶。このアッラーヴェルディ・ハーンが建設したのがチャハールバグ大通りと三十三橋である。地図からも明らかのように、これらの大通りと橋は、新ジュルファアと王宮・新広場を結ぶ、イスファハーンの「表玄関」の役割を果たしている。

II

新ジュルファア街区のなかをもう少し詳しく見ていこう。

新ジュルファアは、当初、アラス河畔のジュルファア村出身のアルメニア人の居住区であった。しかし、その後エレヴァンやタブリーズからのアルメニア人が多数移住してきた。また、17 世紀中葉のシャー・アッバース 2 世（在位 1642-66 年）の政策により、イスファハーンの市壁の内外での居住を許されなくなったゾロアスター教徒や他のキリスト教徒たちが新ジュルファアへ移

された。1660 ～ 70 年代にイスファハーンに数年間滞在したフランス人宝石商のシャルダンは、新ジュルファアについて次のように述べている⁷。

ジュルファ村（Le bourg de Julfa）はおそらく世界一大きな村で、シュール川に沿って長さ 1 リュー [約 4 キロ] 近く、幅 1 リュー以上にわたって広がっている。

村は新旧 2 つの移民居住区に分かれる。旧移民区はアッバース大王がほぼ 120 年前に作ったもので、新しい方はアッバース 2 世が作ってまだ 60 年にならない。新移民居住区の通りの方が広くてまっ直ぐに引かれており、すべて並木が植わっている。しかし家並は旧移民区のものほど美しくない。その理由は、この住民が、旧移民区の住民ほど豊かでなく、政府から重きもおかれず大事にされもしなかったからである。（中略）新旧合わせたこのジュルファの大きな村全体は、東の川から西の山の方に向う平行した 5 本の大通りと、この間をつなぐ何本もの他の小路から成っており、いくつかのバーザールや市の立つ広場、浴場、それに 2 つの小さな隊商宿がある。教会が 11、修道院が 1 つ、それにもう 1 つ別の、かなり小さくて建てつけの悪い、「クセ・ヴァネ」、すなわち「女子修道院」と呼ばれる修道院がある。

「川向こう」の一画をあてがわれ、飲用の水路が引かれた新ジュルファア街区には、両脇にプラタナスが植えられたメイン・ストリートであるナ

5 『シャルダン『イスファハーン誌』研究』、128 頁。

6 アッラーヴェルディ・ハーンは、1595/6 年にゴラーム軍長官になると同時に、ファールス州の州長官に着任している。ファールス州は、州都シーラーズと、アッバースが国際交易港として整備したペルシア湾の港市バンダレ・アッバースを擁す。バンダレ・アッバースからシーラーズを経由してイスファハーンへ向かうルートは、サファヴィー朝の国際交易の大動脈であった。

7 『シャルダン『イスファハーン誌』研究』、167 頁（Jean Chardin, *Voyages du Chevalier Chardin, en Perse, et autres lieux de l'Orient*, Paris, 1811, Vol.8, p. 102）。引用文中で「120 年前」「60 年前」となっているのは、シャルダンが実際にイスファハーンに滞在していた 1666 ～ 67 年や 1673 ～ 74 年、1675 ～ 76 年を起点とするのではなく、この書の初版がアムステルダムで刊行された 1711 年からさかのぼっていると思われる。

ザル（Nazar）通りが東西に走り、新旧ふたつの移民居住区（コロニー）があった。もっとも、19世紀の新ジュルファー出身のアルメニア人の歴史家 Der Hovhanian は、タブリーズやエレヴァン出身者たちが暮らす区（すなわち、シャルダンの言うところの「新移民居住区」）は、同じアルメニア人であっても市内から遅れて移ってきたために元来の「新ジュルファー」に含めるべきではない、と述べている⁸。シャルダンにはさらに、

ジュルファには 3,400 から 3,500 戸の家がある。いちばん立派な家は川沿いにあり、中にはお屋敷と呼んでもいいような、じつに豪華に金や群青で仕上げられたものがある。アッバース大王、サフィー 1 世といった王たちは、アルメニア人がこの国に適応して散財することを喜び、立派な邸宅を建てるよう勧めては、彼らが自邸で催す宴席に足をはこびさえするほどの好意を示して、大いに保護してやったのである。こういう行為はこの人々の発展を大いに助け、当時彼らの間には、200 万とか 300 万長者の裕福な商人が何人もいたほどであった。

と述べる⁹。新ジュルファーに居住していたアルメニア人たちは、サファヴィー朝の生糸の独占販売と免税特権を授けられたために、巨万の富を築いて新ジュルファーの邸宅を飾り立てたのである。

当時の新ジュルファーには、「ホージャ（Khwāja/

Coja）」と称される豪商の家系が 20 近くあり、彼らはこの街区を拠点に交易活動に励み、世界各地にネットワークを構築していった¹⁰。17 世紀中葉にイスファハーンを訪れたほぼすべての外国人が、新ジュルファーのなかでも旧ジュルファー村出身者の移民区がイスファハーンで最も裕福な人々が暮らす街区だと述べている。

また、「3,400 から 3,500 戸の家」の一戸あたり 5 人の家族がいると仮定すると、1670 年代の新ジュルファーは 17,000 から 18,000 人の人口を擁していたことになる（6 人であれば約 2 万人）。先行研究では、当時のイスファハーン全体の人口は 50 万人程度と見積もられていることから、新ジュルファーに占める住民の割合は、わずか 3～4 パーセントである。

III

アルメニア人の街区としてつくられた新ジュルファーにはいくつかのアルメニア使徒教会（Armenian Apostolic Church）の聖堂がある。17 世紀の旅行者らの記述によると、上掲のシャルダンに聖堂の数を 11 とし、Pietro Della Valle が 10、Jean-Baptiste Tavernier が 15 か 16（うち 2 つが女子修道院）という数字を挙げる¹¹。今日、新ジュルファーには以下の 13 のアルメニア使徒教会が現存する（図 2）¹²。

8 Der Hovhanian, *Tārīkh-i Julfā-yi Isfahān*, p. 26.

9 『シャルダン『イスファハーン誌』研究』、168 頁。

10 新ジュルファーを拠点とし、インドや東南アジア、ロシアやヨーロッパなど各地へ渡って交易活動に従事した裕福なアルメニア商人らの活動については、Baibourtian (2004), *International Trade and the Armenian Merchants* や Aslanian (2011), *From the Indian Ocean to the Mediterranean* をはじめ、多くの研究がある。

11 Carswell (1968), *New Julfa*, p. 84.

12 以下の現存する 13 の教会については、Hakhnazarin (1991), *Nor Djulfa* の一覧（pp. 14-15）を参考に、聖別・成聖式の年の順に並び変えている。



図 2

1. 救世主教会 (Surb Amenaprkič)	1605 年 ¹³	12. 聖サルギース教会 (Surb Sargis)	1659 年
2. 聖ヤコブ教会 (Surb Hakob)	1607 年	13. 聖ナルセス教会 (Surb Nerses)	1660 年
3. 聖ゲオルギオス教会 (Surb Gevorg)	1611 年		
4. 聖母教会 (Surb Astvatzatzin)	1613 年	これら 13 の現存する聖堂のほかに、荒廃したりもはや現存しない聖堂が 12 あり、そのほか 18 世紀以降の建造で現在はアルメニア使徒教会ではない別の宗派の教会として用いられている聖堂が 3 つ、そして 7 つのカトリック教会が新ジュルファー街区内にあったとされる ¹⁴ 。	
5. 聖ステファノス教会 (Surb Stephnos)	1614 年		
6. 洗礼者ヨハネ教会 (Surb Hovhannes Mkrtič)	1621 年		
7. 聖カタリナ教会 (Surb Katariné)	1623 年		
8. ベツレヘム教会 (Surb Betghehem)	1628 年		
9. 聖ニコラウス教会 (Surb Nikoghayos)	1630 年		
10. 聖グレゴリウス教会 (Surb Grigor Lusavorič)	1633 年		
11. 聖ミナス教会 (Surb Minas)	1659 年		
		このなかで、「ヴァーンク教会」と通称される救世主教会 (Surb Amenaprkič) (No. 1) が新ジュ	

13 救世主教会 (通称ヴァーンク教会) の成聖式の年について、Hakhnazarin (1991) は「1664 年」としているが、建設年は 1605 年であることから、ここでは 1605 年を挙げる。その後、1655 年に当時のカトリコスの指示のもと、古い建物を取り壊して拡張工事が始まり、9 年後の 1664 年に現在の建物が完成した (Der Hovhannian, *Tārīkh-i Julfā-yi Isfahān*, pp. 387-398)。

14 現存しない 12 の教会名は以下のとおり。1. Surb Anania Arakyal (Gheynan 街)、2. Surb Astvatzatzin (Gask 街)、3. Surb Astvatzatzin (Marnan 街)、4. Surb Tovma (1695 年、Pokr Meydan)、5. Surb Hogi (Metz Meydan)、6. Surb Hreštakapetats (不明)、7. Surb Minas (Gask 街)、8. Surb Hakob Baghata (1666 年、Erevan 街)、9. Surb Hakob Muradents (1632 年、Metz Meydan)、10. Surb Hovhannes (不明)、11. Surb Nazaret (1611 年、Metz Meydan)、12. Surb Sargis (1609 年、Gheynan 街)。このほか、イスファハーン市内外にあったが 17 世紀中に完全に損壊した聖堂として 5 つの名前が挙がる (Hakhnazarin (1991), *Nor Djulfa*, pp. 14-15)。

ルファールで最初の聖堂であり、司教座が置かれた最重要な教会である。アルメニア人たちは、この教会のカトリコスの管轄下で信仰の自由を保証され、カラメントルと呼ばれる区長（町年寄）のもとで自治を営んだ。

ここで、No. 8 のベツレヘム教会について紹介したい。ベツレヘム教会は、新ジュルファールのなかでは最大級のドームを有する聖堂で、その内部を埋め尽くす宗教画が圧巻である。この教会は、アラス河畔の旧ジュルファール村出身のホージャ・ペトロス・ヴァリージャーニアン（Khwāja Petros Valijanean）が私財を投じて 1628 年（アルメニア暦 1077 年）に建設した、との銘文と、この一族の墓が堂内に残る。また次のような逸話もある。建設者のペトロスが、イースター前に近隣にあった聖母教会（No. 4）に礼拝に行ったところ、参列者が立錫の余地なくあふれ出るほど混み合っていたために、自らの財で聖堂を建設するを思い立った、というものである¹⁵。この逸話からは、移住者第一世代にあたるホージャ・ペトロスが相当な財を築いていたことと、聖堂を建築するほどに信仰心が篤かったこと、そして何よりも近隣の礼拝所の収容力が不足するほど、1620 年代の新ジュルファールがアルメニア人で活気あふれる街区であったことが明らかとなる。

上記の現存する 13 の聖堂の成聖式の年をみると、その大半が、旧ジュルファール村を中心としたアルメニア人たちの移住後 30 年以内に建てられていることがわかる。すなわち、移住者の第一世

代が聖堂建設を担ったと考えてよからう。このような新ジュルファールの第一世代のアルメニア人たちは、王室御用商人としての立場を活かして「長者」と呼ばれるほどの財をなし、邸宅を飾り立てるのみならず、ベツレヘム教会のように、自分たちのコミュニティやアイデンティティの中核となるアルメニア使徒教会の聖堂を建てることにおいて、互いに張り合っていたと想定されるのである。なお、No. 11 や No. 13 の聖堂の位置するところが、タブリーズ人街や石工街と呼ばれた「新移民居住区」であり、これらの聖堂の 1659 ～ 60 年という成聖年は、シャー・アッバース 2 世の政策によるこの街区内への移住の結果、コミュニティの核となる聖堂がそれぞれ新たに建設されたことを示唆する。

以上のことをまとめると、1610 ～ 30 年代は、移住者第一世代が財をなして聖堂建設を推し進めた最初の建設ラッシュの時期にあたり、第二の建設ラッシュが、イスファハーン市内から移住してきたエレヴァンやタブリーズ出身者が主体となった 1650 年代末から 60 年代にかけてに相当する。しかしながら、その後は新規の聖堂がほとんど建造されていないことや、あるいは 17 世紀中に崩壊してしまった聖堂が少なからず存在することに鑑みると、1660 年代以降は聖堂建設の必要性が失われたことが推察されるのである¹⁶。

シャー・アッバース 2 世の没後、シャー・スレイマーン（在位 1666-94 年）、シャー・スルターン・フサイン（在位 1694-1722 年）の時代にサファ

15 Der Hovhanian, *Tārīkh-i Julfā-yi Isfahān*, p. 526; Arakelian (1999), *A Pictorial Guidebook to St. Bethlehem Church*, p. 16.

16 17 世紀の最後の四半世紀には、サファヴィー朝のみならず、アジア全域で宗教的寛容性が失われていくことを筆者は最近論じたが（守川（2018）「あるアルメニア人改宗者の遍歴にみる宗教と近世社会」）、新ジュルファールに限っていうと、17 世紀から 18 世紀の世紀変わり目には、流出していった人々のあとを埋めるかのように、新ジュルファールにはムスリムも暮らすようになっていた。

ヴィー朝は急速に減退していくが、サファヴィー朝の経済的衰退の最たる影響を受けたのは、ほかでもない新ジュルファーのアルメニア商人たちであった。シャルダンは、「この地で先の王たちの御世に彼らが享受していた繁栄はいまや見るかげもなく、かつては多かった人口も、すっかり減少してしまっている」とその現状を伝えているが¹⁷、これは上記の新ジュルファー街区内のアルメニア使徒教会の建設年からもうかがえることであろう。

IV

新ジュルファー街区で注意したいのは、ここが決してアルメニア人のみの居住区ではなかった点である。シャルダンは、

アッバース大王は、新移民居住区に現在いるアルメニア人や拝火教徒も、イスファハーンに連れて来た。しかし彼らは職人であったため、この町〔イスファハーン〕の先の川の向う岸に住まわされたのである。こちらのアルメニア人は、メディア、イベリア〔南コーカサスを指す〕、それに低地アルメニア地方から、拝火教徒は、キルマン〔ケルマーン〕、イエズド〔ヤズド〕を中心都市としてもつ地方から、それぞれ集められた。拝火教徒は 1,500 家族以上が連行されたが、大王の死後ほどなく大部分は元の土地に戻って行った。彼らの住む地区には、今は 300 戸の家しかなく、一部は農民、一部は山羊や羊の毛を扱う職人で、この職人たちはフェルト地や自分たちの使う

一種の帽子を作っている。

と述べている¹⁸。

シャー・アッバース 2 世は、即位の際に、イスファハーン市内の酒屋を禁止した。その後、イスファハーン市内のエレヴァン出身のアルメニア人たちが立ち退きを命じられ、新ジュルファーの西端に居を定めることになった¹⁹。なかでも 1654 年に宰相に就任したムハンマド・ベグ (1672 年没) は、就任と同時にイスファハーンの市壁外のアルメニア人たちを、「水路の水でワイングラスを洗うことにより、王宮へ流れる水を穢している」との理由から新ジュルファーへ移転させた。その結果、新旧ふたつの「移民居住区 (コロニー)」からなる新ジュルファーは、各地からのアルメニア人たちのほか、ヤズドやケルマーンのゾロアスター教徒とあわせて、全体ではおよそ「10,000 戸」におよぶ人口となった²⁰。なお、ゾロアスター教徒が新ジュルファーの南西に居をあてがわれた背景には、ゾロアスター教徒が神聖視する丘とサーサーン朝期にさかのぼる拝火殿 (アーテシュキャデ) がイスファハーンの西方にあったからであろう。

また、1662 年にイスファハーンにいた Tavernier が、最も遅れてイランにやってきたイエズス会士が新ジュルファーの中で暮らしていると伝えるように、市壁内に居を構えていたアウグスティノ会やカプチン会と異なり、宣教活動の激しかったイエズス会のみは新ジュルファーのエレヴァン人街

17 『シャルダン『イスファハーン誌』研究』、173 頁。ただし、これがシャルダンの滞在した 1670 年代のことを指しているのかどうかは不明であり、注意が必要である。

18 『シャルダン『イスファハーン誌』研究』、172 頁。

19 Der Hovhanian, *Tārīkh-i Julfā-ye Isfahān*, pp. 60-61.

20 Carswell (1968), *New Julfa*, p. 74.

に居所をあてがわれた²¹。

このように、アルメニア人のほかにも、イエズス会士などのキリスト教徒や、数名のヨーロッパ人、ゾロアスター教徒が新ジュルファーには暮らしていた一方、この街区は、「マホメット教徒は住んでいないが、それは居住が許されていないからでもある」と述べられているように、ムスリムの居住は固く禁じられていた。あるいは、ごくわずかなムスリムたちがいるにせよ、彼らは「収監者」というよりも「スパイ」としてであった。そうではあるが、1655 年のヴァーンク教会（救世主教会）の増改築時に、かつてはアルメニア式に何ら装飾のなかった聖堂内部に、同じ新ジュルファーの大商人の要望に従って絵画をほどこしたところ、「マホメット教徒が、描かれた絵を見て楽しむために、まるで芝居小屋に出かけるようにこの教会に押しかけて来るのである」とシャルダンは伝えている。17 世紀を通して歴代のシャーもたびたび教会に足を運んではイースターなどの祝祭を楽しんだことから、新ジュルファーが決して閉ざされた空間ではなかったことがわかる²²。

ところで、何よりも興味深いことに、新ジュルファー街区にはユダヤ教徒が移ってきた形跡が一切ない。イスファハーンはもともとユダヤ教徒の住む街区が旧市街にあり、シナゴーグもまた旧市街や新市街の王の広場のそばに現存する。ではなぜ、ユダヤ教徒はこの「川向こう」の「非ムスリム街区」に移転しなくともよかったのであろうか。この点に関して、近世期の“イスラーム都市”

や“イスラーム社会”なるものの性格を改めて考える必要があるが、宗教的に厳格化したシャー・アッバース 2 世の政策は、都市と“異教徒”について考えるうえで非常に示唆的であるため、ここで簡単に紹介しておきたい。アッバース 2 世は、イスファハーン市内に暮らすユダヤ教徒に対して、「もし自分たちの不埒な信条に固執するのであれば、その者たちのために市外に場所を定め、ムスリムの民と区別するよう定められた色の服を着るように」と命じた。その際、もしムスリムに改宗するのであれば、元の住まいに残りつづけることを保証し、改宗した者には 1 人あたり 2 トマンの現金を支払うとした。結果、イラン全土で約 2 万戸のユダヤ教徒が改宗したと伝えられる²³。すなわち、住み慣れた市内からの強制的な立ち退きを避けるために、ユダヤ教徒たちは自発的にムスリムへと改宗したというのである。これらのユダヤ教徒たちが改宗していなかったならば、イスファハーンでの彼らの集住先はどこに定められていたのだろうか。

18 世紀に入ると、アフガンの侵攻、サファヴィー朝の崩壊、ナーディル・シャー（在位 1736-47 年）の台頭と、イランは激動の時代を迎える。1722 年のアフガン侵攻後の新ジュルファーの住民の数は 12,883 人であり、これは侵攻以前の 6 分の 1 に満たないと言われていることから、18 世紀初頭の新ジュルファーの人口は 8 万人ほどであったと推定される。ナーディル・シャー期の混乱を経た 1789 年の新ジュルファーのカトリ

21 Tavernier, *Les six voyages*, p. 420; Carswell (1968), *New Julfa*, pp. 81-82; Ghougassian (1998), *The Emergence of the Armenian Diocese of New Julfa*, p. 142.

22 『シャルダン『イスファハーン誌』研究』、167-168 頁；Fryer, *A New Account of East-India and Persia*, p. 265; Carswell (1968), *New Julfa*, pp. 78-80.

23 Qazvīnī, *‘Abbās-nāma*, pp. 218-219.

コストの算出では、リストに欠損があるとはいえ、戸数はわずか 364 戸であり、その大半は寡婦や独居者であった²⁴。その 100 年後、1880 年の新ジュルファーは、もはや 2,658 人のアルメニア教徒しかおらず、街区全体でも 380 戸、教会が 12、学校が 3、男女の修道院が 1 つずつ、公衆浴場が 4、商人にいたってはわずか 5 人に減ってしまったのである²⁵。

＊

本稿でみたように、イスファハーンの新ジュルファー街区は、“イスラーム都市”のなかにある「非ムスリム街区」としては格好の事例であろう。君主の命令によって「川向こう」に居住区をあてがわれ、そのなかでは信仰の自由と自治が保証され、数々の教会や学校をもち、自分たちの信仰の導き手であるカトリコスと、街区を代表する世俗の長であるカラントルのもと、「故国」を離れてなお彼らは熱心に生業や家業に従事した。さらに半世紀のちには、主にムスリムたちが暮らす市壁内のいくつかの街区やイスファハーン近郊に暮らしていた同胞のアルメニア人のみならず、宗教的にはまったく異なるゾロアスター教徒らが市内から追い出され、あるいは近郊から集められ、新ジュルファーでの居住を命じられる。こうして新ジュルファーは名実ともに「非ムスリム街区」となっていく。

だが、17 世紀後半以降の特権の喪失や国力の減退、社会全体に広がる宗教的非寛容といった社会的・経済的影響により、この“イスラーム都市”

のなかの「非ムスリム街区」にほころびが生じるようになる。確かに 18・19 世紀以降においても新ジュルファーはアルメニア人の居住区でありつづけたが、街区としての機能はもはや失われ、「ムスリム」か「非ムスリム」かという区別は 17 世紀ほどには見られなくなった。それは「非ムスリム街区」が不要となるほど、社会全体が“イスラーム化”したことによるのだろうか。一方、同じキリスト教徒であっても、新ジュルファーのアルメニア人たちは、ヨーロッパのカトリックの宣教師たちをまったく快くは思わず、17 世紀末には新ジュルファー街区から彼らを追い出した。さらに、ユダヤ教徒にいたっては居所を同じくした形跡はなく、むしろユダヤ教徒やゾロアスター教徒に対して、積極的にアルメニア使徒教会の宣教活動を行ったことから²⁶、新ジュルファーのアルメニア人自身の側にも宗教を基盤とするコミュニティやアイデンティティを守ろうとする動きがあったと考え得る。しかし、その試みが失敗に帰し、経済的な凋落や、政権や社会からの迫害が誰の目にも明らかになったとき、彼らは自分たちの街区を捨て、それまでに築き上げたネットワークを頼って各地へ移住したのである²⁷。

本稿では試みに、イスファハーンの新ジュルファー街区の事例を紹介したが、都市とそのなかの“異教徒”街区や外国人居住区については、政権やそこに暮らす人々の視点や他都市との比較を交えたさらなる考察が必要であろう。

24 Der Hovhanean, *Tārīkh-i Julfā-ye Isfahān*, pp. 273-279.

25 Hölzter, *Persien vor 113 Jahren*, p. 80. だが、19 世紀末のこの段階でもワインづくりが 10 人（アシスタントが 50 人）も残っている（*Ibid.*, p. 82）。

26 Ghougassian (1998), *The Emergence of the Armenian Diocese of New Julfa*, p. 142.

27 この点については、守川（2018）「あるアルメニア人改宗者の遍歴にみる宗教と近世社会」を参照されたい。

参考文献

- Abgar ‘Alī Akbar, *I‘tirāf-nāma*, Ed. by M. Sefatgol, Tehran: Ketābkhāne-ye Majlis-e Showrā-ye Islāmī, 2010.
- [Chardin, Jean] 『シャルダン『イスファハーン誌』研究－17世紀イスラム圏都市の肖像』羽田正編著、東京大学出版会、1996年。
- Fryer, John, *A New Account of East-India and Persia, in Eight Letters. Being Nine Years travels begun 1672, and finished 1681*, London: Chiswell, 1698.
- Höltzer, Ernst, *Persien vor 113 Jahren*, Tehran: Kultur-und Kunstministeriums Zentrum für die Persische Ethnologie, 1975.
- Der Hovhanian (Ter Hovhanian), Harootun, *Tārīkh-i Julfā-yi Iṣfahān (History of New Julfa)*, Persian Trans. by L. Minassian & M. Fereydani, Esfahan: Zende Rood & Naghsh-e Khorshid, 2000.
- Qazvīnī, Vahīd, ‘*Abbās-nāma*, Ed. by I. Dehgān, Arak: Ketābforūshī-ye Dā‘udī-ye Arāk, 1951.
- Tavernier, Jean Baptiste, *Les six voyages de Jean Baptiste Tavernier*, Paris, 1679.
- A‘rābī Hāshemī, Shokūhosādāt, *Arāmana-yi Julfā-yi naw dar ‘aṣr-i Ṣafāvī*, Tehran: Enteshārāt-e Sāzmān-e Asnād va Ketābkhāne-ye Mellī-ye Jomhūrī-ye Eslāmī-ye Īrān, 2016.
- Arakelian, Rev. Hamazasb (Hacob), *A Pictorial Guidebook to St. Bethlehem Church of New Julfa – Isfahan*, Tehran: Nairi Publishing House, 1999.
- Aslanian, Sebouh D., *From the Indian Ocean to the Mediterranean*, Berkeley & New York & London: University of California Press, 2011.
- Baghdiantz-McCabe, Ina, “The Socio-Economic Conditions in New Julfa Post-1650: The Impact of Conversions to Islam on International Trade”, *Revue des etudes arméniennes*, 26 (1996-97), pp. 367-396.
- Baghdiantz-McCabe, Ina, “Princely Suburb, Armenian Quarter or Christian Ghetto?: The Urban Setting of New Julfa in the Safavid Capital of Isfahan (1605-1722)”, *Revue des mondes musulmans et de la Méditerranée*, 107-110, (2005), pp. 415-436.
- Baibourtian, Vahan, *International Trade and the Armenian Merchants in the Seventeenth Century*, New Delhi: Sterling Publishers, 2004.
- Carswell, John, *New Julfa: The Armenian Churches and Other Buildings*, Oxford: Oxford University Press, 1968.
- Ghougassian, Vazken S., *The Emergence of the Armenian Diocese of New Julfa in the Seventeenth Century*, University of Pennsylvania, 1998.
- Hakhnazarian, Armen, *Nor-Djulfā*, Venezia: Editore, 1991.
- Khanbaghi, Aptin, *The Fire, the Star and the Cross: Minority Religions in Medieval and Early Modern Iran*, London: I.B.Tauris, 2006.
- 守川知子「あるアルメニア人改宗者の遍歴にみる宗教と近世社会」島田竜登編『1683年 近世世界の変容』（歴史の転換期 7）、山川出版社、2018年、64-109頁。

初期イスラーム時代の都市からの覚書

深見 奈緒子

国土舘大学イラク古代文化研究所

西アジアとは、アジアの西方を国単位であらわすことが多く、アフリカ大陸に位置するエジプトは入ったり入らなかったりする。本稿では、7世紀から10世紀の初期イスラーム時代にイスラーム勢力の支配が行き渡った地域の都市を対象とする。西アジアより少し広く、西はアンダルシアから地中海南岸、東は中央アジアを含む。

本論に入る前に、「定型都市と非定型都市」という都市形態、および「中緯度乾燥地域」という地域区分を紹介したい。前者は、幾何学的に計画された都市を定型都市、有機的な姿で形態的な計画を伴わない都市を非定型都市と呼ぶ¹。

後者は「メガシティ全6巻シリーズ叢書」の第1巻第2章²で都市地域生態圏の一つとして提案したものである。地球を都市から見ると6つの都市地域生態圏に分けることが可能で、都市地域生態圏とは歴史的に形成された自然生態系と人間活動のまとまりである。その一つとしての「中緯度乾燥地域」とは、「乾燥帯、あるいは温帯か

ら熱帯の少雨気候で、中央アジア、西アジア、地中海周域を中心とし、東は黄河流域からモンゴル高原、南はガンジス上流からデカン高原まで広がる。人々は遊牧あるいは麦作農業を生業とし、土や石を利用した組積造あるいは移動式住居に住まう。ここは都市が誕生した地域で、限られた水を有効利用するために稠密に居住する伝統が構築された。」³と定義した。

すなわち本稿の対象地域は、都市地域生態圏としての中緯度乾燥地域から、ゴビ砂漠以東の黄河流域、アフガニスタンより東のインド亜大陸、アナトリア半島からギリシアを経てフランスに至る地中海北岸を除く地域ということもでき、部分集合ながらも、そこには都市に関する共通性を指摘することができる。

さらに、この概念を導いたプロジェクト⁴を通して、都市の人口規模とその歴史を考えることができた。西暦1800年より以前では、その時代の有数の都市のいくつかで10万人を越える程度で、

1 川西宏幸「エジプトにおける都市文明の誕生」『都市と文明』講座文明と環境4、pp. 42-62、朝倉書店、1996年。

2 深見奈緒子、内山愉太、「メガシティとその出現経緯」『メガシティ1 メガシティとサステイナビリティ』pp. 35-71、東京大学出版、2016年。

3 村松伸・深見奈緒子・山田協太・内山愉太『メガシティ2 メガシティの進化と多様性』pp. 2-3、東京大学出版、2016年。

4 総合地球環境学研究所で2009年度から2014年度の6年間にわたるプロジェクト「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト：そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案」代表者村松伸。

100 万人を超えた都市はほんのわずかだった。普通の都市は、数千人から 2 万人くらいの人口を抱えるのみであった。

本稿ではこのプロジェクトの成果と、7 世紀から 10 世紀までイスラーム教徒が為政者となった都市のうち今までに著者が都市史を紐解き、あるいは調査した都市からの知見を総合し、それらから導かれる注目点を記すこととしたい。それゆえ、該当する時代の比較的大規模で著名な都市に焦点を当てることになるが、それは同時に本稿の限界でもある。

1. 都市の持続性と規模

本稿で取り上げる都市の規模に関しては、何らかの人口記録が残るもの、あるいは発掘や市壁の建設等により当時の都市規模がわかるものとした。とはいえ、人口記録は必ずしも真実でないことも多く、市壁内が全て市街地であったかどうか不明である。しかし、広い地域から不確かながらデータを集積することによって、当時の都市の様相やその関係について、今後考えねばいけない点を抽出することを試みた。

先述のプロジェクトで作成した人口統計表のうち、本稿の対象とする地域の都市で 500 年から 1000 年の人口データのあるものを表 1 に示した。622 年以後のイスラーム時代を対象とするが、前時代との関わりが重要と判断し、年代幅を広げた。人口の情報がえられたのは全て人口 4 万人以上で、縦軸に地域、横軸に人口をとって並べた。

一方、当時の都市形態とその規模が分かっているものを表 2 にまとめた⁵。面積計算については既往文献あるいは Google Earth を用いた⁶。

1-1. 都市のヒエラルキー

表 1 と表 2 で取り上げた都市を検討すると、人口 10 万人を超え都市面積が 900 ha 以上の大都市、その次のランクとして、人口 2 から 10 万人で都市面積 100 から 500 ha ほどの地方都市、さらに人口 2 万人以下で都市面積 100 ha 未満の小都市のランクを想定することができる。大都市は表 1 の人口 10 万人以上、地方都市は 9 万人までの都市に該当する。また表 2 には、人口と照合しながら、そのランクづけを記入した。ただし、地方都市や大都市というランクも、都市の盛衰によって対象とする時代の中でも盛衰があったことには留意しなければならない。

大都市として、市域人口ともに巨大なのはアッバース朝の首都バグダード、後ウマイヤ朝の首都コルドバ、サーサーン朝の首都クテシフォン、東方の拠点ニーシャープール、ファティマ朝のカイロである。10 世紀のアレキサンドリア、6 世紀のアンティオアキアがこれに継ぐ。ダマスカスには、表 1 に記載したようにウマイヤ朝時代の人口が 15 万人という説があるが、人口のすべてが市壁内だけに居住したと仮定すると、1 ha あたり 1300 人を超え、想定が難しい。

大都市に継ぐのが地方都市で、人口では 4 万人から 10 万人、都市面積では 100 から 500 ha とした。

5 イスラーム暦元年の 622 年をさかのぼり、西暦 500 年から 1000 年を対象としたが、イスラームの支配下に組み込まれた期間のある都市を取り上げた。

6 Bosworth, C. Edmund, edited, *Historic Cities of the Islamic World*, Brill, 2007, *Encyclopedia of Islam 2nd*, *Encyclopedia of Iranica*, その他発掘報告書等を参照した。Google Earth からの面積測定は精度が低いので、面積はおおよその大きさである。

500 ha から 900 ha の都市が見当たらない点に関しては、先の大都市がこの時代の特殊な形態であることを意味しているのではないかと推察されるが、クテシフォンとバグダードとの比較検討が必要で、今後の研究課題である。地方都市には、それぞれの地域の伝統が強く現れる。

小都市については、人口データがないので、都市面積から考える。イスラーム化以前には、都市面積が 100 ha 以下の都市が多い。大シリアでは、エルサレム、ジェラシュ、アレppoなど、アラビア半島ではメディナやジェッダがこの範疇に入る。これらの都市は、地方都市に継ぐランクの拠点となった小都市と考えられ、都市面積 20 から 100 ha で、おそらく人口は 5000 人から 2 万人くらいであったと想定される。本稿ではその一部しか取り上げることができなかったが、小都市は数多く存在したので、今後の研究課題のひとつである。

さらに、大シリアのアンジャールは、市域内に大モスクと宮殿、住宅を備えるが、その広がりはずか 10 ha で、1 ha あたりに 200 人が住まったとしても、2000 人である。より小規模のウマイヤ朝宮殿群やイスラーム以前の修道院複合体と同様に農業経営の中心拠点としての意味を持ち、ローマの軍営都市カストルムの系譜を引く。また、アカバ（アイラ）は矩形の城壁をもつが、その面積はわずか 2 ha である。これらは、小都市よりもさらに小さいので、小規模拠点と呼ぶ。類例にケリビアやラーヤなどがあり、ウマイヤ朝期の砂漠の宮殿もこの範疇に含まれるとみなしたい。小規模拠点がこの時代に都市であったのか否かは今後の課題といえよう。

1-2. 連続的な都市と新たな都市

規模のデータが残る都市の多くが前時代の集住

地や都市を受け継いでいる点に注目したい。近年のニュー・カイロのように、無人の砂漠に新たな都市を形成する例はほとんどない。イラクのクーファやワーシト、大シリアのアンジャール、パキスタンのマンスーラは前身都市の記録や遺構をもたない例外的な存在であるが、現在周囲が農地であることから、当時も農村のような集住はあったと考えたい。北アフリカでは、スースやチュニス、カイラワーンなどのように古代都市が遺跡として残る地に、多少の空白期において都市が再建される場合もある。何れにせよ、前近代においては都市の必須要素となる水を豊富に得られる土地は限られていたために、都市の位置に連続性が生じたと考えられる。形態的には、基本的には従前の骨格（市壁や街路等）を継承するが多少の変更を伴う。また、王朝の交代、首都の移転、あるいは為政者の交代（為政者の奉じる宗教の差異）などで、後述するように都市の面積自体が巨大化する場合も多い。

初期イスラーム時代には軍営都市（ミスル）の存在が強調されるが、軍営都市とはいえ、砂漠の拠点から始めるわけではなかった。フスタートの近傍にはローマ時代のバビロン、バスラの近傍にはサーサーン朝の軍営があった。これらの拠点を中心に、広大な広がりを持つようになる。バグダードの建設に際しても、カリフ・アル・マンスールはティグリス川とユーフラテス川が最も近づく地域で、かつサーサーン朝時代のイーサー運河のある地を選び、そこにはテントの並ぶ商業地としてのカルフと小さな町があった。

すなわち、本項で扱う地域では、この時代、基本的には連続的な居住を基盤とした都市が大半で、新たな都市とは、既往の都市あるいは集住の核を用いて、この時代に都市が巨大化していった

表 1 500年から1000年の間で、人口の記載が確かめられた都市の歴史人口の地域・規模別分布
表記は、都市名、人口単位万人（年代）：複数のデータを持つ都市は矩形で囲んだ。斜体字はイスラーム侵攻以前の人口

	40,000	50,000	60,000	70,000	80,000	90,000	100,000	110,000	300,000
Central Asia	Balkh 4.2 (500)								
	Thakhar 5.0 (500)								
	Kashgar 4.8 (800), 4.4 (1000)	5 (622,900)							
	Balasagun 4.6 (900), 4.3 (1000)								
	Samarqand 4.5 (621)	6 (900)	7.5 (800, 1000)						
	Bukhara 4.5 (800)		7.5 (1000)	10 (900)					
	Merv 4.9 (500), 4.8 (621)	5.7 (800)	Uzgen 6.9 (1000)						
	Nishapur 4.2 (800)	5 (500)		10 (900)	12.5 (1000)				
Persia	Hamadan 4.3 (900)	Ray 5.9 (500)	6.8 (622)	10 (800,900, 1000)					
	Kermanshah 4.9 (622), 4.3 (800)	Isfahan 5.1 (500)		Isfahan 10 (1000)					
	Isfahan 4 (500), 4 (622)	Shiraz 5.2 (1000)							
	Siraf 4.2 (800)	5 (1000)							
			Mansura 6 (800), 6.5 (900,1000)						
			Basra 5 (1000)	10 (800)					Ctesiphon 40 (500), 50 (622)
Sind									
Iraq	Kufa 3 (638)*	Kufa 5.4 (900)	6.5 (800)				Baghdad 12.5 (1000)	70 (800), 90 (900)	
			Anbar 6 (800)						

表 1 続き 表記は、都市名、人口単位万人（年代）：複数のデータを持つ都市は矩形で囲んだ。斜体字はイスラーム侵攻以前の人口

	40,000	50,000	60,000	70,000	80,000	90,000	100,000	110,000	300,000	
Syria	Aleppo 4 (1000)									
		Damascus 5 (500), 5 (621)	6,8 (800)		8 (800)				Antioch 15 (500)	
		Jerusalem 5 (500), 5 (621), 5.8 (800), 5.3 (900)	6 (1000)						15 (700)**	
Arabia					Mecca 8 (800)			Hasa 11 (1000)		
Egypt	Qift 4.4 (500), 4.3 (622)					Alexandria 4 or 7 (641)		9.4 (621), 9.5 (800) 10 (500)		13.5 (900)
	Qus 4 (800), 4 (900), 4.5 (1000)				Tinnis 8.3 (1000)		Fustat 10 (800)	Fustat 20 (750), 19 (900) Cairo 13.5 (1000)		
		Cartaghe 5 (622)				10 (500)				
Maghrib					Qairawan 8 (800, 1000)		10 (900)			
Sicily				Palermo 7.5 (1000)						
Andalusia	Sevilla 4 (800,1000)								Cordoba 16 (800), 20 (900)	45 (1000)

*本文付録の脚注27参照
**Shatzmiller, Maya. 1994. Labour in the Medieval Islamic World. Leiden; New York: Brill. Seshat URL: http://seshatdatabasebank.info/data/polities/Umayyad-Caliphate-sycalum.html#cite_note-37

イスラーム化以前の都市、あるいは都市遺跡を引き継ぎ、拡大していく場合
イスラーム化以前には都市の存在を確認することができない場合
イスラーム化以後、次第に人口がへり、都市でなくなっていく場合

表2 地域別の都市面積によるランケづけとその形態

	面積 ランク	500-1000年ま での最大 面積(ha)	部分名称	面積 (ha)	市壁	非定型 概形	非定型 街路網	定型 概形	定型 街路網	注記
Central Asia										
	Merv	2	500?	Erk Qala, Giyaur Qala	20 340	あり あり	Tepe ?	矩形	?	円形の古い都市 円形部分とあわせて、シャハレスタンと呼ばれる ラバドと呼ばれ、8世紀に新設、12世紀までに580haに拡張
	Balkh	2	270	城塞 シャハレスタン	3 87	あり あり	○ 楕円	有機的 ?		南部に広がるラバドとの境界部 ポリジュ付の市壁がまわる。8189年に地震被害、9-10世紀 に繁栄 サウサーン朝期に溯り、9世紀にはラバドの市壁は喪失
	Herat	2	215	Tepe 矩形都市	60 165	あり あり	○ ?	正方形	十字形大通り	テヘットの旧都市ながら10世紀に再利用、矩形都市と旧都市 の間に城塞 建設はイスラーム以前にさかのぼる
	Samarqand	2	190		190	あり	○	有機的		北の城塞から次第に拡張、ラバト込みの面積
Persia										
	Bukhara	2	144	城塞 シャハレスタン	4 30	あり あり	○	矩形	?	Tepe状の城塞が既存 矩形市街地が既存
	Tashkent	3	400	849年の市壁 シャハレスタン ラバド	110 18 400	あり あり 2重	○ 有機的 ○	有機的		849年に双方を囲む市壁を建設 3重構造、9世紀にはラバドの外壁喪失(周囲60km?) シャハレスタンを囲む2重の市壁
	Kunia Urgench	3	35		35	あり	○			紀元前4世紀の囲壁を含む紡錘形市壁、11世紀に南西に新たな 団都市街地、12世紀に両者を囲む市壁建設
	Kashgar	3	35		35	あり	○	有機的		北東部の旧市街
Persia										
	Nishapur	1	1700?	城塞 矩形都市 市域	5 15 1700?	あり あり ?	Tepe ○ 有機的	矩形	?	北側に位置する城塞 城塞の南に広がる矩形市街 市域の広がり不明
	Isfahan	2	500	ヤフーディヤ ジェイ 市壁	? ? 500	? あり あり	? ○ 有機的	有機的	?	馬術競技場としての古広場、教会がある小都市 サウサーン朝の軍営都市 既存の2つの集住地のうち一つが拡大し、10世紀に市壁 を建設
	Firuzabad	2	270		270	あり		真円	放射状	プワイフ朝期に宮殿建設、復興
	Darabgerd	2	260		250	あり		円	?	多少の幾何学的なみあり

表2 続き

		500-1000年ま 面積 ランク	部分名称	面積 (ha)	市壁	非定型 網形	非定型 街路網	定型 網形	定型 街路網	注記
Perisia	Rayy	2	215以上 城塞とジャハレス タン 新市街	15 200以上	あり	○	有機的			ハルテティア時代からの都市、東北隅の丘に城塞その下にシヤハレ スタン アッパース朝期に広域に広がる新市街が形成、面積は中世の市域 復元から測定
	Shiraz	2	120	120	?	○	有機的			古モスクを三角形に囲む形の市街地の広がり
	Bishapur	2	125	125	あり			矩形	直交	10世紀には住む人はいたが次第に廃墟となる
	Istakhr	3	65	15(65) 16(65)	あり	○		矩形	?	○ は双方を含むマウンドの面積 ○ は双方を含むマウンドの面積
Iraq	Baghdad	1	2400 円城 周城市域	500 1900	なし	○	有機的	円	放射状	マンズールが建設した円城 前身は、Kharf, 円城の周囲に2つの運河と9世紀の東岸市壁で囲 まれた区域
	Surra Man Ra	1	3300 宮殿 市域	125 3175	あり			不整形	直交	Dar al-Khalifaの面積。 前身はサーサーン朝の宮殿都市。ムータシムの時代の市域長さ 11km幅平均3kmと仮定。市域東に広大なal-Hayがある。
	Mutawakkiliya	1	2000 宮殿 市域	765 1235	あり			不整形	直交	宮殿域の面積、ただしセキュリティゾーンを含む。 前身はサーサーン朝の宮殿都市。
	Mada'en	1	1215 Cteshipon Aspabar Weh Ardashir	400 115 700	あり	○	円形 (歪み)	矩形	?	大モスク建設、9世紀には農業拠点、 ターキ・キスラなどサーサーン朝の公共建築 サーサーン朝期にはユダヤ教、キリスト教徒、次第に 廃墟化 大モスクの西に702年にダール・アル・イマーラ建設 Bosworth, p.550
Syria	Wasit	2	300	300?	?			不整形	直交	ローマ時代アレリアヌス帝の城壁内 市域
	Antiochia	2	440 城壁内 市域 山地	60 240 140	あり			不整形	直交	市壁に囲まれた斜面地、東側にひろがる
	Damascus	2	110	110	あり			矩形	直交→有機的	矩形都市内にグリッド状の街路網
	Raqqa	2	135 Nikephorion al-Rafika	90 145	あり			不整形	直交	古代ローマ都市を継承 796年に馬蹄形都市ラッカを建設、アッパース朝宮殿は 郊外に点在
	Palmyra	2	130	130	あり			不整形	直交	ウマイヤ朝期大モスク建設、衰退
	Jerash	3	90	90	あり			不整形	直交	ウマイヤ朝期大モスク建設、衰退
	Jerusalem	3	85	85(14)	あり			不整形	直交→有機的	○ は神殿の丘、ユダヤ神殿、ローマ神殿を経て岩のドームとア クサ・モスクが建設された

表2 続き

	500-1000年までの最大面積(ha)		面積 (ha)	市壁	非定型 概形	非定型 街路網	定型 概形	定型 街路網	注記
Syria									古代ローマ時代の市域、市域外にスタディウム、3つの貯水池、2つの劇場
	Bosra	3	80	市域	あり		不整形	直交→有機的	古代ローマ時代のkastrom (城塞)
	Aleppo	3	75	城塞	あり		矩形	直交	
	Resafa	3	25		75(10)	あり	矩形+Tepe	直交→有機的	()は城塞の面積、矩形都市内にグリッド状の街路網
	Anjar	4	11		25	あり	矩形	?	ウマイヤ朝期に教会の隣に大モスク建設
Arabia	Aqaba	4	2		11	あり	矩形	直交	宮殿と大モスクをもつ、農業地点ではないか？
	Medina	3	50		2	あり	矩形	直線	教会のあるアカバ遺跡が近傍に広がる
	Jeddah	3	65?		50	後補	○	有機的	ヤスリブと呼ばれる地域で、ユタヤ教の集住地があった。974年市壁新設
					65	なし	○	有機的	当時は市壁がなく、広がり不明で、数値はマムレーク朝の市壁内の面積。前身は少し離れた漁師町
Egypt							隅欠き矩形	直線	前身であったバビロン
	Cairo	1	960	Babylon	あり		不整形	直線/有機的	イスラーム以後のフスタート、アスカル、カタイーを含む。市壁は12世紀新設
				Fustat	後補		矩形	中央通り	969-973年建設のファティマ朝の宮殿都市、中央通りの両端に宮殿
	Alexandria	2	300	Al-Qahlira	あり		直交街路	直交	アレキサンドロス大王の建設したヘレニズム都市を核に、古代ローマ都市が築かれていた。
Maghrib							不整形	中央通り	9世紀中頃に縮小市壁を建設
									762年市壁建設。前身となる古代ローマ、ビザンツの集住地があったという伝承。
	Qairawan	2	295	762年市壁	80	新設	○	?	9世紀には大モスクを中心に直径2kmほどが市壁に囲まれる
				9世紀の市壁	250	あり	○	?	Fatima朝の建設の宮殿都市、Qairawanと繋がる947-69建設
				Sabra Mansuriya	45	あり	楕円形	十字通り	前身の古代ローマ港市、中央通りの両端に宮殿、大モスクは市壁沿い、港を含む916-21建設
Andalusia	Mahdiya	3	35		35	あり	細長形	中央通り	古代ローマ都市の上に、775年に城塞建設、859年に古代ローマ都市を踏襲して市壁を建設
	Susse	3	30		30	新設	矩形	十字路	古代の十字路の上、市壁の建設は9世紀
	Tunis	3	25		25	新設	不整形	直交→有機的	古代ローマ都市を踏襲
	Cordoba	1	1215	Cordoba	100	あり	不整形	十字路	郊外への街路沿いにアメーバー状に広がる市域
				市壁外の市域	1000	なし	○	街路	矩形都市、宮殿を中心とする、庭園から発達 936-57建設
				Madina al-Zahra	115	あり	矩形	中央通り	

面積ランクは、1は900ha以上、2は100～500ha、3は20～100ha、4は20ha未満
は、イスラーム支配確立以前にすでに存在した市街地等

と考えることが適当なのではないだろうか。

1-3. 都市中心の移動と突然巨大化した都市、そして衰退した都市

ラッカ、カイロ、バグダード、メルブなどには、中心を近傍で移していく現象が見られる。ただしこの現象は、この時代に限った事象ではない。例えば、テベと矩形の都市が結びついている都市、メルブ、ヘラート、アレppoなどは初期の都市はテベにあり、ヘレニズムの時代から紀元後3世紀頃までに矩形都市が築かれた。

この時代に注目すべき事象は、イスラームの侵攻後、突然巨大化した都市である。従前の都市域を引き継ぎ、近傍に新たに都市域を構築する例が多い。1000年以後前近代の中緯度乾燥地域の都市には、このような傾向は見られない。

この現象は王朝の首都レベルの都市で特に顕著である。アッバース朝の首都としての、バグダード、スッラ・マン・ラーおよびムタワッキリーヤが最も面積規模が大きい。ウマイヤ朝の首都となったダマスクスでは、先述したように実際の人口は不明ながら、既存市域はそのままの形で維持して人口増加を迎えた。後ウマイヤ朝の首都コルドバでは、街道沿いに新たな市壁のない市域が増殖するとともに、郊外にも集住地が形成された。

首都規模ほどではないが、地方支配の拠点も同様であった。中央アジアやペルシアではブハラ、サマルカンド、イスファハーンなどをはじめ、既往の城塞と都市域の周りに拡大化した市街に、それらを囲む形で新たな市壁が建設され、あるいはメルブのように少し離れて新市壁に囲まれた市街地が建設された。エジプトや北アフリカでは、すでに既往の市壁が荒廃し、カイラワーンのように前身都市がわからなくなっている場合もあ

るが、アレキサンドリア、スース、チュニスではこの時代に市壁が新たに建設された。

一方、この時代に衰退した都市がある。ビシャーポールは10世紀までは住む人がいたというが、7世紀以後次第に凋落した。クテシフォンも7世紀以後次第に荒廃し、マンスールがバグダード建設に宮殿の転用材を利用したことが有名である。ジェラシュにはウマイヤ朝期のモスクが作られるものの、749年の地震で大きく被害を受ける。また、サーマッラーは、バグダードへと首都が戻ると遺跡と化す。

都市の拡大や衰退については、一つの都市だけでなく広域の都市のネットワークの変遷を考えねばならない。長期的にみるとイスラーム勢力の台頭は、地方の首座都市の変更はもたらしたものの、直接的に都市を滅ぼしたわけではなかったのではないだろうか。首座都市の変更は、サーサーン朝のペルシアとイラクに顕著で、ビザンティン帝国下にあった地中海周域では、イスラーム侵攻以前には、小規模な都市が多かったので、フスタートやカイラワーン、コルドバの台頭以外には特に顕著ではない。

2. 都市の形態から

冒頭に定型都市と非定型都市で紹介したように、有機的形態をとるゆえに自然発生的と推測されるものと、幾何学的で人為的に計画されたと推察されるものがある。形態的計画性は、都市の外形と街路網から判断することが可能である。外形に関しては、計画性を有する都市の多くは矩形(長方形の場合と正方形の場合がある)で、少数ながら円形がある。一方街路網の計画では、直線街路、直交2軸、直交グリッド、放射状街路などがある。とはいえ、外形と街路網の双方が計画性を持つ場

合は少なく、土地の起伏や河川などの状況によって幾何学性が歪む。くわえて、例えば宮殿域や神域だけが部分的に計画性をもつ都市もある。それゆえ本稿においては、定型都市と非定型都市のあいだに、都市の外形と街路網を挿入して、幾つかの段階を想定することとした。なお、対象時代に建設された都市として、ニーシャープール、ワーシトは、市壁の有無、市域の様相は不明である。

2-1. 囲殻都市

中緯度乾燥地域では、周壁をめぐるし内部に有機的な街路網を持つことがウルやウルクの昔から通例であった。周壁の形は、多くは歪んだ円形や紡錘形などで、テペとなった遺構も数多い。ウルでは有機的な街路網に不整形な中庭建築が連なり、都市域は非定型都市といえるが、神域は整形な矩形を連ねる。

計画的な要素を、外形あるいは街路に盛り込んだ定型都市は紀元前 10 世紀から紀元後 3 世紀に増加する。その背景には青銅器時代から鉄器時代への移行による工具の進化が考えられる。特にアレキサンドロス大王の遠征以後、古代ギリシアや古代ローマの植民都市では定型化が顕著である。都市の外形や街路網を計画的に設計することは、都市をコントロールする一つの試みとも捉えられる。他方で、宗教や思想に基づく理想都市を具現化しようとする試みともいえよう。

本稿の対象とする時代には、中央アジアからアンダルシアまで矩形都市を確認できる。これはヘレニズムの矩形都市の潮流が古代ローマ、サーサーン朝に引き継がれ、その都市をそのまま利用したためである。622 年以後に作られた矩形都市として、アンジャールやアカバは古代ローマの軍営都市カストラムの系譜をつぐ。またアル・カーヒラとマディーナット・アッ・ザフラーは、宮殿都市として矩形を選択したと考えられる。

円形に関しては、本稿の対象とする時代にはバグダードの円城が有名ながら、先例としてのサーサーン朝のフィールーザーバードでは、放射状の街路割も指摘される。同じくサーサーン朝のダラブゲルドでは歪みのある円形である。真円の系譜上⁷に位置付けられる円城は、直接的にはサーサーン朝の円形都市の後継者で、アッバース帝国の中心としての意味をもって設計されたが、後続例はほとんどないことが注目できる⁸。

一方、非定型都市として本稿の対象とする時代に建設が進んだものとして、メルブのスルタン・カラー、ブハーラの拡張市街地、イスファハーンの市壁内、レイの市壁内などがあげられる。

2-2. 周壁のない都市

中緯度乾燥地域の都市形態として、市壁をもたない都市は数少ないが、存在する。とはいえ、周壁のない都市では都市域の広がりやを推定することは難しい。イラクのクーファとバスラ、サウジの

7 クレスウェルはアッシリアの都市の図像からはじめ、幾つかの円形に近い都市を紹介する。紀元前 3000 年紀にさかのぼるマリは巨大な真円の都市であった。ただし、自然に広がるテペの形が円形に近い場合もあり、幾何学的な真円をとる都市とは区別せねばならない。

8 ハルン・アル・ラシードが正 8 角形のカーディシーヤ宮殿、不整馬蹄形の都市ラッカ、真円と正方形の建造物ヘラクラをつくるが、その後は管見の限り見当たらない。また、都市内の広場としてもバグダードのような円形広場は見当たらない。

アル・ハサ、メッカ、メディナでは、この時代に市壁をもたなかった。

メッカやメディナ⁹の形は、伝統的なアラビア半島のオアシス集落を引き継いだのではないだろうか。オアシス集落では、水場の周囲にテントが集まり、いくつかの日乾レンガ造の建築もあったかもしれない。イスラームの聖都となったことで、人口や規模が増し、次第に仮設テントから常設建築へと姿を変えていったのだろう。

ミスル（軍営都市）の場合、その立地として既存の集住の核の上や近傍を選んだことは先述したが、集住の様相はオアシス拠点と同様だったと推察できる。大モスクと支配者の拠点を中心に、当初は軍団のテント群が部族ごとに集合し、取り巻く状況で、市壁は建設されなかった。アル・ハサは10世紀にカルマト派の拠点となったので、クーファやバスラの軍営都市と同様に見做すことができる。

バグダード、サーマッラーの2つの都市、フスタートの広域市街地には、集住地を取り巻く市壁は設けられなかった。また、コルドバはローマ時代の都市を引継いだ市壁を有したが、人口増加によって市壁外に市域が広がり、市壁の外側を市壁のない集住地が取り囲むようになった。これらは、上記のオアシス都市とは異なる、この時代の特殊現象であると位置付けたい。その理由は、いずれもカリフ在住の首都の大都市であるからである。その先例としてサーサーン朝時代のクテシフォンの公共建築が配されたアスパバールを指摘できよう。これらの都市は、先述したように人口と面積の規模の特殊性に加え、このような巨大で

かつ市壁をもたない都市は、17世紀のイスファハーンまでは西アジア、ヨーロッパ、北アフリカには現れない。

2-3. 街路の計画性

計画性をもった街路には、直線の大通り、十字の交差路、グリッド状の街路、放射状の街路などがある。一方、曲折する街路に袋小路がつながる街路を計画的につくることは難しい。有機的な街路網はどのようにして形成されるのだろうか。ダマスクスやアレppoのヘレニズムのグリッド都市が長い間の居住によって、次第に有機的に歪んでいくことは指摘されている¹⁰。また、集住の際に、街路を主体とせずに個々の土地所有の隙間を縫うように街路が形成され、長い間にわたって生成されたとも考えられる。いずれにせよ、短期間の計画とは異なり、長期にわたって形成されたのではないだろうか。

矩形の周壁をめぐるし内部に十字に交わる街路をもつ都市、あるいはグリッド状の街路網を持つ都市では、街区割に計画性が用いられることが多い。ちなみに、宮殿や宮殿都市は、計画性が高く定型である。

ただし、ヘラートやビーシャープールのように外形と内部街路ともに計画性をもつ都市ばかりではない。ジェラシュやパルミラのように外形は不整形ながら内部に直交街路網をもつ場合がある。また街路網は市壁に比べて変容が顕著なことに加え、街路の様相が不明な都市も多い。

7世紀以後10世紀までに作られた計画的街路網の様相を伝えるのは、遺跡と化したサーマッ

9 Munt, Harry, *The Holy City of Medina; Sacred Space in Early Islamic Arabia*, Cambridge University Press, 2014, pp. 94-121.

10 Lapidus, I.M. *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge University Press, 1967, Blood, Finbar Barry, *The Great Mosque of Damascus: Studies on the Makings of an Umayyad Visual Culture*, Brill, 2001.

ラーの2都市である。注目すべきは、宮殿から都市域を貫く大通りと、兵営部分の短冊状の街区割である。加えてマディーナット・アッ・ザフラーとアル・カーヒラでは直線大通りをもつ。

とはいえ、初期イスラーム時代の都市街路の様相は、発掘によって判明するだけで、発掘は都市の一部でなされるのみで、都市全体の街路の様相を捉えることは難しい。

3. 宮殿、城塞、都市

三者ともに厚い壁で囲まれることが多い。宮殿は為政者の住まいや統治機関、城塞は軍事的側面、都市は一般の人々の住居とそれぞれ特筆すべき機能をもつものの、相互乗り入れも大きい。一応上述のような機能の差異を前提とした上で、相互の関係を考えてみたい。

3-1. 城塞と都市の関係

すべての都市が城塞をもつわけではない。また城塞と市域が連続せずに、異なる周壁で囲まれることもある。7世紀以前の事象ながら、多くの矩形都市はそれより前時代のテペ状の都市と並存する点は興味深い。

通常、城塞はカラア、クヘンディズ、都市域はマディーナ、シャハレスタンなどと呼ばれるが、例えばメルブではそれぞれの時代の都市域がカラアと呼ばれる。またマディーナット・アッ・ザフラーは、後ウマイヤ朝カリフとそれを取り巻く軍人や官僚の居住地で、普通の人々はコルドバに住んでいたにも関わらずマディーナと呼ばれる。

また、中央アジアには市域の外側の郊外地にも

周壁をめぐる伝統があり、ラバドとよばれる。

バグダードの場合には、円城自体はカリフの宮殿とそれを取り巻く円形広場、さらに外側のカリフの係累やマワーリーの住まいが堅固な壁で囲まれた。それはあたかも、城塞の機能を備えた宮殿であった。本来の市民の暮らす都市は、運河とティグリス川を外周とする不定形な集住地であった。しかしながら、10世紀になると円城の広場内に住宅が立つようになり、円城の壁は次第に都市の中へと姿を消していく。

3-2. 宮殿と都市の関係、そして宮殿都市

この時代の注目すべき事象のもう一つに、大都市において、宮殿が都市から出て行くようになる点を指摘できる。これに伴い、宮殿のある小規模拠点を都市と考えるかどうか問題となる。

ムハンマドの家は、大モスクそのものであった。正統カリフ時代、クーファやバスラでは、大モスクとダール・アル・イマーラ（為政者の居所）がセットで建設された。ウマイヤ朝期には、ダマスカスやエルサレムなど既存の都市の教会や聖地を利用して大モスクを建て、そこに近接して宮殿を営む¹¹と同時に、大シリアでは都市から離れた離宮が数多く建設された。アッバース朝期になると、バグダードでは最初は宮殿域としての円城が中心を占め大モスクを内包したが、円城の東北外や対岸に宮殿域が作られるようになる。ラッカでは馬蹄形市域の中央に大モスクがあるが、宮殿は郊外に建設される。サーマッラーの2つの都市では、都市域と宮殿域は区分され、市域の端部に大モスクが建設されると同時に郊外に巨大な宮殿が

11 アンマンでは宮殿はアクロポリス城塞に、大モスクは下の街に作られた。ウマイヤ朝の軍営都市ワーシトでは、大モスクとダール・アル・イマーラが接していた。

多数建設される。同様な郊外の宮殿都市に、ファールティマ朝期のカイラワーン郊外のサブラ・マンズーリヤや、カイロの矩形宮殿都市アル・カーヒラ、あるいは後ウマイヤ朝首都コルドバ郊外のマディーナット・アッ・ザフラーがある。

位置の問題に加え、広大な宮殿は、為政者の居住機能だけをまかなっていたわけではなく、支配域の統治や管理、あるいは為政者とそれを取り巻く人々の生活を支える機能も担っていたわけで、これらは、計画された宮殿都市と考えるべきであろうか。とはいえ、これらの宮殿都市のうち、アル・カーヒラだけは例外ながら、他の宮殿都市は短命に終わり遺跡と化する。

これらの宮殿、あるいは宮殿都市は、商業活動や一般人の住む母都市ともいえる都市と共存関係なしには存在し得なかったのではないかと推察する。それゆえ、母都市と多少の距離をおく衛星都市として考えることが適当なのではないだろうか。9世紀サーマッラーの諸都市の母都市をバグダードと考えることもできるのではないだろうか。

4. まとめ

本稿の対象は、規模の大きな都市が大半を占めるが、その中でも初期イスラーム時代にはバグ

ダード、サーマッラーの2つの都市、フスタートからアル・カーヒラの広域市街地は特殊な存在である。大きな人口を支えるために、いくつかの近傍の都市が同時に機能するという先例は、サーサーン朝のクテシフォンにあった¹²。クテシフォンでは、矩形都市と円形都市、そして市壁のない広がり、5 km ほど離れた2つの都市がイスラームの侵攻以前に機能し¹³、50万ともいわれる人口を支えていた。バグダードは、その円城がフィールザーバードの都市形態を受け継いだだけではなく、大規模都市としての側面も大きく影響を受けたのである。

都市の継続性については、当時の都市景観を考える場合、キリスト教徒やゾロアスター教徒など異教徒との共存だけでなく、いわゆる荒廃した古代の建物との共存する状況であった。地中海地域のモスクは、古代建築の転用材を用いることが通例であり、廃墟と新建築が建ち並ぶ様相だったのではないだろうか。

付録

1. 中央アジアの都市

地方都市としてのメルブ¹⁴、バルフ¹⁵、ヘラー¹⁶、サマルカンド（アフラシアーブ）¹⁷、ブハー

12 Morony, Michael, “Mada’en”, *Encyclopedia of Iranica*, 2009, <http://www.iranicaonline.org/articles/madaen-sasani-an-metropolitan-area>

13 Simpson, John, “The Land behind Ctesiphon: The Archaeology of Babylonia during the Period of the Babylonian Talmud”, *The Archaeology and Material Culture of the Babylonian Talmud*, Brill, 2015, p. 8 図版参照。

14 Williams, Tim, “Unmanned Aerial Vehicle Photography: Exploring the Medieval City of Merv, on the Silk Roads of Central Asia”, *Archaeology International*, p. 55, 2012.

15 Bosworth, C. E., “ii. History from the Arab Conquest to the Mongols, Balk”, *Encyclopedia of Iranica*, 1988, <http://www.iranicaonline.org/articles/balk-town-and-province>

16 Allen, Terry, *The Catalogue of the Toponyms and Monuments of Timurid Herat*, Cambridge, Mass., Map2, 1981.

17 Shishkina, G.V., *Glazurovannaya keramika Sogda*, Tashkent, 1979.

ラ¹⁸などは市壁内が広い。規模が小さいのがカシュガル、タシケント、ウルゲンチなどである。これらの都市は全て中央アジアにイスラームの支配が確立する以前の都市を引き継ぎ、都市は厚い市壁に囲まれ、城塞部（カラあるいはクヘンディズ）と市壁に囲まれた市街地（シャハレスタン）からなる。中央アジアの都市には、壁に囲まれた郊外地（ラバド）の存在が解かれる。サマルカンドではイスラーム期に建設された城壁とそれ以前の城壁の間の土地がラバドと呼ばれ、タシケントの前身ピンカスは2重ラバドで囲まれていたと記録される。そのほかの都市では、この時期に明確なラバドの外市壁を確認できない。

矩形都市はメルブのギヤウル・カラ（一辺1800 m）、ブハーラのアラブ軍侵攻直前までのシャハレスタン（6世紀から709年、一辺550 m）、建設期不明のヘラート（一辺2000 m）で、それぞれ十字の直交街路が復元される。その他は、非定型都市である。メルブでは8世紀にギヤウル・カラの西に非定型なスルタン・カラ¹⁹が建設され、次第に西の町に移り住んだが、10世紀まで最古の円形城塞都市エルク・カラは使われていた。ブハーラでは、サーマーン朝期に城塞とシャハレスタンを囲むより大きな市域が壁で囲まれた。矩形と十字の都市構造が長期に渡って維持されたのは

ヘラートだけだが、北側にクヘンディズと呼ばれる円形城塞都市があり、10世紀に再利用される。

ブハーラ、サマルカンドは初期イスラーム時代に都市が拡大し、メルブ、ヘラートでは都市が移動・拡張する様相を確認できる。対象時代に限る記録の残る人口としては、900年のブハーラ10万人が最高である。

2. ペルシアの都市

レイ²⁰（9から10世紀）、ニーシャープール（10世紀）、イスファハーン（1000年）の3都市は10万人を超える大都市であった。ニーシャープールに関しては、発掘はなされているがその概形は明らかでなくこの1700 ha²¹と言われるが、この時代のペルシアおよび中央アジアの都市としては群を抜いて広い。その一部にあるスルタン・テペは350 m四方の矩形市壁の北東辺に直径200 mの円形城塞がついた形で、ヘラートやメルブと同様な形を持つので、ここが7世紀の市域で、その後周囲に拡大していく形をとったと推察される。イスファハーンは7世紀には小規模な2つの集住地（サーサーン朝軍営都市ジェイと馬術競技場を持つヤフーディヤ）が4 kmほど離れて存在した。その後、ヤフーディヤが巨大化し、10世紀後半には市壁で囲まれた。レイは尾根の先の城塞

18 Sobti, Manu P., *Urban Metamorphosis and Change in Central Asian Cities after the Arab Invasion*, Georgia Institute of Technology, Atlanta, 2005.

19 Williams, Tim, *Unmanned Aerial Vehicle Photography: Exploring the Medieval City of Merv, on the Silk Roads of Central Asia*, *Archaeology International* No. 15, 2011-2012, 54-68.

20 Rante, Rocco, “Ray i.Archeology”, *Encyclopedia of Iranica*, 2010, <http://www.iranicaonline.org/articles/ray-i-archeo>

21 Sardar, Marika. “The Metropolitan Museum’s Excavations at Nishapur.” In *Heilbrunn Timeline of Art History*. New York: The Metropolitan Museum of Art, 2000. http://www.metmuseum.org/toah/hd/nish/hd_nish.htm (originally published October 2001, last revised July 2011). 以下引用：At its peak between the ninth and thirteenth centuries, Nishapur had a population of approximately 100,000 to 200,000 people, and development covering an area of approximately six and a half square miles.

を三角形に囲む形で 215 ha の市壁が復元されている²²。フィールーザーバード、ダラーブゲルド、ビーシャープールはサーサーン朝期の大都市で、シーラーズ²³の勃興とともに、次第に衰退する。

人口が 4 から 5 万人代とされる都市にハマダーン、ケルマン・シャー、イスタフル、シーラーズ、シーラーフなどがある。イスタフル²⁴は 400 m 四方ほどの矩形都市がほぼ同規模のサーサーン朝矩形都市の隣に軸線をずらして作られたとするが、それらがのるマウンドは不整形で 65ha である。シーラーズ²⁵は、旧市街中心部の約 120ha ほどの広がりがあった。

どの都市もサーサーン朝期からの連続性を持つ点は共通する。定型都市としてはバグダードの円形都市の先例ともいえる真円都市にフィールーザーバードとダラーブゲルド、矩形定型都市としては大規模なビーシャープールと小規模なスルタン・テペ（ニーシャープール）とイスタフルがあり、イスファハーンのジェイは矩形か真円であっ

たとされる。そのほかは非定型都市である²⁶。

3. イラクの都市

クーファ (15 万人) とバスラ (20 万人) について、670 年に巨大なアラブ人口を抱えたとする説がある²⁷。ダール・アル・イマーラと金曜モスクを中心に部族ごとの集住地を復元した説がいくつかあるが、ミスルとしての当時の姿は不明である²⁸。10 世紀まで 5 万人以上の人口を保つ記述から、周辺部も次第にテントや仮設建築から日乾レンガ造の都市に変わったとおもわれる。しかしながら市壁の存在は不明である。

一方、バグダード²⁹は 2400 ha の真円の城塞 (762 年着工) を囲むティグリス川と 2 つの運河に挟まれた三角形の部分が都市化していたとされる。市壁を持たない都市であったが、10 世紀には東岸に市壁が建設される。これらの広大な都市説を支えるかのようにサーマッラーは、20 km あまりの川沿いをわずか 60 年余りの間に、スッラ・マ

22 深見奈緒子、イランの古都イスファハーン『イスラーム世界の都市空間』、陣内秀信・新井勇治編、法政大学出版会、2002、pp.469-538。同、よみがえるイスファハーン『イスファハーンーオアシスの夢』、NHK 出版、2002、pp. 169-199。

23 Adli, Saeid Nazari and Mohamadzadeh, Mohsen, “A Deleuzean Interpretation of Urban Morphological Transformation”, *Archi-Cultural Translations through the Silk Road 2nd International Conference Proceedings*, Mukogawa Women's Univ., Nishinomiya, Japan, July 14-16, 2012, pp. 401-406.

24 Whitcomb, Donald, *Islamic Archaeology at Susa, Paléorient*, Vol. 11, No. 2 1985, pp. 83-90.

25 Pirbazari, Alireza Qolinezhad, *Structural Transformations of Shiraz during 95 -138, European Online Journal of Natural and Social Sciences* 2016; www.european-science.com Vol.5, No.3 Special Issue on Humanities and Social Sciences, pp. 234-250.

26 対象時代のモスク遺構が残る都市としては、タムガン、ナーイーン、ヤズド郊外のファフラージなどがあるが、当時の都市域が不明であるために割愛した。とはいえ、これらはいずれもサーサーン朝からの継続的な集住地で、モスクの周囲には都市が形成されていたであろう。

27 David Siddhartha Patel が 2001 年の Stanford University 提出博士論文 “Political Engineering and the Origins of Culture: The Institutional Foundations of the Rise of Islam” の中で Weatley 2000, p. 46, 49 として引いている。

28 Hillenbrand, Robert, “Anjar and Early Islamic Urbanism”, *The Idea and Ideal of the Town between Late Antiquity and the Early Middle Ages*, pp. 59-98, Brill, 1999.

29 深見奈緒子、円城都市バグダッドの再現『文明の道 4 イスラムと十字軍』NHK 出版、pp. 40-53, 2004.

ン・ラー (836 年) からムタワッキリーヤ (847 年) へと巨大市域が移動する。同時にアル・カトゥル (833-6 年)、バルクワラ、アル・アーシクなど離れた宮殿地域が築かれる。ノサージ³⁰は軍の存在をその理由とするが、イラクの当時の都市については不明な点が多い。注目すべき点は、サーマッラーの2つの都市には直線街路と矩形の宅地割がなされている。

都市の連続性については、クーファは前身の集住地が不明ながら、他はサーサーン朝期の集住の集積を引き継ぐ形でこの時代に巨大都市化する。特に人口も面積も巨大で、市壁を持たない都市の存在は他の地域には見られない。サーサーン朝のクテシフォン（マダーイーン）との関係性が指摘できる。

4. シリアの都市

大シリアの都市は、ヘレニズムからローマ時代の比較的狭い囲まれた都市域を引き継ぎ、その中に大モスクを建設していく様相が明らかである。ローマ時代に都市化していたパルミラ、ジェラシュ、バールベック、ルサファ、ボスラには転用材を利用した比較的規模の大きなウマイヤ朝期のモスクが残り、イスラーム侵攻後も旧来の地方都市にそのまま人が住み続け、教会も共存していた。ヨハネ教会を706年に接収して建設されたダマスクスの大モスクは、706年までは教会の南周廊一部を借りる形であった。

中でもウマイヤ朝首都のダマスクス³¹、地方拠点としてのアレppo、聖都エルサレムは、ウマイ

ヤ朝以後も5万人以上の人口を保った大シリアの中では大規模な都市であった。ただし、ラッカは、ニケフォリオンを継続的に使ったことは他の都市と同様ながら、ハルン・アル・ラシードが冬の都としてのアル・ラフィーカを築き、都市の周囲に宮殿が建てられた点は、むしろアッバース朝のイラクの大都市と共通する。

アンジャール³²とアカバは、地方拠点としてイスラーム時代に建設された小都市で、矩形の市壁と直線的な街路を持つ点は、ローマ時代の軍営カストラムの系譜を継いだものである。現在遺跡として残るものは、その後都市機能を喪失あるいは縮小させたものであるが、ボスラ、ジェラシュでは747年の地震の被害が大きかった。

5. アラビア半島の都市

イスラーム時代の聖都としてのメッカ、メディナ、メッカへの外港ジェッダが大きな都市であるがこの時代には市壁を持たない。カルマト派の拠点となったハサは1000年に11万の人口を集めたとされるが、これはイラクの7世紀中葉のクーファやバスラと同様の部族の集結を表すのではないだろうか。

メッカはイスラーム以前からアラビアの聖都であり、ワディの集結する土地で前近代には市壁は作られなかった。当時もイスラーム以前からのカーバ神殿を取り囲む形でアメーバー状の住宅の広がりを持っていたのではないだろうか。一方メディナは古くは農地とナツメヤシ林に囲まれた集住地が点在する状況で、有事の際に閉じこもる

30 Northedge, Alastir, *The Historical Topography of Samarra*, British School of Archaeology in Iraq, 2007.

31 Burns, R. *Damascus: A History*, London: Routledge, 2005.

32 Hillenbrand, Robert, “Anjar and Early Islamic Urbanism”, *The Idea and Ideal of the Town between Late Antiquity and the Early Middle Ages*, pp. 59-98, Brill, 1999.

200 もの砦があった。預言者ムハンマドが移住した時には、ユダヤ人のコミュニティがあり、預言者のモスクの周囲にテント、時には日乾レンガ造でイスラーム教徒の家が点在し、市壁はないがオアシス都市になっていったと思われる。その後、974年に初めて紡錘形の市壁が建設される。ジェッダは、マムルーク朝になって市壁が建設される。

6. エジプトの都市

いずれも、ナイル川流域の都市であり、乾燥地域ではあるものの中央アジアからアラビア半島までの地域と比べると緑地内に位置する点が異なる。地中海の港市アレキサンドリアと、ナイルの要に位置するカイロが大都市である。上エジプトのクースやキフトはコプト時代からの地方都市である。クースにはファールティマ朝のモスクの北に、新王国時代の神殿遺跡も残り、都市の歴史の長さを示す。

アレキサンドリアは、古代には人口 30 万人の巨大都市であったが、イスラーム侵攻ののち、古代の東西通りデクマヌスを軸とし、9 世紀半ばに北西部の古代市壁を用いて市域を縮小した市壁が建設された。一方、カイロは、ローマの軍事基地としてのバビロンの北側に、軍営都市フスタートを築き、ナイル川沿いに北に向かい、アスカル、カタールと新たな市街地を広げた。フスタートの市街地には複雑な街路網が発掘されているが、この時代の市壁は確認されていない。969 年にファールティマ朝が新都として築いたアル・カーヒラは市壁に囲まれた矩形都市であった。カイロとアレキサンドリアはこの時代の人口や都市域の変容に関して異なった方向性を持つが、都市のきっかけには古代からの連続性があった点は重要である。

7. マグレブの都市

北アフリカでは、人口記録の最大都市はカイラワーンで、670 年からイフリキヤの拠点となったが、762 年に建設された市壁内は小規模で、9 世紀に入るとアグラブ朝の首都として巨大化した区域が市壁で囲まれ、イフリーキヤの第一の都市となる。加えて、5 km 南東にアッバシーヤ、10 km 南西にラッカダの宮殿都市が造営された。ファールティマ朝が首都としたマフディヤは岬を利用した小規模な城塞都市である。ファールティマ朝はカイラワーンと繋げる形で、バグダードの円城を模したサブラ・マンスーリヤ (946 年) を建設した。

チュニスでは、当時はまだ市壁内は小さく、フェズはアラブ族の拠点が川の両岸に置かれた状況であった。

カイラワーンは古代都市を利用したとされるが、前身都市は不明ながら、大モスクの数多くの転用材は都市の再利用を物語る。また、スースもイスラーム化初期には軍営拠点が築かれるが、都市形態から古代都市が利用されたと思われる。大シリアに比べると、古代都市に連続的に人が住むのではなく、一旦遺跡と化した都市が再利用されることが多いといえよう。

8. アンダルシアの都市

コルドバは、後ウマイヤ朝の首都として繁栄を極めていた。市域に囲まれた部分はそれほど多くはないが、周囲には、アメーバー状の都市域が広がり、離宮としての集住地が数多く築かれた。1000 年の 45 万人という人口を支えるためには、おそらく市域の外にも住宅地が広がっていた。

研究項目 C01「中世～現代の西アジア都市」

計画研究 06

西アジア地域の都市空間の重層性に関する
計画論的研究

計画研究 06 「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」 2018 年度活動報告

松 原 康 介
筑波大学システム情報系

都市計画関連活動

1. UNDP シリア人文化財専門家国内研修 (2018 年 10 月 28 日－11 月 25 日)

本研修は、UNDP のプロジェクト（日本政府出資枠による）として、シリアの考古総局から派遣されてきた 4 名の文化財専門家を、日本国内の被災地（戦災・震災・その他災害など）に案内し、行政関係者、学識経験者らのコーディネートの下に研修を行ったものである。研修担当者は松原であり、補助者としてアッラーム・アルカゼイが同行した。

研修のテーマは「記憶」であり、各被災地では災害の記憶がどのように扱われているかを中心に見聞を深めた。講師として、本プロジェクトから、木村周平、田中英資、アッラーム・アルカゼイ

がそれぞれ講義および現地研修を行った（図 1）。この際、現地調査の交通費を本科研費から補助的に支出した。

一か月弱に及んだ研修の、シリア人専門家による成果発表を、国際開発学会大会（2018 年 11 月 23 日）における企画セッションとして実施した。

2. UNDP シリア人文化財専門家レバノン研修 (2018 年 10 月 28 日－11 月 25 日)

本研修は、1. の国内研修と対になるもので、やはりシリアの考古総局から派遣されてきた 4 名の専門家に対し、内戦からの戦災復興都市計画が実施されてきたベイルートのダウントウン、及び考古遺跡を中心とするビブロスの旧市街を対象として研修を実施したものである（図 2）。研修担当者は松原であり、補助者としてアッラーム・アルカゼイが同行した。

レバノンの諸都市はイスラームの都市空間のみならず、そのヘレニズム時代の遺構が都市の各所に存在し、多様な空間を今日に伝えている点に特徴があり、まさにシリアの都市空間と重要な共通性がある。その内戦からの復興はシリアの復興を考える上でも参考となる点が多く含まれており、これらの特徴を特に重視して研修を実施した。ま



図 1 UNDP 国内研修レクチャー風景
(講師：田中英資研究協力者)



図2 UNDP レバノン研修現地研修風景
(若手学部生を含む)

た講師として、阿部大輔龍谷大学教授、また本プロジェクトより、海外協力者 (Dr. Robert Saliba: Professor, American University of Beirut, Lebanon; Dr. Khaled Kurdi: Professor, Lebanese University, Lebanon; Mr. Mohamed Nour El-Barbary: Assistant Lecturer, Fayoum University, Egypt)、およびアッラーム・アルカゼイ氏による講義及び現地研修を実施した。また、フランス及びモロッコに留学中であった学類生3名を調査補助者として招待し、それぞれの卒論に向けた示唆を得た。これらの講師及び補助者の調査費用の一部を、本科研費から補助的に支出した。

3. JICA 大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト

大エジプト博物館（カイロ郊外）の建設と、これに付随して実施される、最先端の技術を用いた文化財の保存修復事業を JICA が支援している。本年度、谷口は、古王国時代第6王朝の壁画、イニ・スネフェル・イシェテフのマスタバ墓から発掘された14点の壁画をカイロ博物館から移送し、保存修復、分析を行い、墓のコンテキストを復元した展示を大エジプト博物館で行うための再構築を実施した。

その他の社会活動

1. JAR/ICU/UNHCR シンポジウム

「難民高等教育支援を考える」への出席

本シンポジウムは、国際基督教大学の新垣修教授によってコーディネートされた、様々なシリア支援団体の連携を推進するための報告会である。2018年12月2日に実施された。テーマはシリア人学生の支援であり、代表者の松原が、大学教員代表として報告し、指導下のシリア人学生2名の事例報告を行った。報告には、シリア人に対する都市計画教育・研究の日本の大学における位置づけと、(難民としての)就職活動の課題提起を含んだ。シリア人学生に対しては、ある難民支援団体から就職支援の申し出があった。

2. イブラ・ワ・ハイト + 清泉女子大学 共同企画勉強会での講演

本勉強会は、シリア支援団体であるイブラ・ワ・ハイトと、そのメンバーで清泉女子大学の山本達也教授（元・アレppo大学学術交流日本センター主幹）による共同企画として実施されたもので、松原が「アレppoの旧市街、スークの未来」と題して講演した。2019年1月18日に実施され、出席者は約20名を数えた（図3）。

3. 映画『セメントの記憶』日本上映への協力

レバノン映画『セメントの記憶』（ジヤード・クルスーム監督）は、シリア内戦でレバノンに避難を余儀なくされた、いわゆるシリア人難民が、内戦後の復興が進むベイルートにおいて、苦しい労働に駆り立てられている状況を活写したドキュメンタリー映画である。この映画の日本上映にあたり、パンフレットに都市計画史の観点から松原が解説記事を寄稿した（本報告書の225-228ページ）。



図3 勉強会「アレppoの旧市街、スークの未来」風景

ジに掲載)。

2019年3月23日開始のロードショー中には、各地の映画館でシリア・レバノン、また建築関係者らとトークショーを行う予定である。

若手育成および教育連携

1. 若手育成

アッラーム・アルカゼイ（シリア国籍；筑波大学大学院博士課程2年（指導教員：松原）、モハメド・ヌール・ル＝バルバリィ（エジプト国籍；ファイヤーム大学講師）の若手研究者2名が上記UNDPシリア人研修に講師として参加した。

アルカゼイ氏は、期間中、2019年度より学振特別研究員（DC2）に採用されることが決定した。

モハメド氏はその後、スカイプ入試により合格し、2019年度より筑波大学大学院博士課程に入学予定（指導教員：松原）となった。

2. 教育連携

また、松原指導下の学類生3名（それぞれ、パリ・ラヴィレット建築大学およびモロッコ、アル＝アハワイン大学に交換留学中）を、教育的配慮も込めて調査補助者として上記UNDPレバノン研修に参画させ、将来の卒業論文などの構想を支援した。

3. 修士・卒業論文の成果

- ・ 掛神有希奈「モロッコ・フェス旧市街における中庭型住宅リヤドの空間変容」筑波大学システム情報工学研究科社会工学専攻修士論文、2019年3月
- ・ 牧野奈央「マルセイユの戦災復興都市計画における建築家位置づけ—ル・コビュジエとブイヨンの特徴に着目して—」筑波大学国際総合学類卒業論文、2019年3月
- ・ 広田瞳子「歴史都市プラハにおける広場の継承 — 旧市街広場とヴァーツラフに着目して —」筑波大学国際総合学類卒業論文、2019年3月

アルジェ・植民都市計画の変遷

(初出：『都市史研究』, No.5, pp.55-65, 2018-11)

松原 康介

筑波大学システム情報系

はじめに：本稿の背景と目的

アルジェリアの首都アルジェは、カルタゴ植民地に起源を持ち、16世紀にオスマン帝国に属する軍港として発展し、19世紀前半には植民地支配を受けフランス型の都市計画が実施された都市である。イスラームの伝統に基づき世界遺産でもあるカスバ（旧市街）の存在と、海岸線に沿った植民都市新市街の白いファサード、そしてル・コルビュジエを先駆とする建築家達の作品群には、都市・建築における地中海的要素を数多く見出しうる。

昨年末のシンポジウムで共有されたことの一つは、「全ての都市は植民都市である」という仮説であったと記憶している。今、筆者の発表を改めて書き起こすにあたって意識しているのは、それを敷衍したところにあるはずの、都市空間の地域的な独自性と、近代都市計画との絡み合いのあり方であり、アルジェを事例にそれを素描しておくことである。

アルジェの植民都市計画史は、カスバの形成史を前史とした上で、1830年の植民地化から1962年の独立までのおよそ130年間の間で、おおむね

3段階に分けて考えることができよう。① 19世紀植民地都市計画の時代は、カスバをオスマニゼーションの手法により破壊、開削した近代的空間の暴力的な形成に始まり、フランス型の植民都市新市街が建設される。歴史的な建築や都市組織といった地域性はファッションに留まるか、殆ど配慮されることはなかった。続く② ル・コルビュジエとCIAMの活動期では、近代建築運動の担い手であったル・コルビュジエとCIAMのメンバーが、それまでの植民都市計画を否定して、大規模な都市計画を構想しながら地域にも目を向け、保全や歴史的空間の読み込みを試みた時代である。ここではカスバ、ガルダイヤ、そしてマヒエッディーンのスラム事業の例をとりあげる。そして、CIAMを継承しながらもその普遍性を疑い、より地域的な独自性が追求された時代が③ 独立期の都市計画とスラム事業といえる。ここではまず、地域性と都市計画との絡み合いを考える上で重要と考えられるものの、近年は議論がやや沈滞気味な「イスラーム都市」論の問題を改めて取り上げる。その上で、独立期に大きく転換した都市計画行政と、そこで活動した日本人建築家・番匠

谷堯二（1930-1998）¹ が試みた未実現の中庭式住宅を一つの例としてとりあげる。

本稿では、紙数の都合もあり、また①と②についてはフランスを中心に既知の事項が多いことから既往研究に基づく概括にとどめ、史料を紹介しながら③の時代を中心に記述し、①、②を踏まえた③の歴史的な位置づけを目的とすることにしたい。

前史 カスバの形成と空間

植民都市計画の変遷を考える上で、各時代の特徴はカスバとの関係性に顕れるといえる。異なる空間原理を持ったカスバこそ、都市計画が相対するところの、アルジェの地域性の根源と見ることができからである。

カスバは、アルジェにおいては旧市街を意味する²。フェニキア、ローマの支配下で建設された植民都市が最初である。海側の一面には当時に起源を持つ真っ直ぐで幅の広い通りが今日でも確認でき、スーク（市場）を形成している。

オスマン帝国の傘下に入ると、アルジェのカスバは帝国の軍港都市として、堅牢な城壁で防備された。城壁内には、ケチャワ・モスク、ジャディード・モスク、サイダ・モスクが建設されていった。アンドレ・レイモンドによれば、19世紀初頭までに、城壁は海岸線に沿って構築され、内部の稠密市街地には城砦、城門、マドラサ（新学校）、スーク、病院、フンドウク（隊商宿）、シナゴーク等の施設が存在していた。街路網には階層性が認められ、主要通りたるカスバ通りとジャディード門

通りが環状に巡り、そこから不規則な細街路や袋小路が派生していた。

住宅は中庭式であり、空間構成はモロッコやチュニジアの旧市街と多く共通する。ただし、アルジェのカスバは急斜面に立地しており相当な高低差がある。アルジェの建築史家ジャン＝ジャック・ドウルズのスケッチによれば、細街路に沿って住宅の壁面が敷地一杯に迫り、袋小路からのアクセスもみられる。街路は薄暗いが、各戸には必ずと言ってよいほど中庭があり、採光と通風が確保されている。また、地下水槽からサイフォンの原理で揚水する噴水があり、植栽も豊かである。日干し煉瓦をモルタルで覆っただけの質素な外壁に対して、中庭は美しく装飾され、住民による手入れも行き届いている。こうした空間形成が一般化した要因として、多くの場合「公私分離の原則」が指摘されてきた。その意味で、中庭は家族の空間であり、私的な生活の場だといえるだろう。

ただし、こうした都市の空間的特徴は、個別事例の特徴を浮かび上がらせるためのいわば分析概念であって、そのままアルジェに固有の状況とみなすべきではない。いわゆる「イスラーム都市」論の問題との関連で後述することにした。

1. 19世紀植民都市計画の時代

1830年にアルジェリアはフランス軍により占領され植民地となった。残されている当時の図面類から、カスバ内で実施された近代開発の概要がわかる。街路線計画をかけ、広場・道路用地だけでなく沿道部の土地まで含めて超過収用を行い、

1 Matsubara, Kosuke. “Gyoji Banshoya (1930–1998): a Japanese planner devoted to historic cities in the Middle East and North Africa.” *Planning Perspective* Volume 31, Issue 3 (2016): 391-423.

2 本来、アラビア語でカスバとは城砦を意味し、また北アフリカにおいて旧市街はメディナと呼ばれることが多いが、アルジェにおいては旧市街はカスバと一般的に呼称されている。

整った町並みを形成していく手法である。この場合、新しく創出された近代的な広場や道路と、従前の建築や都市組織がどのように関係しているかが重要となる。ひとまず前史で紹介した建築について見ると、1831 年に中心部に総督府広場を建設した際、そこにあったサイダ・モスクを収用・破壊している。また、ジャディード・モスクは新設された広場に面する形となったが、高低差ができ擁壁が再構築された。また、翌年には近接するケチャワ・モスクがカトリック教会へとコンバートされた。このとき多くのムスリムが抵抗し殺害されたため、総督府広場は後に殉教者広場と呼ばれることになる。

第二帝政期(1852-1870)に入ると、ナポレオン三世とジョルジュ・オスマンの下でパリを初めとする都市改造が本格化し、古い都市組織を開削し沿道開発も合わせて行う超過収用が各地で実施されていった。1858 年にはアルジェにおいても、カスバの南側外殻にグリッド型街区を敷き詰めるナポレオン・ヴィル計画が立案された。海岸側の城壁を全て取り壊し、海岸線に沿って倉庫、その上を走る道路、そして海辺に面したアパートマンからなる大通りを建設した。アパートマンは、4～6 階建てで精細な装飾が施された典型的なオスマン様式であるが、強い日差しへの対処として壁は全て白く塗られた。今日のアルジェを象徴する海岸線ファサードはこうして形成された。大通りはレピュブリック大通りと名付けられ、路面電車も導入された。

20 世紀に入ると、ルネ・ダンジェ、アンリ・プロストといったシリアやモロッコで保全型都市計画の経験のある都市計画家らが海岸に沿ってカスバの東方向に展開する拡張計画を策定し、今日のアルジェの新市街が築かれていった。新市街に

は、19 世紀同様にオスマン様式のアパートマンを代表とする近代建築が一貫して建設されたが、いくつかの公共建築において、ドームや馬蹄型の窓、現地のタイル装飾等を用いたデザインがなされた。代表的なところでは、県庁舎(1908)と郵便局(1910)とが今日まで残るランドマーク的な存在となった。歴史的な建築要素を取り込んでいるという点でアルジェの地域性に着目したものと言え、モロッコやチュニジアのアール・デコ建築にも通じるものがあるが、数は少なかった。

このように、19 世紀的植民都市計画の時代は、フランス型の都市計画を中心に実施され、近代市街地が拡大した。しかし、アルジェ本来の都市・建築の地域性に対しては、基本的には破壊的または無関心であったといえよう。

2. ル・コルビュジエと CIAM の活動期

戦間期に当たる 1930 年代初頭、ル・コルビュジエは頻繁にアルジェを訪問し、自身の計画をアピールしていた。新時代の、機械論的・生産主義的なモダニズムを標榜するル・コルビュジエにとって、アルジェを埋め尽くしていたオスマン様式のアパートマンとアール・デコ建築は、まさに自らが取って代わるべき対象であった。サヴォア邸の翌年にあたる 1932 年、ル・コルビュジエがブリュネル市長に提案したオビュ(弾道)計画は、その名の通り、アルジェ湾の弓状の地形に沿って緩やかに曲線を描く高速道路を基軸にして都市の再構築を促すというもので、高速道路の起点はカスバを跨ぐように計画された超高層ビル群であった。基本的には、それまでの彼の計画提案と同様、超高層ビルを中心とした極めて大胆なものであったが、アルジェリアにおいてはカスバや宮殿を評価し保護することも忘れておらず、新しい道路は

歴史的市街地の外側や背後、或いはそれを飛び越えて建設されるべきだと提唱している³。実際、オビュ計画におけるカスバの部分は、カスバ両端の外側に高層ビルが配置されているが、高速道路はカスバ上空を大胆に乗り越えていく形となっている。これにより、カスバの直接的な破壊は避けられている。オビュ計画は実現することはなかったものの、後年にルイ・ミケルが新市街で高層住宅アエロ・アビタ（1955）を実現した。

また同じ時期、ル・コルビュジエはアルジェリアの伝統的な集落にも強い関心を示し、内陸のガルダイヤなど、ムザブの谷にあるイバード派の集落を訪れている。集落のオアシスの水システムやナツメヤシ、ザクロの実り、木陰の涼しさ等に触れるとともに、とりわけモスクに強いインスピレーションを受け、多くのデッサンを残している。以後、ル・コルビュジエは著作において度々ガルダイヤの集落について言及しているが、この時の体験が、後年の傑作であるロンシャン礼拝堂（1955）に繋がったとも言われている⁴。

第二次大戦後、ル・コルビュジエはMRU（フランス復興・都市計画省）とともにマルセイユのユニテ・ダビタシオン（1949）を建設し、近代建築による戦後復興の立役者として知られることになる。しかし、上述のアルジェリアにおける活動には、地域の都市・建築への関心が明確に見出されるのであり、それは戦後の建築ラッシュの最中に全て失われたのではなく、例えばやはり被災した中世の礼拝堂の再建であったロンシャン礼拝堂

のような形で現れたものと見ることも出来よう。

こうした地域性への関心を主題として活動を続けていたのがCIAM アルジェである。CIAM アルジェは、戦後となった1951年に、ル・コルビュジエに縁のあるアルジェリアの建築家達によって結成された。主な参加者を挙げると、上述のミケル、ピエール＝アンドレ・エムリー、ジャン・ドウ・メゾンスール、それに若手のロラン・シモネがいた。その視線は地元アルジェの都市問題に向けられた。当時、農村を追われた離村農民達らが大量に都市に流入し、多くのスラムを形成していた。CIAM アルジェのメンバーは、新市街の辺境に位置するマヒエッディーンのスラムを対象に様々な調査を実施して、1953年、エクス＝アン＝プロヴァンスで開かれたCIAM 第9回大会において発表した。詳細についてはザイナブ・セリク⁵に詳しいが、内容は人口、就労状況、賃貸状況、衛生状況等といった社会調査と、トタンバラックで作られた住宅や、過密化した居住状況、更に主要通りとそこから分岐する細街路の状況等をフィールドワークに基づくスケッチから丹念に表現した、いわば建築家によるスラム調査であった。

このように、ル・コルビュジエとCIAMの活動には、19世紀の植民都市計画に見られた無関心とは一線を画す、地域的独自性への関心と活動が認められた。とりわけスラム調査は、これに続く独立期の都市計画におけるスラム事業に繋がることになる。

3 ル・コルビュジエ（井田安弘訳）『四つの交通路』鹿島出版会、1978年

4 たとえば、Stanislaus von Moos, *Le Corbusier: Elements of a Synthesis*, MIT Press, 1979.

5 Celik, Zeynep. «Bidonvilles ; CIAM et grands ensembles.» In *Alger, paysage urbain et architectures, 1800-2000*, edited by Jean-Louis Cohen, Nablia Oulebsir, and Youcef Kanoun, 186-227. Besançon: Les éditions de l'imprimeur, 2003.

3. 独立期の都市計画とスラム事業

3-1. 「イスラーム都市論」と都市計画

本題に入る前に、ここでもう一度ル・コルビュジエに戻っておきたい。彼はアルジェリアの建築、都市、集落や自然を数多くスケッチしてきた。その中には、現地の女性を主題的に描いたものも多くある。そこから、ル・コルビュジエのアルジェリアに対するオリエンタリズムを検討しておくべきであろう。オリエンタリズムとは、狭義には、欧米の芸術、特に絵画の分野で、好んで女性を官能的に描くことを通じてオリエント（東洋）世界を表象してきた、という批評的論点である。実際、ドラクロワ以降の欧米の画家たちが、ハーレムからの連想と思しき裸体の女性達を描いている。エドワード・サイードの著書『オリエンタリズム』はこれを敷衍し、文学から歴史、思想、そして現実政治において、オリエントを官能美に満ちた非合理的で停滞した社会とみなす、欧米特有の認識論的枠組みであると批判したものである。そして、オリエンタリズムのいわば都市版が、枠組みとしての「イスラーム都市」論であるといつてよい。

「イスラーム都市」論とは、平たく言えば、モスクやマドラサ、フンドウクといった典型的な施設と、曲がりくねった街路や薄暗く袋小路からなる都市空間を、絵画的なイメージの元に「イスラーム都市」として表象し語ることを指している。イスラーム世界、あるいは中東・北アフリカ地域といった大きな枠組みでのイメージはとらえていても、それぞれの都市や地区がもつ固有性、あるいは歴史的形成の一回性の認識は、そこから欠落す

る。アブー・ルゴドやアイケルマンといった欧米系の学者らによる問題提起を皮切りに、日本でも80年代後半から90年代にかけて盛んに議論されたという経緯がある⁶。そこでは、都市研究がフランスを中心とする植民地経営の必要上から生まれてきたという事情が批判的に共有された上で、以後は個別事例の堅実な蓄積と、現地研究者の研究に着目することの重要性が指摘され実践されてきた⁷。

筆者は学部生の時、指導教員の手ほどきでこの議論に触れた。その中で特に印象に残ったのは、ラバト出身の社会学者アブー・ルゴドによる、その名の通り、「The Islamic City（イスラーム都市）」と題された1987年の論文⁸であった。この論文は日本でも多く引用され「イスラーム都市」論批判の最重要文献の一つとされてきたが、筆者にとって意外だったのは、この論文が、いわゆる都市研究全般を問題にするというよりは、むしろ「都市計画」を批評の対象にしているという事実であった。ルゴドは、冒頭からこう書いている。

イスラームの復興が議論される今日において、「イスラーム都市」論がまたしても問題となってきた。アラブ世界の多くにおいて、特にサウジアラビアと湾岸地域において、過去の偉大な達成を尊重する都市計画家達は、「イスラーム的」と認められる都市建設のパターンを、現代の都市において再現する方法を求めているのである。自覚しようがしまいが、彼らは、イスラーム都市のエッセンスを抽出することを目指してきた西欧人オリエンタリストたちの文学的構築物によって感化されて

6 たとえば、Yukawa (ed.), *Urbanism in Islam*, ICUIT, 1989.

7 羽田正・三浦徹編著『イスラム都市研究 課題と展望』東京大学出版会、1991年

8 Janet L. Abu-Lughod. "The Islamic City--Historic Myth, Islamic Essence, and Contemporary Relevance", *International Journal of Middle East Studies*, 19 (1987): 155-176.

きたのだ。（傍線筆者）

「イスラーム都市」論とは純粋な研究上の問題であるだけでなく、むしろ実践的に都市を計画していく際の問題だと、ルゴドは述べている。ここでは当時のトレンドであったサウジアラビアや湾岸地域のニュータウン計画が挙げられているが、それには先例があったことも示唆されている。そこで筆者が思い当たるのは、やはりフランスによって主導された隣国モロッコの植民都市計画である。リヨテ総督の方針に基づく旧市街保全政策によって、都市はモロッコ人が住む旧市街（メディナ）と、フランス人が住む新市街（ヴィル・ヌーベル）、そして離村農民の受け入れ地である第三の地区、郊外地（ヌーヴェル・メディナ）からなる三地区構造に基づいて拡張されていた。郊外地の設計に際しては、旧市街が徹底的に調査され解釈されて、抽出された空間構成の原理がその設計方針とされたのである。結果として郊外地は、モスク、ハーン、袋小路や中庭、更にはサーバードといった装飾要素まで散りばめた、まさに官能的イメージを伴う「ジ・イスラーム的」な計画都市として実現されている⁹。

「排他的ではなくて相互扶助的な、近隣の育成は可能だろうか？女性のためでなく家族のための、プライバシー意識の醸成は可能だろうか？慣習法を矛盾なく適用しながら、隣人の権利を尊重することは可能だろうか？これらこそがアラブ人都市計画家達に課せられた職責に他ならない、

という問いかけが、ルゴドの論文の結論部である。彼女がいう「イスラーム都市」論とは、現代におけるアラブ/イスラーム社会における、都市計画の問題であったのだ。

先述のように、アール・デコ建築にはオリエンタリズムの要素が見出された。またル・コルビュジエ以降の都市計画家達は、アルジェの地域的独自性に目を向け調査を行っていた。しかし、それはモロッコを初め既に北アフリカにおいて続いていた「イスラーム都市」論、ひいてはオリエンタリズムの軀から免れていたとは言い難い。むしろそれは新植民地主義と呼ばれても仕方のない面があった。

3-2. 独立期の都市計画の体制とスラム事業

話をアルジェに戻そう。1956年に隣接するチュニジア、モロッコが独立すると、アルジェリアでも独立の機運が高まったが、フランスにとってアルジェリアは両国とは比べ物にならない重要な位置を占めていた。植民地化から100年以上が経過し、既に入植者のフランス人も3世代目、4世代目に至っていた。彼らにとって、フレンチ・アルジェリアは母国そのものであった。結果として、アルジェリアの独立戦争は酸鼻を極める激しいものとなるのである。スラム住民も日増しに増えていき、独立派のテロリストが潜伏するとも噂され、フランス系住民にとって脅威となっていた。

緊迫した雰囲気の中、1953年にアルジェ市長となったのは、「ムスリムとキリスト教徒の共生」

9 たとえば、松原康介『モロッコの歴史都市 フェスの保全と近代化』学芸出版社、2018年。カサブランカ郊外地における赤線地帯カルチェ・レゼルヴェの事例が紹介されている。

を政治理念に掲げるジャック・シュヴァリエであった¹⁰。新市長は、まさに CIAM アルジェの活動を通じて注目の的となっていたスラム問題に着手した。まず、マルセイユやル・アーヴルの戦災復興で実績のあったフランス人建築家フェルナン・パイオンを招聘し、ディアル＝ツサアーダ、ディアル・ル＝マフスール、クリマ・ドゥ・フランスの3つの低層住宅地を実現した。これらはフランスの社会住宅 HLM (Habitation à loyer modéré; 適性家賃住宅) の位置づけであったが、市長は特にムスリム、キリスト教徒の区別なく入居できることを議会でアピールした。パイオン自身の語るところによれば、そのデザインはムーア様式、つまりアンダルシアに多く見られる北アフリカと西欧の混合様式であった。

シュヴァリエは更に、市長直属の諮問機関として、アルジェ市都市計画局を発足させ、総裁に MRU 出身のピエール・ダロズ、局長にル・コルビュジエの番頭出身であったジェラル・アニングを据えた。パイオンの HLM は「アルジェ 3 部作」とも呼ばれ、それまでのシンプルな HLM とは異なり地域的な空間要素が盛り込まれた集合住宅として有名になったが、これはいわば新市政を象徴するモデル建築であった。これに対して都市計画局は、より数とスピードを重視した視点から都市計画提案を行う機関であった。ともあれ、独立期の危機的な状況になって初めて、アルジェ市は、植

民都市計画の枠組みから逸脱した存在であったスラムに正面から向き合おうとしたのである。

ところで、スラム住民は、スラムが取り壊された後、そのまま HLM に移住できるわけではなかった。その前に、一つの中間的な段階があったのである。それが「Cités de Recasement (再定住住宅)」への一時的居住である。再定住住宅とは、スラム住民が、正式な HLM のアパートマンが建設されそこに入居する前の段階で居住する、いわば仮設住宅である。ここで重要なのは、離村農民出身であるスラム居住者達が、一時しのぎで居住するだけでなく、「再定住住宅」に備えられた最小限の近代設備を用いて生活することで、都市型生活の基本を身につけるための、いわば生活訓練の場とみなされていたことである。市の広報誌『アルジェ・ルビュ』に掲げられたクリマ・ド・フランスの例を見てみると、「現在」においてルジョンプル地区と呼ばれる「再定住地区」とその奥のスラムの写真、「将来」としてクリマ・ド・フランスの模型写真が掲載されている¹¹。スラムから「再定住住宅」を経て HLM に居住するというプロセスがここからわかる。

再定住地区については、先述のロラン・シモネが中庭をバルコニーに変換したジナン・ル＝ハッサンを実現し、評価を得た¹²。これはキャンディリスがカサブランカで試みたことと同じであるが、彼はそれにより新植民地主義的と難詰されて

10 Jacques Chevallier, *Nous, Algériens,...*, Calmann-Lévy, 1958. なお、ムスリムとは当然アルジェリアの原住民であるが、この場合は基本的にスラム住民のことを指していた。一方、キリスト教徒とは、フランス人を中心とするヨーロッパ系の植民者 (コロン) 達のことであった。

11 Anon. «Le présent...l'avenir.» *Alger-Revue*, No.3: 16, 1954.

12 Zeynep Celik, *Urban Forms and Colonial Confrontations: Algiers Under French Rule*, California : University of California Press, 1997.

いる¹³。また、同時期に徹底したヒアリング調査から、こうした都市計画の試みを批判した社会学者ピエール・ブルデューによる、下層民は近代住宅に適應できずむしろスラムを好み、時には近代的空間をあえてスラム化する傾向にあるという調査報告も無視できない¹⁴。このように独立期には、植民地期の無関心から比べれば、より地域事情に即した都市計画が志向されていたとはいえる。しかし、そこには「イスラーム都市」論の問題があり、また完成した空間が住民自身によって拒否されてしまうという問題も存在した。

3-3. 一つの解：番匠谷堯二「トタンバラック移転用の住宅」

ここで一人の日本人の青年建築家が参画してくる。東工大清家清の研究室出身で、1953 年からパリの ATBAT（建造者アトリエ）で研修をしていた番匠谷堯二は、1954 年 7 月に指導者の一人であったアニングの誘いを受けて都市計画局の局長補佐の一人となった。1958 年 5 月まで同局の業務に従事した後、その経験を活かしてベイルート、ダマスカス、アレppo等の都市計画プロジェクトを主導することになる人物である。以下、本人による雑誌記事、業務経歴書の記載、更に『アルジェ・ルビュ』に掲載された活動の様子から、番匠谷が従事していたスラム事業と再定住住宅の事例を紹介し、都市計画における地域性の問題に位置づけておきたい。

業務経歴書によれば、番匠谷はアルジェでの 5 年間に複数のプロジェクトに関わっていたが、そ

こには「マヒエッディーンのスラムの空間整備計画及び移転事業（1/500 スケール、人口 5000 人）」という項目が含まれている。また、自身が雑誌『建築界』に発表した記事「アルジェリアのアパート」¹⁵には、離村農民によるスラムの形成を始めとする都市問題と、ル・コルビュジエ以来の建築家達の活動が紹介され、マヒエッディーンのスラムの写真も掲載している。更に自身の業務報告として、「トタンバラック移転用の住宅」と題された一連の図面が掲載されている。「トタンバラック移転用の住宅」とは意味が取りにくいだが、これこそが「再定住住宅」の番匠谷版に他ならない。

まずテキストを読んでみると、当時のアルジェに乱立していた派手な近代建築とは裏腹に、スラムのバラックが建築的な意味で非常に洗練されており、その建設者の才能に感嘆したと書いている。とはいえ、そこは 20 代半ばの日本人である。記事では更に、アラブ人の住宅においては、以下の 3 点が尊重されるべきルールだと書いているが、これがやや硬直的である。

- （1）内部は外部からは覗かれてはならない
- （2）中庭は不可欠である。
- （3）男は基本的には家の外におり、女性は基本的には家の中、または外であっても周辺の女性だけの場所にいる。女性は家の外では夫以外の前では自分の顔をあらわにすることはしない。

まさに、カスバの住宅の特徴である、中庭を

13 George Candilis, *Bâtir La Vie. Un Architecte Témoin de Son Temps.* in FOLIO, 2012.

14 ピエール・ブルデュー（原山哲訳）『資本主義のハビトゥス — アルジェリアの矛盾』藤原書店、1993 年。

15 番匠谷堯二「アルジェリヤのアパート」建築界 vol.4 no.12: pp. 2-7、1955 年 12 月。また巻頭に写真集が掲載されている。

基本とした、内的空間の尊重と公私の分離、ひいては伝統的な男女の区別が標榜されているのである。それはあまりにも典型的な「イスラーム都市」のイメージだというほかはない。フランス的な見方の影響もあったかもしれない。

ここで図面を見てみると、確かに、大小の中庭を組み合わせた集合住宅である点に特徴がある。大きな中庭は 10 戸からなるユニットの中庭である。各住戸は 2 部屋からなり、男性用と女性用に分けられており、男性用は外側に、女性用は中庭側に配置され、それぞれに入り口がある。また、男性用の入り口はクローゼットを兼ねており、女性用のそれは住戸の中庭と位置づけられている。これが小さな中庭である。戸外には、シャワーやトイレ、ベンチや水場等が設置されている。公私、ひいては男女の分離を計画として表現した

ものであろう。

それでは、この計画の独自性はどこにあるだろうか。更に図面を検討してみると、計画には「第一段階」と「第二段階」があり、スラム住民の生活の展開にあわせて段階的に構成されていることがわかる。これは、清家の指導下で設計・実現され、キャンディリスが好意的に評価した『正方形の家』（目白 1953）にも共通する番匠谷自身のコンセプトとの共通点を認めることができる。また、「再定住住宅」の目的がスラム住民に都市生活の作法を教え込む場とされていたことにも合致するといえよう。

重要なのは、その展開の方向性である。第二段階では、第一段階においてユニットの中庭でシェアされていたトイレとキッチンが取り去られ、それぞれの住戸の中庭に設置される形となっ

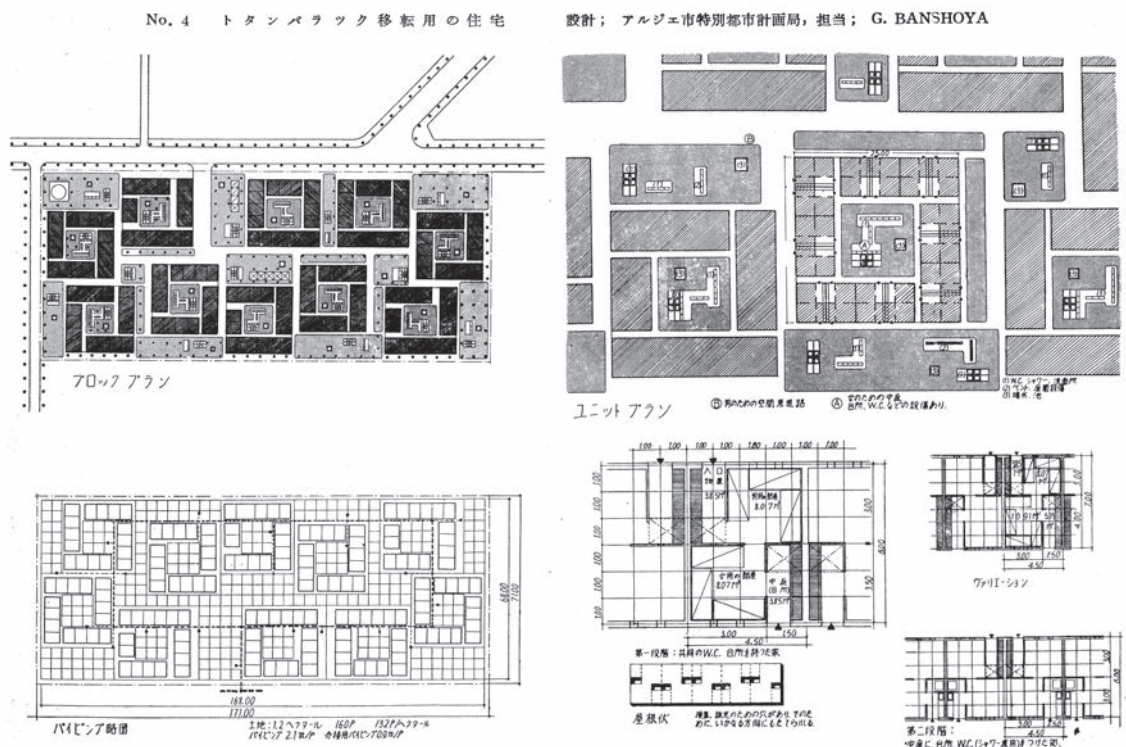


図1 番匠谷亮二『トタンバラック移転用の住宅』

ている。共同トイレ・キッチンから個別のそれに
変化するのである、これは住戸レベルのプライバシー
が向上することになるだろう。一方で、ユニット
の中庭は日常生活の場から、より公的なオープ
ンスペースと変化したといえるだろう。では、そ
こが直ちに男性に占有され、女性がいよいよ住戸
に押し込まれていくことになるのかというと、そ
うとも考えにくい。ここではむしろ、ユニットの
中庭は、女性も含む家族が集まって過ごす場と見
るのが無理がないように思われる。

「トタンバラック移転用の住宅」は、地域性を
求めた CIAM アルジェのスラム調査を引き継ぐ
形で計画されたが、「イスラーム都市」のイメー
ジの単純な模倣ともいえない。それはアラブ人が
先祖代々に渡って継承してきた伝統的で厳格な都
市生活の作法を強制的に学ばせる場ではなく、農
村から出てきたばかりのスラム住民に、より柔軟
で開放的な生活のあり方を示唆することを企図し
て計画されていた。そこから見たとき、ルゴドが
都市計画家に対して発した「女性のためでなく家
族のための、プライバシー意識の醸成は可能だろ
うか？」という問いは、30 年前にこの日本人計
画家によって、一つの解を与えられていたと言え
るかもしれない。

3-4. マヒエッディーンのスラム事業の結末

1958 年 5 月、アルジェは映画にも描かれた激
しい独立戦争の舞台となった。ムスリムとキリス
ト教徒の双方にとって憎悪的となったシュヴァ

リエ市長は軍によって排斥された。このとき、番
匠谷もまたパリへの撤退を余儀なくされたので
ある。

マヒエッディーンのスラム事業が着手されたの
は、その直後であった。1959 年に『アルジェ・
ルビュ』に発表された記事¹⁶によると、計画は
HLM 事務所のクイオン、ベリッセ、レジェスト
の 3 人の建築家によって担当された。計画図に
は、1800 戸を擁する高層アパートマンによる 17
ブロックが、斜面に縦横に配置されている。模型
写真からは、2つのヴィラ・マヒエッディーンを
除いて全てのバラックが除去される計画であるこ
とがわかる。古い邸宅には歴史的価値が認められ
ても、スラムにそれは認められなかったのである。
写真からは、完成した高層アパートマンと、その
北のスラム、そして東の再定住地区が同時に存在
している状況が見て取れる。

筆者は 2016 年 2 月にマヒエッディーンを訪れ
た。1953 年にスラムの慈善活動のために来訪し、
以来今日まで住み続けてきたキリスト教徒の老人
2 人に話を聞くためである。HLM の広大な敷地
を歩くと、各棟をつなぐ空中回廊と、低層部を商
店街とする手法がいかにフランスの近代住宅と
いう印象を与える。かつてのスラムの面影は皆無
である。ジェームズ・ハウスは、スラム時代のコ
ミュニティと HLM のそれとに断絶があることを
指摘しているが¹⁷、筆者がみてもそこに計画され
た地域性を感じさせるものは殆どない。ヴィラ・
マヒエッディーンは荒れ放題という有様である。

16 Jahan, A. «Mahieddine: vaste bidonville au coeur d'Alger va faire place à une cité H.L.M. moderne.» *Alger-Revue*, automne (1959): 32-37.

17 House, Jim. "Shantytowns and rehousing in latecolonial Algiers and Casablanca", In *France's Modernising Mission: Citizenship, Welfare and the Ends of Empire*, edited by Ed Naylor, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2018. 133-163.

周囲に建設されたモスクには大勢の人がおり、礼拝後には野菜の屋台に人々が群がっている。

当時の写真を見せてもらおうと、自分達で建てたというバラックのスラム居住時の様子を写した写真と、再定住地区に移転した際の写真があった。鮮明ではないが、平屋建てで横にかなりの長さのある長屋住宅が、海に向かって降りていく斜面に沿って、段になっているのがわかる。通りも階段式である。屋根はプレハブのようであり、小さな中庭らしきスペースも見える。しかし、いずれも番匠谷の計画の反映だとは言えそうもない。

老人らの1人に案内されて数百メートルほど東にある現場と訪れると、アルジェ湾の海が見える風景が広がっていた。当時の写真とピタリ照合する。足下には道路と敷地跡がさながら遺跡のように残存しており、住戸の床のタイルまでもが確認できた。歩いてみると、はっきりとかつての再定住地区 — Cités de Recasement — のスケールを感じることができた。老人らは、4年間住んだそこを、思い入れをこめて「Château Cassé（壊れた城）」と呼んでいた。

おわりに

「全ての都市は植民都市である」とは、端的には、従前の歴史的/地域的な空間が存在し、そこに外的かつ人工的な秩序に基づく計画都市が建設されること一般を指すであろう。それは当然、アルジェの場合のようないわゆる宗主国—植民地関係の中にはとどまらない。筆者が住んでいるつくば研究学園都市もまた、古い農村地帯に近隣住区論に基づき計画されたという点で、その定義に該当しよう。

本稿では、アルジェを事例にそのいくつかの様相を紹介した。政治史的に言えば、① 19 世紀の

植民都市計画は、いわば迷いのない植民地主義である。②ル・コルビュジエと CIAM の活動は、その伝で言えば新植民地主義ということになる。そして、番匠谷を含む③独立期の都市計画もまた新植民地主義に与したことになるだろう。しかし重要なことは、視点をよりミクロな都市空間の評価、つまり住民が良く生きる上で一定の時間をかけて整えられてきた器としての都市空間—本稿ではそれを地域的な空間と呼んできた—が、個別具体的にどのように変容してきたかに置くことであろう。そこには当然ながら、カスバのような自然都市であれ 19 世紀的な植民計画都市であれ、所与の物理的空間に対して住民がどのように関係してきたかという論点を加えることが不可欠である。

都市計画は「イスラーム都市」論に終わってはならないというルゴドの議論は、都市計画は自然都市（＝地域的独自性のある空間）を生み出しえないというクリストファー・アレグザンダーの議論とちょうど相補的な関係にあるように思われる。「イスラーム都市」論をまったく拒否したところに出てくるのは、均質で生活規範の感じられない空間でしかない。実際、ルゴドは中庭を物理的な意味で否定するのではなく、女性だけでなく家族のための空間として再構築していくべきだと論じているのである。

住民が植民都市を自らアレンジし、自らの住処として取り戻しているのなら、それはまさしく地域的な空間へと再構築されるプロセスにあるといえる。また、再定住住宅で意図されていた通り、計画が提供した生活規範が住民の生活様式を変えることもあるだろう。それらをどう評価すべきだろうか。今後、更なる文献の精査と現地調査から掘り下げて、住民目線で議論していくことが肝要

であろう。

最後に、番匠谷堯二の「トタンバラック移転用の住宅」について触れるなら、コンセプトとして興味深い位置づけを得られたことは確かなように

思われるが、実現されなかったのは残念である。

その後、中東各地で展開された番匠谷計画を分析する上での参考としたい。

ロドス旧市街の文化の重なり

(初出：松原康介編著『地中海を旅する 62 章 歴史と文化の都市探訪』
明石書店 2019 pp.19-23)

田中英資

福岡女学院大学人文学部

「ロドスの中世都市」としてユネスコ世界遺産に登録されているロドス・タウンの旧市街は、エーゲ海の南東に浮かぶ、「太陽とバラの島」という別名を持つロドス島の北端に位置する。古代ギリシャやビザンツの文化遺産の登録が多いギリシャの世界遺産のなかでも、ゴシック様式の城塞にビザンツやイスラームの文化が融合した旧市街の街並みに世界遺産としての価値の焦点が当たっている点で、際立った存在だ。

また、ロドス島が属するドデカニサ諸島にも独自の歴史がある。これらの島々は、首都アテネから最も遠い海域にあり、対岸のトルコ（アナトリア）に張りつくように浮かんでいる。ドデカニサとは、ギリシャ語で「12の島」を意味する。これは、ギリシャ独立後もオスマン帝国の支配下にあったロドス島を含むこの海域の12の島が、20世紀初めにオスマン帝国に対して反乱を起こしたことに由来する。しかし、イタリア・トルコ戦争（1911～1912年）の結果、ドデカニサ諸島はイタリアの統治下に置かれたため、ギリシャに編入されたのは、第2次世界大戦が終了した1947年であった。

そうしたロドス島の独自性は、アナトリアとヨーロッパ、そしてアフリカやレヴァントを結ぶ航路上に位置し、古代から人びとが行き来してき

たこととも関わりが深い。ロドス・タウンは古代からこの地域の重要な貿易港として栄えてきた。島の別名は、花で満ち溢れた風光明媚なロドス島が太陽神ヘリオスに与えられたという神話に由来する。それゆえ、古代のロドス島では、太陽神ヘリオスが盛んに信仰された。古代のロドス島が最盛期を迎えた紀元前3世紀には、ロドス・タウンの港の入り口に、台座まで含めると高さ約50mのヘリオス神を象った青銅製の巨像が立てられていた。フィロンの「世界七不思議」にも選ばれたこの巨像は、紀元前226年の地震によって倒壊したが、800年ほどそのまま放置され、人びとが見物に訪れていたという。しかし、7世紀にイスラーム商人が残骸を解体して持ち去り、現在ではその正確な位置がわからなくなっている。街の中心部から少し離れたモンテスミスの丘に残るアクロポリスを除くと、現在のロドス・タウンで古代の繁栄ぶりを示す痕跡は残っていない。

一方、世界遺産に登録された旧市街の城塞都市を築いたのは、14世紀初めにビザンツ帝国からこの島を奪った聖ヨハネ騎士団である。彼らはビザンツ帝国が築いていた城砦を土台に、ロドス・タウンの周囲にさらに堅牢な城壁と堀を巡らせた。聖ヨハネ騎士団の起源は、聖地エルサレムで巡礼者向けの病院・宿泊を世話した慈善団体で

ある。12世紀初頭に騎士修道会としてローマ教皇から認可を受けた後も、団員には平常時の病院での医療奉仕が義務付けられていた。また、団員はその使用言語に応じて八つの部隊に分かれていた。

聖ヨハネ騎士団は、ロドス島だけでなく、対岸のハリカルナッソス（現在のトルコのボドルム）や周辺の島々にも拠点を構え、イスラーム勢力との抗争を続けた。1444年にはエジプトのマムルーク朝、1480年にはビザンツ帝国を滅ぼしたオスマン帝国のメフメト2世が攻撃を仕掛けたが、騎士団はロドス・タウンの城塞に籠って撃退に成功する。しかし、1522年にオスマン帝国のスレイマン1世が大軍をもって攻め寄せると、約半年の籠城戦の末、ついに騎士団はロドス島を明け渡したのだった。

以後、約400年に及ぶオスマン帝国の支配の間、旧市街のギリシャ正教の教会の多くがモスクに改装されている。新たに建てられたモスクも多い。代表例がオスマン帝国の勝利を記念して1522年に建てられたスレイマン・モスクだ。こうして、ゴシック様式に、ビザンツ様式や、オスマン朝様式の建築が混ざりあった街並みが生まれることになった。

イタリアの統治下に入ると旧市街の修復整備が始まった。特に、19世紀半ばに弾薬庫の火災で廃墟と化していた騎士団長の宮殿が再建され、イタリア国王やムッソリーニの別荘として使われたことが知られている。第2次世界大戦後にギリシャに編入された後は、ギリシャ政府による旧市街の修復・保存事業が進められてきた。

現在の旧市街は、北側の騎士団地区、南側の一般住民地区に分かれており、一般住民地区は、オスマン帝国時代の建物が多く残る西側のホラ地

区、東側のユダヤ人地区と、さらに二つに分けられる。かつて騎士団の軍港だったマンドラキ港側の城門から旧市街に入ると、その一帯は、ヨーロッパ中世の面影を強く残す騎士団地区だ。城門に近い、つまり、港に近い場所には、聖ヨハネ騎士団の施療院だった建物がある。考古学博物館となった現在は、かつての病室に、ロドス各地の遺跡から出土した彫像や陶器、墓碑などが展示されている。施療院脇の坂道は、各言語の騎士館が建ち並ぶことから「騎士団通り」と呼ばれている。この坂道を上ると騎士団の心臓部、騎士団長宮殿が現れる。こちらも現在は博物館となり、イタリア統治下で修復された内装が公開されている。また、近くの城門から旧市街をめぐる空堀につくられた遊歩道に降りられる。遊歩道から城壁を見上げると、オスマン帝国の大軍をもってしても打ち破るのが難しかった城壁の堅牢さを実感できる。

騎士団長宮殿を南に歩けば一帯がホラ地区である。このエリアの目印は、先述のスレイマン・モスクだ。高台から市街を見下ろすように建っている。このピンク色の建物の前を下る通りが、旧市街の目抜き通り、ソクラトゥス通りである。その先には観光客で夜まで賑わっている旧市街観光の中心地イポクラトゥス広場がある。レストラン、カフェ、バー、アイスクリーム屋が広場を取り囲むように並んでいる。ここから東のアリストテロス通りを進むと、タツノオトシゴの噴水が目印のエブレオン広場に行きあたる。この辺りは、かつてのユダヤ人地区だ。1920年代には六つのシナゴグがあり、4000人のユダヤ人が暮らしていたという。現在は住宅街となっていて、旧市街のなかでものんびりとした雰囲気が強くなる。

さて、観光客で賑わう通りから脇道に一歩足を踏み入れると、石のアーチが続く石畳の小道が

迷路のように張り巡らされ、何世紀も続いてきた旧市街での日常生活を垣間見ることができる。手作りの土産物や揚げたての自家製ドーナツを売る、ガイドブックには載らない小さな店も多いし、ミナレット（尖塔）が残り、かつてはモスクに改装されていたことがわかるギリシャ正教の教会にも行きあたる。民家の庭には、今日でも色鮮やかな花々が咲いている。石壁を見上げたら、窓枠に座って通りを眺めている野良猫と目が合うといった、思わぬ出会いもある。

ヨーロッパ中世の面影を残しつつ、ビザンツやイスラームの文化が融合した旧市街の独特の景

観は、古代以来、ロードス・タウンで続いてきた人びとの交流の結果である。迷路のような石畳の通りに、そうした文化の重なりを感じられるところがこの街の魅力なのだ。

参考文献

桜井万里子 編『ギリシア史（新版世界各国史）』山川出版社、2005 年。

塩野七生『ロードス島攻防記』新潮文庫、1991 年。

村田奈々子『物語近現代ギリシャの歴史 — 独立戦争からユーロ危機まで』中公新書、2012 年。

アレppo、ファラジュ門地区の履歴

(初出：松原康介編著『地中海を旅する 62 章 歴史と文化の都市探訪』
明石書店 2019 pp.317-321)

松 原 康 介

筑波大学システム情報系

日本でいえば京都大学にも匹敵するアレppo大学の日本センターに、幸いにも研究員の肩書きをもらったのは2006年の春のことであった。私はモロッコのフェスに関する博士論文をどうにか書き終えたばかりで、その後の展望は何もなかった。ただ心のどこかに、あるとき偶然に聞いた、かつてこの地で活動したらしい日本人計画家のことを留めていた。日本人は番匠谷堯二といい、国連の専門家として1960～70年代にかけてダマスクスとアレppoの都市計画を担当したが、その自動車優先型の計画手法がユネスコや考古総局の手厳しい批判にあって失脚したとされていた。奇異なことに、それらの情報は全て欧米系の報告書によるものであって、日本語で書かれた資料はまったくといってよいほど存在しなかった。

アレppo大学は西の小高い郊外の整然とした住宅地にあり、中心部となる旧市街まではフランス委任統治時代の名残であろうセルヴィスと呼ばれる乗り合いのバンに乘るか、歩いて小一時間の距離である。朝からお昼過ぎまではセンターでシリア人講師ジャームース・ラーウィヤさんによるアラビア語の個人指導を受け、どうやら暑さが収まってくる夕方を待ってセルヴィスに飛び乗り、旧市街の街歩きに向かうのが日課となっていた。

セルヴィスは中央郵便局の前でとまる。ここ

は巨大なオブジェのある広場と公園に隣接した近代市街地で、オスマン帝国の末期にいわゆるお雇い外国人によって計画的に実現された西欧人居住区でもあった。とはいえ、今日ではビルの壁は煤けており、裏通りには商店よりも自動車やバイクの零細な修理工房が陰鬱に軒を連ねている。唯一、ここにはアレppoの煮込み料理店アブー＝ヌワースがあり、何を食べるか迷うと店員が気軽に厨房まで案内してくれて、指差して赤や白の煮込み料理を選ぶことができ、在住日本人にも好評を博していた。アガサ・クリスティの『オリエント急行殺人事件』の舞台となったバロン・ホテルもここにある。

区画をいくつか横切っていくと大通りに出て、渡るとそこからは旧市街となる。その入口に当たるのがファラジュ門地区であり、オスマン時代の時計塔が目印になっている。学生時代に読んだ大塚和夫の『近代・イスラームの人類学』に、時計塔とは、西欧が持ち込んだ太陽暦に基づく近代的時間の支配の象徴だと論じられていたことを思い出す。

ファラジュ門地区はかつてのいわゆるユダヤ人地区であり、シナゴグもいくつか存在する。旧市街のスナナ派住民と新市街の西欧人らの交流の場であり、また緩衝地帯でもあった。アレppoは

シルクロードの要衝に位置し、中東随一のスークが形成され、15 世紀以降はヴェネツィアやマルセイユといった地中海諸都市とのレヴァント貿易で発展した商業都市である。中でもファラジュ門地区は、旧市街の入口、スークの手前に位置する、まさにユダヤ人が媒介する各国商人たちの商談の場として賑わっていた。

街路は緩やかに曲線を描きながら奥へと続いている。一見ではシリアのどこにでもある商店街のように見えるが、建物は今にも崩れ落ちそうなくらい老朽化しているか、面白みに欠ける新住宅に建て替えられており、スークのような石造りの重厚な雰囲気は感じられない。13 世紀に起源をもつ小さなモスクには商店が付設されており、売り上げの一部がモスクの管理費に回されるワクフの仕組みの名残とわかるものの、売られているのはブリキやプラスチックのパケツなど特徴のない日用品ばかりである。モロッコのリヨテを得なかったシリアの旧市街の、交通量の多い入口近くだからこんなものかと思いながらしばらく行くと、突如として近代的な中層建築が出現し、それが市役所であったりする。そこでようやくこの空間が特殊な成り立ちをしていることがわかってくる。要するに、この地区は紛れもなく旧市街地内でありながら、古い都市組織はとっくの昔に壊死しており、半端な近代化が進んでいるのである。私の滞在中には地区内に高層の外資系ホテルさえ建設された。これは保全活動が行き届いているアレppoでは珍しいことであったが、少し調べてみると、それはこの地区の辿った歴史が陰を落としていることがわかった。

ファラジュ門地区が「非衛生的である」という理由で再開発エリアに指定されたのは、まさに 1973 年の番匠谷計画によってであった。しかし、

これは計画家の意思によるというよりは、中央政府が都市計画に介入し、その政治的思惑が反映されたためであった。当時、スンナ派が多数を占めるアレppoでは、ムスリム同胞団による反政府運動が盛んであり、運動によってスークが一斉にストライキを余儀なくされたこともあった。それ以前には、スンナ派住民がユダヤ教を嫌ってシナゴークを襲撃するという事件も起きていた。大商人として教養と経済力を備えた名士が多く存在するハラビー（アレppo住民）と、常に緊張関係にあった中央政府は、旧市街を反政府運動の温床とみなしており、特にファラジュ門地区の稠密空間を治安の観点から危険視していた。そこで再開発という名目の下、この地区を根こそぎ取り除いてしまおうと考えたのである。オースマンのパリ改造の陰の目的がそうであったように、都市計画はしばしば権力者が都市民を抑圧し管理する手段となりうる。実際、少し後の 1982 年に発生したハマー事件では反政府派は旧市街の稠密な市街地のそこかしこに分散し息を潜め、モスクからの合図で一斉に反乱に加わったとされているし、対する政府軍は水車のある風景で知られる旧市街の 3 分の 1 を破壊することで応じている。

そこまで調べてみて、私は伝説的な日本人計画家の真実を見たような気がした。都市計画は政治の片棒を担がされたのである。私はそれまで敬遠してきた政治学について学ばねばならないと思ったが、それはあくまで自分の関心ごとの歴史的背景として押さえておくためであった。

政治の意味を、骨身に染みて理解したのは、2011 年からの内戦によってアレppoが甚大な被害を受けてからであった。今では信じ難いことに、それ以前はアルメニア人地区の居酒屋でいささかアラク（伝統的な蒸留酒）を過ぎて深夜に家路

についても、子供連れの家族がそこら中で散歩しているほどに平和であった。ただ一人、センターの副所長で農村部における慈善活動を続けていた奥田敦教授が、社会の底に流れる反抗のマグマの存在を示唆してくれていたが、不肖の弟子であった私は本当にはそれを理解できないまま、内戦勃発を悔恨とともに迎えることになってしまった。

以来、アレppoはもちろんシリアに足を踏み入れることはできていない。いつか再び、図面片手にアレppo城の城壁に立ち、ボロボロになった街を見下ろす日が来るかもしれないが、いましば

らくは、この当時に収集してきた資料や写真を眺めつつ、平和を祈って過ごすほかないであろう。

参考文献

パトリック・シール『アサド —中東の謀略戦』佐藤紀久夫訳、時事通信、1993 年。

大塚和夫『近代・イスラームの人類学』東京大学出版会、2000 年。

黒田美代子『商人たちの共和国 —世界最古のスーク、アレppo（新版）』藤原書店、2016 年。

エルジンジャンの震災復興

(初出：松原康介編著『地中海を旅する 62 章 歴史と文化の都市探訪』
明石書店 2019 pp. 348-352)

木村周平
筑波大学人文社会系

トルコが比較的日本人が多く観光で訪れる国だとしても、エルジンジャンを知る人はそれほど多くないだろう。トルコ東部の小都市で、現在の人口はおよそ10万人。岩肌がむき出しになった山々に囲まれた平地に、直交する二本の大通りを中心にちょっとした繁華街と、ゆったりと住宅地がひろがっている。夏は暑く乾燥し、冬は雪に覆われる、トルコの内陸によくある町、といった風情である。

エルジンジャンには、古くはアルメニア人が住んでいた。4世紀頃、神聖ローマ帝国のもとキリスト教化する。11世紀にはセルジューク・トルコに支配権が移り、追ってオスマン・トルコの領土となる。歴史の教科書で名が出てくるとすれば第一次世界大戦中の1916年、南進してきたロシアとオスマン・トルコとの間で起きた「エルジンジャンの戦い」である。このときロシアは勝つが、2年後にロシア革命が起きる。トルコがこの町を再奪取し、5年後の1923年にはトルコ共和国が成立する。

このようにエルジンジャンは、たしかに歴史の流れの中に位置しているが、とくに目立つわけでもない町だ。だとしたら、なぜこの町を取り上げるのか？ この町は「地中海都市」なのだろうか？ 読者の頭に浮かんでいるかもしれないこの

二つの疑問に答えるキーワードが、地震である。

トルコは、北からのユーラシアプレート、南西からのアフリカプレート、南東からのアラビアプレート、それらに囲まれた小さなアナトリアプレートがぶつかりあう場所にあり、国土を横断する形で東西に北アナトリア断層が走っている。この断層は、西はエーゲ海に達するが、その反対側の、東端あたりに位置するのが、エルジンジャンなのだ。そしてこの断層は、歴史的に、東から西、あるいは西から東へと、震源を順に移動させながら大きな地震を起こしてきたとされる。これらのプレートがおりなす複雑な地殻活動は、その一方の端でエーゲ海の文明を生み出してきたが、他方の端では、この町を繰り返し襲い、大きな被害をもたらしてきたのである。

エルジンジャンはトルコ共和国成立後の100年弱の間に、二度、大きな被害に見舞われている。一度目は1939年である。建国から国を支えていたケマル・アタテュルクが1938年に亡くなり、盟友イスメット・イノニュが後を継いだ翌年の、年の瀬も押し迫った12月26日にマグニチュード7.9の大地震が起きた。時節柄、揺れを感じた時にソ連からの爆弾だと思った人もいたという。この地震は死者3万人とも言われるきわめて大きな被害を生んだ。当時、このあたりの住宅は煉瓦

を積むか、木枠に土壁といったものが一般的であり、地震ではひとたまりもなかった。老人たちは「地震後は鉄道の駅舎以外何も残らなかった」と語る。ちょうどエルジンジャンにも鉄道が敷設され、ドイツ人の建築家によって設計された立派な駅舎ができたところだったのだ。そんなエルジンジャンに対し、政府は大規模な支援活動を行った。イノニュにとっては、アタテュルク亡き後の「国難」だという意識があったかもしれない。支援のなかには、物資だけでなく、住宅の再建費用の援助や、被災者を一時的に近隣の諸県に移して保護する、というものもあった。また近隣諸国からも食料や物資などが来た。老人たちのなかには、「ロシアの砂糖菓子」や「ルーマニアの家」などの支援を記憶しているものもある。

こうした支援と復興に関わるもののなかでもっとも目を引くのが、町の移動である。もともと町があった場所は地盤が弱いとされたことが理由だ。駅から見て北側にあったかつての町は放棄され、新たな町が駅から見て南側に建設された。かつて町だったところには1980年代頃までは家の残骸が残っていたというが、いまでは林のなかに姿を消している。そのそばにひっそりと集合墓地が建っているが、筆者が訪れた時には、来客の形跡はほとんどなかった。

さて二度目の地震は、それから約半世紀後の1992年3月13日のことであった。マグニチュードは6.8。ちょうどラマダンの最中であり、しかも地震が起きたのは、日没の礼拝の頃だったという。モスクで激しい揺れに襲われた男たちもいたし、その頃、若い男性たちで賑わっていたチェルケスという名前のカフェの倒壊と火災では大きな

被害が出て、全体としての死者は600人を超した。行政は対策本部を作って被災者支援に当たったが、この地震を出発点として1990年代に起きた災害への対応が、その後のトルコの防災体制を形づくっていった¹。私がこの町を2008年に訪れた時、すでに地震から15年以上が経過していたにもかかわらず、人々に地震について聞くと、直後に撮った写真を持ってきて、それを見ながら被災の様子を生々しく私に説明してくれた。道案内してくれた中年の男性は、街を歩きながら、あるいは車で移動しながら、この建物は地震後に建てられたものだ、これはその前からあって修復したものだ、とか、このあたりが一番古いマハレだ、とか、事細かに教えてくれた。地震を経験した世代の人々には、エルジンジャンで暮らすことと、地震の記憶とが密接に結びついているのだ。

このように、繰り返す地震は、この町と、この町を生きる人々に、ある種の「痕跡」を残しているように見える。エルジンジャンの人々は一様に「この町が一番安全だ」という。確かに、中高層のアパートが都市部を埋め尽くすことの少ないトルコにおいて、この町では比較的低層階の建物が多く、市内の中心部でも1階建てや2階建てが目につくし、建設中の現場を見ても、比較的、基礎工事に力を入れているように見えた。その意味でこの町は、過去の経験から学ぼうとしているといえる。しかし他方で、この地震への意識は、「運命」への意識と結びついてもいる。先のカフェで足に大けがを負いながら辛くも一命を取り止めたある男性に、「次にまた地震が起きたらどうするか」と問うと、「そのままの場所で待つ」と答えた。「あのカフェで、もう一歩前にいたら死んでいた

1 木村 周平 2013: 『震災の公共人類学』世界思想社。

し、もう一歩後ろにいたら梁にも引っ掛からず無事だった。すべては運命（kader）だ」。地震という運命。エルジンジャンの人々は、外部者が「あの町の人々は可哀そうに、いつも地震に襲われて……」と語ることや、1999 年のトルコ西部での大地震の際に、「エルジンジャン出身者が地震を連れてきた」などと噂されたことも耳にしている。

エルジンジャンの過去と未来は、地震と切り離しがたく結びついている。

この町には、人間の世界とはリズムが大きく異なる地殻活動と折り合いをつけながら生きる都市のひとつのあり方を見いだすことができるだろう。

カッパドキアの岩窟教会

(初出：松原康介編著『地中海を旅する 62 章 歴史と文化の都市探訪』
明石書店 2019 pp.358-362)

谷 口 陽 子
筑波大学人文社会系

カッパドキアの有名な景観を生み出しているのは、火山灰の堆積物である非常に柔らかい凝灰岩である。その凝灰岩の大地が、クズルウルマツク川の水、風雨に加えて凍結融解の繰り返しによって早い速度で風化が進んでいるために、キノコのような形状の岩がたくさん連なる地形になっているのである。この凝灰岩は、年に 0.4 ～ 2.5 mm ずつ風化が進んでいることがわかっている。硬いところと柔らかいところに差ができることによって、有名なラクダ岩や三姉妹の岩のようなものができあがる。当然、いつか岩はもっと風化してゆき、いずれ平らになっていくのが自然の摂理である。現在は、風化した小山の連なりがまるで迷路のような溪谷を作り出していて、溪谷内は水はけのよい火山灰地帯であるから、桃やブドウ、ピスタチオといった果樹栽培が盛んにおこなわれている。小山と小山の間を抜けて歩いたり自転車や馬で散策したりするトレッキングが人気である。

この火山灰をもたらしたのが三つの火山、エルジエス、ハサン、ギュルルである。それぞれの噴火の特徴により、鉄分などの微量成分が異なるために、白、ピンク、黄色、灰色の層となって、美しい景観を生み出している。風化の遅いところは、表面に地衣類が繁茂して灰色を示しており、

風化が早いところは、そういった地衣類や藻類さえも育つ間を与えないほどに表面が削られている状況を示している。

いま、カッパドキアと言えば、熱気球に奇岩の風景が思い浮かぶかもしれないが、新石器時代のカッパドキアは、この火山地帯のおかげで生み出されるガラス質の溶岩、つまり黒曜石のため極めて重要な産地として広く知られていた。キプロスからシナイ半島まで、カッパドキア産の黒曜石が使われていたことがわかっている。今はほとんど土産物でも扱われているところは少ないが、カッパドキアといえば、垂涎の極めて良質な黒曜石産出センターであり、いくらでも原石が拾えて、大きな露頭もたくさん存在していた場所だったのである。当時の利器といえば黒曜石、というほどにとびぬけて重要な材料であった。不純物が少なく、うちかくことによってきれいな石刃がたくさん採れる、非常にきれいな黒色透明な火山ガラスである。

トルコではそれから銅や鉄の時代が来て、カッパドキアの黒曜石は忘れられていった。とはいえ、ヒッタイト帝国にしてもその後のキリスト教覇権の世界にしても、カッパドキアは常に歴史の表舞台であり続けたことは間違いないのであるが。

カッパドキアといえば、白馬にまたがって毒

の息を吐くドラゴンに槍を刺す聖ゲオルギオスの出身地としても有名である。聖ゲオルギオスは地域によって聖ジョージや聖ジョルジョとも呼ばれているが同じ人物を指す。もともと父親の出生地がカッパドキアで、本人はシリア・パレスチナのリュッダ生まれだという話もある。聖ゲオルギオスはローマ軍に従軍していたが、ディオクレティアヌス帝によるキリスト教棄教の圧力に対して従わず、斬首されて殉教した。ゲオルギオスはローマ末期、紀元4世紀頃の人物であるが、中世になってから生まれたドラゴン退治伝説と合体し、殉教者として、また、キリスト教布教ともかかわる人気の守護聖人として、ギリシャ、キプロスやジョージア、ロシアといった周辺地域の正教の中に広く受け入れられていったものと考えられる。事実、これらの地域の11世紀以降の壁画の多くは、聖ゲオルギオスの物語を描いたものである。セルビオ王が治めるロシアを通りかかったゲオルギオスが、毒の息を吐くドラゴンを退治して王の娘を助ける代わりに、この地の人びとをクリスチャンにするという伝説である。ラファエロなどルネッサンス画家たちは好んでこの聖ゲオルギオスとドラゴン退治の絵画を描いている。なお、ドラゴン退治伝説そのものもまたカッパドキア周辺を舞台にした物語である。そもそも、この地域にキリスト教の祠がたくさん開かれ、鑿されたり、隠れ里として地下都市がたくさん作られたりしたのも、この地の凝灰岩が柔らかくて掘りやすかったという地質、地形的な利点が大きく影響を与えたと言えるだろう。そういった意味では、カッパドキアは、火山があったからこそその利用のされ方をしてきたことがよく見えるのである。

現在のトルコは、イスラーム教を主軸とした教育が盛んであり、キリスト教時代のトルコのあ

り方について正確な教育が進んでいない現状がある。そのために、トルコの考古学と比較して、カッパドキアのキリスト教聖堂としての岩窟や図像解釈といった美術史の領域についてはまだまだフランスやイタリアの美術史専門家に任せきりな側面もあるように感じる。国の中で歴史資料としての価値の共有が進まないということは、当然、トルコ人の中での理解が進まないということでもあり、その結果として、壁画や遺跡は多くの落書きや破壊の被害にあっているのである。

カッパドキアの岩窟教会には、たくさんの壁画が残されている。とくに、緑色と赤、黄色が特徴的な色彩であるが、これらはすべてアナトリアやキプロスなど周辺地域から採れる材料でできている。緑色はグリーンアース（テールベルト、緑土）と呼ばれる鉄を含む柔らかい粘土質の材料であり、赤や黄色は、酸化鉄を含んだオーカーである。しかし、時代や教会の規模によって鉛の合成材料である鉛丹を用いたり、バックル（留め金）の教会（トカル・キリセ）の壁画のようにアフガニスタン産の高額なラピスラズリを用いたりすることもあり、教会建設とパトロンの財政状況の関わりが顕著にあらわれるものとも言える。しかし、たいがい、入手に苦労することがないような、つまり安価に手に入る、この地の顔料を用いて壁画が描かれていることが多い。今も、メイクの際に、ピンク系の化粧下地として緑系を使うことが多いが、これは、色の補色の関係で説明がつく。ビザンティンのイコンもまた、このグリーンアースの緑色で顔や手足の下地を作り、その上に、ピンク色を塗り重ねて肌色を作り出しているのである。カッパドキアの人物像も例外ではなく、グリーンアースが巧みに利用されている。東欧から地中海に至るまで、ビザンティンの聖人像と言えばグ

リーンアースといっても過言ではない。この材料は、乾性油との相性が良くないために油彩画では綺麗な発色が得られない。そのため、グリーンアースは、イコンのような水性のテンペラ技法から油彩技法に材料、技術が変化していく際に使われな

くなっていった材料のひとつでもある。

参考文献

前田 修「西アジア新石器時代における黒曜石研究の新展開」『西アジア考古学』第 11 号、2010 年、67-79 頁。

レバノンとシリア、戦災と復興の連環

(初出：映画『セメントの記憶』プレスシート 2019 年 pp.18-19)

松 原 康 介

筑波大学システム情報系

父親が出稼ぎに出て、やがて自らも出稼ぎに出る。空爆の下敷きから逃れても、また別の穴に落ちる。言葉少なく淡々と進む、映画「セメントの記憶」(監督ジヤード・クルスーム、2017 年、日本国内公開 2019 年) から伝わってくるのは、レバノンからシリアへ、またシリアからレバノンへと、ひたすら往復を繰り返す破壊と建設、あるいは戦災と復興のイメージであろう。そこに託されたメッセージに迫るうえで、ここではその歴史的背景、特に都市の戦災復興の連環についてまとめておきたい。

現在のシリア、レバノン、ヨルダン、イスラエルそしてパレスティナを含む東地中海一帯は、古くからレヴァントと呼ばれるひとまとまりの地域であった。オスマン帝国の支配を受けた後、二つの大戦を経て現在に至るまでに、シリア、レバノンはフランス領、ヨルダンは英国領、更にイスラエルの建設とパレスティナの独立といった形で地域は細分化されてきた。その混乱と利害対立が、今日のシリア内戦にまで続く紛争の背景にあることは論をまたないであろう。

このうち旧フランス領となったシリア、レバノンでは、都市の計画が共通の行政的枠組みに置かれた。歴史は浅かったベイルートが、レバノンのみならずシリアの港として重要な位置を占め、

イスラーム的な生活習慣に基づく細街路からなる旧市街を中心に発展した。しかし第一次大戦ではオスマン帝国に属していたため、イタリア海軍による艦砲射撃を受け旧市街は壊滅的に破壊されてしまう。1933 年、フランス人都市計画家ダンジェが中心となって考案した戦災復興計画では、旧市街を開削し、エトワール広場を中心とする 6 本の放射状街路網が導入された。沿道には、フランス風に装飾された柱廊とファサードを備えたアパルトマンが連続して建設された。19 世紀のパリ改造に遡るフランスの伝統的な都市計画手法に他ならない。こうして旧市街は、さながらパリにおけるシャルル・ド・ゴール広場とシャンゼリゼ通りのミニチュア版である「ダウNTOWN」として生まれ変わったのである。第二次大戦後の経済ブームに乗ったベイルートは「中東のパリ」と呼ばれ、日本からも多くの企業が支店を開設した。ここで参画した日本人の都市計画家が、清家清の高弟であった番匠谷堯二(ばんしょうや・ぎょうじ: 1930-1998 年)であり、拡大のさなかにあるベイルートの幹線道路網を更新し、ダウNTOWNを保全しつつ市街地全体を構造化することに貢献している。そこにはダマスカスへの歴史街道ダマスカス・ロードも含まれていた。

しかし、中央政府が弱く、宗教的、民族的にも



図1 映画『セメントの記憶』パンフレット

多様で、またそれぞれの背景に諸外国との関係も深かったレバノンでは、1975 年より 15 年も続く激しい内戦に突入してしまう。ベイルートではダマスカス・ロードを境界線として東ベイルート（キリスト教徒側）と西ベイルート（イスラーム教徒側）に分かれ、激しい戦闘が繰り広げられた。またしても破壊し尽くされたダウンタウンでは、アパルトマンの最上階に巣食ったスナイパー達が人々をひたすら狙い続けている、というありさまであった。

1989 年のタイフ合意（国民和解憲章）により内戦が終結すると、サウジアラビアで起こした建設会社を率いるラフィーク・ハリリーが復興に参画し、92 年には自ら首相となって計画を推進した。こうした在外レバノン人には、往古のフェ

ニキア人よろしく海外で成功した資産家が多く、その資金が大量に復興事業に還流したといわれている（余談だがカルロス・ゴーンもそうした在外レバノン人の一人である）。力をつけたハリリーはシリアの影響排除を目論むものの、2005 年に暗殺されている。

ハリリー以降の都市計画のポイントは、ダウンタウン内ではほぼ完全に原状復旧型の復興を行い、モスクや教会を国民和解の象徴として再生する一方、その外側においては、最新の超高層ビルを中心とする、より投資志向の再開発を実施することであった。その結果として、今日のダウンタウンは物理的には往年の都市美を伝えてはいるものの、都市全体の中で見ると、まるで高層開発に取り残された空隙のようにさえ見える。また、

ダウンタウンの外側にも存在した、スーク（市場）や港湾部、またキリスト教徒地区のアシュラフィーエなどの歴史的景観は、今日では急速にその姿を喪いつつある。番匠谷もコンサルタントとして参画し、空爆された日本大使公邸の再建に携わっている。

このように、バイルートは少なくとも二度、大きな戦災を経験しており、その都市計画史は莫大な資金流入に浮かれた戦災復興の歴史であった。本作の舞台がバイルートであることの一つの意味は、聳え立つ超高層ビルの影に光を当てたことにあるだろう。いや、建設中である以上、ビルの影というよりは、夜間外出を禁じられた労働者が着工から竣工まで寝泊りを強いられる（日本の現場では安全衛生上からもありえない）、根切りされた地下空間という「穴」といったほうが正確であろう。シリア人である主人公の父親と主人公が時間差をおいてともにバイルート復興の建設現場に立ったとすれば、父親の出稼ぎ労働はレバノン内戦直後からハリリーーの復興事業の初期、主人公の労働はシリア内戦が開始された 2011 年以降の限りなく現在に近い時期、となる。主人公がいわゆるシリア難民であることは明らかだが、80 年代のシリアもまた安定からは程遠かった以上、

父親もまた何らかの理由で出国を強いられたのかもしれない。本作ではこの穴で働く労働者を、暗にシリアで空爆の下敷きになった人々に例えることで戦争に抗議しているようでもあり、あるいは作中の数少ない言葉を辿るなら、「戦争が母国を破壊し尽くすまで外国で待ち、終わったら再建のために国に戻る」という認識に、むしろ皮肉な諦観さえ込められているのかもしれない。確かなことは、これからアレッポを初めとするシリアの都市は、まさにバイルートの戦災復興が辿った道のりを辿らなければならないということである。このとき、シリア難民の帰趨もまた問われるであろう。

以上、本作はシリアとレバノンをめぐる都市の破壊と建設、戦災と復興の断ち切りがたい連環を活写した秀作であるといえよう。では最後に、本作と日本の私達をより結びつけるものは何であろうか。日本もまた復興大国である。古くは関東大震災からの帝都復興計画があるし、広島・長崎の平和都市計画、神戸や中越、そして東日本大震災からの復興と枚挙にいとまがない。開発と保全、労働者の人権、そして人々に残された記憶といった問題に私達がどう向き合ってきたかを想起すれば、きっと本作の描いたレバノン、シリアを身近に感じることはできるのではないだろうか。

2018 年度に開催した研究会・シンポジウム・講演会

C01 計画研究 05・06 第 1 回合同研究会 「都市アレppoの歴史と現在」

(計画研究 05 第 1 回研究会 / 計画研究 06 第 1 回研究会)

日時：2018 年 10 月 7 日 (日) 13:00-17:00

会場：東京大学 法文 2 号館 第三会議室

プログラム：

守川 知子 (東京大学)・松原康介 (筑波大学)：趣旨説明

谷口 淳一 (京都女子大学)：「イスラーム宗教施設からみる前近代アレppoの都市構造：アイユーブ朝
期とマムルーク朝期の比較」

黒木 英充 (東京外国語大学)：「オスマン後期・騒乱頻発期のアレppoの都市構造と都市民」

松原 康介 (筑波大学)：「シリア都市計画史の論点」

C01 計画研究 05 第 2 回研究会：特別講演会

日時：2018 年 10 月 19 日 (金) 16:00-18:30

会場：東京大学 法文 2 号館 第三会議室

講師：Dr. Mohamed Ahmed Soliman

(Director General of the Archaeological Affairs Old Cairo and el-Fustat, Ministry of Antiquities)

題目："Reconstructing the Islamic Water System in Alexandria during the Medieval Period"

A02 計画研究 02 第 1 回研究会：講演会

日時：2018 年 10 月 19 日 (金) 16:45-18:00

会場：筑波大学 総合研究棟 B108

講師：菊地 咲 (ハイデルベルク大学博士課程)

題目：「古代メソポタミアにおける暦注」

A01 計画研究 01 第 1 回研究会

日時：2018 年 11 月 10 日 (土) 13:30-17:00

会場：筑波大学 東京キャンパス 651 ゼミ室

三宅 裕 (筑波大学)「西アジア先史時代における貝製装身具」

有村 誠 (東海大学)「PPNB 式対向剥離石刃製作技術のもつ意味を考える ―その始まりと終わりに
注目して―」

A01 計画研究 01 第 2 回研究会：講演会

日時：2018 年 12 月 9 日 (日) 14:30 開始

会場：筑波大学 東京キャンパス 121 講義室

講師：Artur Petrosyan (アルメニア国立考古学民族学研究所)

題目：「アルメニアにおける都市的生活の始まり ―村落から都市への変遷―」

C01 計画研究 06 第 2 回研究会

日時：2019 年 1 月 23 日 (水) 13:00 開始

会場：筑波大学 共同研究棟 A501

発表者：谷口 陽子 (筑波大学人文社会系)

題目：「西アジアの文化遺産をまもる・壁画のテクノロジーの分析を通じて」

A02 計画研究 02 第 2 回研究会：国際ワークショップ

"The Mesopotamian Landscape Archaeology: Recent Researches in Iraqi-Kurdistan"

日時：2019 年 1 月 25 日（金）13:00–17:30

会場：筑波大学 東京キャンパス 121 講義室

プログラム：

Shigeo Yamada (University of Tsukuba): "Topographical Terminology in Cuneiform Texts"

Jason Ur (Harvard University): "The Archaeological Landscape of the Kurdistan Region of Iraq:
Current Results and Future Prospects"

Shin'ichi Nishiyama (Chubu University): "Archaeology of Assyrian Landscape in the Shahrizor Plain, Slemani"

Nobuya Watanabe (Chubu University): "Considerations for the Spatial-Context of the Archaeological
Sites: Utilization of Multi-Scale Remotely Sensed Data"

Akira Tsuneki (University of Tsukuba): "Neolithization and the Landscape in the Chamchamal Area, Slemani"

C01 計画研究 05 第 3 回研究会：国際ワークショップ

"Baghdad, a 1400 year old capital city in West Asia"

日時：2019 年 1 月 29 日（火）10:00–17:30

会場：東京大学 法文 2 号館 教員談話室

プログラム：

Tomoko Morikawa (The University of Tokyo): "Introduction"

Yasuyoshi Okada (Kokushikan University): "Ctesiphon – Its architectural performance in the context of
the Sassanian capital"

Naoko Fukami (JSPS Research Station, Cairo): "Re-thinking the round fortified city of Baghdad from the urban
history of West Asia"

Michele Bernardini (University of Naples "L'Orientale"): "Baghdad and Tabriz: Two capitals for one
kingdom"

Gökhan Çetinsaya (Istanbul Şehir University): "The notables of Baghdad in the late Ottoman rule"

Felix Arnold (German Archeological Institute, Madrid): Discussant

Akihiko Yamaguchi (University of the Sacred Heart): Discussant

C01 計画研究 05 第 4 回研究会：特別講演会

日時：2019 年 1 月 30 日（水）16:00–18:00

会場：東京大学 東洋文化研究所 3 階大会議室

講師：Felix Arnold 博士（マドリード・ドイツ考古学研究所上席研究員）

題目："Madinat al-Zahra (Córdoba, Spain): Recent discoveries in the caliphal city"

A02 計画研究 03・C01 計画研究 05 第 1 回合同研究会：特別講演会

（計画研究 03 第 2 回研究会 / 計画研究 05 第 5 回研究会）

日時：2019 年 1 月 31 日（木）17:30–19:00

会場：京都大学 稲盛財団記念館 3 階 中会議室

講師：Dr. Felix Arnold (German Archaeological Institute, Madrid Department)

題目："A Garden in the Desert: Recent Excavations at the Bent Pyramid in Dahshur, Egypt"

C01 計画研究 05 第 6 回研究会：特別講演会

日時：2019 年 1 月 31 日（木）16:30–18:30

会場：東京大学本郷キャンパス、法文 2 号館・第三会議室

講師：Professor Gökhan ÇETINSAYA (Istanbul Şehir University)

題目："Ottoman rule in Iraq under Abdulhamid II"

C01 計画研究 05 第 7 回研究会：特別講演会「中世ユーラシアの『イスラーム都市』」

日時：2019 年 2 月 2 日（土） 14:00-17:00

会場：京都大学 ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）

講師：Felix ARNOLD (German Archeological Institute, Madrid)

題目："Madinat al-Zahra (Spain): a caliphal city of the 10th century"

講師：Michele BERNARDINI (University of Naples "L'Orientale")

題目："Ghazni during the Qarawnas period, 1300-1370 ca"

2018 年度「西アジア都市」領域全体研究会

日時：2019 年 2 月 23 日（土） 10:00-17:00

会場：筑波大学 東京キャンパス文京校舎 119 講義室

プログラム：

山田 重郎（筑波大学）：イントロダクション

三宅 裕（筑波大学）：「西アジア先史時代における生業と社会構造」2018 年度活動報告

山田 重郎（筑波大学）：「古代西アジアにおける都市の景観と機能」2018 年度活動報告

近藤 二郎（早稲田大学）：「古代エジプトにおける都市の景観と構造」2018 年度活動報告：

古代エジプトの祝祭都市テーベの景観と構造

安間 了（徳島大学）：「古代西アジアをめぐる水と土と都市の相生・相克と都市鉱山の起源」

2018 年度活動報告：地球化学からみた古代西アジア都市の石材と環境

守川 知子（東京大学）：「中世から近代の西アジア・イスラーム都市の構造に関する歴史学的研究」

2018 年度活動報告

松原 康介（筑波大学）：「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」2018 年度活動報告

C01 計画研究 05 第 8 回研究会：特別講演会

日時：2019 年 3 月 12 日（火） 15:00-17:00

会場：東京大学 法文 2 号館 第三会議室

講師：Deborah G. Tor 博士 (University of Notre Dame)

題目："Religious Partisanship (ta'aşşub) in the Medieval Islamic City"

C01 計画研究 06 第 3 回研究会「西アジアの都市と文化：今後の研究に向けて」

日時：2019 年 3 月 13 日（水） 13:00-16:00

会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 435 教室

プログラム：

田中 英資（福岡女学院大学）：「『遺産』としての過去の痕跡とローカルな実践」

村上 薫（アジア経済研究所）：「トルコ都市貧困層と権利概念の重層性：

「住むことの権利」の考察に向けて」

池田 昭光（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）：「内戦後バイルートにおける
宗派と空間」

木村 周平（筑波大学）：「トルコ都市の災害とレジリエンスの人類学」

A01 計画研究 01 第 3 回研究会：国際ワークショップ

"What bone tells us: The Neolithic lifeways in Anatolia and beyond"

日時：2019 年 3 月 15 日（金） 13:30-18:00

会場：筑波大学 総合研究棟 A107

プログラム：

Yutaka Miyake (University of Tsukuba): "Opening address"

- Yuko Miyauchi (University of Tsukuba): "Reconsidering the infant burials in prehistoric West Asia:
Case study from Tappeh Sang-i Chakhmaq, Iran"
- Osamu Kondo (University of Tokyo): "Paleobiology of the Neolithic people from Hasankeyf Höyük"
- Ömür Dilek Erdal (Hacettepe University, Turkey): "Population structure and health status of Aşıklı Höyük people"
- Yu Itahashi (University of Tokyo): "Change of the contributions of animal protein between hunter and herder in
the Neolithic Anatolia"
- Kameray Özdemir (Hacettepe University): "From sedentary populations to centralized societies: Changing
in dietary pattern in Anatolia"
- Yılmaz Selim Erdal (Hacettepe University): "Effect of agriculture on human skeleton: A bioarchaeological study
in the Neolithic Anatolia"

C01 計画研究 05 第 9 回研究会：特別講演会

日時：2019 年 3 月 15 日（金）15:00 開始
会場：京都大学 人文科学研究所 本館 1 階セミナー室 1
講師：Deborah G. Tor 博士 (University of Notre Dame)
題目："Chivalric Bands (Futuwwa/fityān) in Medieval Islamic Cities"

A01 計画研究 01 第 4 回研究会：講演会

日時：2019 年 3 月 17 日（日）14:00–16:00
会場：筑波大学 東京キャンパス 文京校舎 119 講義室
講師：ユルマズ・セリム・エルダル（トルコ・ハジェテペ大学・教授）
題目：「埋葬から読み解く社会 ―アナトリア新石器時代葬制研究の最前線―」

A02 計画研究 02 第 3 回研究会：特別講演会

日時：2019 年 3 月 20 日（水）16:00–18:00
会場：筑波大学 総合研究棟 B 110 教室
講師：松村 公仁（アナトリア考古学研究所）
題目：「アナトリア古代史の諸問題：ビュクリュカレ遺跡発掘調査を通して」
コメンテーター：津本 英利（古代オリエント博物館）

科研費新学術領域研究

都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 1 研究成果報告 2018 年度

発 行 日： 2019 年 3 月 31 日

編 集： 山田重郎（領域代表）

発 行： 文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）平成 30-34 年度
「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」

URL: <http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/>

〒 305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学人文社会系 西アジア文明研究センター

Email: rcwasia@hass.tsukuba.ac.jp

印刷・製本： 前田印刷株式会社

2018-2022 年度

文部科学省科学研究費補助金 新学術領域研究（研究領域提案型）

都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究 1

研究成果報告 2018 年度

<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/>

